

アマゾン開拓は夢のごとし

安井宇宙

草思社



表紙説明 水路をふさぐ倒木を取り除いているところ。



安井宇宙 (やすいうちゅう)

1917(大正6)年、東京に生まれる。旧制千葉県立長生中学校卒業後、アマゾンでの開拓者リーダーを養成する日本高等拓殖学校で一年間学び、1934(昭和9)年、16歳にしてアマゾンに入植。以来、アマゾン中流域でジュートの栽培と仲買を手がけ、1941(昭和16)年、同期生3人と安井宇宙合名会社を設立して、牧畜、カカオ、胡椒などの栽培とアマゾン河通商に携わる。1971年から83年まで汎アマゾニア日伯協会事務局長をつとめるかたわら、アマゾンでの開拓生活をテーマに油絵を描きはじめ、パリのサロン・ド・ドートンスに出品したほか、日本でも個展を2回開催。作品の一部が本書のカバー・本文に使われている。81歳になる現在も、アマゾン河口最大の都市ベレンに在住。

(1992年、東京・立川市での個展にて。左側は妻の信子さん)

昭和9年、16歳のとき国を出て、アマゾン開拓移民として
「我、モンテクリスト伯たらん」と
ブラジルに渡った著者は開拓地のアマゾン河流域の
大自然に翻弄され、幾多の苦難を嘗める。
耕しても耕してもそれをあさ笑うかのような
自然の圧倒的な力にしだいに無力感を覚える。
本書はいまや81歳となった老開拓者が
河畔の都市ベレンで往時を追想するアマゾン開拓移民私史である。
七転び八起き不屈の人生を痛快に綴った異色の自伝。

はじめに

今年（一九九八年）で、ブラジルのアマゾン河流域に移住して六十四年を迎えた。その間、ずっとアマゾンに暮らしている。

私が一九三四年にアマゾンでの開拓者リーダーを養成する学校を卒業するとき、ひとりの来賓がこんな祝辞を贈ってくれた。

「赤道に沿うて流れる河には、古来、文明の発達した試しがない！」。以来、私は、この初老の来賓の暗示を覆うしてみせなければならぬという宿題を背負ってしまった。

アレクサンドル・デュマが描くところのモンテ・クリスト伯——無実の罪で投獄され、脱獄後、巨万の財宝を手に入れ、モンテ・クリスト伯と名乗って仇敵につぎつぎ復讐を果たす巖窟王——私は来賓の老人の暗示を覆すべく狭い日本をあとにして、モンテ・クリスト伯たらんと勇躍アマゾンに渡った。十六歳のときである。

しかし、赤道に沿って流れるアマゾン河の開拓に来て六十四年、文明が発達するか否かの答えを出すのは、一代の命ではできないことがわかった。たくさん民族が来ては去り、子どもを産ませては去ったあとに、他の民族が来て子を育てては去り、残った者が土着することのくりかえしをつづけて

いるうちに、何かが生まれてくる。

アマゾンとは、そんなところだということがあった。文明が来ては去る、と言えようか。

この三年間でアマゾン流域では、四国の面積の三倍を超える約六万平方キロの熱帯雨林が消滅し、大規模開発や大型発電所の建設、世界最大の鉄鉱石の埋蔵量を誇るといわれるカラジャス鉱山プロジェクトの推進など、いまや人間の生み出した力が自然の力を上まわりつつあるようにも見える。しかしこれらとて、いつふたたびアマゾンの大地に埋没してしまいかかわからない。

私がいま住んでいるアマゾン河口の都市ベレンは人口一〇万人を超す大都市であるが、都市も奥地もかわりなく、アマゾンはいまだに「男子、門を出ずれば七人の敵あり」という環境にあるのだ。

日本ではアマゾンといえば、いまだに地球最後の秘境とか、天然資源の宝庫と言われることが多いが、かつてその流域に開拓に赴いた日本人がいたことなど、知る人は少ないと思う。昭和の初期、七十年もまえになる「アマゾン開拓」の話をいまさら持ちだしても、高度経済成長の恩恵を受けて生活をエンジョイしているいまの日本人には縁のない、寝ぼけた夢物語にすぎないだろう。

移住の当時でさえ、「満州ではなく、なぜアマゾンへ行く

のか」と理解されず、サンパウロなどの南伯（南部ブラジル）へ移住した日本人からも、「三年たてば猿になる」とあざけられた存在だ。

しかし、いつの時代にも「蓼食う虫」はおり、金魚の群れには鮒もまじっている。宇宙のゴミみたいな星くずも歌や詩に詠まれるとロマンティックになるように、それぞれの時代には、その時代に応じた人間が現れて、善かれ悪しかれ何らかの役割を演じてきたはずだ。

アマゾン開拓一世の仲間もみな八十の坂を越え、残り少なくなつた。その一人として、一度ならず「モンテ・クリスト伯たらん」と夢見た男が演じた役割を、化石になるまえに刻んでおきたい。

アマゾン開拓は夢のごとし

もくじ

はじめに

3

プロローグ アマゾンで知った祖国の敗戦 12

不吉な予感が的中

戦争は終わったのだ

街じゅうにあふれる日本敗北のニュース

日本のアマゾン開拓移民

第一章 親不孝者

30

中学は卒業したけれど

第二次入学の四回生

肥料の汲みだし

仮想熱帯作業

憂国の士・上塚司

現地所長の辞任騒動

渡航準備

第二章 門出の歌

53

大言壮語の激励をうけて

南洋航路

南十字星の感激も薄れて

ブラジル国到着

楽園の島の収容所

アマゾンへ行くか、南伯へ去るか

第三章 いよいよアマゾン河へ

73

三等船客の蚕棚ベッド

アマゾン河口のベレンに到着

黄土色の水の世界

第四章 アマゾンに入植

91

四回生の入植式

アマゾンア産業研究所

サンタルジア植民地へ

伐採に追われる日々

第五章 サンタルジアの四回生村

113

パイヤの根入り味噌汁

亀捕りと魚釣り

ダンスに病みつき

上塚校長の来訪

失敗に終わった山焼き

校長の突撃ラッパ

高台地のはずが水田に

第六章 石の上にも三年

139

入植一年、退去者があとを絶たず

仕送りの結婚資金で借金返済

アマゾニア産業研究所の法人化

植民地建設の理想からの離反

ダンスパーティーの開催

ジュートの新品种

不老長寿の秘薬の里を求めて

第七章 ジュート栽培に進出

158

ジュート栽培に希望を託す

港湾会社の別荘番に

英国人に酷使されて

マラリアに冒される

エステーボ島での青春

暴利を得ていた会社

無人島での単調な日々

高拓の閉鎖

緑綾なすサンジョアンキンへ

マラリアで廃墟同然になった村

吸血鬼との闘い

警察結婚を迫られる

研究所創立十年祭

喧嘩とダンス

イルカとたわむれる

南伯に去った同期生からの便り

マラリアで入院

自力でのジュート栽培の限界

ジュートの仲買商をはじめ

第八章 太平洋戦争下の苦闘

217

敵国人となる

特別に保護されたジュート栽培者

命綱の行商船が沈没

ジュート全盛の到来

牛を飼い始める

第九章 戦後の闘いがはじまる

230

暗雲が漂いはじめたジュート商売

カカオ地帯への進出をねらう

カカオ売買の店舗を設ける

カカオの高騰

カカオから潔く撤退

第十章 牧場と行商に挑戦

250

暴れ牛

牧場の完成を目指して

牛の移送

敗戦將軍の来訪

一回だけに終わったジュート移民

大水と格闘した悪夢の四か月

行商でしのぐ日々

遠のくばかりの人並みの暮らし

第十一章 畑の黒ダイヤ・胡椒に賭ける 227

ベレン近郊の胡椒園へ

三十七歳にして居候生活

胡椒栽培の一大ブーム

肥料食いの胡椒栽培

ある老人の不吉な予言

粘土質の土地をつかまされて

続々とやってくる移民船

胡椒には最悪の土地

写真結婚

相変わらずの自転車操業

手間のかかる胡椒栽培

全滅した胡椒園

エピローグ アマゾン開拓をあとにして 3 1 9

ベレンでの再スタート

高拓関係者のその後

あとがき 3 2 5

アマゾンへの日本人移住史 3 2 8

引用・参考文献

カバー・本文挿画 安井宇宙

プロローグ アマゾンで知った祖国の敗戦

不吉な予感が的中

水に没して水郷となってしまったヴァルゼア（低湿地）のカンポ（草地）は、水陸両生の牧草コロニアが青々と水面を覆って、どこまでも広がっている。

吹きはじめた季節風がその上を流れて、蓑毛を風に震わせた白鷺が点々と餌を漁り、ときどき甲高い叫び声をあげては陽光をきらめかせて舞いあがる。

乾季を迎えようとしているアマゾンの水は、のどかな響きを奏でながら、高床式住居の床下の杭を洗い、毎日5センチ、6センチと減っていく。

アマゾン河口から約1、500キロ、ここ中流域の村サンジョアンキンには買い物に集まる船もなく、暦だけがまわっていく。

アマゾンでは十二月から五月の雨季と六月から十一月の乾季があり、雨季と乾季では水位が5〜10メートルも上下する。

アマゾン河の河岸一帯は、高台地と低湿地で構成されている。雨季になって河が増水すると水没し、乾季になって減水

するとふたたび草原や森林にもどる低湿地をヴァルゼアとよぶ。

この低湿地はアマゾン河の氾濫によつてもたらされた土壌によつて地味が豊かで、牧場、ジュートやカカオなどの栽培に利用されている。

一方、雨季になつても水没しない高台地をテーラ・ファイルメ（「確固たる土地」という意）とよぶ。

砂地や粘土から成る高台地は全般的に森林に覆われ、テラ・プレータとよばれるごく限られた黒土地帯を除いて、農業や牧畜にはあまり適さない土地である。

雨の遠のいた高台地の牧場では、食い尽くされた牧草が伸びる力を失つて、だんだん痩せてきた牛たちが、低湿地の大地が現れるのを待ちわびている。牧草のちびてしまったあとには、木の芽が伸びる。それらを切り払つてリンパ・カンポ（草地整備）をする人たちの上に、灼熱の太陽が照りつける。

裏の原生林には、腹をすかせたオンサ（アマゾンジャガー）がうろついている。彼らは、伐採した跡地に生い茂つたカポエラとよばれる再生林の陰から隙をねらつて牛を倒すと、森のなかへ運びこんで、仲間たちと饗宴を開く。獲物が見つからなければ、夜、コラウ（柵囲い）に寝ている牛を襲つてくる。番犬が狂つたように吠えたてると、牛は総毛立って水辺に逃げる。

銃を手に飛びだしたときには、ジャガーは影形もなく、彼

らが柵に首を突っこんだあたりに体毛がこすりついていていだけだ。

一九四五年の乾季を迎えようとしていたある夕、立木の枝に無数の燕が集まって、かまびすしくさえずりながら渡りの準備をはじめた。茜色の雲の峰めがけて飛び去っていく姿を見ていると、思いは遠く祖国日本の空に飛んでいき、鉛のように重く心に淀んでいたものが込みあげてきた。

それは三年半まえの一九四一年の雨季のはじめ、私がヴィラ・アマゾニア（アマゾン村。植民事業の開発と熱帯における作物研究を主体としたアマゾニア産業研究所がおかれた場所）に居合わせたとき、薄暗い灯火のもとでラジオから流れてきた短波放送を聞いて以来、胸の底に淀んでいたものだ。祖国の勇ましい勝ち戦を伝える陰気な声を、居合わせた者たちは顔を寄せ合って聞いた。あのとときの複雑な思い。あれ以来、声をあげて笑うほど愉快なことなど一度もなかった。

乾季を迎えると、火のつきそうな炎天の地に畑を開いて陸稲の籾を播き、雨季に入ると、はげしい雨にずぶ濡れになりながら、体の乾く暇もなく、ジュート（現地ではジュータという）栽培に明け暮れていた。米、麦、綿花、コーヒー豆などを詰める南京袋の原料となるジュートは、茎の皮をはいで繊維を取るときに、ドブ臭が身に染みついてとれなくなるのだ。

さらには、囲いの泥土に牛を迫っては、牛糞にまみれ、手足の皮膚は爬虫類のものかと思うほどガサガサになる。そんな惨めなわが身を思うと、西北の空を目指して渡っていく燕が羨ましい。

いつまでこんな両生動物同然の暮らしをつづけるのか……。

祖国は存亡のときを迎えているにちがいない。街から入ってくるニュースはどれも、追いつめられていく祖国の姿を伝えている。

アビオン・スイシーダ（自殺飛行機）、

すなわち特攻機で若い命を国に捧げて戦っているのだ。

私もまだ二十八歳。こんなアマゾンでの泥百姓など投げ捨てて、祖国の急に馳せ参じたい。ぼんやり遠くの空を眺めながら、

そんな物思いに沈んでいると、数日後には燕も去って、影も見えなくなった。

まもなく西の空から毎晩、マレッカ（野鴨）やマレカン（雁）の編隊が夜を徹して、水かさが減って現れてきた低湿地を目指して渡ってきた。われわれは陰鬱な気分を押しやっつて、高台地から低湿地へと牛の群れを移す「スポーツ」に没頭した。

八月を迎えると、アマゾン河口の最大の都市ベレンから来たレガトン（行商船・通商船）が、《米国が新兵器ボンバ・

アトミカを落として、広島街は瞬時に消滅した。その焼け跡は、今後百年は生命が育たない、不毛の地と化してしまつた」という絶望的なニュースをもたらした。

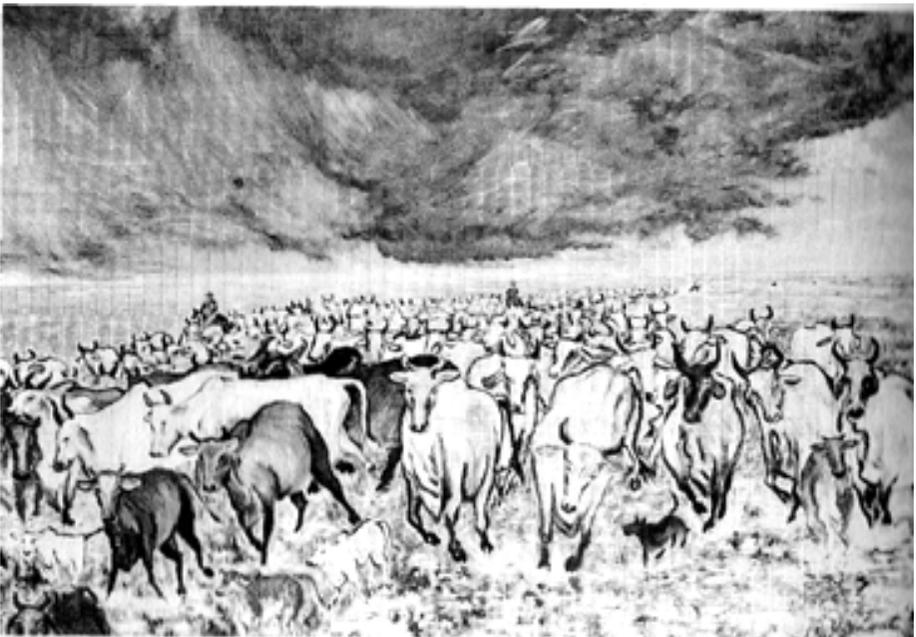
この知らせに、われわれ日本高等拓殖学校四回生のソルテイロ（独身者）の入植者は声もなかった。にわかにはそのニュースを信じられないでいた私たちは、ボンバ・アトミカについて幼稚な憶測を交わし合つた。

しかし、来る船、来る船がボンバ・アトミカと腹切り（自決）のニュースにくわえて、ソ連が満州に進攻したことを伝えてきた。恐れていたことがついに現実になつた。もうだめだ！そしてしばらくして、ついに日本は降伏し、戦争が終わったことを知つた。

日米開戦の年の一九四一年に共同経営による合名会社を設立した薬師神光雄、山崎太郎と私（安井宇宙）、そして石黒桑吉にかわつてくわつた戸口恒治の四人は、長いあいだ引きずつてきた不吉な予感が的中してしまつたことが、心底信じられなかった。

戦争は終わったのだ

私は高台地から低湿地に移した牛どもその後始末を終えると、懇意にしているユダヤ系の青年ガバイが行商支配人をつとめるパリンチンス号でベレンに下つた。



一瞬にして黒雲が湧き、

スコールが襲う、アマゾンの雨期

ベレンに出たのは、アマゾンに入植して以来十一年目にして、はじめてである。河口のマラジョー島近くのアロザール沖を通過したのは晴天の朝だったが、強い風に波頭が躍っていた。その波間を荷物を満載した、たくさんのパルコ（荷船）が見え隠れするアマゾン河口は、海といってもいい広さだ。河口の最大都市ベレンから対岸の都市マカパーまでの川

幅は約340キロもある。

マラジョー島は島といっても日本の九州と同じくらいの大
きさで、河川のなかにある島としては世界最大だと聞してい
る。そんな島をたくさん抱えるアマゾン河は、アンデス山脈
の標高五〇〇〇メートル以上の地点をはじめ、ボリビア、ペ
ルー、コロンビアなどの周辺諸国から流れこんでくる千を超
える河川が、ブラジル国内に入ってひとつの河川になったも
のだ。全長約六四〇〇キロ、日本の本州の延長の三倍強にも
なるというのに、橋も堤防もない。

三〇〇トンのガイオーラのパリンチンス号は、甲板もハッ
チも褐色の波に洗われ揉まれつづけていた。ガイオーラとい
うのは、アマゾン河の足となっている通行船のことで、烏龍
(ガイオーラ)を思わせる船形からその名がついたという。
つぎの朝は対岸のベレン市街を遠望しながら、水生植物の
アニングア(水生植物とはいっても、太さ二握りぐらい、長さ
四、五メートルもあり、湿地や泥洲の中に密生して通行の
じやまになる)の茂る水道の入口で潮待ちをした。水道とい
うのは、何千とあるアマゾンの支流のうち、本流から分岐し
てふたたび本流に合流する支流のことをいう。結局、潮の流
れが船の航行に都合よくなるのを半日近く待つことになり、
入植後十一年、すっかりアマゾンぼけになっているはずの私
も、その退屈さにしびれをきらした。アマゾン人になるに
は、まだまだ長い時間を必要とするらしい。

ベレン港に着岸した昼下がり、下船に際して何か面倒な手
続きでもあるのではないかと、しばらく様子を見ていた。し
かし、岸壁の雰囲気はいたって長閑で、警官らしい男が乗り
こんできて、私のまえを何回も通ったが、日本人の私に注意
を払おうともしない。ここではじめて、たしかに戦争は終
わったのだと実感した。自由の身になったのだ！

やがて行商支配人のガバイは残務が終わったらしく、私と
明日の仕事の件を打ち合わせると、アマゾンから運んできた
土産のバナナ・グランデ（大バナナ）やパット（家鴨）、鶏
などを荷役に運ばせて下船していった。あまりの呆気なさに
狐につままれたような気分のまま、中央公園に面したホテ
ル・スイスに投宿した。しかし、私が部屋に向かったあと、
警官がホテルのフロントに来てチェックしていったようだ。

つぎの日は、フェレイラ・ダ・オリベイラ・ソブリーニョ
商会の本社に顔を出した。ガバイが前日の打ち合わせどお
り、社長とその先代の社長に私を紹介してくれた。はじめて
挨拶を交わし、心配していた現金融資をうける約束をすぐに
取りつけることができたので、気分が軽くなった。商社から
現金融資をうけるというのもおかしな話だが、われわれ日本
人入植者には、まだ銀行から融資をうけるほどの信用がない
のである。ソブリーニョ商会の先代の社長は、若いころポル
トガルから渡ってきて、バナナ売りからいまの商社を創立し
たという、親切な老人だった。

気分が晴れ晴れしてきた私は、商用を終えたその足でアベニード・ジョアン・アルフレッドを渡り、そこにある仕立屋で洋服を仕立てた。このアベニード（街路）は、われわれを乗せた日本からの移民船がベレンにはじめて寄港したとき、仲間の畠中実とスコップを買った金物問屋の近くにある。仕立屋の主人は頭髪が真っ白のスペイン系の老人だが、スペインの名誉領事を兼ねていて、

「大戦中は日本の領事事務を代行して、日本人の面倒を見てきた」

と言って、親切にも自転車商を開いている邦人に連絡をとってくれた。後日、その自転車商に招かれて行ったところ、店主はあいにく留守だった。店主の妻と二十四、五歳の娘を頭に二、三人の子どもがいて、日本人であることで危害をくわえられるといけないので、シネマにエスコートしてくれるように頼まれた。田舎からぽつと出てきた日本人でも、男なら役に立つと見える。とにかく街じゆう、カーキ色の軍服の米兵でいっぱいだった。補充兵なのだろうか、意外にやさ男が多い。自転車商のおかみさんは、

「あんなひ弱そうな米兵に、日本は負けたのかねえ」

と嘆息していた。私も同感だった。

街じゆうにあふれる日本敗北のニュース

ホテルの近くの公園では、雑誌を売る露店が軒を並べ、どの店にもニュース画報がいっぱい並んでいた。目のやり場がないほどでかかと、《日本帝国敗北》のニュース写真が表紙を飾っている。

沖縄の決戦場であろう、集団自決をして果てた姿を写した写真に、顔を上げて歩いていても、あふれてくる涙がこぼれ落ちた。口惜しさに、胸がふさいでしまう。街の餓鬼どもが、敗戦国日本人を見つけたとばかりに、

「ボンバ・アトミカ！ ジャボネース！ ハラキリ！」

と、雑言のつぶてを投げてきた。まるで私は、都大路を引きまわされる罪人にされたような気分だった。自決した同胞の無念を思っただけで耐えたが、それからしばらくは、街へ出る勇氣もなくて、ホテルの天井を眺めて日を送った。

そうしていると、ますます孤独になり、周囲の戦勝ムードに押しつぶされてしまいそうになる。目と鼻の先にある師範学校からは、来る九月七日のブラジル国独立記念日に向けて練習している、鼓笛隊の勇ましい行進曲が押し寄せてくる。街を行き交うタクシートの警笛までが、高らかに「勝った勝った」と叫んでいるように聞こえる。私が負けたのではないが、孤独な敗残者であることにはちがいない。

毎日夕方になると、ホテルと公園とのあいだの通りに、近くの米軍の空軍基地から兵士が続々と運ばれてきて、蜘蛛の

子を散らすようにばらまかれる。一九四一年十二月八日の日本の真珠湾攻撃のまえに、ベレン、ナタール、レシフェに米軍の基地の建設がはじまったという。その威勢のいい姿を眺めていると、いつまでもしよげているのがばからしくなってきた。

隣の映画館オリンピアに入るつもりで出かけた。入口のサロンでつぎの上映を待っていると、立ち話をしていた女性たちがいっせいに、私に視線を浴びせた。小声で、

「ジャボネースがいる」

と耳打ちしている。さすがに男たちは好奇心を抑えて黙っている。

やがてなかに入ると、まずニュース映画が上映された。スクリーン上に展開されるのは、米機に襲撃されて苦戦し、つぎつぎに撃沈される日本艦隊の姿ではないか。過ぎし日に、南洋の演習から帰ってきたその艦船の勇姿を見たことがある。観ているのが忍びなくて、外に出てしまった。

外は米兵の渦で、みな赤線街のほうに流れていく。路上で腹を立てていても面白くないので、タクシーを拾って赤線街へ乗りこんだ。はたして赤線街は米兵であふれていて、そのなかをひとときわ背の高い二人組のMPが、人の群れをかき分けるようにして巡回していた。窓から首を出した女が雑言を浴びせかけると、MPは腹に据えかねたらしく、

「プアー……」

とか何とか、窓に向かって言いかえしている。

タクシーの運転手は、すいている店を見つけて、私を降ろした。サロンに入ると、幸い米兵の姿はなかった。しかし、大きな体の女を相手に飲んでいるうちに、米兵で店がふさがってきた。そのうちにMPが店の中まで巡回してきて、私の相手の女に目配せすると、奥へ入っていった。私のためにこの女の部屋が調べられたのだそうだ。MPの合図を軽くうけ流す彼女の態度は、なかなかにしたたかだ。

夜が更けるにつれ、サロンのなかは米兵で満席になってしまったが、彼らは長居はしない。〈用事〉をすますと、「サンキュー」と軽く言っつて、潮が引くように出ていく。すると間髪を入れずべつの米兵が入ってきて席を占めるので、私は外に出る機会を逃してしまった。しかたなく四面楚歌のなかで金はずんで酒を飲んだ。敵国人でなくなったとはいえ、私たち日本人はMPに目をつけられているので、解放されたわけではないのだ。相手の女が、「今夜はゆっくりできる」と言った意味がわかった。女たちは看板をおろしたあと米兵の相手をするのだが、この女は、私が店から出られないのを知って、私ひとりにつきあえばよいので、ゆっくりできると言ったのだ。

つぎの日からは、アマゾンでは手に入らない商品を仕入れるために、問屋通いで過ごした。そこには餓鬼どももおらず、ボンバ・アトミカもハラキリも、ジャボネースも関係な

く、どこの国の移民も、その子孫も、アマゾンから来た東洋移民も顧客としてあつかわれ、人間らしい時間を過ごすことができた。私は丹念に必要な品を選んで、パリンチンス号に積みこませた。

せっかく都に出てきたので、長いこと食べていない野菜を食べたいと思っても、ホテルにはエスピナフレとよぶ、ハウレンソウとかげろう草（妙めると茹でたハウレンソウのようになる雑草）の合いの子のようなものしかなくて、それを茹でて小さな皿にちよっぴり出す。ぬるぬるしてうまくないが、在伯十一年になっても日本人の体は野菜を要求するので、持ってこさせる。日本のようなご飯もないので、アロース（煮た米）を注文すると、米を煮て汁を捨て、それを油で妙めて黄色く色づけしたものが副食として出さる。これも量が少ないので、三皿は頼まなければならない。ずいぶん不経済だ。早くもパリンチンス号がアマゾンに向けて出航するのが待ち遠しくなった。

パリンチンス号の乗組員は、「十月の第二週からはじまるナザレの祭までにはベレンに帰ってきたい」言って、商品の積みこみを急いでいた。アマゾン河ではこうした通行船や通商船は一航海に二、三か月もかかるのだ。積みこみが終わると、パリンチンス号はあわただしく出港した。

アマゾン中流のサンジョアンキンに帰ってくると、もう

すっかり乾季の盛りになっていた。乾ききった空気に、あちこちで山焼きをする煙と野火がまじり合い、もうろうとして壤っぽい空に、半熟卵のような太陽が揺らめいている。亀の仲間ではもっとも大きいタルタルーガの捕れる季節で、大ナマズに似た巨魚のピラルクー（白身の魚肉は淡泊で美味）や鰐皮を積んだ港の倉庫に、足を縛ったタルタルーガの大きなやつが仰向けに転がっている。それらは行商人がベレンへ持ち帰る土産だ。

それからしばらくのあいだ、私はベレンから持ち帰った自家発電装置の設置に追われた。戦争が終わって、やっと人間らしく電灯の光のもとで、ラジオの電波を捉えて暮らせるようになったのだ。月と星ばかりの夜の世界に輝く一連の電灯の光は、夜の海に突如、豪華船が浮かび出たようだった。

そんな心のゆとりができると、自然に、過ぎ去った出来事が胸に浮かんできた。二十八歳になった年のせいかもしれない。一九三四年、十六歳のとき、日本から見れば地球の反対側、最後の秘境と言われるアマゾンくんだりまでなぜやてきたのか。そもそもアマゾン開拓とは何だったのか。

日本のアマゾン開拓移民

一九三〇年代の日本は、昭和恐慌のあおりで農村が疲弊

し、人口過剰の捌け口として海外移住を奨励する一方で、軍国主義への道をひた走っていた。満州進出が本格化する舞台裏で、一九〇八年（明治四十一年）にはじまった国策によるブラジル移住は最盛期を迎えていた。

しかし、その大半は南伯（南部ブラジル）のサンパウロ周辺のコーヒー農園などの大プランテーションで、契約農民として牛馬のように働かされてきた。そうした「奴隷に代わる労働力」とまで言われていた日本人移民からも、「猿になりに行くのか」と悪口をたたかれさげすまれたのが、未開の地アマゾンに入植した者たちだった。

一九九〇年代の今日でも、サンパウロからアマゾン河口のベレンまで直行便のフライトでも六時間かかる。成田からシंगाポールの距離に相当する。サンパウロ周辺のブラジル人にとってもアマゾンは辺境の地であり、いわば外国に等しい。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、空前のゴム景気に沸いたアマゾン河流域も、ゴム産業が東南アジアにとって代わられてからはこれという産業がなく、ヨーロッパの植民先進国も開拓から手を引くほどの蛮雨の地に送りこまれたのが日本のアマゾン開拓移民だった。

折から、アマゾン流域のアマゾナス州とパラ州政府では、移民を受け入れることで海外の資本と技術の導入をはかり、開発を促進しようと、日本政府に熱烈なラブコールを送ってきていた。サンパウロ周辺に移住した日本人移民は、

誠実、勤勉で農業振興に貢献していると、高く評価されていたが、その一方で、アメリカ、ハワイの日系移民排斥運動がサンパウロ州にも波及していた。ブラジル人の就労を妨げるとして、下院議会に「黄色人種入植制限法」が提出されていたのだ。

日本人排斥につながるサンパウロ州に集中している移住策を転換して、ブラジル各州に分散させようと、着任したばかりの田付七太駐伯大使の要請で、日本の外務省は専門家を派遣して、日本人のアマゾン移住の可能性を調査した。

これにもとづく「将来、日本人の発展地はアマゾン地域である」との報告をうけ、日本政府はパラ州とアマゾナス州の要請を受け入れた。

そうした背景のもと、いち早くブラジルの綿花に目をつけていた鐘淵紡績株式会社（鐘紡の前身）の関係者を核に設立された「南米拓殖株式会社」、熊本県選出の政友会の代議士、上塚司が政財界に働きかけて創立した「アマゾン産業研究所（のちにアマゾニア産業株式会社に改組）」、鐘淵紡績株式会社の技師だった大石小作が設立した「アマゾン興業株式会社」など、いくつかのルートを通して大戦前までに、約三〇〇〇人がアマゾン開拓に送りこまれた。

このうち、私がかかわることになったアマゾニア産業研究所は、一九二七年三月二十一日、田付大使の勧めで、アマゾナス州と、同大使館通訳官の栗津金六、少壮実業家の山西源

三郎とのあいだで結ばれた一〇〇万町歩（約一〇〇万ヘクタール）の土地の無償譲渡契約にもとづき設立されたものである。

この契約は二年以内に植民地經常の会社を設立することが条件とされていたため、山西は帰国して各方面に働きかけたが、大不況のうえに、政府、財界の目が満州に向いているがために支援が得られず、栗津と神戸高商で同窓の代議士、上塚司に契約の実行を託した。

一九二八年に渡伯して契約の二年延炭をとりつけた上塚は、一九三〇年六月、再度渡伯して、サンパウロで、ブラジルでの生活体験と開拓の専門技術を持つ日本人二〇人からなる調査団を組織し、四か所の指定地域から、アマゾナス州とパラ州の境に位置するパリンチンスを中心に、一〇〇万町歩の土地を選定した。

パリンチンス下流六キロの地点をヴィラ・アマゾニア（アマゾン村）と命名し、ここに事業開発と熱帯における作物研究を主体とした、在伯アマゾニア産業研究所の建設に着手して、初代所長に栗津金六を任命した。

しかし、昭和恐慌のあおりで、産業界にはたらきかけても資金が集まらず、上塚司は会社設立を延期して、アマゾニア産業研究所と付属の実業練習所、そして、私が入学することになった「日本高等拓殖学校」（略称高拓）の財産を上塚個人から法人に委譲するかたちで、とりあえずアマゾニア産業

研究所を一九三三年二月に財団法人化して、会社設立という契約の条件をクリアした。

その指令機能をつかさどる東京本部は当初、銀座四丁目にあったが、のちに新橋駅近くの大坂商船所有のビルに移転した。上塚が東京本部所長をつとめ、神戸高商の後輩の辻小太郎が主任と高拓の主任教授を兼務した。財界人、アマゾン開拓に関心を抱く人びとや、高拓生父兄から会員を募り、その年会費三円と会友の年会費一円を事業資金の一部に充て、上塚は事業推進PRのために全国を講演して歩いた。

日本高等拓殖学校は、一九三〇年三月に創立され、上塚司がみずから校長となった。この学校は「アマゾン産業研究所」の幹部を養成することを目的に、当初は国士舘専門学校（創立者・柴田徳次郎）に、国士舘高等拓殖学校として付設された。ただちに第一回生（定員五〇人）を募集。創立二年後の一九三二年三月、教育方針のちがいがいから国士舘から独立。川崎市登戸に約一〇町歩（約一〇ヘクタール）の土地を確保して移転した。同時に、日本高等拓殖学校と改称し、定員も一学年一〇〇人になった。こうして七回生までの二四八人がそれぞれ一年間、高拓で学んだあとアマゾンに渡った。日本人のアマゾン移住者のなかでも、高拓出身者は少数派で、いわば離れ猿の存在である。一匹狼とも言われた。私もひよんなことから、上塚校長の理想に共鳴し、一匹狼の一員となったのである。

第一章 親不孝者

中学は卒業したけれど

日本高等拓殖学校（以下、高拓）―そんな学校があるとはまったく知らなかった。しかし、一九三三年（昭和八）三月、千葉県立長生中学を出ると、私には行くところがなかった。「明日こそは」「来学期こそは」「来年こそは」すこし本気で勉強しなければと思いつながら、生来勉強というものに興味がなく、遊びほうけているうちに、父、安井寛も口やかましく言わなくなった。これ幸いと、ごまかして過ぎすうちに、学校から押しだされてしまった。

私立なら何とかかなりそうだったが元海軍士官だった父は私立学校が嫌いだった。私立は万事につけ規律がなっていないというのは口実で、父の本心は金がもつたいないからだろう。もうひとつは、アカに染まりかねないと、恐れていたこともあるらしい。

折から、台湾製糖に勤めている父の弟の勉が法事で内地に来ていて、私の将来を引き受けてくれることに決まった。

ただし、叔父の卒業した北海道帝国大学農学部の子科か、東京駒場の東京帝国大学農学部の実課を修了するという条件付きだった。そのかわり、台湾で十年勤めあげれば、一生食べ歩いていけるほどの退職金が約束されるという。父はわが事成れりと上機嫌だった。

私にしてみれば、好きでもない農学で会社に身売りすることになる。人に頭を下げられる地位には就けまい。十年間も甘しょ（砂糖キビ）畑で働くのかと思うと、気が遠くなる。しかし、浪人の身でわがままを言っているわけにもいかない。逃れる道はいずれ考えることにして、とりあえずは親の命令に従うことにした。

親孝行では苦い経験がある。中学二年の成績がよくなかったので、よけいな負担をかけまいと、親の任地の近くの長生中学に転入試験をうけて転校したのだが、そのかわりに、東京の府立二中（現在の都立立川高校）での自由な寄宿舎生活を棒に振ってしまったのだ。一度とあのような愚かしい轍（てつ）は踏むまいと決心した。東大農学部の受験のとき、母の妹の村上勝子の家に厄介になって、試験に臨んだ。幼時のころから世話を焼かせた叔母は、私の生半可な性格を見通して、

「宇宙よ、おまえは将来何になるつもりか」

と尋ねた。そんなことがわかっていたら、浮かぬ顔をして
いるはずがない。

しばらくして、

「政治家になる気はないか」

と、問われた。返事に窮していると、叔母もそれ以上は訊かなかつた。私は会ったことはないが、叔母の舅（しゅうと）は政治家なのだ。

ともかく受験だけはして、親孝行の一端を果たしたつもりでいた。

府立二中時代の友だちで、文通をつづけているのが二人いた。杉本恒彦と山崎太郎である。山崎は高拓で学んでいるとのことだった。ここは南米アマゾンの開拓者リーダーを養成する学校で、現地にも練習所があるという。前途洋々、希望に満ちた便りを寄こしていた。府立二中の先輩や同級生もいるそうだ。私も来年はそこへ入ろうかと考えていた矢先、五月に第二次募集があるらしいと知らせてきた。

よし、アマゾンへ行つてやろう！　ところが、私の態度に不審を抱いた父は山崎からの私信を捜しだしてしまった。

「親父が息子宛ての私信を盗み見するとは、何を血迷ったのだ！」

と、私はいささか逆上した。

「おまえは長男だから、母親の面倒を見なければいかんだ。アマゾンなんぞに行くのは許せん」

たしかに父の言うことは間違つてはいないが、いつも一方的なのだ。母親の面倒を見ることぐらい、言われなくても考

えてらあ。だからアマゾンに行くのではないか。

この狭い島国ニッポンでは、ぼんくらの私に母の面倒を見るだけの糧は得られまい。乗るか反るか、行ってみなければわからないが、万が一にもモンテ・クリスト伯にならないともかぎらないと、アマゾンの原生林に立ち向かうのだ。

無実の罪で投獄されて、脱獄後、巨万の財宝を手に入れ、モンテ・クリスト伯と名乗って仇敵につきつぎ復讐を果たすという、アレクサンドル・デュマが描く巖窟王の気分になっていた。

とはいっても、父には口答えは絶対にできないから、腹ふくるる思いで、黙って時が来るのを待っていた。山崎太郎から、二次募集が決まったと通知がきた。しかし、高拓は私立の学校だ。学費もけっして安くない。そのうえ、日本からは地球の反対側、南米ブラジルの秘境アマゾン開拓のリーダーを養成するという、異色の学校だ。現地に開拓本部「アマゾン産業研究所」もあるという。

そこは父、高拓の上塚司校長の人物調査に手をまわしておいたらしく、ある日、大蔵省人事局から上塚司校長の人物調査報告書が父のもとに舞いこんだ。それによれば、上塚司は元満鉄調査部の社員で、熊本県から選出されて代議士をつとめたこともある、国士的人物だということだった。

四回生の二次募集の試験にかろうじて引っかけかり、私は高拓に入ることができた。

一九三三年六月のことだった。それからというもの、父は私以上にアマゾン党になってしまった。

私の名前の「宇宙」は本名である。宇宙のようにでかい男になれ、と父が名づけたのだ。

第二次入学の四回生

第二次募集の入学者は、たったの七人。

一次募集をふくめても四回生は三九人だった。

一回生は四二人、二回生五八人、三回生七九人と尻上がり増加していたのが、高拓創立一年半後に起きた満州事変（一九三一年九月）から翌年の上海事変へと、日中戦争が拡大していく時局がら、日本の若者は満州へ満州へと駆り立てられていた。

「守れ満蒙！ 帝国の生命線」と、大新聞は連日のように戦鬪写真の特集号外を発行して、満州進出を鼓舞していた。千葉の長生中学へ移る際に世話になった国語教師のところへ引越しの挨拶にやらされたとき、私がアマゾン行きを望んでいると言うと、その教師は激励の言葉に詰まり、苦しい顔をされた。

こちらでも面食らい、その場を取りつくろって早々に暇ごいをした。アマゾン渡航は、満蒙に目が向いている時流に逆行

していたのだ。

高拓の新生活も、手放しで青春を謳歌する気分にはなれなかった。六月に入学すると、寮生活がはじまった。入学してわかったのだが、高拓はアマゾンを想定して訓練する場所でありながら、教師はアマゾンの実態の片鱗すら知らなかったのだ。だから、われわれ学生にとってアマゾンは、あくまで彼岸だった。

われわれを導く上塚校長も、アマゾンの広大さを見てきただけという人で、その感激を校歌に謳いあげたにすぎなかった。一、二の教授がアマゾンに行ったことはあっても、アマゾンについて教えられる人は皆無だった。

学校の生活は大別して、午前中は学科、午後は農業実習で、学科の大部分はポルトガル語の授業だ。ポルトガル領事館に勤めたことがあるノーちゃんこと山口鉄次郎という先生と、もう一人はアブランシエス・ピントさんというポルトガル領事館の副領事が講師として来ていたが、ピントさんはあまり教室には顔を見せずに、なぜかうサギ小屋をのぞいてまわっていることが多かった。

入学生は一年間、高拓で学んだあと、アマゾン現地本部のアマゾン産業研究所の実業練習所で、一年間実地訓練をうけることになっていた。そして、この練習所の過程を終えた者は、無償で二五町歩（約三五ヘクタール）の土地が譲渡される。渡航費は全額補助されることになっていたが、

生徒の必要経費は入学査料五円、入学金五円、授業料年八四円、学友会費年二円、寄宿舎経費月に二〇円、アマゾン現地の実業練習所の授業料一二〇円のほか、渡航手続きなどに七〇円から八〇円を要する。相当に高額で、学生の多くは中流以上の家庭のインテリぼんぼんだった。

高拓での農業実習は、アマゾンに渡ってから体力と忍耐を撃つことが中心で、教えるほうも教わるほうも、日本の農業技術があちらで役に立つとは考えていない。

一日の生活は、寮の玄関に据えられた大太鼓の音で起床する。校舎のまえに整列し、朝礼がはじまる。ポーチの上に国旗を掲げ、沢高志の指揮するブラスバンドの演奏に合わせて、上塚司校長の理想を謳いあげた校歌を合唱する。その歌詞はつぎのように気宇壮大なものだ。

第一節 希望

碧綾なす大空に

金色の色照り映えて

霞に咽（むせ）ぶアマゾンの

流れゆたけき朝ぼらけ

草踏み分けて岸に立つ

健児の胸に希望あり

第二節 学舎

溶々としてたゆみなく

水は揺らぎて四千余里

北ブラジルの中枢に

七大河川の合しては

大江に入る要地こそ

我が学舎のある所

このような調子で第七節までつづく。

朝食までの一時間は農作業をやり、腹いっぱい食べて、学科になる。午後の農業実習は、当時ただ一人、アマゾンで農業経験のある木内謙一教授が、班別に作業を割り当てた。木内教授は東京農大卒業時に、上塚校長に声をかけられ、高拓一回生にくわわって渡伯した。農大助手として「ブラジルにおける農作物の調査」をするのが目的だったようだ。アマゾンア産業研究所では早々から事業の柱としてジュート栽培に目をつけており、木内教授はヴィラ・アマゾンアでジュートの栽培試験に携わって帰国したばかりだった。

二次募集で入学した私たち新米七人の班（宮地茂、薬師神光雄、小坂井浄治、長谷信次郎、沖澤初男、河原顕一、安井

宇宙）はほとんど毎日、整地作業を割り当てられて、労働の特訓をうけた。関東鋤という柄の長い鋤を使って、大根畑の耕運をやらされた。



(上) 日本高等拓殖学校全景（『アジアの農業研究』同報より）
(下) 戦後、明治大学に払い下げとなり学生キャンパスの一部となった高田校舎（1963年、明治大学歴史写真事務教室提供）

新入生の大半は、サンパウロ周辺に移住した農業移民とちがって、中流以上の家庭の子弟が多く農業経験がなかった。しかも、そのころの私の体重は五二キロにも満たなかった。他の新入生はみんな六〇キロ台だ。鳥羽商船から来たという、私より小柄な宮地茂でさえ五八キロはある。彼は、腕の筋肉が盛りあがり、自分の体重より重い六〇キロ入りの袋を

軽々と一度に放りあげることができた。

開墾地は寮の北側のゆるい傾斜地にあり、一〇〇メートルほど先の雑木林は急傾斜して、その麓を小田急電鉄が走っていた。この日は全生徒が深耕をやらされた。

各班一列横隊になって進んでいくうちに、列のでこぼこがひどく目立ってきた。私は宮地を目標に進んでいく。彼について行けばまずまずだからだ。遅れだすと、うねをいい加減にごまかして、先方の土を被せておく。気の毒なのは大根だが、べつに人命にかかわることでもないのです、勘弁してもらう。

肥料の汲みだし

鍬の扱いに慣れてくると、肥汲み作業をあてがわれる。

この作業は人聞きよく「肥料の汲みだし」と言われているが、へっぴり腰で桶を担ぐと、桶のなかで汚いやつが騒ぐ。それを数歩行ってはなだめすかす。とてもオフクロには見せられない格好だ。運悪く風がくると、飛沫が散って新調の作業服にしぶきが飛ぶ。臭気ふんぷんとして抹香たりで、青春謳歌などという甘っちょろい夢は雲散霧消してしまふ。

「これしきのこと弱音を吐くようでは、アマゾンで往生できなぞ！」

と、互いに悟ったような口が叩けるのは、アマゾンにはな

い作業だと承知しているからだ。

肥汲みが終わると、丘の麓を流れる小川で桶を洗う。暮色濃い影のなかで波立てて洗うのだから、日本の小川は「春の小川はさらさらいくよ」というような、きれいなものではない。

「二篠男爵でさえ、高拓で肥桶を洗っておいになるのだ。えい！ ままよ」

と、作業服を流れのなかにたたきつける。二篠男爵というのは、男爵二篠家の息子、二篠豊基のことで、高拓の四回生として学び、ドイツ帰りの夫人をともなつてアマゾンに渡ったが、半年ほどで帰国。第二次世界大戦でテニヤン島に赴き戦死したという人物である。

ある日、新宿駅で手に入れた五・一五事件について書かれた小冊子を、肥臭い作業服のかかった室のなかで読みふけていた。

前年（一九三二年）の五月十五日、一団の海軍将校が首相官邸を襲撃し、「話せばわかる」と言う犬養毅首相を「問答無用」と射殺した事件で、この小冊には、政党政治の腐敗を暴き、別行動に参加した農民決死隊の窮状を訴える文が載っていた。

「農村の窮乏は土地が狭いためだ。農家の二、三男は満州に移住せよ。立国の基礎は農村にあり、純朴勤勉な農民の気風を奮い起こすことが、時局解決の根本である」。こうした一

字一句に、「俺は道を誤ったか」と、高拓に入ったことが悔やまれた。

販売実習もあった。他の班が、できた野菜を荷車に満載して、坂を下って街に向かっていく姿を見ると、楽しそうに羨ましかったが、自分がやってみると、荷車に振りまわされるわ、きまり悪いわで閉口した。しかし、高拓の野菜は評判がよく、街角に立てば、おばさんや姐やさんがどんどん買ってくれた。

仮想熱帯作業

八月になっても新入組は休暇なし。炎天下のアマゾンを仮想して、特別訓練をうけた。

収穫を終えた甘藍（かんらん・キャベツ）畑跡の整地である。帰省する学生は、自分たちが丹精した桃の実を、高拓のレツテルのついた箱に詰めて、喜々として帰っていった。

寮には藤島正徳助教授（高拓一回生）が残っているだけで、気が抜けたようになった。

舎監（しゃかん）の姿も見えない。われわれ新米七人は毎日、炎天下の敷地の隅で黙々と仮想熱帯作業に励んでいた。

一学期の休日はほとんど上塚校長の来校でつぶれたが、この時期はそれすらもない。校長は超多忙な政治家だからだ。上

塚校長は学校では植民史の授業を担当した。

その講義は名調子で、民族一連の大叙事詩となり、移民の難
難辛苦を美化してしまふのだった。

そして休日になると、大理想の講演となり、植民地建設から
大和民族の将来にわたり、憂国の熱情ほとばしって、いつ果
てるとも知れない大講演となって終わるのがつねだった。

つぎつぎとアマゾンに関心のある人や、関心を持たせたい
人を連れてきては講演させるのだが、それに先立つ上塚校長
の挨拶は、知らず知らずのうちに憂国の熱弁へと高まり、口
角泡を飛ばして爪先立ち、はては天上天下唯我独尊の境地に
入る。聞き手の生徒は置いてけぼりだ。

休日の朝、生徒たちは朝礼を心そぞろにすませると、出入
口の靴箱に殺到する。

心は学校の外に向いているが、一抹の不安がある。東京か
らかかってくる電話を恐れているのだ。

その時間帯に校長来訪の連絡があると、当番の号令が、
「全員、娯楽室へ」

と集合を告げる。これで、休日は万事休す。重要人物の来
訪ともなると、朝礼のやり直しで、ブラスバンドを先頭に、
玄関のポーチの上にはためく国旗のもとに整列する。

やがて、校長の乗った黒い車を先頭に、数台の車が砂利を
きしませて坂をのぼってくる。

こうして、青く晴れわたった休日の空のもと、むなしい時

間が過ぎていった。

憂国の士・上塚司

この特異な人物の上塚司とはどんな人だったのだろうか。

上塚司は戦後、日本・ブラジル中央協会理事長を二十年間つとめ、戦前は立憲政友会の、戦後は自民党の代議士として知られる。一九六五年には勲二等瑞宝賞をうけている。

姫路市に住む日系人史研究家の野口敬子女史によれば、上塚司は一八九〇年（明治二十三）に、熊本県益城郡杉上村の士族の家庭に生まれた。肥後学派の流れをくむ一族の出身で、県立熊本商業学校を経て、

神戸高等商業学校（神戸大学の前身）を卒業。第一回ブラジル移民の引率者で、

「ブラジル移民の父」とよばれる上塚周平の従弟にあたる。

上塚が神戸高商で学んでいた時代は英独をはじめ世界の強国が覇権を争っていた時代で、隣の中国は欧米列強に分割されかかっていた。

神戸高商卒業後、上塚は外交官志望だったが、南満州鉄道会社（満鉄）に入社。

満鉄社員として七年半を送ったが、一九二〇年二月はじめ、妻を失った直後に衆議院が解散され、熊本県の第五区の候補

者として推された。兄の秀勝は当時、立憲政友会の党員で、県会議員だった。

この年の五月、初の小選挙区制による総選挙で、立憲政友会はライバルの憲政会を抑えて大勝。上塚も当選し、満鉄を辞職する。

満鉄時代、上塚は朝鮮全道を遍歴し、当時の豆満江畔から満州・吉林にいたる区間を調査して、「吉会鉄道論」という報告書を提出。次いで、当時の北満、朝鮮、蒙古、北支那、中部支那、南支那、仏領インドシナの経済調査に参加。外務省から「揚子江沿岸商工業に関する調査」、農商務省から「支那における商工業に関する事項の調査」を委嘱された満州通であった。

政治家として第一歩を踏みだした上塚は、一九二三年に衆議院を代表して、デンマークのコペンハーゲンで開催された、第一二回万国議員会議に列席し、デンマークをはじめ欧州諸国を歴訪した。このとき、デンマークの農村における農業協同組合事業をつぶさに視察し、旅先から政友会機関誌「中央新聞」に投稿をつづけた。この連載はのちに『農業の国デンマーク土産』として単行本になった。

一九二四年一月末に衆議院が解散し、五月の第一五回総選挙では落選したが、デンマークに同行した犬養毅の推薦で高橋是清農商務大臣の秘書官となった。

翌一九二五年の農商務省の分離廃省の際には、商工大臣秘書官、大臣官房秘書課長に任命され、一九二七年四月には高橋是清大蔵大臣の秘書官に就任している。さらに一九二八年二月の総選挙で、上塚は議員に返り咲いた。このように、大臣を歴任した高橋是清の知遇を得て、また側近として中央政界、中央官庁に多くの知己をつくった。



大蔵大臣高橋是清とその秘書官をつとめた上塚司（1927年ごろ。上塚芳郎氏提供）。上塚はアマゾン産業研究所の設立や法人化において高橋是清の後援をうけた。

上塚はかねてから、日本の人口問題、失業、農村の不況の打開のために海外発展の必要性を考えており、日本全土の目

が満州に向いているとき、大自然のまま残されているアマゾンの開拓移住に着目していた。実踏調査した経験から、満州開拓には異論を抱いていた。ハワイ、北米では排日運動が起きており、カナダ、オーストラリアなど英国の植民地は白人しか受け入れない。ブラジルでもサンパウロ周辺では日本人排斥の動きがある。ペルーやアルゼンチンも同じような状況にある。残された土地はアマゾンしかない……。

一九二八年と三〇年の二回にわたってみずからもアマゾンの現地調査をした上塚は、気候風土がけっして日本人に不適ではないと、一〇〇万町歩の開拓にますます胸をふくらませた。

「アマゾンア産業研究所月報発刊に際して」と題した上塚の序文によれば、

「過去数世紀に亘り幾度か欧米人の手に依って此の神秘境の探検は繰返された。然共彼等は自ら汗して原生林を開拓するに非ずして、その求むる所は土人の金銀財宝に非ずんば、原始林中にある自然物の搾取に外ならなかった。アマゾニアは此の如き利己的なる心なき闖入者を心より嫌悪し、また此の如き貪慾なる暴君の入り来るを強き力を以て拒否している。(中略) 今や我が日出る国の民族こそ、彼女が求むる恋人として、遙かの彼岸より三千歳文化の華を載せて渡り、拓き、植へ、培ひ、収め殖やさんとして第一歩を踏み出す。(後略)」

とある。これが上塚校長のアマゾン開拓にかける理想であり、先進諸国の植民地政策に対する批判と、満州開拓へとなびく日本の世論への警告でもあった。

現地所長の辞任騒動

高拓の木野逸作講師がインド派遣から帰ってきた。

全校生徒のまえで、木野講師のジュート視察の報告講演が行われたが、期待はずれの興味のわかないもので、まるで田んぼで稲を眺めてきたような内容であった。

木野講師は、現地のアマゾン産業研究所が総力をあげて建設してきた模範植民地「アンジラ・モデルセツルメント」で指導に当たる予定になっているが、これで大丈夫なのだろうか。

工業学校出身の川村蔵吉という大工が寮に入ってきた。この人たちが九月十三日に、もんでびでお丸で横浜を出航するのを、全校生徒で見送った。渡航者のなかには、のちにジュートの試験栽培に成功して、ブラジルのジュート産業の基礎をつくった尾山良太の家族（第一回家族移民）もいた。

高拓の敷地のなかに「黙思の森」と名づけられた一角があった。ここは彼岸、すなわちアマゾンに渡る悟りを開く場所と言われていた。その森につづく雑木林は、秋風とともに落葉しはじめ、堆肥用の落ち葉かき作業が忙しくなった。

芋がよくできて、芋掘りも忙しくなった。自然に焼き芋がひんばんにおこなわれるようになった。

喜んだのは生徒ばかりではない。上塚校長は芋掘り作業を背景にして、記念写真を撮ることを好んだ。高橋是清をはじめ、日ごろ世話になっている要人をつぎつぎ招いて、芋掘り班といっしょに写真を撮るのが忙しくなった。ついには東久邇宮も訪れた。私は芋掘りよりも芋虫捕り作業をやらされた。入学当初に整地に追われた寮の北側の大根畑に、大量の芋虫が発生したのだ。藁の付け根に隠れている幼虫を、一匹一匹丹念に探しだしては、割りばしでつまみ上げるのである。北風が私を震えあがらせる。雑木林から立ちのぼる煙は焼き芋の煙だろう。

ああ、焼き芋が恋しい。

高拓も、高拓のある登戸も冬枯れになった。

太田正充教授がアマゾンから帰ってきて、教壇に立った。太田教授は二回生の引率者として現地に入ったが、まもなくしてアマゾニア産業研究所所長の栗津金六がアマゾン開拓に希望を失って去ってしまい、いわば無法状態になった研究所の立て直しに苦勞したらしい。とくに先遣隊の一人、大工の棟梁の増永栄次郎は栗津所長と折り合いが悪く、所長が去ったあとは飲んだくれては暴力をふるい、研究所の実権を握っていた。太田教授も増永棟梁に暴力をふるわれたという。

この粟津所長の辞任騒動はあとでくわしくふれるが、一回生による各作物の試作も、ジュートの栽培試験もこれというほど成果が上がらず、一回生の半数が帰国または南伯に移転していくという事態にいたって、粟津所長はついにアマゾン開拓に反対を唱え、上塚校長に進言したが、校長はこれを受け入れず開拓論を強硬に推し進めたために、所長は辞職して南伯に去ったのだという。これにもなつて、二回生も大多数は帰国するか、南伯へ移転していったのだそうだ。

上塚校長は太田教授の現地での労に報いたいのだろうが、太田教授は農学を教えるわけではないから、二回生尾崎麦門冬の短歌を紹介しながら、現地の様子を話しはじめた。

その話し方から、実情をナマで伝えることに躊躇しているのが、ありありうかがえた。尾崎麦門冬は本名を尾崎龍夫といい、伊藤左千夫の門下生であり、左千夫の研究者でもあった。尾崎はアマゾン産業研究所の二代目所長の辻小太郎にいらまれて、ベレン領事館に勤務することになり、領事を最後に退官後、帰国。一九九四年に没している。

学生もお互いに、自分の日だけしか信じなくなっているの
で、現地の状況の危うさに関する噂はいろいろと流れてきて
いたが、歌の文句じゃないが、

「知らないうちが花なのよ」を決めこんで、聞き流していた。

就寝まえの点呼では、当番の打つ太鼓の音とともに、暗い
裸電球のともる廊下に出て並んだ。点呼が終わるとすぐ解散

して自室に入っていたのだが、最近は現地の状況が悪化しているの、舎監の訓示が多くなった。ふだん何もしていないから出番到来と思うのだろうが、現実味のない修身のような説教ばかり並べられて、学生は迷惑千万だ。

舎監は咳払い一番、こう言った。

「現地の状況はますます厳しい。生爪をはがすような困難な生活に耐えなければならぬ。

きみたちはその覚悟ができているのか」

彼は支那浪人と言われる得体の知れない人物で、前身は誰も知らない。あるとき、何かの催しで父兄が招待されたことがあった。高橋三吉連合艦隊司令長官の軍服姿もまじっていた。長官が脱帽して、舎監に深々と挨拶している姿を見た。だからといって、舎監が偉いとは感じなかった。長官の息子も二回生だから、あれは父親としての礼儀だったのかもしれない。

足もとから寒さが身に染みてくる季節になった。

毎晩、登戸方面から夜風に乗って、小唄勝太郎の甘ったるい歌声が流れてくる。

島の娘が荒海に消えた男を想う、切ない恋の歌だ。

絞りだすようなその美声を聞いているうちに、私は、これこそ高拓の寮歌だと思えてきた。

渡航準備

年が改まると、渡航準備の雰囲気は押し寄せてきた。

学科も現地での対応にウエートがおかれた。生徒の心はアマゾンに向かってしまっている。しかし、模範植民地アンジラ・モデルセツルメントの建設は、研究所の総力をあげたジュート試作の失敗で、頓挫してしまったらしい。校長の口から「モデルセツルメント」という近代語が聞かれなくなったのだ。

そこで、われわれの行く先は、アマゾン河のもう一つの支流、ワアイクラツパ河畔に新しく開拓する高台地に変更になった。各人二五町歩（約二五ヘクタール）を割り当てられるという。

そんな状況を上塚校長の熱弁で聞かされるのだが、見たこともない土地の話で、いっこうに頭に入らない。

上塚校長の熱弁は、ワアイクラツパ植民地の建設と、大和民族によってつくられるべき正義の通る社会の建設という、大理想に移っていった。日増しに植民地を去る者が増えていく、校長ははらわたが煮えかえる思いなのだろう。その反動で、新植民地建設の大理想が、熱情の嵐となってわれわれを襲ってくる。ついには、「去る者は追わず」と、悲壮な言葉を吐き捨てるまでになった。

生徒のほうは、そんなことにはあまり関心がなく、

「生爪をはがすような」と言われる困難な生活に向けての準備に張りきっていた。生徒たちはいわば、ようやく翼が生えそろってきた渡り鳥。新大陸に向けて飛び立つことしか考えていない一群だ。高拓はいま、渡りの時機が近づいてきた若鳥の巣のようにざわめきたってきた。

休日には校長が、私たちと同行する、先輩たちの「呼び寄せ花嫁」を紹介することが多くなった。朝、「娯楽室に集合！」の号令が飛ぶ。円座して待つなか、花嫁さんが入ってくる。母親同道の人、一人で来た人、頬を染める人、十字架を胸に端然としている人などさまざまである。

十六歳で四回生最年少の私は、現地でいちばん必要とされる「道具」である嫁さんを押しつけられることなく、単身で渡航できそうな気配になった。あとになって聞いたのだが、父は学校によびだされて、私のすぐ下の妹を高拓生にくれと口説かれたのだそうだ。

渡航する者は髪の毛を伸ばしはじめた。そのうち、生活用品から帽子、背広にいたるまで、業者が注文を取りにくるようになった。

三月末の卒業式には、父兄もよばれて、来賓が代わる代わる勇壮な熱弁で、祝辞を贈ってくれた。たいがいは決まり文句だが、なかに一人、頭のはげかけた初老の男性が、つぎのように言った。

「赤道に沿うて流れる河には、古来、文明の発達した試し

がない！」

居並ぶ来賓、父兄、校長をしり目に、型破りの弁舌をぶち上げたのには驚いた。

私たちは、この老人の自説というか暗示を覆してみせなければならぬという宿題を背負ってしまった。

第二章 門出の歌

大言壮語の激励をうけて

一九三四年四月十日、東京・代々木の日本青年団修養団本部に来てみると、桜のつぼみが春を待ちわびていて、熱帯行きの軽装には風が冷たかった。残念なことに渡航できなくなった佐瀬仁も泊まっていた。理由はわからないが、秀才の彼は日本に残ったほうが将来性があつたからではないかと思う。

しかし、われわれには引率者がいない。つぶれかけた植民地へ行くのでは、なり手がないのだろう。

一回生から三回生までは引率者が自動的に開拓現地の支配人になっていた。結局、寮長の丸岡京（三回生）が団長を

つとめることになった。「自立、自治」の高拓精神を守る一団は、烏合の衆ではないはずだ。

まず、校長の引率で、宮内省に参上して天皇陛下にお別れの挨拶を申しあげた。一同記帳をすませると、関係先への挨拶まわりに日が過ぎた。永井柳太郎拓務大臣からうけた「ご苦労様です。二、三年したら一度帰っておいでなさい」という送別の辞は、毎日、大言壮語の激励をうけている耳に、ありがたく響いた。

明治神宮では、百武源吾海軍中将（ひやくたけげんご・のちに大将）が深々と畳に伏して、われわれに別辞を述べられたのが印象的だった。

桜が咲きはじめた四月十六日、横浜へ行って、ブラジル領事館でパスポートに査証をうけた。

今村泰三はアコーデイオンを買った。つられて、それぞれがレコードなどを買いこんだ。

そのなかには、「赤城の子守歌」「会議は踊る」「マドロスの恋」「東京音頭」、それから仲間うちで「酋長の娘」とよばれていた「南洋小唄」などがあつた。

出航まであと二日だ。桜は満開になり、われわれはカフェではしご酒をしては、花の都を浮かれ歩いた。

四月十八日十時、春爛漫の横浜港で、ぶえのすあいれす丸に乗りこんだ。



1934年4月、アマゾン渡航をまえに、両親、祖母、6人の弟妹と撮った記念写真。中央の帽子姿が16歳の安井氏。

四回生五一人（うち一回生一人、三回生一四人）、同伴夫人、呼び寄せ花嫁をあわせて八四人だ。われわれのいる甲板と岸壁とのあいだは五色のテープの川になった。父母、弟妹、私が赤ん坊のときから世話を焼かせた叔母の村上勝子とその家族の姿は、岸壁で揺れ動く大群に埋もれて消えそうになった。

神戸まで便乗する中学生、女学校生の修学旅行を見送る大群がいつしよになって振りまわす日の丸の旗の波、
ブラスバンドの「螢の光」、あとからあとから投げ交わす

テープが絡み合って、春の空は沸きかえった。

ついにドラが鳴る。最後まで甲板で別れを惜しんでいた人の群れがタラップを下りてしまうと、船のなかは見栄えのない中学生と移民の群れだけになってしまった。華やかな姿はみんな陸へ去ってしまい、甲板は灰色になってしまった。

ブザーが鳴りはじめ、腹に重々しく響いた。ディーゼルエンジンの音が港を圧して響きわたると、岸壁からも壮行を鼓舞する大音声が沸きあがり、「螢の光」がひととき高く流れはじめた。旗の波、ハンカチの波、涙をぬぐいつつ手を振る家族をおいて、船体はゆっくりと岸を離れていく。さつきまで母親らしい人と別れを惜しんでいた斎藤四郎が、黒目がちの大きな瞳に涙を浮かべて岸壁に見入っている。

テープが切れて落ちていくと、船はゆっくりと向きを変えて旋回をはじめめる。

懐かしい人たちの姿は、ひとかたまりの色となって埠頭に溶けこんでいった。モーター船が何隻も見送りにきている。そのなかの二隻に舎監の顔が見えた。そのどす黒い顔に向かって、渡航生たちはこのときとばかりに、無責任な雑言を浴びせかけた。

「おーい中村、悔しかったらアマゾンに来てみる！」

「アマゾンで会おうぜ！」

「殺されるぜ！」

しかし、その声もむなしく消えていく。港口を離れた船

は、警笛一声速度を上げて、南を目指して波を切りはじめた。私たちの部屋は特別三等で、夫婦の部屋には形ばかり仕切りがあったが、われわれ独身者と同じつくりだ。一室に二段ベッドが七つあり、一四人が入れた。作業服に着替えて特三の食堂に行く。ここで、鯨の肉というものはじめて食べた。

翌日、神戸港に入港した。出航のときに、見送りにきた母の弟の重蔵叔父が、一歳の従弟を私に抱かせて、記念写真を撮った。

「この子が大きくなって写真を見たら、こんな従兄がいたのかと言うだろう」

と、叔父は私の腕からわが子を抱きとった。今生の見納めの記念写真なのだ。

関門海峡を過ぎると、日本とおさらばだ。菜の花畑を間近に望みながら進んでいく。

日章旗を大きく振っている姿が見えた。土地の出身者がこの船に乗っているのだろうか。

それとも、移民船と知って、われわれを見送ってくれているのだろうか。われわれも手を振って応えた。

日本人に送る最後の挨拶だ。

南洋航路

横浜を発って七日目、香港がわれわれにとってのはじめての外国である。ジャンク（木造帆船）の往来が目立つようになり、島影が現れてきた。赤屋根に白壁のバンガローが目につきはじめると、目の先を過ぎる島を見て、藤島正徳が、「あんな家を持てるようになりたいなあ」

と、感慨を吐く。みんな似たような思いを抱えて、舷側に集まってきた。私も一度は、モンテ・クリスト伯のようになってみたいものだと思った。

外国への第一歩が、世界三大美港の一つであり、東洋の真珠とよばれる香港だからか、とめどなく幻想が湧いてくる。ところが噂にたがわず、宝石をちりばめたような大都会にはコレラが流行しているそうで、一等船客以外は上陸禁止になった。

船員たちは夏服姿で上陸していく。髯（はしけ）が行ったり来たりして横づけになる。丸髻（まるまげ）姿のマダムらしい女性が、慣れた足さばきで髯からタラップを上がってくる。しばらくするとこのマダムは、船員といっしょに髯に乗ってネオンサインを目指して出ていった。

今村泰三が買ったレコードにもある「マドロスの恋」というやつだ。

「今日は椰子の島影、明日はオーロラ燃ゆる下・・・」か

と、特三組は指をくわえて見ているだけだ。

夜になると、燦然と輝く港の夜景と南十字星の美しさを遠望して、憂さを晴らすのだった。

五月五日か六日だったか、つぎの寄港地シンガポールに着いた。真つ先に目に入ってきたのは、まばゆい草原の濃緑色だ。岸壁に着くと、脚の長い荷役が素早く乗りこんできて、船内にはわかにかに騒々しくなった。

青山学院を中退したという畠中実はなかなかすばしい男で、われわれのなかではいちばん語学が達者で、渉外にも慣れたものだ。彼はさつそく、日本人の案内人を連れてきて、独身者のキャビンで、市内見物の希望者を募った。

山崎太郎、秋山三雄、武井信元、今村泰三と私の五人が名乗りをあげた。港には幌付きのフォードが待機していた。黒人の運転手だった。市内の商店街で山崎が写真機を買った。見物が一段落したところで、レストランに入った。二階にあるこぢんまりした店内には、卓が五つほどある。

トルコ帽であろうか、その赤い帽子の似合う褐色の肌の男性が二人、食事中だった。

「小さな店だが、けっして低級ではない」
と、案内人は強調した。

われわれの卓にもカレーの香ばしい替りのする黄褐色をした料理が運ばれてきた。案内人はわれわれのために辛味を抑

えてもらったと言った。とてもうまいのだが、その辛さに舌がしびれて、味わうどころではない。

「これ以上辛味を落とすと、料理の味をそこなう」と、案内人は言った。食後の小さなバナナがめずらしかった。

シンガポールを出航すると、しばらくのあいだは、見送りのお札を絵葉書に書くことにいそしんだ。デッキに出ると、スマトラあたりの山だろうか、高く連なった山々が青くそびえていた。夜も、その山の嶺を見ながら船は進んだ。ここがマラッカ海峡だろう。舷側を夜光虫の光がきらめいては消えていった。空には南十字星がゆっくりと瞬いている。

インド洋は、見つめていると、深い海底へ吸いこまれそうなくらい透明だ。サファイア色の大海のうねりのなかに、飛魚の大群が終日、滑空を楽しんでいる。

食堂ではいつも森進一郎が、中井憲明、松沢正行、有井繁弥（いずれも三回生）などを相手に麻雀をしていた。

私の使っていた階段側のベッドは暑くて寝汗をかき、それが耳に入って痛くてしょうがなかった。

キャビンではしばしば酒宴が開かれ、また毎晩、流行歌が流れていた。高拓の寮に漂ってきた「島の娘」はもう流行遅れになったのか、聞かれなかった。

南十字星の感激も薄れて

赤道を通過する際に開かれた赤道祭では、「東京音頭」と
“酋長の娘”が船内のいたるところに流れた。コロomboの港
が近づくころ、夜に急ぎ水葬がとりおこなわれた。

長旅で衰弱したのか、船客のひとりが新天地も見ずに息を
引き取ったらしい。これで、この航海で二人目である。港に
入ってからだと、遺体の法的な処理など何かとうるさいら
しい。

船尾にしつらえた台の上に遺体が安置され、デッキに遺族
がそろろうと告別式がおこなわれた。それがすむと、台が傾け
られ、覆っていた白布が取られて、遺体を海に落とした。
速度を落としていた船は、告別のブザーの尾を引いてピッチ
を上げた。暗い海はどんどん後方の闇のなかに吸いこまれて
いった。

港の灯が間近に迫っていた。コロomboの港は防波堤のなか
にある。防波堤に波がうねっては砕け、砕け散った飛沫が奔
馬（ほんば）のように躍っていた。陸地は椰子林で覆われて
いる。コロomboでもコレラの流行のために上陸できなかつ
た。移民船であろうか、大勢の人間を満載した中国の船が停
泊していた。

南アフリカ連邦（現在の南アフリカ共和国）の東部、イン
ド洋に臨むダーバンの港に着くころには、月日も曜日もあり

まいになってしまった。

港の近くに公園のような広場があり、ここでは新婚夫婦も女性たちも上陸した。私は例の仲間たちといっしょに上陸した。その広場には、轆（ながえ）をつけた人力車が客を待っていた。

車夫は極彩色に染めたダチョウの羽で褐色の身体を飾っている。

中井と松沢が試乗した。轆を持ちあげると、二人ともわれわれに手を振った。二人が座席にそっくり返る格好でおさまると、車夫が長い脚で地面を蹴り、轆が勢いよく天に向かって弾んだ。車夫は肘で轆の先の方にぶら下がって宙を飛ぶ。轆が下がるとふたたび地面を蹴る。車夫も半分は車に乗っていく格好だ。その様はまるで極彩色の舵鳥が走っているのと同じで、感心した。日本の人力車のようにこせこせしていない。広場の外の街路を電車が走っていた。乗り降りのたびに老若男女がキスをするのには驚いた。

東洋紳士のわれわれは、目のやり場がなくて面映い。アフリカ南端のケープタウンでは、畠中、山崎、武井、今村、秋山、私のメンバーで上陸した。

目指すテーブルマウンテンは、山頂の霧が晴れずに途中で下山した。白人オンリーの国なので、あまりいい気持ちはしないが、門前払いはくわなかった。見物して歩いているうちに、ヴィクトリア・ステーションのまえに出た。英国の探検

家で南アフリカの政財界に君臨したセシル・ローズの銅像が立っていた。

「汽車に乗ってみようか」

と相談しあったが、誰も勇気がわかなかつた。

セシル・ローズの銅像をまえに山崎の写真機ではじめて記念写真を撮った。

つぎの朝、テーブルマウンテンを港から眺めながら出航した。

よく晴れていたなので、その姿がいつまでも見えていた。

希望峰を通過してインド洋から大西洋に入るころには、酒宴つづきのせいか腹の具合がおかしくなった。

航海にもあきてきたし、懐にも秋風が吹いてきた。南十字星にも感激が薄れた。

ブラジル国到着

六月一日の明け方、ぶえのすあいれす丸は晩秋の霧のなかをゆつくりと、リオデジヤネイロのあるグアナバラ湾へ入っていった。

四月十八日に横浜港を発って、香港、シンガポール、コロomboを経て、アフリカ南端まわりで四十四日目、朝日が輝きはじめたころ、海軍兵学校の沖で投錨した。検疫、入国の手続

きがはじまった。医師が乗船してくると、みんな緊張した。トラホームの検疫が厳しいらしい。後甲板にある医務室のまえに長い列ができ、順に入っていく。

接岸すると、われわれは舷側に集められた。まもなく、団長の丸岡京に先導されて下船を開始した。私は乗船後、丸岡団長に命じられて伝書鳩の輸送係をしていたので、かさばる二つの籠も提げて降りた。

下船して甲板を見上げると、四人が残されているではないか。中井憲明、若林政雄、そして伊原只郎夫妻である。

トラホームが見つかり検疫に引っかけってしまったのだ。いつも赤い目をして目薬をさしていた宮地茂はと見ると、無事上陸していた。

はるばるブラジルまで来ながら本国送還になる彼らの心中は、いかばかりであろうか。中井はボートデッキで男泣きに泣いていた。涙をぬぐおうともせず、千切れるように手を振っている。彼は三回生として来伯するはずだったのが、仲間といたずらがすぎて罰をくらい、一年間、神奈川県内のサカガワとかいう牧場に送りこまれていたのだ。本当に難関をくぐってやってきたのに、目的地を目のまえにしてふたたび万里の波路を引き返さなければならぬのだ。同志を捨てていく私たちも、慰めようもなく、痛む心で手を振った。

私たちは迎えの舢乗に乗って、「花の島」を意味するイーリヤ・ダス・フローレスの移民収容所に入った。

さつそく浜辺へ出て、異国の土を見まわすと、「万里の波濤を越えて」だの「前人未踏の地」だのと大げさな挨拶に送られて来てはみたものの、足もとの草は、子供のときから見慣れた日本の雑草とすこしもちがわないではないか。

覚悟してやってきたつもりだったが、食堂ではフェジョアーダとかいう牛の内臓の煮込み料理と、スルイーという南伯産のマンジョカ粉でつくった麦焦しのような干からびた味の食事には閉口した。マンジョカはキャッサバともマニオクともよばれ、ダリアの根茎に似た芋を生じるブラジル原産の植物で、原住民のインディオが食料にしていた。この芋の純白な澱粉はタピオカもよばれ、南伯ではマンジョカ粉をスルイー、北伯ではフアリーニャとよんで、主食として魚や肉料理にまぶして食べる。

高拓では、これらの料理を経験しなかったので、たいらげる勇者は誰もいなかった。その代わり、朝食にはホーロー引きのカネカ（マグ）一杯のコーヒート、二〇〇グラムのフランスパンが配られた。コーヒーの本場とはいっても一級品ではないのだろうが、それでも毎朝、食堂集合の鐘が鳴るのが待ち遠しくなった。

土曜日だけは、鱈と馬鈴薯と椰子などのジュースを熱帯特有の香辛料で煮込んで、ウルクー（ベニノキ）という木の紅色の実で色づけしたカルドというシチュー風料理が出た。これで息をついた。ろくろく食わずに過ごしてきた女性たち

も同様だった。これにもマンジョカ粉を振りかける。マンジョカ粉は芋の味がするのだが、日本人にはおがくずのような気がしてならない。

大和撫子もこれからがたいへんだ。

楽園の島の収容所

この島には、大勢の囚人が収容されていた。いずれも軽犯で、模範囚たちだそうだ。

われわれがとった食事は本来、彼らのためのものだと思われた。私たちが着いたときには、ポーランド人が宿舎に大勢いた。満州経由でやってきたそうだが、言葉が通じないので、わしいことはわからない。

食器の洗い場には、金髪碧眼のがっしりしたおばさんたちが働いていて、なかに美少女もちらほらいた。

彼女たちは、どこに下げたらよいのかわからずうろろしているわれわれの皿を取りあげては、洗ってくれた。後片づけがすむと、彼らは男女一団となって食堂の隅でコーラスをはじめた。たいがい裸足だった。美少女の一人ニーナから、ダンケシェーンなどというドイツ語を教わった。ポーランド語でないのが不思議だったが、あとになって考えると、ナチスに追われたポーランド系ユダヤ人だったようだ。彼らのコーラスは素晴らしかった。

島の暮らしはおとぎ話の国か楽園のようで、ブーゲンビリアの花が色とりどりに咲き、芝生は因人たちによってよく手入れされていた。島の総監邸の赤い屋根に白壁のバンガローが美しく映え、島を取り囲むグアナバラ湾に、対岸のニテロイ市の灯火が投影している。シャチが多いと見え、大きなやつが海原を跳ねる。

総監邸でダンスパーティーが催されたときには、私たち移民も招待された。日本では考えられないことだ。コーラスもろくにできない無粋者ぞろいなので、出席は遠慮申しあげたのだが、結局、畠中実、岡村徹らが代表して出席することになった。岡村はタップダンスの真似ぐらいはできた。

宿舎の階下の売店には、ネーブルとポンカンの合いの子のようなバイア蜜柑を売っていた。船旅でもっとも恋しかったのは果物で、とくに女性たちが欲していた。

バイア蜜柑に病みつきになって毎日食べ、ビタミンCを補給した。二つ買うたびに、ずつしりと重く厚みのある、四〇〇ヘアイス（当時の邦貨で約一〇銭）銀貨を一枚支払った。売店の二人の娘たちによれば、われわれが目指すアマゾンのパリンチンスというところは何の楽しみもないへき地だが、毎土曜日にはダンスパーティーが開かれるそうだ。

「あんたたちはそんな蛮地に行かないで、リオデジャネイロに残りなさい」

と勧めてくれたが、ここでは食っていくあてがない。彼女

たちはカリオカ、つまりリオ生まれのリオ育ちというリオの子である。

こんな楽園に住んでいれば、少々腹が減っても文化の香りにふれるだけ幸いかもしれない。島の舩は役人と職員以外はほとんど乗れないので、便乗の許可が取りにくい。それでリオに出るのもおっくうになって、楽園でぶらぶら過ごすことが多かった。

上陸後二日ほどして、リオの港の倉庫へ荷物の整理に駆りだされたことがあった。倉庫の外を労働者風の人びとが、電車にぶら下がって通る。通るたびに誰かが、

「シネース、シネース（支那人だ、支那人だ）」

と言うので、しゃくにさわって、

「ジャポネース、ジャポネース」

と言いかえすのだが、相手は多勢だ。しまいにはあきらめて、支那人になったままでいた。

そのつぎにリオに出たときには、「マンゲを知らずして、リオに来たとは言えない」ということになり、マンゲという有名な赤線地区を見物することにした。誰もその場所を知らないのも、人から聞いた話を頼りに、日が暮れるまで歩きまわった。それらしい一角の建物の入口に、女が大勢腰掛けているのでわかった。わが一団もぞろぞろ歩きながら、

「これが世に有名なマンゲであるぞ」

と冷やかして満足した。

解の時間を気にしながらでは、冷やかして歩くのも落ちつかなかつたが、鼻の下を伸ばして家のなかばかりに気をとられていて、私は路地の中央にいた牛太郎（客引き）に気づかなかつた。そいつにいきなり腕を捕まえられて、揉み合うちに仲間はどんどん行ってしまった。

声をあげて助けを呼ぶわけにもいかない。そこへ女二人が牛太郎に加勢したので、入口のなかへ引きずりこまれてしまった。たいへんだ！ けれども、相手が取り押さえたと思つて油断したすきに、力まかせに飛びだして逃げだすことができた。

仲間の影が角を曲がるところだった。危うく置いてけぼりにされ、カリオカの仲間にされるところだった。

アマゾンへ行くか、南伯へ去るか

楽園の島でアマゾン行きの船を待つあいだ、月のない暗い晩に、山崎太郎が私をよんでニチロイ市側の浜辺へ連れだされた。

行つてみると、小高い丘の崖下と渚とのあいだに小さな窪地がある。暗いのでよくわからないが、芝生のようだ。

崖の上には雑木が生えている。狭い海には対岸のニテロイ市の灯火が映っている。

芝生に数人の人影が円座をつくっているが、顔は見分けがつかない。何か密議をこらしている雰囲気だ。

山崎は、崖を背にしている荻野正美のそばに私を座らせた。海を背にしている者のなかには、大友達眼、原莊太呂、大久保巖、木村宗一らがいるようだ。

これは高拓の敷地の一角にもあった「黙思の森」の再現だと思った。丸岡京、二條豊基、藤島正徳ら上級生の長老格の姿はない。

荻野が私に向かって口火を切った。話の骨子は、アマゾンア座業研究所は植民の失敗でつぶれかかっている、木村という研究所のリオ代理人や先輩の話を聞いても、それはたしかだという。

「先輩たちは南伯のサンパウロ周辺で大勢が成功している。望みのないアマゾンに行くよりも、ここで別れて残るのが賢明である。頼って行く先はいくらでもある。何もアマゾンばかりがブラジルではない。きみの考えは賛成かどうか」

と言うのだ。こんな大事なことを相談するにしては、藪から棒だ。誰が首謀者だろうか。私より九歳も年長の大友がいるのに、黙っているとところをみると、一同は衆議一決して、横に座っている荻野がその結論を私に説明して、私の意思をたしかめようとしたのだ。

大友はつねに人の後ろに隠れて何かを企んでいるという先入観がそう思わせた。山崎は私が事の経緯を承知していると

思っていたようだ。

そこで私は、一同に向かって答えた。

「せっかくここまで来たのだから、アマゾンに行って自分の眼でたしかめてから、南伯へ行く。私にはそれでもけっして遅くはない」

私は覚悟した。密議を打ち明けられたからには、ただではすまされない。団長の丸岡を抜きにしている以上、これは集団逃亡だと感じた。

一同はしばらく黙っていたが、ようやく大友が口を開いた。「では、相談の結論はアマゾンへ行くことにする。これから、新しい藤島団長のもとに団結を固めて、決心の固まっていないやつには、張り紙をして、心を引き締めるよう促す。その張り紙を安井が大書きして張りだせ」

いつのまに丸岡から藤島に団長が変わったのだろう。

私は狐につままれた気分だった。

そのうえ、楽園の島で字を書かされるとは、はなはだ迷惑だ！ もっとも、団長の仕事は下船のときに指揮をとったぐらいで、自律と自治を重んじる高拓生には、団長が変わろうが何ら影響はなかった。

迷惑といえ、私が輸送責任を負わされている伝書鳩でも、こんな出来事があった。伝書鳩の籠をおく場所がないので、われわれしか使用しないトイレのなかにおいておいたのだが、誰かがいたずらをするともみえて、籠のフタが開けっ放

しになっていることがたびたびあった。植民地の失敗は周知のことで、内心不満を抱いている者が大勢いる。その腹いせに籠を開けるのだろうか。

鳩はつぶれた植民地では用をなさないし、誰も大切だと思っているやつはいない。だから、この楽園の島で逃がしたほうが鳩のためかもしれないが、年上の仲間たちの悪戯に追従するのもしゃくだ。

「逃がすのだったら、私の流儀でやるつもりだ。勝手な真似をするな」

少々腹に据えかねて、心当たりの人間に文句を言ってやった。

私が鳩のことにかまけているあいだに、新団長の藤島はしばしば、アマゾン産産業研究所の木村代理人といっしょにリオ市へ出かけていた。

東京から託された、植民地へ持っていく三万円の大金の両替に関することらしい。あるとき藤島は、自分のベッドに腰掛けながら、両替用の金を渡すよう木村から迫られている、と私たちにこぼした。けれどもこんな時節だ、研究所の代理人とても信用できるわけがない。

ところが昨日、現地支配人から、「両替を木村に委託するように」と電報がきた。

木村代理人が言うには、

「パリンチンスでは、それほどの大金を両替する方法がな

い。リオでやっていかなければ、現地でたちまち立ち往生だ」

新団長は東京とも連絡できず、苦衷（くちゆう）を漏らしていた。藤島は団長といっても二十四歳の青年だ。東京は遠すぎる。伝書鳩もこういうときには、何の役にも立たない。

第三章

いよいよアマゾン河へ

三等船客の蚕棚ベッド

十日ほど楽園の島で遊びほうけていた私たちは、混沌として退職者が続出しているというアマゾンア産業研究所へ出発する日を迎えた。晩秋のグアナバラ湾には朝霧が立ちこめて、すこし肌寒いなかをリオ港へ向かった。

岸壁には、さんとす丸が接岸していた。いまだ荷積みがつづいているとみえて、クレーンの操作音を包みこむように白い蒸気が吹きだしている。この一万トンの汽船は、第一次世界大戦の賠償としてドイツから獲得したという、年老いたスチームシップである。

今度は、われわれは特別三等から二等船客に格下げになって、船底の大部屋に押しこめられた。鉄パイプ製の蚕棚のよくなベッドである。三等船室のトイレは古いので、不潔な感じがする。シャワー室と向き合って、便器が個室のなかに並んでいるのだが、どれも扉がなく、まる見えだ。

蚕棚ベッドの整理も一段落したところ、十歳くらいの女の子を連れて一人の女性が、われわれに向かって演説をぶちはじめた。聞くともなく聞いていると、研究所の悪口だ。

一回生とともにヴィラ・アマゾニアの建設に骨折った大工のかみさんということで、切れ切れに聞こえてきたのは、「ピングアと性病に冒されて、あんたら若い人生を台なしにするようなところへ行くことはない」

というようなことだった。ピングアというのは、別名カシヤサともいう砂糖キビ焼酎のことだ。よほど義侠心があるのか、それとも恨みがあるのか、彼女は同じことを何度も強調していた。

最初の寄港地はエスピリト・サント州の州都ヴィットリア港だった。港の周辺が小高い山に囲まれていて、伊豆の下田港を思わせる。山腹に沿って商店街が見える。平石定吉が仲間よくなった同室の商船学校生と買い物に出て、タマンコという木製のサンダルを買って、カランコロンと音を立ててデッキに上がってきた。

つぎに寄港したのはブラジルの古都、バイーア州のサル

ヴァドルだ。

時刻はすっかり午をまわっていた。荷役の騒音と蒸気の吹きだす熱気とで、三等キャビンは居たたまれない。

夏服姿になって上陸してみた。季節はもうすぐ冬だというのに、われわれ日本人の感覚では真夏である。

港の下街のすぐ後ろには山が迫っていた。

山の上に教会の尖塔がいくつもそびえていて、そのあいだに繁茂しているココ椰子の葉は、すでに夕色を帯びていた。下の街から上の街にエレベーターで上がった。

上がると、そこは広場になっていて、下街も海も一望のもと見渡せた。広場の端のバーに入って、夕日を眺めながらはじめてココ椰子の果汁を飲んだ。

ココ椰子は南海の象徴である。吸い口を切ってストローを挿した青い果実を見ると、椰子の樹に憧れていた、過ぎ去った日々が想いだされた。ところが、南国の夢のジュースたるや、石鹼水と砂糖水のまじったような妙ちくりんな味がして、三分の一も飲まずに残ってしまった。

東北伯（東北部ブラジル）の水の都レシフェでは、たくさんのお客が乗りこんできた。

子供連れの三等船客が急に増えた。移住か引越らしらしく、たくさんのお動物を持ちこんできた。

犬、子猿、鶏、鳩、さまざまの小鳥が、国旗を掲げるポート

デッキの最後尾を占領した。どれも栄養がよくないうえに手入れもされていなく、勝手に籠から出歩いて、甲板を汚している。

めずらしくもなくなっていた食事の時間に、急に長い列ができるようになった。三等船客はあたえられた皿とスプーンを持って、デッキに運びあげられた大鍋のまえに並んで、順に盛ってもらって適当な場所で食べるのだが、長蛇の列でやたら時間がかかるようになった。

毎日、あるいは昼夜交互に、鱈か肉と馬鈴薯を煮こんだカルドが出されて、マンジョカ粉は欲しいだけ取る。

楽園の島イーリヤ・ダス・フロレスの奴隷食よりははるかに上等で、食事の不満は解消した。

反対に出すほうで苦しんだ。人が増えたぶん、扉のないトイレには困った。

あとから乗船してきた連中は、便座に腰掛けている人に面と向かって平気で順番を待っている。

われわれは野っ原で飼い主に見守られながら用をたす犬の心境で、便秘になってしまった。

おまけに波の荒い日には、便器から汚物があふれるほど上下するので、寄りつけない。要領のいいやつは女性客の真似をして、船員のトイレを無断で拝借していたが、船員に見つかるとまずいので、何時間も閉じこめられてしまう者もいた。

このころ後甲板で、六十歳ぐらいの日本人男性をときおり見かけるようになった。彼はいつも、ともづなの輪に腰掛けて、去っていく濃緑色の海原を眺めていた。

体つきは頑丈だが、その姿はどこか寂しげである。

私が通りかかると、故国のニュースを聞きたがった。

時代のずれがひどく、満足に答えてあげられなかったが、気まずい思いをさせないために、

調子を合わせるのに苦労した。たとえば、

「山本権兵衛さんは、いま何をしていますか」

と言われても、日露戦争で武勲を立てた軍人にして政治家のことに、私の頭のネジは巻きもどしがきかなかった。

「ああ、おれもそのうちこんなになって、大西洋の果てで同胞の話し相手を求めるのだろうか」

「いや、すでになりかかっているのではないか」と、ちよつと気持ち落ちこんだ。彼の姿には、群れにはぐれたマッコウクジラの哀れさともいうべきものが漂っていた。

いよいよあと三日ほどでアマゾン河口だ。夕食後、七時ごろになると静かになったデッキの昇降口に、大きな素焼きの瓶に入ったお茶が用意され、好（マテ茶）で、それを飲みながら私たちは蚕棚ベッドに入るまでの時間をつぶした。

リオを出てから雨に遭ったことがなかった。天気の良いデッキ暮らしは、気分は晴れ晴れするが、退屈きわまりない。そんな一日、会議が招集された。アマゾンに近づいたの

だ。入植準備の体制づくりのため、四家族が一組になって共同作業に当たることになった。この会議はまた、長い航海でたるんだ開拓精神を引き締めることもねらっていた。入植地は学校のつづきではなく、女性も新しく加わって、苦しい生活に耐えなければならぬのだ。

私は原莊太呂、大久保巖、山崎太郎の班へ組みこまれた。なかには「火薬」を抱えた班もできた。内藤茂三郎（三回生）の班で、彼はふだん、心の通じ合った仲間がいなかったのだ。一家族足りない班に無理やり入れられたのだ。当然、他の家族メンバーから不平が出た。夫婦者といっても出航に間に合わせてできた新婚ばかりで、まだお互いの機微などわかるわけがない。そこに『珍品』の異名をとる内藤とその妻がまじるわけだから、ブツブツ言うのも無理はない。年長者たちは屈強な開拓団ができあがったと満足しているようだが、この一団には強力な指導者が欠けていた。

アマゾン河口のベレンに到着

六月二十四日未明、まだ中天に月があるころから、船内が女性の声でにぎやかになった。

サリーナの灯台が見えるという。ここでアマゾン河へ入るた

めに、水先案内人に乗せた。



ふえのすあいに丸で日本を出発した高拓四回生は、ブラジルのリオデジャネイロに到着。そこから、さんとす丸で東海岸沿いに北上して、アマゾン河口の都市ベレンへ向かった。

八時、朝の光が充満しているベレン港の埠頭に接岸した。空気はすでにムンムンしている。

埠頭では、出勤してきた人が右往左往している。白服にカン帽姿の一群のなかに、一回生の引率者でアンジラ模範植民地の支配人をつとめる越知栄の姿を見つけた呼び寄せ花嫁たちのあいだに、小さな動揺が起こった。

そのなかに越知栄の婚約者の恒子もいた。恒子ははじめて見る新郎を、姐御然として見下ろしていた。新郎のほうも手

を振るでもなくズボンのポケットに突っこんで、突っ立っている。

下船がはじまった。北伯（北部ブラジル）第一の雄都なので乗り降りにはぎやかだ。私は舷側の群衆のなかで、港の雑踏とその向こうに広がる街並み、街路に濃い影を落としているマンゴー樹の並木、強烈な日光に翼を輝かせて舞い立ったウルブーとよばれるハゲタカの群れを、ぼんやりと眺めていた。

ウルブーはアマゾンの掃除屋とよばれ、カラスと同じように残飯のありそうな場所にはかならず見かける。

われに返ると、一度も言葉を交わしたことのない一等食堂のブラジル人ピアニストがそーっと寄ってきて、

「ごいっしょに降りましょう」

と、柄にもなく誘いをうけた。せつかくのチャンスだが、私のポルトゲース（ポルトガル語）は話せないも同然だし、喜んで応じられる身分でもないので遠慮した。

あとで今村泰三が、

「あいつにはおれも誘われた」

と、ささやいた。隅におけない男である。

午後、全員下船して、マンゴー並木のつづく街道沿いにある、博物館兼動植物園のムゼウ・エミリオ・ゴエルジに案内された。

そこには、アマゾン産の動植物ばかりが集められている。

植物園は三〇町歩（約三〇ヘクタール）ほどの原生林を残してつくられたものだそうだ。

つぎの日は、出港が午後五時だというので、午前中いっぱい市電に乗りっぱなしだった。狭い街なので、折り返し折り返し、その都度、乗車賃を払えば座りっぱなしでいられる。昨日見学したムゼウをすぎると、ブラガンサ鉄道のターミナル、サンブラスという駅に出た。

ブラガンサ鉄道は一九〇八年、アマゾン流域がゴム景気にわかには活気づいた当時、ベレンから大西洋沿岸の町ブラガンサまで約二二八キロにわたって敷設された鉄道で、ゴム景気の凋落と自動車道路の開発で一九七〇年代に廃線となった。石畳の舗装道路はサンブラス駅で終わり、駅周辺は黄色土の広場である。

その広場でも数羽のハゲタカがひよこひよこ歩いていった。機関庫からは、かつての青梅線の機関車のような可愛いのが出たり入ったりしていた。

出港時間が迫った四時ごろ、これで文明ともお別れかと、畠中が思いだしたようにスコップを買いに下船していった。山崎、今村、秋山、武井、平石、宮地、私もつづいた。埠頭から南へ二キロほど行くと、砲台の下の市電通りに沿って金物屋が並んでいた。スコップを買ったついでに、時間の許すかぎり店内を物色して、釣り針や鋸などよけいなものまで買って引き揚げようとすると、まえにいたスコップを担いだ

男が、

「貨物車でないと乗れない」

と、われわれのスコップを指さして言った。スコップも立派な貨物というわけだ。

仕方なく何本もやり過ぎして貨物車を待つうちに、出港時間が迫ってきた。

小便をちびるほど気が動転している我々をしり目に、その男は顔色ひとつ変えず悠然としている。

二両連結した電車が来て、男が乗りこむのを見て、われわれ八人も電車に飛びついた。

やれやれと思う間もなく、港のほうに目をやると、夕日を浴びて倉庫も群衆も黄金色に染まり、軍楽隊らしき一団が演奏するなか、船は出かかっていた。

私たちは懸命に群衆をかき分け、タラップの下までたどり着いたが、無情にもタラップはするすると引き上げられていく。われわれはひとかたまりになってそれを見上げた。

舷門で船長が黙ってわれわれを見下ろしている。彼は身じろぎもしなかったが、そのとき突然、タラップがすこしずつ下りはじめた。

下りきるのももどかしく飛び乗って、恐縮しきって舷門を通り過ぎた。

しかし、乗組員たちは「どこ吹く風」といった表情で、おっとりかまえている。さすが日本の国土の二三倍もある雄

大な国の民である。

日本船の乗組員の厳格な態度に慣らされて、あわてふためいた自分たちがこっけいに思えた。

黄土色の水の世界

夕食がすむと、十三夜の月が明るくなってきた。

デッキには大勢の人形がうごめいていて、三門ほど野砲らしきものが並んでいる。

この一群はオビドスにある要塞へ配属される新兵だそうだ。それで埠頭に大勢の見送りの女性がいたのだ。

月が昇ると、誰ともなく歌いだした。ブラジルの流行歌だ。歌う人数が増えてくると、キャビンからも人が上がってきて、それに和した。手に手に皿とスプーンを持ちだしてきた人たちは、それらを楽器代わりにして、デッキは大合奏と大合唱の劇場と化してしまった。このとき数人のクリスチャンの高拓生が現れて、讚美歌を絶叫しはじめた。そのなかにリオで検疫に引っかけた帰国したはずの伊原只郎夫妻の姿を見かけた。そんなはずはないと見直したが、間違いなく伊原夫妻だった。理由はわからない。

南十字星は相変わらずわれわれの頭上にあり、四方は暗い

海のような空間が広がっているだけだ。

海とちがうのは、船が切り裂いていく波の音と、夜光虫の輝きがないだけだ。

明けて六月二十六日、照りつける太陽のもとではじめて、赤道に沿って流れるアマゾンの大河を目の当たりにした。前方を眺めると、積雲が立ちのぼりはじめた水平線の下から、膨大な濁流が湧きあがるようにして押し寄せてくる。その流れのなかに、浮草の団塊と、団塊にからまる太い流木が、べつの水脈をつくって突進してくる。

それらを目にすると、アマゾン産産業研究所へ向かっているのだぞ、という実感が湧いてきた。

デッキの上で車座になったわれわれは、はじめて越知支配人と膝をまじえて、植民地の話をする事ができた。

私は納得のいかなかった「四大家族一組」という編成について質問した。支配人は、

「人数にこだわらず、気の合う者が組めばよい」

と答えたので、わが意を得たりと納得した。それを聞いた内藤が、真っ先に四大家族一組の束縛から離れた。

それをきっかけに、その後は自由に組み替えがおこなわれた。私と山崎も、原・大久保組から離れ、畠中・平石・宮地・薬師神組に入った。

私は、高拓の精神は「自律と自治。すなわちセルフ・コントロール、セルフ・ガバメントが大切」だと思っている。開

拓団は軍隊ではないのだ。

船はうつそうとしたジャングルに沿って進んでいく。

巨大な樹木や蔦葛（つたかずら）が、互いに生存競争にしのぎを削っている。太い枝には太い蔦葛が覆いかぶさって、引き倒されんばかりだ。

しかも、それらの植物は水辺からいきなり生えているのだ。陸地などと形容できる場所ではない。

黄土色のお汁粉のような水の世界だ。

ときどきそのなかに、古代そのままの高床式住居が、ジャングルに押しつぶされそうにして現れる。その姿はあたかも鳥の巢のようだ。私たちの想像もおよばない大地が水のなかに存在するのではあるまいか。いったい、このような住居に人間はどのような生活しているのだろうか。

ターザンでなければ妖怪じみた人間か。

そんな空想をかきたてる光景も、果てしなくつづくうちに退屈してしまい、ひねもすのたりのたりするようになった。デッキで寝そべっていると、色とりどりの蝶が私の体をかすめていく。河のなかほどから黒い点々をまき散らしたように現れ、近づくにつれて色づき、船の舷を乗り越えたころには宝石のように光る羽を持った蝶になり、どこかへ消えていく。日がな一日そのくりかえしだ。デッキの上は退屈な極楽である。

日が夜ごとに明るくなってきた。

森の後ろに、大小無数の湖沼が見え隠れして、墨絵のようである。万蛙の音が湧きたち、爬虫類の世界と化したなかを、船は単調な機械音を響かせて進んでいく。

やがて私は眠ってしまった。

目が覚めると、幅の狭い水路のような流れのなかにいた。森の影は遠のいて、草原と湿地帯が広がっている。船の立てる波に水草が操まれている。

流れに沿って牛の群れが列をなして移動しているのが目に入った。やっと私たち人間の住む大地にたどり着いたらしい。

今日は六月二十八日、ベレン港を発って三日目。昼ごろにオビドスに入港した。港とは名ばかりで、アマゾン河の流れのなかに投錨する。

しかし、めずらしく人間らしい生活のある街だった。丘の麓に沿った街路には、赤瓦の屋根と色とりどりの壁の美しい商店が連なっている。

店のまえに人だかりがして、停泊したさんとす丸を見物している。岸から一〇〇メートルほど離れた流れに停泊した船から、兵士たちが艇に野砲を降ろしていた。丘の頂上付近の台地に砲台があるらしい。

しかし、街路には荷馬車の姿もなく平穩そのものだ。

野砲を降ろしてしまうと、船はつぎのパリンチンスを目指し

て錨を上げた。
いよいよわれわれの目的地ヴィラ・アマゾニアだ。



その日の夜半、下船の準備を終えたころ、研究所の灯火が見えると伝えられた。

満月で銀青色に輝く空間の、その二キロほど先に横たわる森の稜線に、一〇個ほどの電灯がわびしげにちらついている。

ヴィラ・アマゾニアの明かりだ。わびしい灯火が後方に去ると、パリンチンスの埠頭が現れた。ベレンからパリンチンスまで約一五〇〇キロだそうだ。寝静まった街に火力発電所の機械音だけが、いやに高く響いていた。

小さなカノア（カヌー）の影が近づいてきた。先輩が迎えにきたらしい。誰かをよぶ声がする。

心なしか哀しい響きである。われわれが乗り移った二隻の舳がランシヤ（ランチ）に曳航されて離れると、さんとす丸は錨を上げた。老汽船は汽笛の尾を長く引きながら、いまだ暗い水平線のなかに消えていった。

まもなくわれわれは、闇の立ちこめる研究所の小さな浮棧橋に上陸した。それぞれ下ろした荷物の上に陣取って、夜が明けるのを待った。

しばらくすると、私は脚に鋭い痛みを感じた。その痛みはズボンの下から這いあがってくる。

位置を変えてみたが、痛みはますますはげしくなってくる。地団駄を踏んでも、どうにも治まらない。

足もとには暁闇が立ちこめているだけで、何も見えない。

「さては、これが有名なムクインか……」

ムクインという吸血ダニに刺されると、とてもかゆいと聞いているが、案に相違して焼けるような痛さだ。近くにいる者も騒ぎだしたので、私はその場から離れ、やっと痛みから解放された。

やっぱりアマゾンには得体の知れないやつがいるんだ。さつそくその洗礼をうけてしまった。

夜が明けると、二〇〇メートルほど離れた研究所本館の二階へ移動した。

日が出たと思うと、猛烈な勢いで暑さが襲ってくる。トマカフェ（モーニングコーヒー）がすむと、船着き場へ行ってみた。栈橋は五、六人も乗ると傾くような貧弱なものだ。

河のなかほどに十数頭のボート（海豚Ⅱイルカ）が、濡れてなまめかしい肌を朝日に輝かせて泳いでいる。

プシューと空気の抜けるような呼吸音が伝わってくる。

誰かが、

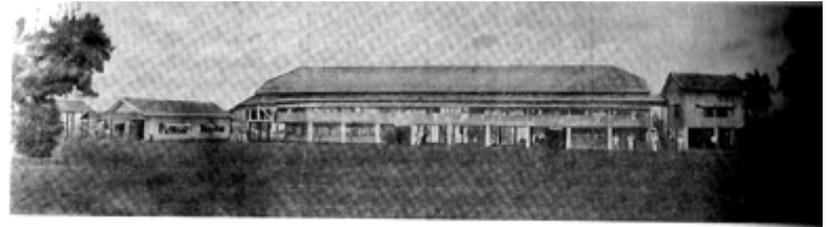
「まず、アマゾン河の洗礼をうけなければならぬ」

と言つて、足もとの水をすくって飲むと、遅れまじとばかりに、みんなが真似をした。黄色い味噌汁の上澄みのような泥流に相達して「甘露」だった。

大アマゾンの広大な大地の一部になった気分を味わった。



(上) アマゾニア産業研究所本館 (上塚芳郎氏提供)
 (下) 本館まえに林大使一行を迎えて (上塚芳郎氏提供)



(上) ヴィラ・アマゾニアのアマゾニア産業研究所本館正面 (『アマゾニア産業研究所月報』より)
 (下) 1932年当時のアマゾニア産業研究所の概況図 (『アマゾニア産業研究所月報』より)

第四章 アマゾンに入植

四回生の入植式

入植より先にアマゾン河の水を飲んで洗礼をうけた私たちは、年来の望みがかなって、一人前のアマゾン男になったつもりでいた。

八時の始業の鐘が鳴ると、買い物をしていた連中が引き揚げて、本館一階のベンダ（売店）が急に静かになった。残った二、三人の女性が木製の突っかけサンダルをカランコカランコ響かせて忙しく去ったあとは、研究所のなかは物音がしなくなった。

われわれはすることもなく、他人の家に取り残されたような気分になってしまった。

周囲は好奇心をくすぐるものばかりだ。

道路の除草に使っている変哲もないエンシャーダ（ブラジルの鋏）さえも、異国の風物に思える。鋏を使っている男は、柄を握る手を持ち替えるだけで、絶対に手を休めない。

軽々と片手で除草している姿に、今村泰三が、

「あれはサンパウロあたりから流れてきたカマラーダのようだ。むこうでは紙巻き煙草を巻くときだけ、手を離してもよいのだ」

と、知識を披露した。カマラーダとは日雇い労働者のことだ。彼は何でもよく知っている男である。

鍬の跡を雀ほどの大きさの鳩が、ピンクの足で忙しげに追っている。一羽が弾丸のように飛び去ると、すぐ代わりが飛んできて同じように鍬の跡を追う。

土はすでに日に焼けていて、日射しで目が痛い。

アマゾンア産業研究所ができて四年目になるので、芝生は青々として、そのなかに植えられたマンゴー樹が陰を宿している。

本館の上がり口には、サボテンの大きな株が何本にも分岐して、花をつけている。みんなの足は自然に、高拓でさかんに聞かされていた「絶景橋」のほうへ向かった。

病院を過ぎると、幅五〇メートルぐらいの小川が、アマゾン河に流れこんでいるところに出た。小川の両岸は再生林の藪で、そのなかに一本の道が向こう岸へつづいている。

高拓で聞かされていた白砂青松の絶景を探したが、いっこうに見当たらない。

見えるのは水と空と、それらを画する森の線だけだ。

これが、上塚校長の言う絶景か。

「心頭を減却すれば火もまた涼し」流に、校長の目にはこれが絶景に映ったのだろう。校長にはアマゾンの森羅万象が詩の世界なのだ。

本館にもどると、昼飯になった。

予想どおりに乏しい食事で、赤米のまじった陸稻のご飯に、プリンジュラ（ナス）とアポブラ（夕顔の実）の入った澄まし汁だ。研究所が傾きかけているときに、これだけの人数に食事を用意するのはたいへんなことだが、これでは身がもたない。早くも、さんとす丸の三等食が懐かしい。

本館の裏に二町歩（約二ヘクタール）ほどのアバカシ（パインナップル）畑が見える。畑のなかに熟れたパインナップルがないかと目で探した。畑の後方に測候所がある。

人気のないところで、風速計の風見鶏が音もなくまわっている。

太田正充教授の講義にあった「尾崎麦門冬の歌』を思い出した。大方は忘れてしまったが、

……の風見の塔の日のあたり、インスチツトは衰えにけり

たしか、そういう歌だった。

本館の隣は自家発電所らしい。夜、パインナップル畑のなかを探したが、熟れたパインナップルはなかった。そこで原莊太

呂と大久保巖に会った。十六夜（いぎよい）の月の光のもとで、

「おれたちの組へもどらないか」

と、長時間口説かれた。言を左右にしていると、つぎの晩、山崎太郎といっしょに話し合う約束をさせられた。原は熱血漢、大久保は精神派らしい。私は理想家の校長を利用してアマゾンに來たような男であるから、彼らのような堅苦しい仲間のごめんだ。

翌六月三十日、四回生の入植式がおこなわれた。アマゾニア産業研究所所長の辻小太郎、ドクターの城間憲恵（沖繩出身の産科医で、四回生の城間宏忠の叔父で養父）、庶務部長の小佐々良衛、農事部長の飯田義平（二回生）らの出席のもと、所長の訓示があった。

みんな初対面である。所長はわれわれをたいして歓迎しているようには見えなかった。城間ドクターは、

「われわれの飲むアマゾン河の水は、太陽光線で消毒された水である」

と、強調した。われわれはすでにその味を知っているの
で、ドクターの説に無条件で同意したが、

「マラリアなどというものは、ブラブラしている者がかかる病気で、蚊に刺されながらも働いている者はすぐ治る」というのは信じがたかった。

訓示がすむと、農事部長からマツシヤード（斧）とテルサード（山刀）を受け取り、使用法の説明をうけて、練習に励んだ。その晩にまた、パイナップル畑で、今度は私と山崎が、原と大久保から、いっしょの組にもどらないかと口説かれた。熱血漢の原には気の毒だが、私は固辞した。翌日、研究所の先輩たちが本館の二階で歓迎会を開いてくれた。

二回生の山本紀雄先輩がさんとす丸でも聞いた最新流行の「ウ、テウ、カベーロ、ナン、ネガ、ムラタ、ムラタ（おまえの髪の毛、隠せず白黒混血）」を全曲、ポルトガル語で完璧に歌ったのには感激した。

山本先輩は、われわれ四回生を迎えに出た越知栄支配人の留守中に、銃の誤射事件を起こして仲間の妻子を死傷させており、それを苦にしてこの二、三か月後にみずから命を絶つた。二十四歳の文学青年だった。

アマゾンに到着したばかりの西も東もわからないときの事件だっただけに、われわれのうけた衝撃はいつまでも冷めやらなかった。

アマゾンニア産業研究所

高拓にいるころから、所長の辞任騒動など、現地の状況が

危ういことはうすうす知っていたが、現地に来ると、「知らぬが花」とばかりは言っていられなくなった。いろいろな話を総合すると、開設当時からわれわれ四回生を受け入れるまで、アマゾンニア産業研究所はつぎのような経過をたどったようだ。

開拓本部のあるヴィラ・アマゾンニア（アマゾン村）は、アマゾン大河に画して前面約二キロ、奥行き五キロ、利用面積は1,150町歩（約1,150ヘクタール）ある。ここは、ワアイクラツパ、アンジラ、マムルーなど七大河川の合流部に扇状に広がる高台地に位置し、船の寄港、物品の集散に好適の場所だった。

アマゾンニア産業研究所には大きく分けて農事部、気象観測所、病院、実業練習所の四部門が設けられ、各部門の責任者にはブラジルでの生活体験がある、この土地を選択するにあたって上塚司が組織した調査団員の中から専門技術を持つ人が選ばれ、それぞれの部門に必要な道路、職員宿舎、売店、農事試験場、病院、港湾施設などの建設に着手した。

一九三一年六月二十日、高拓一回生ら四七人（高拓一回生三五人と、東京農大編入生、宮城県海外協会の選抜生、引率者の越知栄）がヴィラ・アマゾンニアに到着した。

第一回実業訓練生としての生活がはじまったが、研究所とは名ばかりで、宿舎は実業練習所の二階の大部屋だった。まだ

未完成で壁もなければ、床にはただ板が並べてあるだけだった。

食堂も炊事場も便所も未完成で、粟津所長の住宅や現地職員の宿舎も椰子の葉葺きに板壁というバラツカ（バラツク）だった。当時、ヴィラ・アマゾンには所長と第一次・第二次調査団員のうち、現地にとどまっていた職員とその家族をふくめて約二五人が住んでいた。

高拓一回生たちは到着したつぎの日から、所定の日課に取り組んだ。

午前中は実習で、本館周辺の除草、原生林の伐採作業、伐採地までの道路造成、宿舎の床張りなどの大工仕事に追われた。

午後は学科で、主としてポルトガル語の勉強をした。ほとんど農業経験のない彼らだったが、約五〇町歩（約五〇ヘクタール）を伐採し、ただちに米、マンジョカ、カスタニャ・ド・パラートよばれるパラート粟（ブラジルナッツ）、滋養強壮剤や清涼飲料などに使われるグアラナなどを試作し、アマゾンの主要産業にと期待されていたジュートの栽培試験もした。

しかし、いずれもたいした成果は上がらず、実業練習所で一年間アマゾン開拓と闘った一回生ら四七人のうち半数以上が、アマゾンには将来性がないと見切りをつけて、帰国するかサンパウロ周辺の南伯へ移転していった。高拓で

聞いていた話とはあまりにもちがっていたのだ。

翌一九三二年七月には、二回生五八人（渡航者数）が渡伯してくるようになった。栗津所長は二か月あまりサンパウロ方面に出張して、六月初旬に着く予定の二回生をリオで迎えて帰途につくことになった。アマゾンに踏みとどまった一回生二〇人は、指導者を欠いたまま、二回生を実業練習所に迎えるにあたって、自分たちの転出先を確保しなければならなかった。さつそく新しい入植地探しに取りかかり、三つの候補地のうち、土地の購入費が不要で、研究所との候もまずまずのワイクラップ方面に入植を決定したのだった。

こういう状況のなかで、二回生五八人は、七月三日に現地に着した。

二回生を出迎えてもどってきた栗津所長は、それまで胸におさめていたアマゾン開拓反対論を公然と唱えるようになり、上塚校長にもそれを進言したが、校長は受け入れず、開拓論を強硬に推し進めた。

日本から送られてくる運営資金も滞りがちで、給料の未払いで辞めていく職員が続出した。希望を失った栗津所長はついに辞職届を出し、練習所の職員、学生たちにも南伯移住を勧告して、江藤義成医師、亀井満農事部長ら同調者ともども南伯へ去っていった。職員が退所したため、二回生の実業訓練はおこなわれず、栗津所長の悲観論に同調して、大部分は帰

国するか南伯へ移住する結果になってしまった。

このため三回生以降は、現地での実業訓練の課程を廃止し、直接入植するようになった。二回生で残留したのはたったの七人だった。

粟津所長に代わって、現地の混乱收拾とジュートの最終試作のために赴任してきたのが、上塚校長と神戸高商の同窓で、高拓の主任教授を務めていた辻小太郎だった。

一九三三年七月に高拓三回生七九人が入植。つづいて、第一回家族移民一一家族（四八人）も入植した。辻所長はワイイクラツパ河支流のアンジラ河の河口に、上塚校長念願のアンジラ模範植民地の造成に着手した。もともと事業の柱としてジュートに着目したのは辻所長で、彼は赴任してくる途中、セイロン島でインドジュートの種子を仕入れ、最後の試験栽培に賭けた。アンジラ模範構民地の所長に二回生の引率者の越知栄を、副所長に三回生の引率者の高村正寿を任命した。しかし、このジュート栽培も失敗に終わったのだが、家族移民の一人だった尾山良太（二回生の尾山万馬の父）が自分の耕地に植えたジュートのうち二本だけはほかより成長が早く、三か月で三メートルに達したが、一本は河川の増水による土砂崩れで流してしまった。しかし、残りの一本から種子を採取するのに成功し、この一握りの種子がのちに、アマゾンの主要産業となるジュート栽培につながったのである。

こんな経緯があったため、われわれがやってきたとき、ア

マゾニア産業研究所のあるヴィラ・アマゾニアは混沌としていた。のちに自殺した山本先輩以外の先輩は、誰が誰やらわからなかった。三回生から実業訓練は取りやめになり、植民地へ直接向かうことになったわれわれには、この先輩とは今後もかわりが薄いだろし、彼らが職員であるかどうかもわからなかった。来る者と去る者がいつとき出会う、ステーションのような状況だった。

サントルジア植民地へ

一九三四年六月二十九日、われわれ四回生と家族入植者がヴィラ・アマゾニアに到着したとき、

アンジラ模範植民地には、一五〇人近くの高拓出身者とその家族、および家族移住者が生活しており、満杯状態だった。そこへ新入植者が八〇人あまりも加わったのでは狭すぎるというので、越知や高村らの現地指導者は、この年の三月ごろからワイクラッパ河とアンジラ河のあいだの半島に新しい入植地を求めた。それが三回生の入植地タワケイラと、われわれ四回生の入植地サントルジアで、既成のアンジラ模範植民地と一回生が入植したワイクラッパ植民地（四回生が入植したころは、ボアエスペランサ植民地とよばれていた）に挟まれた環境にあった。

ワイクラッパ植民地とアンジラ模範植民地のあいだの原

生林のなかに、幅五メートルの幹線道路を二五キロにわたって伐り開いた。

測量道を伐り開いたのは現地の日雇い労働者たちだが、本道路への拡張工事は、越知所長はじめ一回生の御園福衛先輩たちがみずからおこなった。

七月二日、前夜編成された二二人の先発隊が身のまわり品を持って、ワアイクラツパ湖畔のサンタルジア新植民地へ向けて出発した。四回生五〇人とその夫人らをふくめて八四人の家をつくるためである。

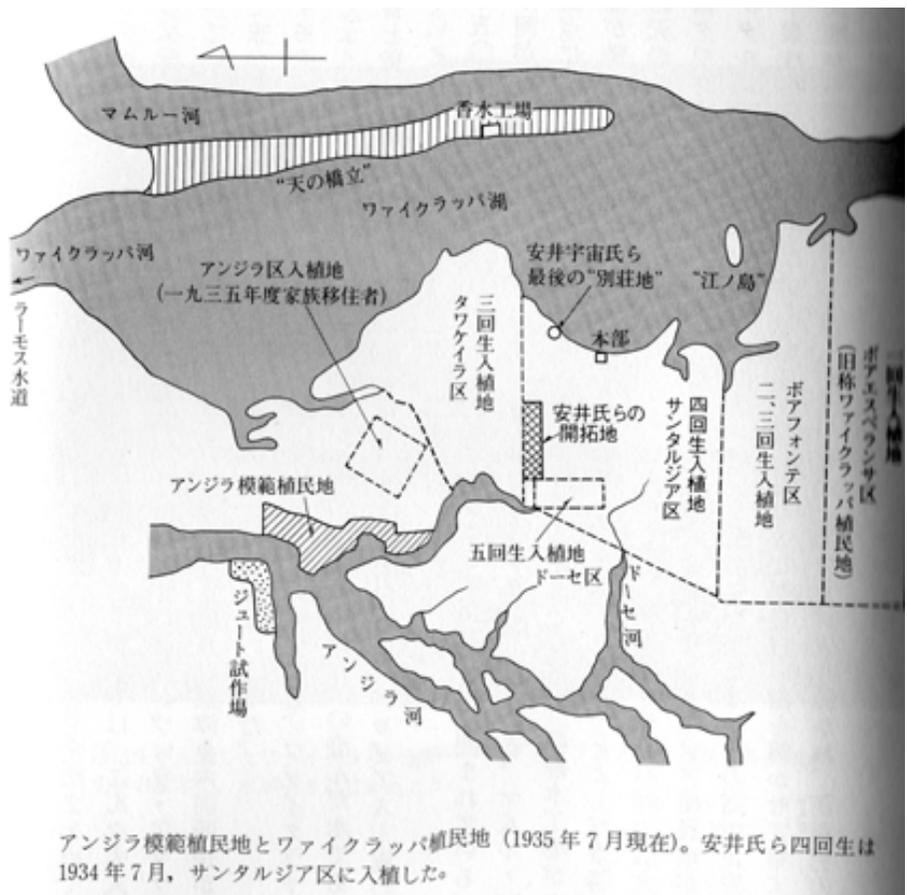
翌三日の朝、先発隊にくわわらなかつた畠中実が、いつのまにか一艘のカヌーと、現地人のカボクロ（元来は原住民インディオと白人移民の混血で、教育をうけていないものを指すが、黒人との混血もいて、アマゾンにもっとも多い現地人）を一人連れてきて、私と武井信元、今村泰三の四人でジョゼアスー湖探訪に出かけた。ヴィラ・アマゾニアを横に見て、アマゾン河支流のラーモス水道を二キロほど遡行すると、水道が東へ大きくカーブする角に、フーロと称する湖の入口がある。

右手に高台地の牧場を見て進むと、すぐ湖に入る。これが上塚校長作詞の高拓校歌に、

「白鷺の群喜々として、渚に遊ぶジョゼアスー」と謳われているジョゼアスー湖にちがいない。

乾季が訪れた季節で、出入りの複雑な渚には水草が生い茂

り、そのなかで白鷺が餌を漁っているのが点々と見える。空の色を映した水にさぎ波を立てて、カヌーは進んでいく。水生林の茂みでは、水底の白砂が透けて見えた。ふと、私は子供のころ、小舟で京都の丹後地方の宮津湾を渡ったときのことを思い出した。そっくりの風景である。



七月五日には家の完成を待たずに、私をふくめた第二陣が荷物を全部まとめて、追い立てられるようにサンタルジアへ向かった。アマゾニア産業研究所の台所事情では、こんな大

人数を無為に食べさせておける状況にはないのだ。

それだけでなく、辻所長は、四回生がヴィラ・アマゾニアに長居して、沈滞しきっている空気に染まるのをもっとも恐れていた。

辻所長は栗津金六前所長がアマゾン開拓に希望を失って去って以来、ピストルを枕もとにおいて寝ているという噂だ。

ラーモス水道の濁流を二時間かけて四〇キロあまり遡行すると、ワイクラツパ河に入った。

内海に入ったように広く、しぶみがかったプルシヤン・ブルー（紺青）の澄んだ水である。水道と河の合流点で、青と黄の二色の水がせめぎあっている。

周囲の高台地は、ジョゼアスー湖の丘より高い原生林が連なっている。

高さ五〇メートルほどの岬に着いた。麓はまばらな水生林に取り囲まれている。

岬の反対の東側はマムルー河が合流して、その流れが運んだ土砂で大きな洲ができています。

マムルー河とワイクラツパ河の合流点に、パウローザ（バラの香りのするエッセンスをふくむ香木）の香水工場があって、赤煉瓦の煙突から煙が勢いよく上がっていた。

日本人入植者たちが「天の橋立」とよんだ景勝地だ。

この天の橋立を左に見て、岬を大きく右にまわると、ワイクラツパ湖の広大な風景が現れる。岬の手前はタワケイラ

植民地で、その先にわれわれが入植するサンタルジア植民地が広がっていた。



サンタルジアの浜に上がると、

この植民地の支配人になったばかりの高村正寿を先頭に一回生の御園福衛や泉桂治らの助教授と先発隊の面々が、真っ黒な顔に白い歯を輝かせて集まってきた。

アンジラ範植民地から南東へ約八キロ、白い砂浜を背に土手の上が伐り開かれ、萌黄色（もえぎいろ）のババスー椰子の若葉でふいた小屋が十数棟並んでいた。

荷物の整理が終わると、われわれも未完成の家づくりに取りかかった。浜に山積みされた椰子の粟の若葉を屋根に葺（ふ）くのだ。その仕事は先発隊の秋山三雄がうまくなっていた。屋根に登っていると、日射しが氾濫して暑い。高拓でおこなった仮想熱帯作業の比ではない。水をやたらに飲むので、作業服は汗みどろになる。ワイクラツパ河の水は石油缶のなかでたちまちぬるま湯になり、アマゾン本流の水とちがって酸味があり、澄んではいるがうまくない。

二、三日すると、われわれ四回生が入居する仮小屋（妻帯者用住宅十九戸、独身者用宿舍四棟）が完成し、サンタルジア村（本部）は一応できあがった。

その中央付近にソルテイロ（独身者）用の宿舍が集まっている。棟割り長屋の真ん中が台所兼食事室で、両側の部屋に四人ずつ入った。床は板敷である。湖に画していちばん右端に新婚の御園助教授夫妻が入った。

中央の売店と事務所のまえは、ちよつとした広場になっており、もとはワイクラツパのジョアン・アレピオ酋長の所有地だったという。そこに建っている大きな家には、いまでも酋長の末裔という老夫婦が住んでいる。その息子のアレピオは六尺豊かな長身で、色白金髪の三十歳ぐらいの男で、警

察官代行の肩書を持っていた。

小高い山に通じる道路も開かれ、登り口に高村支配人の家が建設されつつある。私の住居の隣には横山光男、坂本太郎、松井忠正の三回生三人が一週間ほど出入りしていたが、「われわれは植民地経営の事業実務に携わるといいう話だった。こんなつまらないところには長居は無用」といった調子で、前後して研究所へ帰っていった。その後まもなくして、彼らは南伯へ移転していったらしい。

伐採に追われる日々

日を迫うにつれ、隣のタワケイラ植民地では、三回生の空き家が増えていった。

目のまえに広がる白砂の浜も、減水期に入って日増しに広がり、各家のまえに設けた小さな船着き場や洗濯場の渡し板が所在なげに見える。マムルー河とワイクラツパ湖を仕切る「天の橋立」はますます絶景になり、さらにワイクラツパ河の下流のほうに、ボアエスペランサ岬を背景にした「江ノ島」というおまけまである。

しかし私たちは、絶景を眺めてばかりはいられない。もう山を伐らなければならぬ季節になっているのだ。

風に乗ってクワケイラ植民地のほうから、斧の響きとともに

に、ガラガラ、ゴーツと樹が将棋倒しになる轟音が届いてくる。その昔の聞こえてくるところで作業をしている三回生たちは、そろそろ伐採を終えるころだという。

抽選で耕地の割り当てが決められた。決められた耕地は一人二五町歩（約二五ヘクタール）である。我々の組は山崎が代表してクジを引いた。その結果、サンタルジア植民地の北端、タワケイラ植民地との境界線の隣がわれわれに割り当てられた（八一頁の図を参照）。われわれの組は畠中実、山崎太郎、宮地茂、平石定吉、薬師神光雄と私の六人で、のちに武井信元、秋山三雄、石黒彗吉がくわわった。

農業に携わる者は土壤の善し悪しにいちばん関心を持つ。ましてや、はじめて持つ土地である。

冒頭でもふれたように、アマゾンの高台地にはテーラ・プレータという、おもにインディオが所有する肥沃な黒土地帯が散在しているが、この黒土地帯はごく小面積しかない。われわれの耕地もそれに近い土かもしれないと期待して、自分たちで調べてみた。あちこち落ち葉の積もるなかに山刀を突っこんで、刃先からこぼれる砂土に黒いもののまじった土を見ては、「そう悪い土ではあるまい」と、互いに安心した。念のため、御菌助教授に調べてもらったところ、われわれの耕地は黒色砂質土壤であると、太鼓判を押してくれた。

サンタルジア村の宿舎からタワケイラ植民地との境まで、細い開拓道を五キロあまり往復するには、朝夕二時間はかか

る。新婚の畠中実のワイフには気の毒だったが、彼女にわれわれの夕食の支度を頼んだ。六人の肉体労働者の夕飯を支度するのは、たいへんなことだったろう。彼女はときどき、夕飯を食べているときに小声で亭主をよぶ。飲み水が底をついたのだ。われわれはそんなことにも気がつかないで、食べたら終わりのやつばかりだ。

朝八時に作業をはじめするには、暗いうちに出発しなければならぬ。当番は、そのまえに火をおこしてモーニングコーヒーの用意をするときに、弁当もつくった。弁当のおかずは毎日、塩ピラルクーを焼いたものである。塩鮭のようなものだ。水は布製のバケツで各自が運ぶが、そんなものでは足りない。ほかにも石油缶に水を入れて持っていくのだが、坂道の悪路のため、途中で半分に減ってしまう。

夜明けまえの森のなかは、正体不明の生き物の奇声が飛び交い、にぎやかだ。熱帯の森には薄暮などというデリケートさはない。かといって、まったくの闇というのでもない。一面に散り敷かれた落ち葉、枯れた倒木の幹や枝から、菌類かなにかの発する蛍光がボーツと光って、幽玄郷そのものである。そればかりでなく、樹間の闇を赤い火の玉が弧を描いて飛びまわる。

螢の仕業だ。そんなことにうつつを抜かしていると、毒蛇、毒虫がいつ襲ってくるか知れたものではない。つねに神経を張りつめて歩かなければならないのだ。夕方は、日が落

ちて蚊の大群が出るまえに浜へ着くように帰る。

ある日、高村支配人宅で一か月の生活費を決める会合が開かれた。

その会合から帰ってきた山崎太郎、平有定吉、宮路茂の三人は、

「三回生の、優等生」佐々木一哲の線に沿って、最低の水準に決まった」

と不満をもらした。二回から四回生まで、等級別に補助金だか開拓資金だかが支給されると聞いていたが、私にはくわしいことはわからなかった。われわれの父兄が開拓資金を払わされていたはずだが、たしかめるすべもない。いずれにしても、その決定の結果、毎日、塩ピラルクーを焼いたもので暮らす羽目になった。藤島正徳は、

「校長の理想を達成するためには、生活を保障すべきだ」

という意見だった。それが正論だとは思ったが、私は、こんなところで校長の理想に拘束されたくないの、積極的に賛成しなかった。飢えてもいいから自由でありたいと思っ

た。
サントルジアには果実、魚、肉など一つないのである。あ
るのはマカロン（マカロニ）だけで、われわれは、うどんの
代わりだと思って使った。しかし、いい加減な料理のしかた
をするので、高価なマカロニも糊うどんに化けてしまいがち
だった。

ロツサ（下草刈り）で振りまわす山刀の柄で、手のひらの皮がむけて、赤い肉が露出した。日本から持参した軍手など二日ともたないので、包帯をぐるぐる巻きつけて、やっと撮っているありさまだ。

「坂根（ばんこん）」とわれわれがよんでいる板状の根を四方に張っている大木がある。人が隠れてしまうほどの大きな根だ。それに絡みつく蔦は、大蛇のようにのたうちまわっている。それが、薄暗い森のなかでは毒蛇を想像させてしまい、怖じけづくると本物の猛毒蛇スルククーがいまにも飛びかかってきそうな気分になる。

いよいよデルバとよぶ伐採の本番を迎えた。

開拓の華にふさわしく、体じゅうの筋肉が緊張しきっている。帰りの山道でふくらはぎにこむら返りを起こしたり、熟睡中にも突然、筋肉が硬直したりする。暑さと疲れで、弱った胃からは焼きピラルクーが飛びだしてくる。

日に日に栄養失調とビタミン不足で体が衰弱して、肋骨が浮き出てきた。体力も尽きはて、親知らずが二本とも摩滅してしまった。蜜蜂の巣を見つけた日には、総動員でわずかばかりの蜜採りにおおわらわだった。アマツハの大樹の樹皮から滴る樹液を、うまくもないのに牛乳代わりに飲んで、ビタミン不足を補った。アマツハというのはキョウチクトウ科の木で、アマツハ乳と称する樹液が腫れものや傷薬に用いられる。

また、その強力な繊維が綱やハンモックに使われるツクマン椰子を見つけると、総掛かりでトゲだらけの硬い幹を切り倒し、針の山のなかに踏みこんで、葉柄の中心にあるパルミットとよぶ新芽をもぎ取った。刺は麻袋を縫う針のように太いが、パルミットは孟宗竹の筍みたいに柔らかく、植民地最高のご馳走だった。

伐採も終わりに近づくと、開拓道にも倒木が散乱するようになった。ある日の帰り道、なんとも言えない甘酸っぱい香りが漂うところを通りかかった。杏にも桃にも似た香りである。伐り倒された樹の重なるのなかに、大きな山カジュエイロ（ウルシ科の灌木）の枝が放りだされていて、カジュエイトよぶクリスマスツリーの飾りの∥∥のような真っ赤な実が鈴なりになっているではないか。嬉しかった！

みんなはその香りにつられてそのまま競って食べたのだが、そのカジュエイロはふつうのカジュエイロの実（レモンに似た弱い酸味がある）とちがって、口がひん曲がるほど酸っぱかった。

私は帽子にいったい持ち帰って、苺のように砂糖をまぶして食べた。なんとという芳香だろう！ これこそ天の恵みである。その酸っぱさに懲りて、つぎの日からは誰も見向きもしなかったが、私は一週間ほど同じようにして食べて、久しぶりにビタミンCを補給した。

伐採が終わりに近づくと、高村受配人から指示があった。

「終わりを焦らず、無理をしないように。土曜、日曜は休養するように」と。体が衰弱して疲れきっているときに、仕事が終わる安堵感から油断が出ては困るということだ。このころになると、森へ入る登り口から、木の株などがところどころに残っているものの五メートル幅の立派な本道が一応完成して、将来の植民地の中心部まで延びていた。

注意はしていても、体が衰弱して疲れきっていると、事故が起こる。ある日、私は木を伐り倒す合図とともに、押し倒されてくる一群の樹の根元に退避したほうが安全だとひらめいて、倒れてくる木の下をくぐり抜けようと走った。

その瞬間、倒れてきた木が背部をかすって落ちたような気がした。かすめただけでも、三日間も休まなければならなかった。

もう一度は、椰子の枯れ木を叩いた瞬間、額のあたりに目のくらむような衝撃をくらって、眉が切れたことがある。枯れ木を伐るのが危険なことは常識なので、枯れ木かどうかちよつと叩いてみたところ、腐った断片が落下してきたのだった。斧で背中を切ったやつもいた。山道でつまずいて転んだはずみに、肩にしていた斧の刃が背中に刺さったらしい。いつどういいう目に遭うか、熱帯林は油断禁物である。

八月も終わりに近づくと、遅れていた伐採もやっとすんで、残木の整理をする。これも、足場が悪くて、とても危険な作業だ。

それも片づくくと、真昼の山道を引き揚げる日は、夏休みが来たような気分だ。

あとは、充分乾燥させて、山焼きを待てばよいのだ。

うずたかく積まれた木々からは、焼けつく太陽に蒸されて陽炎が立ちのぼり、草いきれにむっとする。

森陰にさしかかると、瑠璃色の羽をきらめかせて、紙飛行機のように飛んでいるモルフォ蝶を追いかけてみたくなる。

覚えた樹の名前を言い当てながら、森の出口に向かう。

眼下にワアイクラツパ湖が見えてくると、少年時代の日々のような解放感が湧きあがってきた。

第五章

サントルジアの四回生村

パイヤの根入り味噌汁

伐採を終えて、はじめてサントルジア村の宿舎でくつろぐ日があった。食事も貧しいながら自炊した。

このころ、また空き家が目立ってきた。そのため入れ替えがあつたりしたが、比較的落ちついて、山焼きのくる日まで耕地が乾燥するのを待っていた。

高村支配人宅の裏の丘には、旧地主のジョアン・アレピオ酋長の耕地があつた。その一部、三町歩（約三ヘクタール）ほどがテーラ・プレータ、つまり黒土の肥沃な土壌だった。そこを各組一反（約一〇アール）ずつくらい割り当てられて野菜をつくることになったが、この乾季の盛りに、山の上の畑にいくら灌水したところで焼け石に水である。そんなことをやるよりも、湖水の付近で現地人のカボクロたちがやっているように、高床式箱型菜園とでもいうべきカンテイロで栽培したほうが温度調節がきき、害虫も防げるのだが、誰もやるとうしないし、指導者もいなかった。農学校出だという高村支配人は、牛馬のように筋力だけで励むのが農業精神と思っているらしい。

しかし、この黒土は地力があると見えて、マモン（パイヤ）の樹が五、六本、この乾季にも枯れもせずつぎつぎに実をつけた。みんなが競って採るので、熟れる間もなく裸になつてしまった。

私は、このパイヤの根をすこし掘り取って、それを千切りにして特製「大根」の味噌汁をつくり、みんなを喜ばせた。大根のネタを秘密にして、当分のあいだ、食事当番のときに大活躍した。

特製味噌汁の評判がカザード（妻帯者）のあいだにも広まった。彼らにも自慢半分で食べさせたところ、誰もが異常に飢えているときなので、やがて女性たちにネタがばれて、私の「大根畑」はたちまち底をついてしまった。こうして、当番になるたびに、また味噌汁の具に頭を痛めることになった。

宮地茂がどこからかマシシとよばれるライチーのようなピンポン玉大の瓜の種と、キヤボとよばれるオクラの種を持ってきて、宿舎のまえに播いた。これらは野草のようにたくましく育ち、水をやらなくても実がついた。このころになると、塩漬けにして天日干したシヤリキという肉が売られるようになったが、独身者には塩抜きが面倒なので、あまり歓迎されなかった。一回生のなかには、この干肉の傷んだものを食べてカルネ中毒（蛋白質中毒）にかかった人が多いと聞いていた。一回生の入植した一九三一年は、川の増水の多い年で、牛がつぎつぎに倒れた。くわえて牛の病気が流行したそうで、そんな肉を塩漬けにしたのを食べたらしい。一度中毒にかかると、以後長いあいだ、肉汁を食べても毒麻疹が出るという。

われわれが到着したところには一〇〇メートルも沖の水中に生えていた一群の水生林は、いまではすっかり根元まで干上がって、あたりは白砂の浜になってしまった。白砂の上には、われわれの足跡の上にカメレオンの尾の跡が交差して、

幾何学模様になっている。水際に、棧橋代わりに小さな渡り板を突きださせた。その下には、われわれの残飯を漁るエンゼルフィッシュが棲みついてしまったが、こんな観賞魚など何匹いても腹の足しにならない。赤い実をつけた水生林の樹陰、焼けつくような白浜を疾駆するカメレオン、そして渡り板の陰で優雅に泳ぐエンゼルフィッシュ。いずれも移民たちの生活向上に寄与するものではない。われわれ独身者は高村支配人宅の庭にあったツタマン椰子もついに伐り倒して、そのパルミット（新芽）も食べてしまった。

台所のまえにあったその樹を伐られて支配人はよほどしゃくにさわったのか、

「せっかく実のなる樹を伐るのは自然破壊だ」

と、理屈を盾にたいへん立腹された。われわれは、

「破壊されつつある自然、それこそ人間の生命を救ったあかしなのだ」

と、負けずにへ理屈をこねて反論した。これはいわば空腹デモのようなものだ。

亀捕りと魚釣り

そんなことをよそにワイクラップ湖は、風光ますます華やいできた。「水清ければ魚棲まず」というように、この湖

にはまえまえから周辺に住む数家族を養う程度の魚しか棲んでいない。そこへ突然、多数の移民が押しかけてきたのだから、魚など口に入るはずがない。

覆い立つ森林も幾千里を流れる川も天与の宝庫だと言われているので、魚など自然に手に入ると考えていたから、漁労の方法など習わなかった。肥を担いで野菜をつくる方法は習ったが、そんな不衛生な習慣はないお国柄だ。それはありがたいのだが、痩せ地に精神力だけでは通用しない。

マンジョツカ芋の葉を溶けるほど煮込んでスープ状にして食べるインディオ食のマニソーバも、当時はまだ知らなかった。結局、独身者の炊事当番が考えだすことは、村の売店で塩ピラルクーを買ってきて、焼くか揚げるか、ほぐして煮るかのくりかえしになる。われわれはこれを「ぞうきん」とよんでいた。食料品はヴィラ・アマゾニアから一週間に一回便船で運んでくるが、それとても、炊くと赤飯のようになる赤米の混じっている米、コーヒーの粉、塩漬けの干肉、そして塩ピラルクーぐらいしかなかった。

そこで、わが「棧橋」の付近で残飯を漁っている現地人カボクロたちの家鴨をひねってしまった。また、この辺の鶏は雑木の枝に止まって寝るので、妻帯者たちが所有している鶏にもかかわらず、無断で失敬したりした。だんだん人間も野獣性を帯びてきた。

こうしているうちに、四回生も高村支配人に慣れて、訪問したりよばれたりするようになった。代々、高拓には舎監とか引率者が同志として入植して、その人たちが支配人をつとめたので、自然に親しい関係が持続してきたのだが、四回生にはそれがなかった。しかも、自治と自律の精神を叩きこまれてやってきたうえに、つぶれかかった植民地の立て直しをやるう、という自負心がある。

あのモデルセツルメント、アンジラ模範植民地というのは存在していても、われわれ四回生の感覚では、滅亡した過去の植民地にすぎない。そういう感覚で周囲を見るので、アマゾニア産業研究所の辻小太郎所長も、越知、高村の植民地支配人も、先輩というより、研究所ではじめて会った上役にしか思えなかった。

高村支配人とつきあいがはじまると、互いに砂糖キビ焼酎を酌み交わすようになった。植民地では、伐採のあいだは砂糖キビ焼酎は販売禁止だったので、われわれも自制していた。また、船のなかで船員

「ブラジルにはカシヤサという強い酒があって、飲むと頭が悪くなる」

とさんざん聞かされていたので、砂糖キビ焼酎は敬遠していた。しかし支配人は酒好きで、自然にお茶代わりに酌み交わすようになった。

カヌーにも慣れてくると、近くの植民地とのつきあいもは

じまった。われわれ独身者たちは、例の「江ノ島」の近くにあるボアフオンテ植民地の連中と近しくなった。そこには本間武四郎、芹沢正芳の二回生を筆頭に、一〇人ちかい独身者の三回生がいた。彼らは二回生の尾山万馬と彼の家族とともに、ジユート栽培に専念するためにフォルモーザ島へ移住するまではここにいた。この連中はサンタルジアへ買い物に出てくるたびに、かつての自分たちの舎監で引率者であり、アンジラ模範植民地へ入植した同志の高村支配人宅へ寄つて、遊んでいった。夜になると、砂糖キビ焼酎を飲みながらにぎやかに歌う声が流れてきた。

湖水の水がいよいよ減つて、浜伝いにボアフオンテからサンタルジアへ通うことができるようになった。途中に大きな水生林が、海浜の松林のようにつづいていた。支配人の話では、夜、裏の丘からタマンドウア・アスとよばれるオオアリクイが現れて、人の背後から強力な腕で抱えこみ、血を吸うのだという。

浜伝いに「江ノ島」まで渡れるようになったころ、三回生の新保宗雄に誘われてボアフオンテの浜辺へ、亀の一種のトラカジャの卵を獲りにいった。その日は休日で、「仙人組」とよばれている独身者の宿舎では、三人ほどが半裸で碁を打っていた。

浜で亀の卵を探しているあいだに、本間が甘味不足のわれわれのために汁粉をつくってくれた。柔道のはげしい稽古で

両方の耳朶をつぶした豪傑だが、心の優しい人だった。フリー言いながら石油缶で汁粉を似ている姿は、とても山男の頭目とは思えなかった。もちろん、小豆ではなくブラジル産の豆を使ったので、煮たきの加減がわからず、餡（あん）になりかかっていた。

「さあさあ、たくさん食いなっせ」

とさかんに勧めてくれたが、石油缶に半分ほどもある汁粉をたいらげる元気はなかった。亀の卵のほうは、「江ノ島」の先まで足を伸ばしたが、収穫はなかった。

ボアエスペランサ植民地へ行く機会があった。ここには日系開拓民から神格化され、尊敬されている一回生の大石隆人大先輩はじめ、三回生の三重野正一・ヒメノ夫妻、二回生の宮川哲二がそれぞれマンジョカ畑を持っていて、現地人カボクロの家族にも収穫の半分を徴収するという条件でマンジョカ芋をつくらせて生活している。一時期マンジョカ粉の値が上がって、景気がよいと言われていた。大石先輩は評判どおりの飾り気のない人で、私のような餓鬼でも「さん」づけでよんでくれるのには恐縮した。

「おれは毎晩、ピンガが飲めれば満足だ」

と、砂糖キビ焼酎さえあればほかには何もいらないう無欲な人でもあった。訪問するたびに、

「ちよっと待て」

と言って、丘の上の家から麓の船着き場へ、急坂を下りて

いく。そして、あたかも生け簀から魚をすくうように、ペスカーダというニベ科の魚を必要な数だけ釣りあげてくる。まさに神技だった。釣り好きな薬師神光雄が何回教わっても、たまにしか釣れなかった。薬師神は大石先輩から、モロンゴという水生林に育つ木で、水より比重の軽いその木材でつくった浮きに、皮をはいだツクマン椰子の実に数本の釣をつけて、一ダースほど岸边に流しておき、藻を縫って回遊してくるジャラツキーという魚の群れを待つという、気の長い漁法も教わった。

ダンスに病みつき

ある晩、高村支配人の家で酒宴を開いていた新保宗雄が、「ダンス会をするから集まれ！」

と、よびかけてきた。しぶっていると、

「ダンスを踊れなければ、忍耐の必要な植民地開拓に耐えることはできない」

と、理屈にならない理屈を並べた。彼の顔を立てるつもりで行ってみた。

場所は例の酋長のアレピオの家である。ランプとランパリーニヨ（裸の石油ランプ）の照明が、椰子の葉葺きの軒下をぐるりと囲んでいて、油煙を上げている。どこから集まっ

たのか一〇人あまりのダーマ（淑女）が並んでいるが、美人はいない。楽器はビヨリーヌ（バイオリン）とカバキン（ウクレレ）だけだ。

アレピオの家でよく見かける「ダダさん」とよばれるインディオ系のダーマがいて、新保とさかんに踊っている。われわれにも、

「いっしょに踊りましょう」

と、誘ってくる。断ると失礼なので、一人ひとりお相手をつとめなければならなくなった。ところがダダさんはタマンコという木製のつっかけサンダルをはいている。われわれも同じタマンコだからお互いさまだが、慣れないものだから、足からサンダルが脱げて踊りにくい。こうしてダンスの手ほどきをうけてしまった。これが校長の歌にある「アンジラ河の高台に斜めにかかる三日月は、世の移ろいを外にして椰子の葉陰に白銀の砂をけりつつ舞踊る太古の民を輝かすかな」にちがいない。

それから独身者たちは近所のバイレ（ダンスパーティー）へ通うようになり、ダンスに病みつきになっていった。病が高じてくると、リオっ子の娘たちから聞いていたとおり、毎土曜日にどこかで大小のダンスパーティーが催されていることに気がついた。

ある夕方、これまでは遠い存在だった「達眼師」と言われていた大友達眼と、裏の再生林の傾斜地にある便所のなかで

隣り合わせた。彼は高拓では特待生だったが、アマゾンまで来てみると、資格だとか年齢とかいう人間くさいものは関係なくなってしまう、裸同然の動物になってしまう。

イーリヤ・ダス・フローレス（花の島）以後、彼とは言葉を交わしたこともなかったが、彼はすこぶる慨嘆したように、

「安井君、紅顔の美少年もこれでは台なしだねえ！ きみもここにとどまるのかね」

と声をかけてきた。イーリヤ・ダス・フローレスで私は、アマゾンを自分の目でたしかめてから南伯へ行っても遅くはない、と啖呵を切った。彼は私のその判断をたしかめたかったのだろう。

湖の風に乗って、どこからかダンスパーティーのはじまりを告げる音楽が流れてくる。私は「ダンスでもしなければ開拓地の生活には耐えられない」という新保の説に同調した独身者の一人である。達眼師は衰えていく開拓者魂を嘆いて、胸中憤りを感じていたにちがいない。すこし間をおいて、

「退廃的な音楽だねえ」

と、うなるように感慨を吐いた。

湖面を渡ってくるビオロン（ギター）とウクレレの伴奏で弾くバイオリンの音色は、哀れで悲しげに聞こえる。どういう理由かは知らないが、大友は伐採をしなかった。事務所用に伐り開いた土地の払い下げを支配人に要求したとか要請し

たとか、そんな噂が広がっていた。

ある夜、私たち四人が彼の家へ行って、

「そんな特別扱いは許せない」

と文句をつけたら、翌朝にはサンタルジアから姿を消してしまった。大友の考え方はあるいは正しかったのかもしれない。そのとき彼は二十五、六歳、仏教の修行をした妻帯者であった。

上塚校長の来訪

この年の十月二十二日、上塚校長が日本からやってきた。四年ぶり二回目の現地訪問だ。今回の目は、ブラジル新憲法に制定された「移民二分制限条項」について、現地で情報を収集し、善後策を講ずることであった。もうひとつは、これまでの植民地経営を検討して、会社設立に向けて新しい事業計画を立てることにあつたという。

移民二分制限条項は、各国の移民は過去五十年間の入国者数の二パーセント（二分）に制限するというものである。日本は一九〇八年、笠戸丸で七九一人がブラジルに移住して以降、二十年間で約一四万五〇〇〇人の実績しかなく、制限法が実施されれば、年間二八七〇人しか許可されないことになる。そうになると、上塚校長の一〇〇万人の理想植民地計画

も、前途が危ぶまれる。

校長がアンジラから森越えしてサンタルジアに到着すると、アレピオ家に集まって歓迎した。白いヘルメットに黒い靴とゲートル、白い開襟シャツに身を固めた、アングロサクソン植民者風の格好で、財団法人、会社設立、正義の通る社会、大和民族による理想社会の建設についていつもの熱弁をふるった。

財団法人とか会社設立などということは、アマゾンに生きていくわれわれとはあまり密接な関係があるとは思えなかった。なぜそうなのか。しいていえば、校長には校長の世界があるが、われわれは自分の世界に向かってみずから運命を切り開いていかなければならないことを真剣に考えはじめていた、ということになるうか。ここは、広い大地なのだ。

失敗に終わった山焼き

十一月に入って、いよいよ待望の山に火を入れる日があった。

伐採した山は乾きすぎて葉が落ちるほどになっていた。朝、村の本部事務所から、現地人のカボクロたちがつくった、ババスー椰子やイナジャ椰子の樹皮を二メートルほどの長さに細かく割いたものが配布された。昼に火を点ける時間

までに、火もちがよくなるように乾かして、これを兼ねて松明（たいまつ）をつくれと伝達された。

西の湖側から耕地を横断して東の森際まで一気に火勢を強めるためにたくさん藪に点火せよ、ということだった。中心部で撃つ鉄砲の音が点火の合図だ。

タワケイラからボアフオンテにわたる一〇キロあまりに火を点けるので、かんかん照りの日選ばれた。枯木の藪のなかをくぐったり登ったりしながら、一区間二〇〇メートルあまりの距離を渡っていくには、長い松明を一本持つだけでも難儀である。しかも、その間、火を保たなければならぬ。経験のない連中ばかりで迷っていると、フィリピンから来た大越亀蔵という先輩が、竹の代用として、インバウバ（薬用植物で、新芽の液汁は赤痢、淋病などに効き、脾の上部の髄は止血剤に使われる）という木の節をくり抜いて、ロウソク形の石油ランプのようなものをこしらえたという話が伝わってきた。大越先輩に習って、その「熱帯文明的点火道具」を競って真似をした。

さっそく裏の再生林に走りこんでインバウバを切りだし、各自が仕上げで試してみると、あちこちから不満の声があがった。石油を満たすと漏れるのに気がついた。よく調べてみると、インバウバの節にはかならず目に見えないほどの小さな穴があるのだ。一同あわてて、当初はあまり信用していなかったカボクロ式の松明をつくって、ばか騒ぎはおさ

まった。

まもなく、湖を眼下に見下ろす森の入口に集合した。作業服にゲートル姿も凜々しくわれわれのまえに立った高村支配人が、一世一代とも思える訓示をした。

『『開拓者』』と題する泰西（西洋）の名画がある。それは、森林のなかの切り株の根元に転がっている一個のどくろを、翼を広げた天使が抱えるようにして祝福している絵だ」

と開口いちばん言った。この人らしからぬ論調に、すこしびっくりした。私は作者の名前は思いだせなかったが、その絵に心覚えがあった。つづいて彼は、

「開拓者とは、名もなく森林に忘れ去られた閣僚である」

とつけくわえた。空も湖も真っ青な丘の上、その原生林の入口での訓示にふさわしいが、そのようになれと言うのか、あるいは、いやでもそのようになってしまおうと言うのか、将来を暗示されたような心境でもあった。

「正午を期して撃つ鉄砲の音を合図に、いつせいに点火せよ」

と命令が下った。Z旗が揚がった気分である。一同はそれぞれ自分の耕地を目指して、森のなかへ消えていった。

われわれの持ち場は、クワケイラに近い北の端で、途中、宮地茂が陸亀の一種ジャブチーを見つけた。

貴重な兵糧であるから、こんな最中でも見過ごすわけには

いかない。彼はしぶしぶ、丸っこくて動くやつをシツポ（蔦）でからげて、肩にかけて歩いた。

森のなかで合図を待っていると、あたりが薄暗くなって日が陰った。樹間から仰ぎみると、タワケイラの岬のほうから雲が流れてくる。みんなで顔を見合わせていると、パラパラと雨が落ちてきた。点火を見合わせるべきだと思ったが、そのとき、合図の鉄砲の音が轟いた。通り雨のような雨脚が木々の枝葉を湿らせていく。森の中心部のほうを望むと、すでに黒煙と火の手がはげしく上がって広がっていく。雲はわずかにわれわれの上空だけをかすめていったのだ。目ぼしい枯れ枝に火を点けてみるのだが、勢いよく燃えあがらない。何度も試してみたが、結局うまくいかなかった。点火をあきらめて引き揚げた。誰も口をきく者はいなかった。山焼きは失敗したのだ。

つぎの日、重い心を抱えて見に行くと、森の中心部から自首実の耕地あたりまでは、あとの整理も必要のないほど真っ黒な焼け野原になっていた。伊原只郎、木村宗一のあたりは何のじやまものもなく見渡せた。まだ何かくすぶっているらしく、日が昇るにつれて火は勢いを盛りかえし、白煙が立ちのぼった。その上を頭の赤いハゲタカが、餌を求めて悠然と滑空している。

やがて畠中の耕地を通り過ぎると、案の定、われわれの持ち場は半焼けになった枯れ枝の藪が目も当てられない姿をさ

らしていた。半焼けになった藪が累々とつづいて先が見渡せない。午後になって類焼してきた火が舐めて通った跡だ。そこをくぐり抜けて千葉守、横田信男の耕地へ出ると、こども雨が通らなかつたと見えて、上々とはいえないが、十分に焼けていた。

焼け損なつたのは平石定吉、宮地茂、私、山崎太郎、薬師神光雄、武井信元、秋山三雄の耕地である。それをたしかめると、七人はすごすごと村の宿舎に引き揚げた。私たちはしよせん「切り株の根元に白骨をさらす開拓者」である。いまだ天使も現れず、ハゲタカにも見限られたのか、その姿を見せない。

つぎの日からきつそく、自分たちの区画にタビリー（山小屋）をつくつて、宿舎から引越した。山小屋といつても片屋根の物置のようなものである。炊事当番が二人ずつ交代で村へ泊まりにいき、垢を落として翌日に食事と水を運んできた。

焼け損ないの後始末をする寄せ焼きというのは、伐採に匹敵するくらいつらい仕事である。灼熱の太陽が照りつけるもとで、真つ黒に焦げた堅い枝を切り離しては、積み重ねて火を点けるのだ。大きな枝が重なって小山のようになった場所では身動きもできず、ひと山積むのに半日もかかる。日中に火を燃やすと暑いし、時間が惜しいので、夕暮れから火を点ける。炊事当番の日まで炭焼き同然に炭まみれになって暮ら

すのだが、どこへ転がって寝ようが蚊が一匹もないのはありがたかった。

そのうち畠中の隣に耕地のある渡辺正治が仲間入りしてきた。彼の耕地はよく焼けたので、そんな真似をしなくてもすむのに、ワイフが毎日村から弁当や水を運んでくるのをいいことに、われわれのところでも独身者相手に話しこんで過ごすようになった。われわれが夕方火を点けるころになると、彼はやってくる。彼は弁が立つタイプではないが、話のネタが面白い。彼を囲むように、倒木をベッド代わりにしたり、土の上に好き勝手に座りこんだ。

真つ暗な森に囲まれて四角く切りとられた星月夜。山小屋の屋根につるした一個のランプ。周囲で燃えている寄せ焼きの火に、われわれの影がうごめく。空気が湿ってその火が尽きても、彼の山口弁はますます燃え盛った。人気があつたのは、彼が高拓の夏休みに帰省したとき、村の青年に誘われて、夜這い見物をしたり、実際に自分でも夜這いをして歩く場面だ。なかでも圧巻だったのは、東京から帰省している女子大生を夜這いするシーンだ。蒸し暑い座敷のなかで、肌もあらわに熟睡中の彼女に、懐中電灯の明かりを頼りに忍び寄る「忍者」の群れ。その情景描写の鮮やかさと好奇心をくすぐる話術の巧みさに、何回聞いてもぞくぞくした。

校長の突撃ラツパ

こうしたある日、山の麓から校長の帰国を知らせる伝令があった。

「急ぎアレピオの家に集合せよ」

われわれは乗り気ではなかったが、しぶしぶ炭で「化粧」した姿のまま山を下った。校長は例のアングロサクソン植民者風に身を固めて、意気揚々とわれわれを待っていた。新保宗雄をはじめボアフオンテ植民地の連中も顔をそろえていた。校長は別れの挨拶などそっちのけで、またもや会社設立と大理想の突撃ラツパである。

われわれは歓送の儀式がすむやいなや、湖水へ飛びこんだ。そして満々と広がる水のなかで、校長の説く会社設立や大理想を肺のなかの炭の粉といっしょに洗い流してしまった！ 校長は手塩にかけた四回生の心中がよくわかっているらしい。

アマゾニア産業研究所の職員の多くは高拓で教鞭をとっていた人たちだが、四〇キロあまり離れたワイクラツパ植民地へ足を向けようとする人はほとんどいない。矛盾を感じとった先輩たちは、もうここには残っていない。四回生の大部分は緑あつて校長と出会い、国家民族の将来を担う心意気で南米大陸まで来たのだが、校長の理想とみずからの生きる

道がちがうように実感していた。いまは渡り鳥が途中で羽を休めている心境で、やがて広い天地へ飛び立たなければならぬ、と思っている。

校長には悪いが、「セルフコントロール」「セルフガバメント」の教えだけを自分のものにした。

このころ、日本から連れてきた伝書鳩は、アマゾン産業研究所の本館近くに新築された鳩舎に収容されていた。半ダースほどが止まり木に並んでしょぼくれていた。何をさせられているのだろうか。放てばたちまち猛禽類の餌食になるだろう。運よく生きのびた鳩は、ワイクラッパのあたりには山鳩がたくさんいるから、そこで土着するのだろうか。われわれ同様、鳩たちも身の振り方が決まっていない。

高台地のはずが水田に

他の連中より数倍の労力をかけた寄せ焼きが終わると、二月下旬には雨季に入る。米（陸稻）を播きつけはじめた。その合間にアンジラ模範植民地を訪ねた。中心部には支配人の住宅、事務所、学校などが立派に建っている。アンジラ河に突きだした栈橋も頑丈なつくりで、一〇〇メートルもの長さに見えた。

しかし、周囲の耕地跡はすでに荒れはて、再生林のなかに

合宿所だった三棟の椰子の葉葺きの屋根が、風雨にさらされて廃屋になっている。植民地のはずれまで行くと、第一回家族移民の尾山良太の家があった。家族がまだ住んでいて、軒下に一〇本ほどのジュートが植えてあった。それらは二メートルあまりの高さになり、分岐しはじめた枝に黄色の小さな花をつけていた。

アンジラからサンタルジアへの幹線道路は、残っていた木の株も掘り起こされて、完成した。原生林を突つきって開いた幹線道路は、幅五メートル、全長一五キロにおよぶ。その両側に一耕地が前面二五〇メートル、奥行き約一キロで、計二五町歩（約二五ヘクタール）に区割りされていた。

夕食がすむと、独身者たちは村の事務所まえの広場で腰掛けて雑談することが多かった。しかし、ニュースが入ってこないなので、われわれの雑談は弾まない。森の方角から湖のねぐらへ急ぐアララとよばれるオウムが三々五々、裏の再生林の空に姿を現す。その派手な姿だけが、わずかにわれわれの退屈をまぎらせてくれる。

「あいつを捕まえたら、いくらぐらいになるだろう」

今村泰三が言うには、つがいだと一コント（一〇〇〇ミリreis。当時一ミルreisは邦貨にして約二五銭なので一コントは二五〇円）にもなるそうだ。ただし、観光土産とし

て売られている値段らしい。当時、カマラーダとよばれる現地の日雇い労働者の日当が男で二ミル五〇〇レイス（2・5ミルレイス＝約六二銭）ぐらいだったので、相当に高額である。今村は何でも知っている男だ。彼の言葉のはしほしに、継母と仲がよくないらしいことがうかがえた。それでアマゾンくんだりまで来たのだろう。こんな原生林のなかの四角く切りとられた天地に身をおくには惜しい才能の持ち主だ。その後、オウムを見ると、われわれは「一コント」とよぶようになった。

その今村いわく、
「ブラジルでは農民は下から二番目の階級。最上級は政治家、つぎが商人、三番目が牧場主、その下が農民、最下層は漁夫だ」

年を越すと、午後になると雨がやってくるようになった。伸びてくる陸稲のあいだに、日除けの穴を掘ってゴムとコーヒーの樹の苗を植えた。私は穴を掘らずにじかに植えられるパラ―栗（ブラジルナツツ）とグアラナの苗木を植えた。こんなものを植えるのは私一人だった。ゴムやコーヒーは将来、収穫に人手がかかる。十年も先のことを取り越し苦労することはないが、支配人は私の選択に文句を言わなかった。

こうして六月の米の収穫を迎えるまえに、浜辺の村から山の上の耕地へ、思い思いに家を建て、井戸も掘って引越

をはじめた。このころになって、湖の向こうに横たわる天の橋立付近の高台品に、マンゴーの大きな樹を持っている現地人の家があるのがわかった。熟れる季節になると、せつせと買いに出かけたら、売るほうも喜んだ。樹に登ってちぎり、毎度、麻袋に二つぐらい持ち帰ったので、おおいにビタミンの補給になった。

雨季はますます深まり、午後になると断続的にシユーバ（豪雨）が来るようになった。ある日、気がつくと、奥の耕地の稲のなかに白鷺がちらほらするのが目に止まった。不思議に思っ調べてみると、森から水が浸出してきて、ゴムを植えた穴には水があふれ、メダカが泳いでいた。森に沿った三つの耕地の三分の一ぐらいが浸水している。踵ぐらいの深さだ。われわれは不吉な予感を打ち消すように、

「水田ができるぞ！」

と冗談を言った。日がたつにつれて水かさは増す一方で、陸稲のなかに野鴨が来るようになったので、私は食を得んと鉄砲で追いまわした。湖側の宮地の井戸は、井戸の口から水面までがわずか一メートルほどになってしまった。私の浅井戸は口から水があふれた。

そのうちに森の側の耕地のほとんどは、水田を通り越して池になってしまった。黒色砂質土壌と折り紙つきのはずの土地が、水没してしまっただ。雨季になってわかったのだが、この辺はドーセ河の水源地だったのである。天災だか何

だか知らないが、禍福が隣り合うのは、開拓事業のつねなのだ。

迎える二月の末は、ブラジル最大のイベント、カルナバル（カーニバル）だ。じたばたしてもはじまらない。パリンチンスへ行くことにした。私の手もとには、浅井戸にしたおかげで、井戸掘り費用の余剰金が少なからずある。「人間万事塞翁が馬、禍福はあざなえる縄のごとし」と言うじやないか！

例の仲間たちとペンソン（民宿）で栄養をつけて街へ出た。ブラジリアンは三日間で一年分の稼ぎを使い果たすというカーニバル。三日目にはあちこちで競うようにダンスパーティーが催される。

これと思う家のまえに立つと、窓辺から娘たちがランサ・ベルフーメ（香水噴霧器）で香水を吹きかける。サロンのなかは今年のカーニバルのテーマソングとサンバのリズムで熱気が立ちこめている。抱擁し跳ねまわっている男女は汗にまみれ、踊り狂うその姿は、淑女然としたふだんの姿から想像もできなかつた。

カーニバルが終われば、パリンチンスに用はない。研究所から植民地行きの便船をつかまえて引き揚げた。山へ帰ると、そろそろ米の収穫の用意だ。見よう見まねで収穫の道具をつくった。原始時代そのものだ。サンパウロ製らしい鎌の配給があったほかは、素性のよい材木を切りだして、靱を落

とす叩き台をつくった。砂糖やメリケン粉の空袋をつなぎ合わせて、乾燥に使う布をたくさんつくった。

稲穂が出るころになると、故国の秋を想いだした。植民地の中心部に近い原莊太呂、大川博、城間宏忠の耕地、そしてその先の斎藤四郎、戸口恒治、荻野正美ら独身者の耕地にも、立派な稲穂が見える。この辺はマサツペという黄色粘土質の土地で、原の井戸をのぞくと、深さは九メートルもある。畑もよく焼けた。畠中実、渡辺正治、伊原只郎たちの土質は黄色粘土質に砂質がまじっているが、畑は真つ黒によく焼けたので、稲の出来は植民地の中心部と変わらない。サンタルジア植民地のいちばんはずれ、タワケイラ植民地との境の千葉守と横田信男の耕地は黄色粘土質ながら砂質まじりを心配していたが、山焼きのときに雨を被らず上々に焼けたので、稲の生育もいい。

だめだったのは、山焼きの際に通る雨をくらったわれわれ七人の独身者の畑で、半焼けの跡は歴然として、稲の育ちにムラがある。しかも、半分近くは水田というか池というか、水に浸かってつぶれてしまったのだ。黒色砂質土壌と思っていたが、じつは、落ち葉の渋に染まったただの砂に、長年の落ち葉のくずが混じっていたものだった。日光と雨にさらされたあとは、まったくの白砂にもどってしまった。

われわれは運悪く、化けの皮を被った耕地を割り当てられたのだ。

それにくわえて、いままでに見たことがない広い米畑の出現に、山鳩の群れがつきつき舞い降りるようになった。彼らは目ざとくできのよい垂穂をねらって、たちまち大きな体で食い散らし、ささくれにしてしまう。空を見上げると、イラウーナという頭の赤い、真つ黒な小鳥の大群が、タワケイラ植民地あたりで満腹してきたと見え、夕空高く渡っていく。

サンタルジア村に、アマゾニア産業研究所の精米所が移転してきて、運転をはじめた。事務所と並んで、植民地本部らしい趣を整えてきた。精米を終えてみると、われわれの収穫は一人当たり、たったの六俵。他の人たちの五分の一以下の成績に終わった。高村支配人の記録によれば、四回生の最初の陸稲の収穫は、多い者は粃四〇俵ぐらい、少ない者で三〇俵ぐらいとある。粃一俵（六〇キロ）の値段は二〇ミルreis（邦貨にして五円）だったので、収入（純益ではない）は一人または一家族六〇〇から八〇〇ミルreis。現地の日雇い労働者の年間平均収入が六〇〇から七〇〇ミルreisぐらいだから、おつつかつつの低収入である。

しかし、われわれの収入はそれさえもはるかに下回り、また一年間貧乏暮らしがつづき、「あの七人組独身者はだめだ」という烙印を押されてしまった。

第六章

石の上にも三年

入植一年、退去者があとを絶たず

アマゾンに来て一年、一九三五年七月、五回生を迎える時節になった。五回生の入植者はたったの一八人だという。

尾山良太が前年採取したマッチ箱二つ分のジュートの種子を研究所が播種栽培して、三〇キロの種子を得たという朗報が伝わってきたものの、当時の日本においては、アマゾンア産業研究所の存在がようやく知られるようになったばかりだった。植民地経営に有利な主要作物がいまだに見いだせず、入植者も研究所も資本を投じるだけで、利益に結びつくにはいたっていない。

サンタルジア村では、事務所の周囲を整地して、永年作物のカカオなどの苗が植えられた。職員住宅も立ち並んできた。しかし、独身者も妻帯者も、櫛の歯が欠けるように退去者があとを絶たない。考えあぐねたすえのことであろうが、ある日突然、友だちにも告げずにいなくなってしまう。

空き地は増えるばかりで、放棄された植民地を再生林が遠慮なく埋めていく。土地が欲しければ、空き地に勝手に入れればいい。事務所の指導権などあつてない状況だった。われわれは、最初に入った土地を放棄して、それぞれ好き勝手なところへ移転した。共同組織も一年で解散したので、自由裁量で耕地の伐採をした。

二度目の雨季が近づいて、初播きの季節がきた。日本では歳末を迎えているころだ。私は米づくりに興味も資金もないので、多収穫を夢見て、今度はわずか一町歩（約一ヘクタール）だけ伐るにとどめた。

少ない面積に厚播きして収量をあげようという怠け心に発するものである。去年植えたパラー栗（ブラジルナッツ）の苗は、地味のよいところの二本だけが二メートルほどに伸び、二段に枝を張ったが、ほかは植えたときと変わらず、発育不良のままである。植民地の中心部の黄色粘土質のところでは、ゴムの樹が、成績のいいものだと根元が尺八ぐらいの太さになり、三メートルほどに伸びた。その先端にはバラ色の新芽が、蒸し暑い日光に照り輝いている。

隣の再生林は伐り払われて、手入れした跡が見えるのに、その地主の大川博は南伯へ去ってしまった。

原荘太呂のところもゴムの樹の周囲は手入れされているが、彼の家は静まりかえっている。その先の戸口恒治は、ゲートルを付けて作業服姿のまま、退屈している。斎藤四郎のここ

ろをのぞくと、同じように退屈しているらしいので、乏しい話題を突つつきあった。話が途切れると、斎藤はバイオリンを引き寄せて、擦ってみる。とくに曲を弾く気はない。そして、私に向かって、

「こんなところに長くいると、カボクロ（現地人）になってしまうよ。第一の辺では、『ボン、ジア（こんには）』のアクセントはジにあるが、カリオカ（リオっ子）のアクセントはボにあるんだよ」

と、それを強調するように何度も発音した。

「こんなところのポ語（ポルトガル語）を覚えても、全然役に立たないんだよ」

昼近くになったので、帰ろうとすると、

「昼飯を食べていけ」

と言うので、ありがたくちようだいすることにした。私は怠け者なうえに貧乏で、家に帰ったところで、例の蜻蛉草もどきを妙めたものしかない。人の通わぬ道端の草だから、川の水よりずっと衛生的ではあるが、惜しいことにはひどく不消化な草で、栄養があるとは思えない。

斎藤の家では、いつもマカロニを茹でて、うどんのようにして食べる「コロコア（植民地）うどん」

が出た。その彼も、いつのまにか南伯へ去っていった。



開拓当時の家（アマゾン60年史より）

仕送りの結婚資金で借金返済

私は一年間の勤労生活を終えて、まがりなりにも環境に慣れた。砂糖キビ焼酎も一人前にたしなむようになり、原生林のなかに四角く切りとられた天地とパリンテンスとのあいだを行きつもどりつして、惰性の日々を送っていた。空には、ブラジルに来るとき南太平洋からずっと見てきた南十字星が

あるのに、もう興味をなくしていた。また、パリンチンスにも新鮮味を感じなくなっていた。

あるとき、パリンチンスの街で映画が上映された。高拓出身者が定宿にしている民宿の近くの倉庫が会場で、入口の垂れ幕をくぐると、何やらぼやけた影がスクリーンに動いているだけで、話のタネにもならなかった。そうかといって、私は南伯の既成の日系社会に入っていく気はないし、その勇気もなかった。パリンチンスに出かける金がなくなると、金属製のトランクなど、いっさいの持ち物をアマゾンニア産業研究所の売店に持ち込んで、金に替える交渉をしては、「こんな役にも立たないものを持ちこんでくるな！」と、ゴミでも持ちこんだかのようには叱られた。

ある日、研究所へ行くと、会計部長の九十九利雄からよばれた。私の親からの送金があるから受け取れというのだが、よくたしかめると、結婚資金であることがわかり、「いらない」と断った。それでも強硬に「受け取れ」と言うので「送り返してほしい」「いや、困る」と押し問答がつづき、顔が合えば、

「是が非でも結婚せよ」とうるさく言われた。結婚すればまじめに働くものと思っっているようだ。

「軍鶏の番でもつくるように、結婚を安っぽくあつかうのは解せない」

と言っても通じない。九十九部長はいまだに学生服を着ていて、多少は貧乏の味を舐めているようなので、

「結婚するには、いろいろ準備がある」

と矛先を変えてみたら、九十九部長は、

「どのような準備か」

と執拗に食いさがってきた。

「まず、借金を片づける必要がある」

と伝えると、微に入り細をうがち、うるさく使い方を確認したうえで、厄介者を追いだすように金を渡してくれた。

私はきつそくパリンテンスへ行つて、定宿になっている民宿の積もる借金を払った。よくもまあ長いあいだ、文句も言わずに寝泊まりさせてくれたものだ。食事の質が落ちたと行って、新しい民宿を見つけて鞍替えした者が多かったなかで、「私のような者がいれば、食事の質が落ちるのは当然だ」と、義理に感じて宿を変えなかったのがよかったのかもしれない。栗津金六所長の時代に薫陶をうけた実業練習所のエストダンテ（学生）同様に私をあつかってくれる信用を無にしたいくないという思いもあった。

アマゾンア産業研究所の法人化

一九三六年が明けると、研究所では「会社になった」と大

喜びしていた。前年の秋、上塚校長が来所したおり、株式会社、会社組織とさかんに演説していたが、私が惰性で生活を送っているあいだに、研究所は「アマゾンニア産業株式会社」になっていた。アマゾンに大和民族による理想社会を建設するという彼の理想に一步近づいたのか、久々にヴィラ・アマゾンニアにも活気が出てきた。

ここで、アマゾンニア産業研究所の法人化の経緯を追ってみよう。

一九三五年三月、日本の議会では、「アマゾンニア産業研究所」を土台とした新会社設立に翌年度から　むこう十年間、年六分の配当補助が決定された。

これまで上塚校長の事業を後援してきた郷誠之介男爵が、三井合名会社、三菱合資会社、住友合資会社、安田保善社、東洋拓殖株式会社の五大会社に新会社の設立をはかり、同年九月十七日、「アマゾンニア産業株式会社」が設立されることになった。資本金一〇〇万円、総持株数二万株として、全株式を五社が引き受けることで会社組織が誕生した。

そして一九三六年六月、六回生ならびに家族入植者をふくめて五七人と同行した上塚校長は、「アマゾンニア産業株式会社」のブラジルの法律にもとづく現地会社をパリンチンスに設立した。資本金四〇〇〇コントス（邦貨にして100万円）で、取締役社長に上塚司、取締役総支配人に辻小太郎、従来の部課の統廃合による人員整理をおこなうと同時に、収

益の増加を図るために貿易部を新設するなど、事業の発展計画を進めた。

入植者の生計確立のために組合づくりを進め、高台地の作物としてゴム、パラ―栗（ブラジルナッツ）などの永年性のものを主作として、副作に米、マンジョカの栽培を奨励した。しかし、この計画が入植者から歓迎されなかったことは、このあとでふれるとおりである。低湿地の作物としては、尾山が発見した新品種のジュートの栽培を主力にした。

植民地建設の理想からの離反

法人化を実現して意気軒昂の上塚社長（われわれ高拓生は相変わらず校長とよんでいた）は、村の会館に四回生を集めて、これら植民地経営の将来と理想郷建設について、また夢の講演をした。相変わらずの熱弁であったが、聞く側はいつこうに燃えてこなかった。

上塚社長が植民地に現れたこの年には、サンタルジア地区の原生林は、主なき土地を残して、幹線道路の湖側は湖水を見下ろす台地の際まで、反対側は五回生の入植地のドーセ植民地との境までほとんど伐り開かれてしまっていた。理想郷にゴム林が育ちあがるまえに、米をつくる土地がなくなってしまったのだ。熱帯焼畑農業では、施肥や消毒を必要としな

いが、内地のように連作はできない。再生林が育って、ふたたび焼畑ができるまでに十年はかかる。こうしたことから、妻帯者が現実生活の質問をして、米づくりの先途と生活不安の解消のために、新しい土地を要請した。社長は、

「新しく植民地を建設することは、大きな資本を必要とする。現状では不可能である」

と、突っぱねた。それよりは、地味に乏しい旧耕地でも栽培のできるマンジョカ生産を奨励し、マンジョカ生産組合の創設を促した。ブラジル人が主食とするマンジョカ粉生産工場に融資をして、会社が粉を買いあげ、その収益で生活を維持しながら、永年作物の収穫を待て、というのである。理想論ではあるが、永年作物のゴムにしろパラ―栗にしろ、利益が期待できるかどうかの問題であり、それらが達成できるまでには、長い年月がかかる。

環境と社会の変化は予想も計算もつかない。ましてやここはアマゾンである。上塚社長の理想論は博打に等しい。米はブラジル人の主食ではないから、たくさん消費するわけではない。マンジョカ粉はたしかに主食ではあるが、現地人カボクロたちは誰でもつくっており、不足していないのだ。また米のように保存がきかないので、畑に芋のまま寝かせて無理な増産をしないのが当地の慣習であった。要するに米もマンジョカ粉も、たいして金になる作物ではないのだ。校長、いや社長の熱弁も高拓生を相手にするようには沸騰しないのは

当然であろう。

会議は半煮えのまま冷めていく。三回生の内藤茂三郎が四回生の腹のうちを代弁するように、口火を切った。

「先生。先生が言われるように、そんなに大切な大事業を遂行しなければならぬのなら、当地にとどまってみずから模範を示されないのでですか」

それに対して社長は、

「自分が日本を離れると、植民地建設の資金を調達することができない。たちまち、諸君たちは進退窮待ってしまうからである。」

内藤は負けずに食いさがった。

「それならば、われわれに督励するより、子息を寄こしたらよいではありませんか」

痛いところを突かれたようだったが、そこは海千山千の政治家である。

「人それぞれに好きな道がある。親といえども子供に強要はできない」

上塚社長が満鉄社員時代、大連で生まれた長男の昭は医学を学んでいた。

会議はすっかり白けて、マンジョカ生産組合の話もこの日は流れてしまった。

日本では「石の上にも三年」の辛抱と言われるが、三回目の米畑をつくるときがきた。私は、こんな井戸端会議に時間

を浪費するのをやめて、会議が招集された晩は、わざと元氣百倍になって、プランタ・マキナ（播種器。一〇五頁の下の絵を参照）を振りまわした。このプランタ・マキナはもともと南伯で豆やトウモロコシの種を播くのに考案されたもので、それを尾山良太がジュートや米などの小さな種子用に改良したものだ。黒々と焼けた土の上に倒木の影が這いまわっている星月夜。深々と眠っている原生林。その原生林に囲まれた湖の上の畑に出ると、細い月の明かりが冷えこむまで、播種器をしゃにむに地面に打ちこんだ。播種器を開閉させるたびに発するカタンカタンという音が、気恥ずかしくなるほど天地にこだました。

今回は、宮地茂、石黒彙吉と私の三人は、湖に近いほうが土地がよいので、自分たちの土地の延長線を測地して、湖のほうから伐採することにした。宮地と石黒は四町歩（約四ヘクタール）あまり、私は三町歩（約三ヘクタール）を伐採して、通常の播き方をした。土質は砂をふくんだ黄色粘土質である。最初に湖側から開拓すれば、昨年のように「水田」になって流してしまうなど、つまらぬ苦勞をしなくてすんだのに！ 今回通常の播き方にもどしたのは、地味の弱い土地に厚播きしても、収量はさほど上がらないことが、昨年（一町歩で一〇俵〔六〇〇キロ〕）すでに試験済みだったからだ。

そして、自分の作業がすめば、便船があるたびにパリンチンスへ出かけた。べつに町が恋しいわけでも面白いわけでも

ないが、村にいるよりましだ。

やがて、いつさい融資はなしという最悪のかたちで、マンジョカ生産組合がつくられることになった。

夫婦でいれば子供が増えるから、妻帯者たちは家族を養うためにしかたなく賛成したのだった。独身者たちも仲間意識と友情に寄り切られ、不本意ながら同調したが、工場建設の棟上げ以外は、積極的に協力しなかった。そして、これまでどおりの現地人カボクロ同様の生活に舞いもどった。われわれ四回生の心は、ますます植民地建設の理想から離れていった。

ダンスパーティーの開催

サントルジア植民地の中心部も、どうにか村らしくなってきた。

運動場では運動会や野球大会などが開かれるようになった。会館や病院が立ち並び、事務所には、マウエスから来た歯科医の岡田秀臣が開業した。石黒叅吉が勇んで治療をうけたが、その後、治療費の請求に追いかけていた。私は治療費が払えないので、ピメンタマラゲッタ（唐辛子）の種を噛んで麻酔の代わりにし、だめになった親知らずを五寸クギで引っこ抜いた。こんな荒療治に耐えられたのも、二十歳まえの元気な体だったからだろう。

会館の落成式には、辻小太郎取締役総支配人がはじめてサントルジア植民地に姿を見せた。彼は上塚校長流のアングロサクソン植民者風の服装で、居並ぶ高拓生をまえに挨拶をした。我々といえ、椰子の葉でつくったムルムルー帽に、くたびれた作業服。ひどいやつは裸足に木製サンダルのタマンコを突っかけ、敗残兵同然の姿だ。

辻総支配人の挨拶は、カリフォルニアのある移民が、土地を買えずに河原の砂利採掘跡地で馬鈴薯をつくり、それで産を成して「ポテト王」とよばれるようになったというサクセスストーリーだった。花咲爺さんのお伽噺を聞かされてお茶を濁したような味気なさを感じとったのは、私だけではない。

私はさっそく新会館を利用して、何がしかの寄付を集めて一大カボクロ・バイレ（現地人ダンスパーティー）を計画した。まず、カボクロに友人が多く、顔の広い半田二郎に協力を求めて、よい楽団と、ダーマ（淑女）を近在はもとより遠くはパリンチンスに近いパラナ・ネマ（ネマ水道）あたりまでよびかけて招待した。警察関係は酋長の子孫の、警察官代行のアレピオにいっさいを頼んだ。

前評判が盛りあがってくると、妻帯者の渡辺正治、伊原只即、横田信男までが半田の蓄音機でダンスの練習をはじめた。

当夜になると、背広を着込んだ、どこそこの何某の息子の

一族とかいう、生意気な野郎どもが大勢押しかけてきた。ワアイクラツパの浜から坂道を登って、娘たちを引き連れた親たちも続々とやってきて、会館のなかの四方の長椅子は淑女で埋まってしまった。新参の五回生の独身者たちは気圧されて、外から眺めているだけだ。

夜が更けるにつれて、喧嘩の小火が二回も出た。砂糖キビ焼酎がまわってきたのだ。主催者たちは喧嘩でダンスパーティーが台なしにならないように、焼酎を片手に楽団を煽る。煽りすぎて酔いつぶれてしまっても困る。たいてい、喧嘩の火種は美女である。親たちが娘を連れて帰ろうとするのを、ご機嫌を取り結んで引きとめるのに必死だ。ダンスパーティーの華、プリンセーザ（小町娘）たちに逃げられては、ダンスパーティーはおじやんになってしまう。父親のほうは焼酎でなだめられるが、母親のほうはその手にはのらない。

話は前後するが、この年の三月下旬、聖週間（復活祭の週）の前後から、村の売店に材木の買い付け価格が張りだされた。これをきっかけに、収入源が何もない人間のあいだに、材木を探す気運が出てきた。山崎、本間、藤島らはセドロ（建築・家具用材）が、ワアイクラツパ河の上流にあるらしいと聞いて出かけたが、良材が発見できずにまもなく帰ってきた。北海道で材木の仕事をしていた猪股養次郎（樺太出身のアマゾニア産業研究所会友）らと組んで、横田信男がア

バカシー河の上流へ向かった。パテロン（大型のカヌー）と小さなカヌー、食糧を用意して出かけたが、食糧が尽きて引き返してきた。アバカシー河の上流は流れが速く、そのうえ曲折がはげしい。小型カヌーで先行して、適当な樹木にくくりつけ、ロープを使って大型カヌーを曳き寄せるといふ作業をくりかえす。そんなぐあいだから直線距離にして二〇〇メートルを遡るのに二日も費やし、たちまち食糧が不足した。結局、彼らはセドロ・ブランカ（白いセドロ）という、建材や家具には向かない木材を見つけただけで帰ってきた。その後、横田は南伯へ去っていった。

ジュートの新品种

また乾季がめぐってきて、伐採の季節に入ったころ、武井信元と秋山三雄の家に旧耕地を整理するための火が引火して、寄宿していた清水耕治の荷物が全焼してしまった。その後、武井と秋山はアマゾニア産業株式会社へ、清水は南伯へ去っていった。古い耕地に植えられたマンジョカは収穫できる時期がきているのに、放りおかれたまま誰も手をつける様子はなかった。

藤島正徳は尾山良太のいるラーモス水道上流のフォルモーザ島（一二九頁の図を参照）へ身を寄せ、ジュート栽培を手伝っていた。前年（一九三五）から尾山は、ヴィラ・ア

マゾニアから一〇キロ上流にあるこの島へ家族とともに移り住み、ジュート栽培に専念していたのだ。藤島はサンタルジアへ来るたびに、ジュートの情報を伝えてくれた。

彼の報告によれば、尾山は前年、研究所が播種栽培して三〇キロに増やしたジュートの種子の半分を分けあたえられ、無償で提供されたフォルモーザ島に五町歩（約五ヘクタール）を開き、この年、繊維約五トンを収穫できたという。毎月一定の給料も支払われていた。残り半分のジュートの種子は、同じ家族移民の中内義正がヴィラ・アマゾニアの低湿地の三町歩（約三ヘクタール）で栽培、約三・五トンの繊維を収穫したそうだ。三か月で三メートル、四か月で五メートルにも成長するこのジュートは、新品種と確認され、その後「尾山種」と命名された。

六回生に同行して上塚校長が来訪することが決まったとき、それを目当てに、尾山良太と息子の万馬、芹沢正芳、本間武四郎、藤島正徳らがくわわって、ジュートの栽培事業開始の運動をはじめて、われわれにも団結をよびかけてきた。校長に資金の調達を持ちかける算段だった。われわれの気持ちもしだいにジュート栽培へと傾きつつあった。

ジュート栽培のための移転資金を捻出するという目標ができて、米づくりにも張り合いが出た。しかし、日中は引っぱたかれるように暑いので、私のような怠け者は、原生林の闇に怯えながら夜の畑で頑張った。

不老長寿の秘薬の苗を求めて

そんな折、宮地茂が元ポルトガル人所有地の裏の丘を削って、独身者用の新しい家を建てようというので、石黒糸吉と私は賛成した。丘の中腹から眺めると、そこはそれこそ湖畔の別荘地である（八一ページの図を参照）。右手にはサントルジアの船着き場を望み、前方の藍色の湖に浮かぶ江ノ島、その背後に霞む「希望」という名のボアエスペランサ岬、左手にはマムルー河に沿って伸びる天の橋立。前庭の下に広がる浜は、のちに独身者たちが集うダンスパーティーのホームグラウンドになった。

土曜日になると、独身者たちは丘の上からこの「別荘」に散髪をしてもらいに押しかけてきた。散髪奉仕をするのは私である。米は播き終えたが、独身者も妻帯者も日増しに窮乏していく。庭にポルトガル人が残したコーヒーの樹が五本あって、それらの実が色づくとき、精選して平石と宮地が村の売店で売った。二〇キロほどあったが、熱帯のコーヒー豆は香気がないそうなので、安く買ったたかれた。それでも何がしかの足しになったらいい。また、彼らはどこからか投網を借りてきて、白砂の浜が現れはじめた天の橋立へ、小鯛のようなバラルアという魚を獲りにいった。とても美味しい魚で、フライにして食べたが、空腹を満たすほどには獲れなかったのが

残念だった。

朝のモーニングコーヒーにしても、コーヒーなど長いこと飲んでいない。その代わりにシャ・マテ（マテ茶）でしんでいた。幸い、これもポルトガル人の「遺産」だが、庭に一本レモンの樹があつて、干からびたちっぽけな実が毎朝一、二個は採れたので、マテ茶にレモンの輪切りを入れてレモンティーと称して粹がつて飲んだ。食物に油っ気がないので、ご飯にラードをかけることも覚えた。欲張つてかけすぎると、全部おなかを直通してしまつて、後悔することになつた。

こうしてちよつとした別荘気分を味わつていたが、耕地に植えるゴムやカカオなどの永年作物の苗が手に入らなくなつていた。そこで私は、アマゾン中流域でしかつくれぬという、不老長寿の秘薬のもとになるグアラナに興味があつたので、かねてたしかな情報を得ていたワアイクラツパ河の上流へ、苗を集めに出かけた。宮地と平石、石黒が同行した。道中の住民から情報を集めると、近くの森林のなか　にたしかに自生しているというので、探し歩いた。しかし、三日たつても発見できなかつた。その辺の住民はセアレNSE（オランダ人とインディオの混血人）で、彼らは純粹のインディオではないが、グアラナを知らないはずがない。

元来、グアラナはタパジヨース河とマデイラ河の中間付近に野生していたもので、マウエス付近のインディオによつて

栽培されるようになった。鐘淵紡績株式会社の元技術部長の大石小作は自費で欧米諸国を視察。帰途、南米に立ち寄ったところ、アマゾン開拓に先鞭をつけた福原調査団に出くわした。調査団の一行にくわわりアマゾンを視察したあと、グアラナの実態を究めるためマウエスに赴いた。その栽培方法を視察して、将来有望な作物であると確信し、一九二八年にみずからアマゾン興業株式会社を設立。一〇〇〇家族の入植者を予定して、グアラナの栽培に着手したが、予定していた四万五〇〇〇本の苗が集まらず、そのうちに会社が資金不足におちいり、事業を投げだしてしまったと聞いていた。一九五人の入植者の多くは離散したが、残留者はアマゾニア産業に吸収された。

同行の三人はあきらめて帰ると言いだした。私は滋養強壮、消化剤、解熱剤、清涼飲料などに多用され、需要の伸びているグアラナが好きだったし、あるという確証もあったので、一人で残ると言い張って、

「カノア（カヌー）をおいてってくれ」

と頑張ると、三人はしぶしぶとどまって、ふたたび森のなかを半日歩きまわった。そうはいつでも、私にも自信があるわけではない。その日は、四人分の目を凝らして、下生えの根元や落葉の下も見逃すまいと探しまわった。

昼近くなって、いよいよだめかと観念しはじめたころ、下生えと落葉のなかに、一〇センチばかりのグアラナらしい葉

をつけた植物が目に入った。そのあたりを探すと、群落のよ
うに生えている大小の苗木を手に入れることができた。われ
われは栽培されているグアラナしか見たことがなかったの
で、森の日陰で自生しているグアラナを見逃していたのだっ
た。自生の苗はまばらに葉をつけ、鞭状のものが多い。つる
性でひよろひよろっと伸びて人の丈を越す。ことに成木は藤
の大樹のようで、そばにあっても見逃してしまう。天を摩
して枝を張った大木に覆いかぶさり、実を結ぶ。その根元に
落ちこぼれた種は、雑多な苗と競い合って、自分の場所を確
保する機会を待っている。知らない者には、その哀れな姿か
らグアラナの木を想像するのはむずかしい。

上塚社長の井戸端会議をよそにつくった三回目の米の収
穫がはじまった。私ははじめて豊穰の秋の気分を味わった。
収量は三〇俵あまり、約一八〇〇キロで、金額は忘れたが、
まず収穫資金の取り立てを払い、ジュート栽培のための移転
資金に五〇〇ミルレイス（邦貨一二五円）を積み立てて、残
りをあとでふれるマナオス行きの費用に使った。私よりも年
長で働き者の宮地と平石は、各一五〇〇ミルレイス（邦貨三
七五円）、労働成績のよくない石黒と薬師神はそれぞれ、私
と同じ五〇〇ミルレイスを積み立てた。こうして、いよいよ
ジュート栽培計画が実現することになった。渡伯以来はじめ
て、みんなの心は浮き浮きとして、風光明婚な「別荘地」で、
引っ越すまでの日々を楽しんだ。

第七章

ジュート栽培に進出

ジュート栽培に希望を託す

アマゾンに渡って四年目、一九三七年七月、伐採の季節を迎えると、新種ジュート（尾山種）増産計画の試験栽培のため、われわれはエステーボ島へ引っ越す準備をはじめた。

パリンチンス市の上流およそ八〇キロ、オンサ群島の西端に位置するエステーボ島は、長さ約三キロ、幅は最広部で一キロの細長い三角形のヴァルゼア（低湿地）の島だ。

尾山良太が一本の苗木から採取したひと握りの種は、順調に増殖され、前々年（一九三五）の栽培試験では尾山は五トン、中内義正は三・五トンの良質のジュート繊維を収穫できたことはまえにもふれた。

アマゾニア産業株式会社は、これらのなかから六〇俵（二七七〇キロ）を、ベレン市の商社のマルチンス・ジョルジ商会に送って同社の製麻工場で試織した結果、インド産のジュート繊維に勝るとも劣らない品質であることが証明さ

れ、今後の買い付けを約束してくれたという。

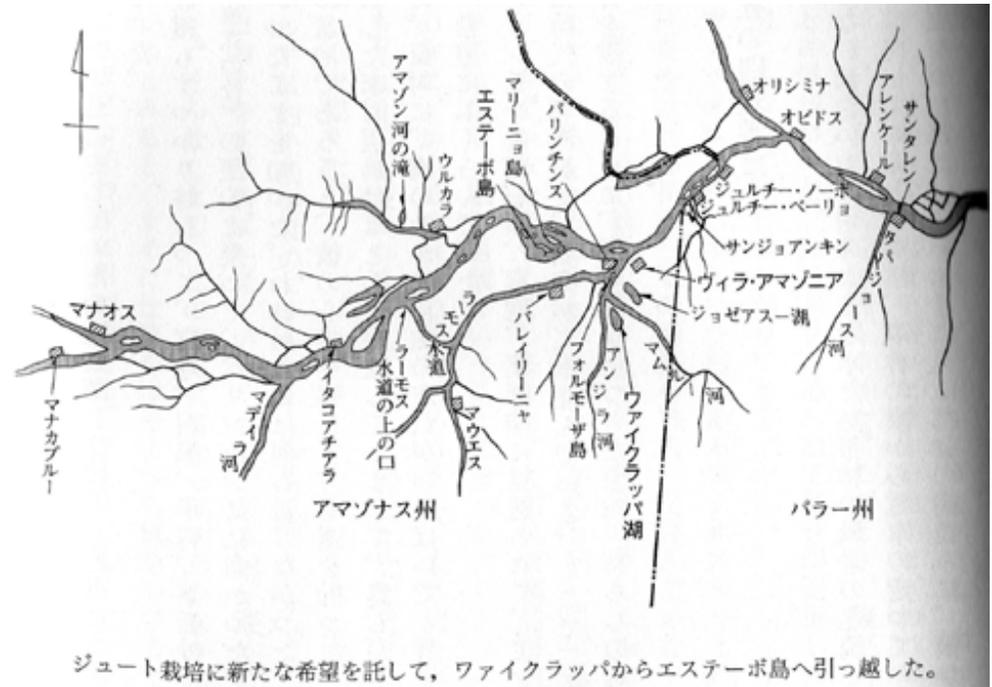
尾山良太の長男の万馬と同期の二回生である本間武四郎と芹沢正芳、一回生の藤島正徳がくわわって、ジュート栽培がまさに船出しようとしていた。本間たちが上塚校長に融資を迫ったことはまえにふれたが、折り合いがつかず、引きつづき、辻小太郎総支配人にジュート栽培への融資を迫っていた。マンジョカ生産計画の足並みが乱れることと、失敗した場合の混乱や責任を恐れて、長いあいだしぶっていた辻総支配人も、植民事業の起死回生のために、ついに折れた。マンジョガ生産に熱意のない独身者を、ジュート増産計画に投じる賭けに踏みきったのだった。

ただし、かならず複数の独身者で共同経営することを、厳しく約束させられた。そして、適地の探索に当たらせ、候補地のなかから選んだ土地を会社が買いあげて、各共同事業に貸与するという契約がまとまった。

何日もかけて探しだした適地のなかからエステーボ島と、その三キロほど下流にあるマリーニヨ島が選ばれた。いろいろな点で植民地の厄介者とされていた独身者たちが、二組に分かれて入植することになった。鳥が野に放たれたのだ！ エステーボ島組は宮地茂、平石定吉、石黒彙吉、私、薬師神光雄、藤島正徳の六人で、年長で高拓で 助手をつとめていた藤島がリーダーにおさまった。隣のマリーニヨ島へは、ボアフォンテ植民地の独身者組が行くことになった。

しかし、米の収穫で得た資金だけでは充分ではないので、ジュートが収穫できるまでの一年間、口減らしを口実に、六人のなかから私がアマゾナス州の州都マナオスに出稼ぎに出かけることにした。出稼ぎ先はイギリス人が経営する港湾会社マナオス・ハーバー社の別荘で、社長はイギリス領事も兼ねていた。私はその会社の別荘番をしていた山崎太郎と交代する約束だったのだ。出発間際になって平石も同行することになった。

八月、米の収穫もすっかり終わって、宮地、石黒、平石、



薬師神と私はサンタルジアの浜からアマ産（アマゾニア産業株式会社）の便船に乗って、パリンチンスに向かった。その浜で渡辺正治が数日まえに、南伯へ去っていったことを知った。われわれには何も告げなかった。残念だったが、南伯へ去ることを恥じる高拓生の意地であろうと、彼の心中を察して、幸運を祈った。

日本から持参した家財道具はほとんど手放してしまって、誰もがトランク一つ、着の身着のままの状態になっていた。反対に、胸のなかは自由の空気がいっぱい、張り裂けそうだった。横浜を出るときと同じように、希望にふくらんでいた。

平石と私はパリンチンスで石黒、宮地、薬師神に見送られて、アマゾン河の汽船ベレン号に乗船した。

ミシシッピ開拓時代の老汽船で、煙突が2本並んでいる。ここで2手に分かれたが、それぞれ「ジュートづくり」に身を投ずるまえに、三年間身についた原始人暮らしの垢を洗い落とさなければ」と思っていた。

港湾会社の別荘番に

船旅は変哲もない黄色いお汁粉のような水と熱帯林の風景の連続で、2日目の昼下がりに、マナオスが近いと聞いて

期待していると、突然、森林の陰から電車の走っている都会が出現した。蜃気楼かと錯覚するくらい意表をつかれた。三年ぶりに見る都会の街並みに、懐かしさが込みあげてきた。

身分証明書代わりにパスポートを見せて下船しようとする時、がっしりした体のイタリア人の荷物搬入が近づいてきて、山崎からの伝言を書いた紙片を渡すと、われわれ2人の荷物をグランドホテルへ運んだ。夜になって、ようやく山崎が迎えにきた。このとき、彼が友だちも自由に迎えられない雇い人の身分であることに気がついた。久しぶりに都へ出て気分が高揚したというのに、それを思うと、その気分もたちまち消えていく。明日はわが身である。

翌日、郊外のヴィラ・ムニシパルという村にあるマナオス・ハーバー社の別荘へ行った。グリーンフィールドという副社長兼会計部長が、その別荘を独占して住んでいた。私は会社の雇い人として、毎月一五〇ミルレイス（邦貨三七円五〇銭）があたえられ、ほかに五〇ミルレイス（邦貨十二円五〇銭）をグリーンフィールドがポケットマネーから払うという。その条件を聞いて、私はグリーンフィールドに山崎と交代する旨挨拶をして、みずから身売りしてしまった。大和民族理想郷建設の敗退者変じて、英国会社の別荘番となった。平石は当分、私の居候ということになった。

別荘の向かいの家に、かつての森林の残木であろうか、太さ約一メートル、高さ20メートルほどの肌　パウ・ダル

コ（弓をつくるのに使われる木）があり、笠状に広がる枝に赤紫色の花が満開だった。その樹になんとなく親しみを覚えた。

グリーンフィールドは四十代半ばの、チャーチルばりのソルテロン（老独身者）で、酒好きだった。当時のアマゾンでは四十をすぎれば「老」がつくのだ。ある晩、遅くになってから仕事以外の用を言いつけられて頭にきた。そんなことで、この主人には親しみがわかかなかった。山崎と交代するとき、彼は、「英国人はチャンスとみると、すぐに仕事を増やすから気をつけろ」と言ったが、なるほどつぎつぎに用が増えた。パウ・ダルコの木のある牧師の家の角を曲がって水道タシクのほうへ行くと、ジョタイゼ・アラウジョ財閥の支配人をつとめる英国帰化人の屋敷があった。乗馬用の馬が二頭飼われていた。その家に、マナカプルーから引き返してきた本間武四郎が羽を休めていた。本間は私のところにやってきては、いろいろ様子を聞かせてくれた。彼は、「ボアフォンテ植民地で、後輩たちの面倒を見るのに疲れた。マナカプルーの上流へ探検に出かけてみたが、冒ぼしい資源は見つからなかった。いまは庭師で馬のケツ磨きだよ」と自嘲した。ゴム景気の凋落したいま、どこまで行ってもアマゾン河には、自然に埋没していく都か、遺跡のような空気が残っているだけなのか……。

彼は、私が植民地を逃げだして、別荘番に身を落とした

と勘違いしたらしい。

「きみはたしかに、マナオス・ハーバーの社員にちがいないが、こんなところでいくら働いても、出世することはないんだよ」と、忠告してくれた。山崎と文通しているときには、別荘番の仕事が下僕になることだとは気づかなかつたが、これで出世できると考えているほど、おめでたくはない。

しかし、アマゾンではいまのところ、ジュート栽培以外に希望の持てる産業はないであろう。それはいままで以上に生易しい仕事ではないはずだ。これから先、気が遠くなるほど何年も、ジュート栽培に首を突っこまなければならぬとすれば、現地人カボクロ同様の生活からいきなり、アマゾナス州の都も見ずに、ジュツテイロ（ジュート栽培者）になる気がしない。この別荘は昔から代々、植民地から疲れはててやってくる日本人たちが羽を休めるところだと聞いていたのだ、この際、州都で一休みするのも悪くないと思ったのだ。

英国人に酷使されて

グリーンフィールドは毎朝、糊のきいた白服姿で、目のかすんだ老犬といっしょに車で出勤しては、夕方六時すぎに帰ってくる。アマンテ（愛人）の通ってくる火曜と金曜日以外は、

オウムの一種のパパガイオを相手に一杯やりながら、一時間ほど花壇の手入れをする。日が暮れると、もう一度会社のクラブへ食事をしに出かけて行って、寝に帰ってくるという生活だった。

私はグリーンフィールドの捨てたカンカン帽を被って、下僕らしく働いた。乾季の盛りになると、炊事場の横のシューバ・デ・オウロ（「金の雨」という意味の、マメ科の喬木）が、枝いっぱいに黄金色の花房を垂らした。藤の花そっくりの房だ。「金の雨」とはよく言ったもので、急に庭が明るく輝き、六本のゴムの樹も黄葉して、落ち葉といっしょに実を散らした。その実は日がな一日、カラシ・コロシ・ポン、ピン・カラカラ・コンと庭じゅうにはせて転げまわった。炎天の空気は乾燥して、なんとなく人の心を遠くへ誘う。陽が傾くと、樹木の陰でいっせいに蝉が鳴く。やがて空が真っ赤に焼けて暮れていく。しかし、下僕にはそんなことを楽しんでいる暇はない。花壇の散水、落ち葉の掃除、グリーンフィールドが帰宅するまえに二匹の犬をつかまえて、水浴をさせなければならぬ。花壇のそばにあるラランジャとよばれるオレンジの木の花に放してあるパパガイオも寵にしまわなければならぬのだ。

しばらくすると、この老独身者は家庭の味が恋しくなくなったらしく、火曜と金曜日に来ていた愛人が、土曜と日曜日にも来ていっしょに過ごすようになった。だんだんグリーンフィー

ルドのプチブル根性が高じてきて、会社のクラブの味気ない夕食をやめて、人のよい太ったコジニエイラ（炊事婦）を雇って別荘で食事をとるようになった。

会社の別荘が新婚のスイートホームに独占されてくると、床をピカピカに光らせるよう、毎日一室ずつワックスで磨くように言いつけられた。ある日、主人は炊事婦に私をよびにこさせた。行ってみると、「床が磨いてない」と難癖をつけた。そして、一挙に四室と廊下を磨くことが日課になってしまった。

これが英国人の人を使う手なのであろう。

いちばん厄介だったのは、日暮れどきに出動してくるサウーバとよばれる葉切蟻である。こいつらは 隣の荒れはた再生林のなかに小ささままの巣をつくり、それらの巣は火山脈のように地下で連結している。ときどき火山が大噴火して熔岩を押し流すように、蟻の大軍がこちらの庭へ押し寄せてくる。

そして、目ぼしい花や植木の葉を一夜のうちに切り刻んで担ぎ去ってしまう。その巣は燻煙（くんえん）などで退治できるとは、生易しい地下壕ではない。何層にもなった大楼层で、滅ぼすためには爆破するより手はあるまい。私はこの蟻の活動周期を一つひとつ覚えた。蟻の先兵が姿を見せると、大軍が押し寄せるまえに目星をつけた巣に行き、出動準備でこった返している出入口を破壊して、その上に三〇キ

口ほどの鉄釜を被せ、砒素と硫黄の煙でいぶした。こうしておけば蟻どもは遠征をあきらめて、城の修繕に立ち働くことがわかった。以後、花壇の花や植木にはいっさい手を出させなかった。こうして、私なりのやり方でグリーンフィールドをコントロールし、動物たちを退治して、仕事を減らした。

マラリアに冒される

居候の平石のほうは、思うように仕事が見つからず、アマゾニア産業株式会社の支店から米の販売を委託されて、街の商店に卸して歩いた。ゴム産業の凋落後、天然資源の採集で細々と暮らす人びとが住む火の消えたような都は、隅々まで歩いて靴底を減らすだけだった。やつとつかんだ顧客をつぎにまわってみると、どこへ行っても米が半分も減っていない袋を見せられる、とこぼしていた。気の毒なことに植民地の人たちは、こんな状況を何も知らされないで米づくりに励んでいるのだ。

ナタール（クリスマス）が近づくと、マナオスはもう雨季に入って雨が降り始める。環境は一変して、湿った空気と露深い世界になってしまう。クリスマスの前夜、別荘の小屋にいてもまったくすることがないので、平石と外に出た。五〇〇メートルほど下った電車で手を挙げて電車を止めて乗

りこむと、港へ出た。雨のそば降る暗い街路には電灯の光がちらつくばかりで、人影もない。

栈橋の入口のイヤラ・バー（酒場「人魚」）が開いていたので入ると、薄暗いカウンターのなかにおやじが一人いるだけで、客はいない。二人でうまくもないマナオス製ビール、シスピットを飲みながら、平石が、

「ボリビアの商人を待っているのだが、やってこないのでもステーボ島へ引き揚げるつもりだ」

と、ぼそぼそ言った。

彼は街で出会ったボリビアの日本人商人に誘われて、ボリビア行きを考えていた。ボリビアのリベラルタという街にはペルー下りの日本人で産を成した商人が何人かいるのだが、教育をうけていない自分の子供たちにあとを継がせるのは不安で、相応の日本人を探しているのだそうだ。

ペルー下りの日本人とは、アマゾンへの日本人移住は公式には一九二九年からであるが、それ以前、一八九八年に第一回ペルーに移住した日本人七九〇人のうち、現地での待遇のあまりのひどさとマラリアや腸チフスなどの流行で一年足らずで一四三人が死亡した。その後アマゾンのゴム景気の噂を耳にして、アンデスを越えてアマゾンに移住し、商売や野菜づくりなどで身を起こした先人たちのことである。

ろくに話の弾まない二人が哀れに見えたのか、バーのおやじが飾り戸棚から真っ赤に熟れたリンゴを二つ取りだして、

私たちのまえにおき、「ボアス・フェスタ（メリー・クリスマス）」と、ひとこと言うと、またカウンスターの後ろへ腰掛けた。リンゴなどめつたに口にできなかつたので、ありがたかつた。リンゴは本当に真っ赤で、その色を見ていると、遠い雪国の情景が目に見えかんだ。このおやじもどこかの国からの移民なのであろう。

一九三八年が明けると、ボリビアの日本人商人を待ちくたびれた平石は、エステーボ島へ下ってしまった。本間も農務長官に会う工作がうまくいかず、マナオスの対岸、ソロモンエス河のカレイロという村で野菜づくりをしているペルー下りの日本人集落へ行ってしまった。

日本語も忘れていく。正月も終わるころの日曜日、表門に服装を整えた五十代半ばの日本人が訪れた。

平石を迎えにきたボリビアの日本人商人である。鉄柵を隔てて、せわしなく話す彼と私に、花壇にいたグリーンフィールドが気づいて、なかに入るように勧めたが、「船の時間が迫っている」と、商人はあわただしく去っていった。グリーンフィールドは、「領事館から迎えがきたのか」と尋ねた。彼は第一次世界大戦に出征したことをたいへん誇りにして、拡大していく支那事変で私が召集されたと思つたらしい。そうであれば祝つてくれたはずだが、われわれは故国にとってはいわば棄民である。

炊事婦の情報では、グリーンフィールドは六月に休暇をとつ

て英国に行くそうだから、あと五ヶ月ほど辛抱すればいい。ああ、パウ・ダルコの花の咲くのが待ち遠しい。マナオスは雨季が明けるのも早い。

アルゼンチンのパンパス（草原地帯）からアンデスの麓をまわってくるという、フリアジアエン（寒風）というアンデス下ろしの冷たい風が数日つづくと、北伯は夏の気配になる。

六月に入ると、マナオスに寄港するブースラインの船でグリンフィールドは一時帰国した。去るとき、「おまえはよく働いた」と言われたのは意外だったが、腹のなかで苦笑しながら、「あたりまえだ」と答えた。雨季がすっかり明けると、私はパウ・ダルコが気になりだした。てっぺんの枝が色づくのを目を凝らして待ちわびた。

グリンフィールドがいなくなると、五〇ミルレイスの収入が減ったかわりに、仕事もなくなった。日射しが強くなり、そろそろ灌水が必要だと思われるころ、パウ・ダルコの枝が赤紫色の花で包まれた。いよいよ一週間もすればこの囲いから解放されるんだと心弾ませていたが、好事魔多しで、マリア熟に取りつかれてしまった。噂に聞いていたこの村で発生した悪性のマリアアであろう。蒸し暑い風に幹を擦りつけあう竹の音に、遠い日本を思いだしながら毛布を被っていた。

栄養が不足して、退職を一か月延ばすことにした。貧乏人の弱り目にたたたり目である。一か月たつと小康状態になった

ので、やっと囲いから逃げだすことができた。パウ・ダルコの花はすっかり散ってしまつて、ゴムの実がさかんにはぜていた。

マナオス・ハーバー社で社長に別れの挨拶をすると、

「これから先、どうするのか」

と訊かれたので、

「自分の土地へ帰つて、ジュートをつくる」

と答えると、喜んでくれた。

「これから戦争が拡大すると、ジュートの消費はますます増える。土嚢に使われるのだ。ぜひ頑張りなさい」

と激励された。表へ出ると、ネグロ河の熱風に揺れているユニオンジャックの鮮やかな色が目に映った。

パウ・ダルコの木に別れを告げて、一年ぶりに、ヴィラ・アマゾニアに着いて、カレガドール（荷役運搬人）に1ミルレイス（邦貨二十五銭）を払うと、マラリアの治療で金を使いはたして一文なしになつてしまった。幸い、高拓同期の戸口恒治がアマゾニア産業株式会社の会計に勤めていたので、彼の厄介になり、ヴィラ・アマゾニアの病院でマラリアの治療をうけた。その後、一か月ほど静養して、エステーボ島から仕入れに出てきた薬師神と、会社の便船でエステーボ島に渡ることができた。

エステーボ島での青春

別荘番の下僕暮らしから解放され、一年ぶりにエステーボ島の仲間のもとに行くと、昨年建てたばかりの椰子の葉葺きの家がすっかり傷んでいた。仲間たちは島でいちばんの高台に、土壁と椰子の葉葺きの新しい家を建てているところだった。その材木を伐りだしたところで、石黒糸吉は悪性のマラリアを背負い込んで、自分で注射をしながら苦しんでいた。私が留守にしていた一年間、彼らはどんな暮らしをしていたのだろうか。

一年前、パリンチンスで平石定吉と私を見送った石黒、宮地、薬師神は、尾山良太のところを引き払ってきた藤島正徳とヴィラ・アマゾニアで合流して入植の準備を整え、エステーボ島に向かったという。しばらく岸边や林相を観察してから、上陸地を決め、島のいちばん幅の広い下端に二十町歩（約20ヘクタール）を伐り開いた。島の中央に大きな湖があることもわかったので、そこで魚を獲ることも覚えた。雨季のアマゾン河の置き土産である。

またその雨季が来て、播種を終え、一九三七年が暮れるころ、ジュートは勢いよく育っていった。一九三八年が明けると、ジュートの丈は一メートルにもなろうとしていた。

そんなある日、突然、畑のなかに水が増えてきたので、は

じめは雨水だと思っているうちに、増水はますます勢いづいてくる。ヴァルゼアは低湿地といっても平坦なわけではなく、ところどころに、自然の堤防のように列状の高まりがある。この高洲をレスチンガ（八頁の図を参照）というが、この島の地形は、このレスチンガに縁取られたお盆状なので、河水がその縁を乗り越えるころには、水位はいつのまにかジュートの丈を越すほどになり、低い畑の半分は池のようになってしまった。アマゾンでは五年に一回ぐらいは異常に増水する年がある。この年、ジュートの半分は水に流されてしまったが、雨季が去ると島は潜水艦が浮上するように、また河面に姿を現した。

アマゾンは暑いばかりでなく、短時日ではあるが、非常に寒いことがある。一月から二月ごろ、アンデス下ろしの冷たい西風が吹くと、四〇度近くあった気温が、急に下がって一五度以下になることもある。よく雨をとまなうので、こんな日の除草や間引き作業は、頬に痛いほど寒い。砂糖キビ焼酎をあおって作業をつづけるが、すぐ寒くなる。また砂糖キビ焼酎をあおる。何回もくりかえしていると、砂糖キビ焼酎を飲んでも歯の根が合わなくなってくる。

増水してくると、鼻だけ水から出して、手探りでジュートを刈り取ることもある。体の自由がきかず、作業は三十分とつづかない。ジュートは草丈が二〜四メートルで、開花後二週間ぐらいで刈り取り、水に漬けて重しをおき、約一週間放

置する。そうして皮を腐らせて、中の繊維を抜き取る。腐らせているあいだにも増水してきて、ジュートを流してしまふこともあった。水はジュートの腐敗でドロドロになり、ドブ臭が体に染みついた。そんなきつい、汚い重労働を重ねて、無事収穫を終えた藤島と宮地、薬師神、そして私より一足先にマナオスからもどった平石の四人は、会社との精算のためにヴィラ・アマゾニアに下っていった。

暴利を得ていた会社

アマゾニア産業株式会社はジュート繊維を一手に買いあげ、ベレン、レシフェ、サンパウロ方面に出荷を開始した。半分のジュートを水に流してしまっても、精算すると投資した資金は倍になっていた。

ただしそれは、自分たちの奮闘努力の労賃を計上していないからである。

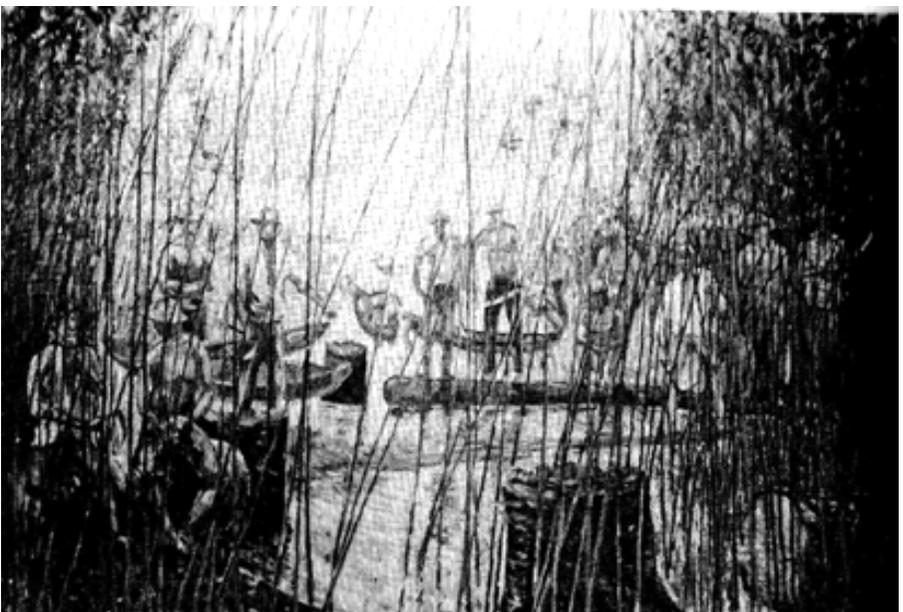
しかし、会社は利益が過大だと勝手に判断して、最初の話し合いを守らず、土地代金として各人一コント（邦貨250円）を差し引いてしまったのである。高拓一回生の藤島や中島敏三らと辻総支配人との話し合いでは、会社側は実費を差し引く以外は、一人当たり一〇〇ミルレイス（邦貨25円）の利益を収るといふ約束だった。にもかかわらず土地代とし

て一人250円、四人で一〇〇〇円を取ったのだから、約束の一〇倍も差し引かれた計算になる。彼らの手にはわずかの現金しか残らなかった。

こうした無慈悲な仕打ちに、やり場のない不満が沈殿していった。しかし、この年一九三八年の高拓関係者によるジュート生産量は六〇トンにも達した。リオの有力新聞「ジオルナル・ド・ブラジル」は、アマゾンでのジュート栽培における日本人移住者の功績を称えた。「ジオルナル・ド・コメルシオ」紙や「コレイオ・デ・マニヤン」紙はその社説で、「日本人移住者によって、ブラジルの主要輸入品であるジュートが近い将来、国産品に替わり、その影響は国家財政に絶大な影響をもたらす」と絶賛し、この勢いがアマゾナス州だけでなく、隣のパラ州まで動かし、アマゾニア産業の事業はパラ州にも進展していきつつあった。

コーヒー豆の最大生産国であるブラジルは、その輸出に使う袋も大量に必要とする。年間二〇〇〇万袋にもぼる繊維を自国内で生産しようと、さまざまな試みをしてきたが、ジュートに勝る繊維がなく、結局インド産のジュートに依存していた。インド・ベンガル地方の特産とされていたジュートは、泥棒紳士の国の英国商人に牛耳られており、ブラジルがその輸入に支払う額は年々莫大な金額になっていた。

こうしてジュート栽培に期待がかけられ、高拓生の大多数は高台地での作物栽培を捨てて、低湿地に移住してジュート



3〜4メートルに成長したジュート

栽培に進出していった。マウエス、マナオス、モンテ・アレグレなどに入植した邦人たちのあいだにも、ジュートづくりが波及していった。サンパウロ州のタウパテー繊維会社もマナオスに支店を設け、ジュートの買い付けを開始した。同社の買付額はアマゾニア産業の買い値よりはるかに高値だったので、中島敏三が計算したところ、アマゾニア産業は口約束した利益よりも120コントス（邦貨約三万円）もの暴利を

得ていたことがわかった。そのため一回生の藤島と中島が当時の中崎邦夫支配人代理に訪問したところ、会社はあくまでその事実を否定した。藤島と中島の両人は邦人のおもなジュート栽培者を招集して、生産者会議を開催した。その結果、ジュート栽培者は今後、アマゾンア座業に一キロのジュートも渡さないことを決議し、その旨を東京本部の上塚社長に打電した。驚いた上塚社長はただちに渡伯してきた。ヴィラ・アマゾニア入りして、帳簿を調べた結果、口約束の利益以外に約八〇コントス（邦貨約二万円）の利益があることが判明した。上塚社長は、「この利益金は生産者に返還するが、各生産者に分配するよりも、公益事業に使用してはという意見もある」と、代表者との話し合いを進めた。その結果、ヴィラ・アマゾニアを訪れる邦人の宿舎と各種の催しに利用する集会所「八紘会館」の建設費に充てられることになったが、国士と崇められていた高拓の上塚司校長の理想主義と、アマゾニア産業の上塚司社長の資本主義との矛盾に、不信感を募らせていった高拓生も多かった。

宮地と平石はヴィラ・アマゾニアで精算をすませると、マデイラ河方面に新しい土地を求めて去っていった。藤島は隣のマリーニョ島の星原貞治と組んで、サラクーラという土地に移転した。

無人島での単調な日々

島には二十歳そこそこの薬師神、山崎、石黒、私が残った。土曜日ごとにどこかで催されるささやかなダンスパーティーで憂さ晴らしをする生活がはじまった。

アマゾニア産業の信用はますますなくなり、四人を乗せたエステーボ島は、永遠に果てることのない単調な「航海」に乗りだしてしまった。ジュート栽培の仕事を終えると、砂糖キビ焼酎を引っかけた。

赤紫に変わっていく残照の河畔で水浴をし、暗いランプのもとで代わりばえのしない食事をとった。外は蚊の軍団の世界である。眠くなるまで砂糖キビ焼酎をあおった。

何のニュースも入ってこない薄暗い家のなかに、コウモリが飛びまわる。重労働とマラリアで痛めつけられ消耗した体にも性欲だけは残されていた。その精力を砂糖キビ焼酎が殺していく。惜しいことである。

毎月一回、交代で八〇キロ下流のパリンチンスに雑貨を仕入れにいくのが、文明の空気を吸える唯一、最上の楽しみであった。しかし四人では、一人年三回しか出られない。若者たちにとっては、収穫が終わったあとは文明世界が恋しくなる。無人の孤島の生活にあきあきしてきた。マラリア原虫も相変わらず体内に潜伏しているようだ。

島から沖を眺めていても、カヌー一隻通らない。まれに对岸に線のように横たわる森の影のなかに、マナオス行きの外洋船が見えることがあったが、目を凝らさなければ見過ごしてしまいうぐらい、ぼんやりした姿である。

ご飯炊きを募集すると、独身者の住む島に引かれて、街からラパリーガ（独身女性）がやってきたが、すぐ逃げだしていった。

たしか2年目の一九三九年だったと思うが、ある季節風の強い乾季の日中、女手もないときであった。

炊事当番がちよつと目を離れたすきに、火が出て、椰子の葉葺きの家はたちまち燃え尽きてしまった。

他の三人が駆けつけたときには、当番が命がけで運びだした各人一つずつのトランクと砂糖キビ焼酎の大瓶、一丁のギターが寂しげに放りだされていた。後始末のため三人が島を出ていき、私だけが留守番に残った。日雇い労働者のための小屋に寝泊りして、みんなの帰りを待った。焼けた家の壁土を取った穴に、アマゾンでいちばん美味といわれるビチュー亀が放りこんであつたのを思いだした。毎日、そいつの丸焼きを一人で堪能した。砂糖キビ焼酎は大瓶にたっぷりあるので、心配はいらない。

問題は夜であった。小屋のなかに板を敷いて寝るのだが、かまれると火のつくように痛い熱帯産の火蟻が上がってくる。熟睡していると、耳のなかにまで入りこむ。下手に騒い

だりすると、彼らはマフィアのように暴れだして、万事休すである。出ていくまでじつと忍の一字。そつとお帰り願うしかない。

やがて、三人が帰ってきて、ふたたび単調な共同生活がはじまった。

高拓の閉鎖

翌一九四〇年のはじめに上塚司社長が突然、エステーボ島を訪れた。私たちは焼け跡の仮小屋住まいに「貴人」の訪問をうけてあわてた。動転している炊事係の大木愛吉の細君を助けて、総出で鶏を追いまわした。大木愛吉夫婦は南米拓殖株式会社（21頁を参照）のカパネマ移住者（一七四頁を参照）で、ジュート栽培をはじめめるために、一時期エステーボ島に身を寄せていた。

その間、上塚社長は、仮小屋の床板にあぐらをかいて、端然と夕食の支度ができるのを待っていた。

足がさぞ痛むだろうと、私は火事で焼け残ったラクダの毛布を三つ折りにして、座布団代わりに勧めると、社長は「うん」と言っつて、すぐ引き寄せた。社長はやおら口を開いて、島を訪問した目的らしいことを語りはじめた。

「高拓を閉校したのだが、どう思うか」

と質問されたので、

「ブラジルへ来たい者はたくさんいるはずだから、目的をアマゾン開拓に限らず、教育方針を変えてでも再開するべきです」と答えた。社長はつづけて、「しかし、たくさん犠牲が出て世間が反対している」と声を落とした。私が、「自分が好きで選んだ道ならば、多少の犠牲が出るのも仕方がないでしょう」と言ったら、社長は黙っていた。高拓こと日本高等拓殖学校は、一九三八年三月、七回生四人を卒業させたあと、募集は打ち切られていた。

夕暮れになって、やっと全員がそろった。高拓の閉鎖、2・26事件、高橋是清蔵相の横死、軍部大臣の横暴、そして満州事変にはじまる日中戦争の拡大など、当時の世相に社長は憤懣やる方なく、あげくに、柳橋の妓楼の荒廃ぶりまで嘆いたのには、一同面食らってしまった。

上塚社長がかつて秘書官として仕え、アマゾン開拓事業に乗りだす決断をするときにも相談にいった高橋蔵相が二・二六事件で凶弾に倒れたのを憤り、軍部の満州侵略を非難するのは理解できる。高橋蔵相はアマゾン産業研究所の設立や法人化においても、何かと後援をうけていた恩人である。

話のついでに、私はアマゾン産業が高拓O.Dから儲けようとしているのではないかとたしかめると、社長は、「それは誰のことか？」問うので、

「支配人代理に決まっている」

と答えると、

「中崎邦夫ごときに何がわかるか！」

と、ますますご機嫌ななめになった。中崎支配人代理は元高拓教授で、わが四回生に産業組合法の講義をしていた。神戸高商の秀才だったという。

後日、気を取り直した社長は、

「とにかく自分の教えを守って、大和民族による正義の通る新天地を築くために、細石を巖にする覚悟でジュート栽培に励んでほしい」と、まだタワケイラ植民地に踏みとどまっていた一回生の御園福衛、泉桂治、佐藤行夫の先輩らに低湿地への進出を強く説得したという。

その結果、先輩たちも七年間も頑張った高台地にあるタワケイラ植民地を捨てて、低湿地へ移動することになり、その途中、エステーボ島に立ち寄ってわれわれのジュート栽培を見学した。それは、私たちがジュートの収穫を終え、乾季を迎えた河の水が減っていくのを眺めながら、休養をしていたころのことである。晴れあがった青い空に、モングーバ（木綿）の熟れた実から飛び散った無数の綿毛が貿易風に流されて、若葉、若草が陽光に輝いていた。

先輩たちは二メートル以上も水位の下がった船着き場に、会社のモーター船を着けて上がってきたが、多くを語らなかつた。われわれも彼らの心中を察して低湿地の島を自慢するようなことは言わなかつた。

御園、泉の両先輩はわれわれ四回生がサンタルジアの浜に
はじめて上陸したときの指導者である。焼け跡の仮小屋での
貧民窟じみたわれわれの暮らしを横目に眺めていたが、河緑
に二メートルほどに伸びて、真つ青な葉を茂らせている木を
見上げて、

「これはビナグレーラか」

と尋ねた。私がうなずいて、

「ここ（低湿地）ではテーラ・ファイルメ（高台地）とちがつ
て、浸水して枯れかからないかぎり、花も実もつけない」と
説明した。先輩たちは黙って深くうなずいた。この植物は高
台地の痩せた土地では、季節が来れば下枝のほうから順に芙
蓉に似た薄紅色の花が咲き、バラ色の苞につつまれた実をつ
ける。日本人はその酸っぱいバラ色の苞をしそ代わりにして
紅生姜を漬けて、祖国の梅干しを偲んだ。アマゾン河が運ん
でくる肥沃な堆積土からなる低湿地は、この植物には窒素過
剰なのだろう。

まもなく、彼らはパリンチンス上流のウルクリツバ郡境
の入植地、ウルバーノへ向かっていった。

御園、佐藤の両夫人はわれわれ四回生と同船者である。す
でに幼児があるはずだ。

この年を最後に、ワアイクラツパ湖畔に住む高拓生は三人
になってしまった。

そのころ、パリンチンス市に比較的近いサンジョアンキン

の土地が売りに出された。すでにエステーボ島は全島伐り開いてしまつて、増産の余地がない。われわれ四人はその土地を購入して、新たな開拓の夢をふくらませ、一九四〇年七月に移住することになった。

緑綾なすサンジョアンキンへ

われわれが移住することになったサンジョアンキンは、パラ州とアマゾナス州の境界、パリンチンスの五キロ下流にある。前面四キロ、奥行き五キロの約二〇〇〇町歩（約二〇〇〇ヘクタール）のその土地は、パリンチンジーニヨ湖によつて二分されている。まえのほうは低湿地で、奥のほうは高台地。毎年全島がほぼ水没してしまふエステーボ島とちがつて、理想的な開拓地と思われた。パリンチンジーニヨ湖はおよそ四平方キロの小さな湖だが、湖水のなかに二つの小島がある。

エステーボ島で三年間ジュート栽培をしてきた山崎太郎と石黒彙吉、薬師神光雄、私の四人は、この土地を買つて、新たにジュート栽培に取り組むことにしていた。まず山崎と私が一九四〇年七月の末、伐採の準備をするために引越してきた。途中のヴィラ・アマゾニアで入植準備を整えて、サンジョアンキンに到着すると、かつて人が住んだと思われる跡に、片屋根の山小屋を建てて、仮の住居にした。

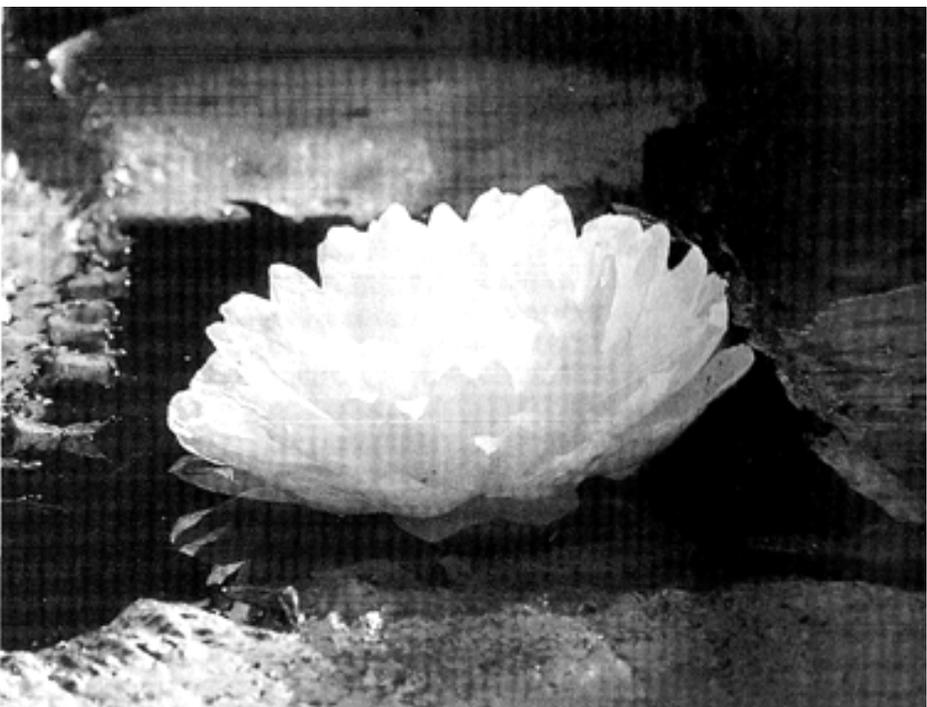
貿易風の季節である。西へ西へと吹く風に、アマゾン河が音を立てて輝き、目が痛い。夕飯の支度の煙に誘われたのか、ムトカ（あぶ）がたくさん集まってきたのには閉口した。夜は一晩じゅう、山小屋の上の茂みで小動物たちが忙しく活動していた。

準備が整うと、パリンチンジーニヨ湖の奥の高台地の伐採にかかった。一〇〇〇町歩ほどの原生林で緑が綾なし、その背後はタパジョース河の岸まで、無限につづく州有地である。しかし、山小屋のある地点から湖の岸までさえ、われわれの足では行けない。水草と泥地に密生する強靱な植物アニングアが要塞のごとくわれわれを寄せつけないのだ。その封じこめられてしまっている湖の下流の高台地に、山男の兄弟が住んでいることがわかった。

その後苦心して、この兄弟と連絡をつけることができた。兄のマツシコは二十四、五歳の黒髪、褐色の目をしている。身長は一七〇センチぐらいで、胸と背中中の筋肉が異常なくらい発達した青年だ。弟のガートは赤毛でイエローオーカー（茶褐色）の目をしている。兄に劣らぬ立派な体格をした、豹のように精悍な若者である。

兄のマツシコの案内で奥に向かった。いったんアマゾン河を八キロほど下って、ジュルチー・ベリーヨ湖へ入る水道をリターンした。水道の入口から三〇〇メートルほど進むと、野生稲や葉の直径が五〜十メートルもあるヴィットリア・レ

ジア（オオオニバス）などの茂る湿地帯に出て、そのなかにカヌーで踏み分けたような細い水路がジュルチー・ベリーヨ湖につづいている。水路を途中で折れて、最初に下ってきた方向に進むと、高台地の裾にたどり着いた。



オオオニバスの花

そこでカヌーを捨てて山路に入った。下草を体で払いのけながら、人の通わないそま道をマシッコは速足で先頭を行く。私は足もとだけを見つめながらいちばん後ろを歩いた。下草にあっちこつつち引つかかる。自分がいかに歩くことが下

手かを思い知らされた。新しい運動靴がじやまに感じる。マシッコは裸足である。

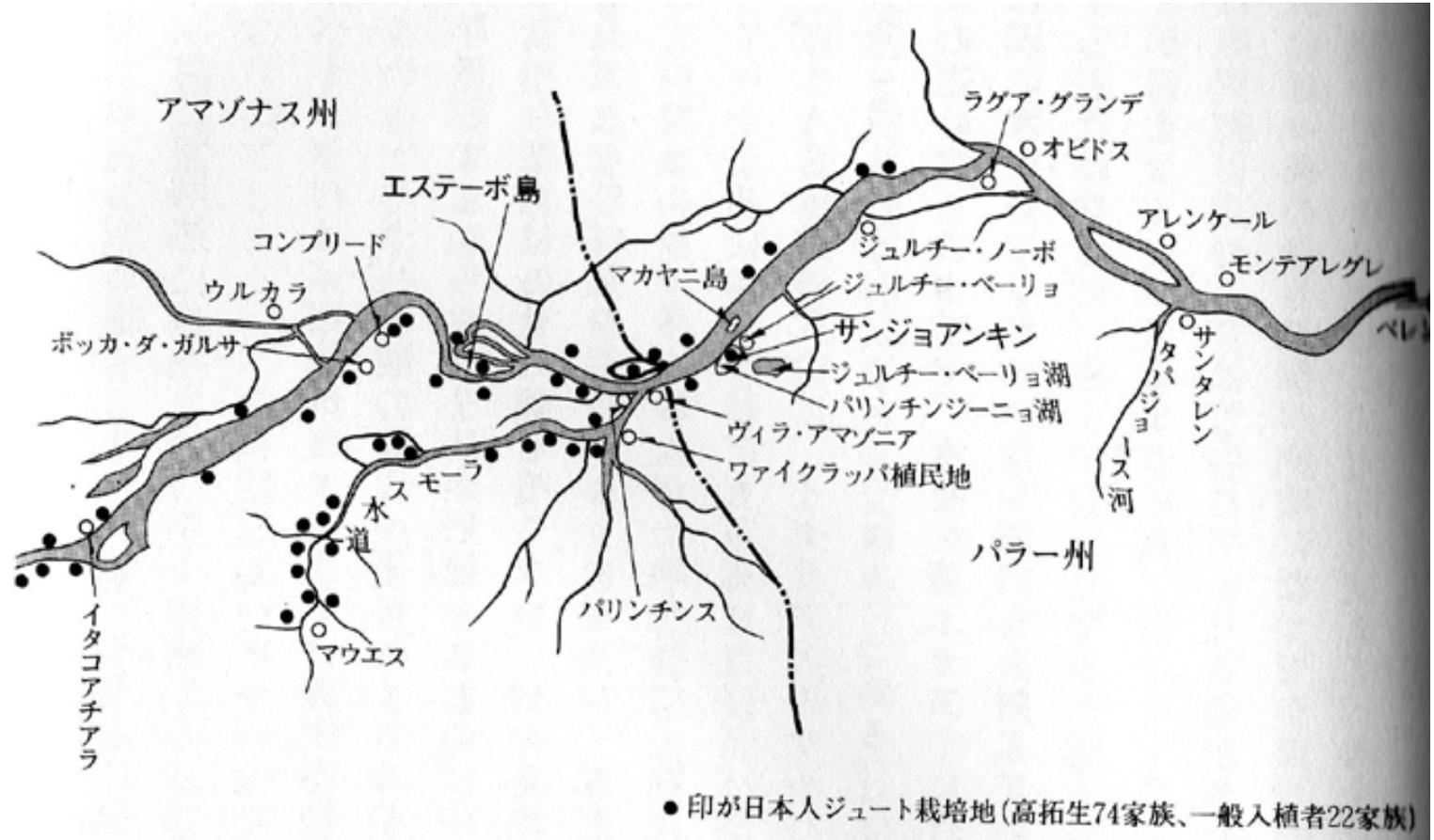
陽が傾くころ、河とも沼とも見分けのつかないジャングルを見渡す丘の上に出た。この丘の上にマシッコとガート兄弟の家がこぢんまりと立っていた。太陽は真っ赤に熟れて、森の上に垂れこめた雲のなかに沈んでいく。湖も沼も、アニンガの密生地も森林もアマゾンの精霊を宿すような光に染まっ
て暮れていった。騒いでいたオウムの声も絶えると、夜鷹と蛙の声が流れる。月の光が明るくなると、葉切蟻の葉を切る音が、雨のように降ってくる。

つぎの朝、山崎を残して私は低湿地に帰った。山小屋に着いたときは、日がすっかり落ちてしまっていた。仕事にかからなければならぬが、エステーボ島から連れてきた現地人のベネジットだけではどうしようもない。ところが、当てにしていたジュルチー・ベリーヨ村からは一人も労働者を集めることができないとわかったのだ。

マラリアで廃墟同然になった村

ジュルチー・ベリーヨ村は、四年ほどまえまでは労働力のあるところとして知られていた。内海のように広大なジュ

ルチー・ベリーヨ湖の周辺一帯にたくさんの人が住んで、農業を営んでいた。



アマゾナス州とパラ州境周辺の日本人ジュート栽培地 (1941年当時)。エステーボ島を伐り開いてしまった安井氏らは、1940年7月、新たなジュート栽培地を求めてサンジョアンキンに移った。

ところが、三年ほどまえからマラリアが猖獗（しょうけつ）をきわめ、中心地にあった教会の司教までが退散してしまった。無人となった聖堂はミサの鐘も鳴らない。村の墓地はあふれ、管理人もいない。飼い主のなくなった犬は野良犬となり、墓を荒らすようになった。家族が死に絶えた人家には、葬る人がないまま死体が放置されていたという。多くの人が土地を捨てて移住してしまった。

私たちがやってきたところにはマラリアも下火になって、残った人たちが細々と暮らしていた。ジュルチー・ベリーヨ湖へ入る水道の入口に、イタリア人のサルバドール・スパノの店がある。彼はソルテロン（老独身者）で、このあたりのパトロン（親方）である。サルバドールの店のまえの水道で、水瓶を運ぶカヌーに行き会った。アマゾン河の水を汲んで帰る人たちで、彼らは湖の水にはマラリアが住んでいると信じていて、けっして飲まないのだ。長いあいだマラリアと同棲するようになる、原虫がどこにでもいるように思えて、「蚊が媒介する」などというあたりまえのことが言えなくなってしまうのだ。

湖の周辺には廃屋が目立つ。昔は繁盛していたと思われ、二、三の商店にも、出入りする人影は少ない。村のはずれには一条の通り全部が廃墟になってしまったところもある。当分はジュルチー・ベリーヨ村に労働力は期待できない。そこで方向を変えて、セーラ・ド・パリンチンス（パリンチンス

山脈)方面へ募集に行った。麓の小川の縁に人家が二軒あったので、案内に頼んだ。

標高一〇〇メートルあまりの台地の上に、およそ十数軒の人家があつて、マンジヨカ畑をつくつて生活しているという。胸つき坂を登ると、長いあいだ山道を歩いたことのない私の足はすっかり萎えていて、頂上付近で膝が抜けて上がらなくなった。目のまえの家の庭へかろうじて這いあがり、門のところまで声をかけると、細目に窓を開けて、疱瘡(ほうそう)でくずれた顔をのぞかせる。驚きをおし静めて、挨拶もそこそこに笑顔をつくつて、つぎの家へ行く。案内の現地人カボクロが、

「どこの家へ行つても同じことだ」

と言つた。疱瘡に怖じけづいて早々に切りあげた。それでも、日を迫うにつれ、あばたの残つた人たちがボツボツ来るようになった。

九月になると、ジュートの種子を持って石黒と薬師神がやつてきた。ジュートの栽培は通常十一月から十二月ごろまでに耕地の用意をしておき、十二月に低湿地のなかのレスチンガ(高洲)の低いところから種子を播きはじめて、翌一月末ぐらいまでに高いところを播き終えるようにする。ところが、十一月の初めに新月が出るころか満月が近づくころに、年によってちがうが統計上、二日間ほど雨が降る。

この雨をねらつて播種すると、ぐんと効率がよくなるのだ。

というのは、このわずかな一日か二日の雨を逃すと、あとは十二月のクリスマスamasのころか、ひどい乾燥の年には年末にならないと雨季の雨がやってこない。通常どおり雨季がきてから播いたのでは、収穫は三月すぎからになってしまう。この時期にはいっせいにジュートの収穫がはじまる。だから十月初めに種を播けば、ほかより一か月半ぐらい早く収穫できる。種は最初はばら播きしていたが、発芽後の間引きや除草に手間がかかるので、播種器プランタ・マキナを改造して使うようになった。



アマゾンではジュートは播種後だいたい二十四時間で発芽し、三日目には双葉が出そろふ。発芽後一〇センチぐらいに伸びたら一回目の間引きをして、膝の高さぐらいになるまでに間引きや除草を三回ぐらいしてジュートの茎がよく太るようにしてやる。

播種して四か月すると、開花期になって収穫期になる。耕地内の河水が足首ぐらいだと収穫に最適であるが、刈り取り時期に、予想外に早く増水してきて、人の身長ぐらいまで浸水してくることがある。

こうなると刈り取りはたいへんな作業だ。鼻から上だけを水面から出して、柄の長い鎌で手探りでジュートの根元を刈り取る。手はずれて自分の太股をばっさり切ったこともあった。

吸血鬼との闘い

サンジョアンキンに移住して森林を伐り開いたあと、家や倉庫、ジュートの乾燥場、現地人労働者の家などをこの年の暮れまでに建てるには、高台地から材木を切り出すためにパリンチンジーニョ湖まで道を開かなければならなかった。土木機械などないので、頼りにするのは山男のマシッコとガー

トの兄弟、そしてセーラ・ド・パリンチンス（パリンチンス山脈）方面の現地人たちだ。

彼らの意見を聞くと、子どものあるところにはサンジョアンキンの下流には、隣の土地との境に細い通路があつて、増水期にはカヌーが通つたし、乾季には陸路として使えたという。

その跡に道を開くことにした。ガートやマシッコが先頭に立つてレスチンガ（高洲）の藪を横切り、湿地帯に水路を切り開いた。湿地帯の水樽の下は冷たく暗い色をしていたが、胸から腰ぐらゐの深さだった。

ガートとマシッコは颯爽として、縦横にふるう山刀の腕は冴え、何十年も積もつた水草の層を切り裂き、アニングアのジャングルをなぎ倒していく。そこに現れた水で、乾いた喉を潤した。冷えきつて気持ちがいいが、しぶくて泥臭い味がした。水のなかには、肉食ドジョウを思わせる、長さ一五センチもあるアマゾンの吸血鬼、サンギスーガという蛭が棲み、大蛇も棲み、カピバラ（ミズブタともブタネズミとも言う）の群れもいるから、そんな味がするのも当然だろう。

小さなカヌーの底に、何匹ものサンギスーガが張りついてゐるのに気がついた。それを見ると、裾をしつかりくくつたはずのズボンの中がむず痔くなった。カヌーに這いあがつて調べると、大きなやつが太股にべったり吸いついていた。一匹はすでに大きな飴玉ぐらゐの黒い血を吸い取って、糸のように細い吸い口をゆつくりと引き抜きながら逃げようとして

いる。まるでヨーヨーの玉がぶら下がっているかのようだ。一〇センチもある吸い口を急いで引つ張って、それが切れて体内に残ると炎症を起こす恐れがあるので、彼らが吸血を終わって吸い口を抜くまで辛抱しなければならぬ。

そんなことは現地人カボクロたちは百も承知で、砂糖キビ焼酎をかけても、体を切断してもあまりこたえないサンギスーガを私が持てあましていると、一人のカボクロがレモンの実をくれた。その汁をかけるのと、みるみるうちにナメクジに塩をかけたようになった。

雨季たけなわ、朝から雨が降るような寒い日にも、冷えた畑の水のなかにならずサンギスーガが出てきた。近くのアニガの藪や水生林から移動してくるのだ。そのなかにひとときわ大きいやつがいて、腹にいっぱい子を抱えている。その子たちはウジのかたまりか、ゾウリムシの足のように頭をそろえてひしめき、うごめいている。

二月から三月の雨つづきの日に、筏の上でジュートの繊維を洗っていると、サンギスーガは足の温もりに子を放そうと寄ってきて、水面にちよくちよく頭を出してはのぞく。ほんとうに気味の悪いやつだ。うっかり肌に触れようものなら、子を放出して親はさっさと逃げてしまう。ウジの群れのように這いあがってくる幼虫は、皮膚の柔らかい部分を探しあてると、鈴なりになって頭を突っこみ、血を吸いはじめる。そ

のときレモンを持ち合わせていなければ、彼らの餌食になってしまう。雨にしよぼくれた体にいつそう寒気が走る。

以後、ジュートの作業をするときは、かならずレモンを用意した。サンギスーガにくらべればプラッケとよばれる電気鰻や歯の鋭いトライラという魚などは、ジュート刈りの余興にすぎない。

警察結婚を迫られる

ガートとマシツコ兄弟の奮闘で約三キロのあいだを、大型カヌーを押して通れるぐらいの「道」がパリンチンジーニョ湖まで通じると、高台地から優良な建築材を伐りだすことができた。問題は床下の杭柱にする材木で、軟弱な地盤に耐えるには太くて強固な木材がたくさん必要だ。そのうえ、浸水に備えるわけだから、地上二メートルぐらいが理想だし、湿地や水中で長持ちする木でなければならぬ。いろいろ情報を集めたところ、低湿地の杭柱にはビラニエイラがいちばんだということがわかった。水中や湿地でも百年以上はもつという。

ごく限られたイガツポ地帯に生えているというビラニエイラは紫檀色をした堅い木で、水より比重が重く、浮かない。イガツポ（イガポーともよばれる）というのは、水生林や水生植物のジャングル地帯（8ページの図を参照）のことで、

この地帯は良材を豊富に産することで知られている。あちこち当たって見たが、ビラニエイラはたいがい取りつくされていた。サンジョアンキンから対岸へ一時間ほど下ったところに、名もない細い流れがあつて、そこを入るとマクリカナという湖へ出る。その湖の近辺のイガツポ地帯に、まだビラニエイラが生えていることがやっとわかった。

行つてみると、流れとは名ばかりで、洲が干上がつてできた溜まり水が連鎖している状態だった。カヌーを押ししたり引いたりして進んだ。奥へ入り、イガツポの森のなかを手分けして探し歩いた。

やがて、ビラニエイラが点在しているのが目についた。製材にかかったが、太いものが少なく、太いのを伐り倒しても、どうやっても割れない素性の悪いやつがあつて、さんざん苦勞したあげく、捨てる樹もあつた。削つた材木は現場にそのまま積みあげて、雨季になつて増水しはじめたころに集めて、大型カヌーで運びだすことにした。めつたに人が入らない場所だから、盗まれる心配はない。

材木を伐採、製材するあいだ、高拓三回生の中井憲明の世話で、彼の妻ジョセフィーナの姉夫婦の家に厄介になつた。その夫婦は半牧半漁で生活する人たちを相手に商売をしていた。家族は夫婦と十五、六歳の姪、年増の雇い女の四人で、われわれは一日イガツポの森で働き、夕方帰つてくると、この家族とともに食事をした。

二日目から主人のほうは近所の男たちとワニ狩りに出かけた。それまでミシンを踏んでいた妻も船着き場のほうへ出ていってしまった。

しばらくのあいだ、ワニ狩りの男たちの声や懐中電灯の光が、水草の上を行ったり来たりしていたが、まもなく静かになった。妻はいつまでたっても帰ってくる様子がない。残った姪たちは私に、早く夕食をしると勧めるので、借りてきた猫のように、早々に食べた。つぎの晩も同じだ。私一人に食べさせて、姪と雇い女は炊事場で、何事か騒がしい。そして、代わりばんこに仕切りのカーテンからのぞいては、忍び笑いをしていた。

ある晩、私が食事を終えて立ちあがろうとすると、カーテンの陰から姪のスサーナが飛びだしてきて、いきなり首っ玉にかじりついてキスを浴びせてきた。私は横に長いバンコ（ベンチ）に座っていたので、食卓の下から膝が抜けなくて自由がきかない。彼女はそれで満足したと見えて、またカーテンの奥に引っこんで、雇い女と何やらしゃべっていた。

つぎの夜も、スサーナはまた飛びだしてきたが、雇い女が監視していたせいか、あまり無謀なこととはしなかった。私がスサーナに、「伯母さんは何をしているのか」と尋ねると、「鰐狩りから帰る旦那を待っている」と言って、問わず語り、「旦那が隣家の女のところへ行くのを嫉妬して、見張っているの」とつけくわえた。以後、私は居づらくなって、夕

食はかたちばかりにして、早々に寝てしまうことにした。材木を取る仕事もできるだけ早く切りあげて、引き揚げた。

数日後、中井が来た。スサーナが私と結婚したいと言っているという伝言だった。しかし、スサーナには中井自身が、「日本人と結婚するには、教育がないといけない」と、言いわたしてあるので、いま彼女は懸命に勉強中だという。

「で、きみはどうするか」

と、私の意向を訊かれた。藪から棒で返答に窮してしまっただ。

スサーナはユダヤ系一族の血を引いて、整ったかわい顔をしている。いきなり断るのはかわいそうだし、断る理由もあるまいとおもって黙っていた。

その後、ヴィラ・アマゾンニアで二回ほどスサーナに会った。彼女のユダヤ系祖父はアマゾンニア産業株式会社の書記をしていた。噂によるとこの祖父は、私が彼女に手を出したら、結婚させると言っているそうだ。一度関係したが最後、結婚させられる例は、アマゾンの入植者にはよくあることで、これを「警察結婚」と称していた。モンテ・クリスト伯の夢を抱いている私が、そんな罠に掛かるわけがないではないか！

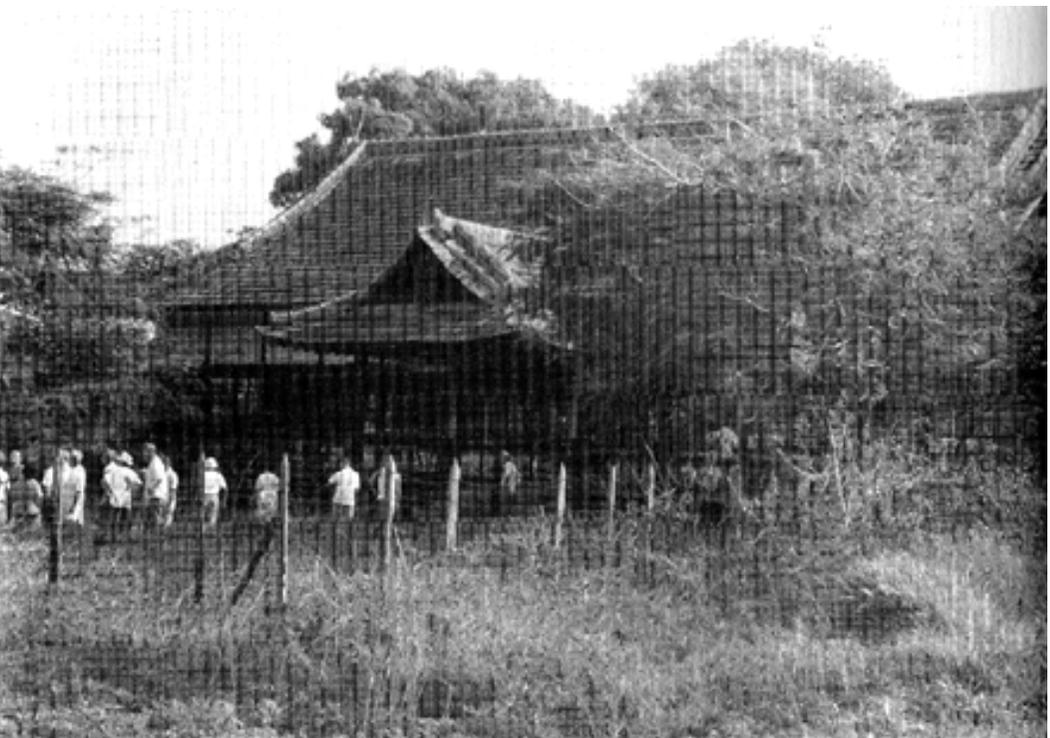
サンジョアンキンに移住して約四か月、ジュート植え付けのための耕地も整った一九四〇年十月二十一日に、アマゾンア産業研究所創立十周年記念式典が催されることになった。その日、尾山良太の功績が顕彰され、彼の発見した新種のジュートは「尾山種」として正式に発表された。その種がなければお祭りどころか、われわれ入植者のほとんどがアマゾンから四散して消えていたであろう。

われわれはジュート栽培をはじめて四年目、最後にジュート栽培に踏みきった者はこの年からである。そのため、高拓生全員がアマゾンア産業研究所創立十年祭に参加できたわけではなかった。

祭りの前日、私は仲間とサンジョアンキンから半日あまりの道程を、カヌーを漕いで駆けつけた。パリンチンス水道の岸に生い茂る水草の一種カンナラアーナ（砂糖キビもどきの水草）に沿って、えっさえっさと勇んで漕いだ。エステーボ島から一晩がかりで下ってくるのにくらべたら、嬉しいほど楽だ。

祭りと記念式典は八紘会館でおこなわれた。八紘会館の建物は高拓にあった武道場に似た神殿造りで、敷地は私たちが日本からはじめてヴィラ・アマゾンアに着いたとき、パイナップル畑があった場所だ。その後方の測候所は健在で、風見鶏は以前と変わらず勤勉に働いている。椰子の葉葺きだった職員住宅は赤瓦と白壁の立派な家になっていた。

ヴィラ・アマゾニアも六年まえにくらべると、殺風景な面影はすっかり消えて、田舎の工場町並みの姿に変わっている。浮棧橋の船着き場から八紘会館のまえを過ぎていくと、測候所の並びの道と交差する。この十字路からラーモス水道まで延びている通りは、恩人・高橋是清閣下の名をとって「高橋アベニード」である。この街路は辻総支配人はじめ、上級幹部の住宅街になっている。その先の低湿地の周辺一帯は製麻工場の建設予定地で、基礎工事が進んでいた。



八弦会館（入植50年祭の折りの写真）

このあたりを歩いて、いまやわれわれは植民地の「捨て猫」と蔑まれる心配もなく、それどころかアマゾン産業株式会社の大切な顧客、ジュツテイロ（ジュート栽培者）とよばれている。ジュツテイロはファゼンデイロ（牧場主）とアグリクルツール（農夫）の中間ぐらいの、新興階級に属するあつかいだ。

以前、今村泰三がよく言っていた「下から二番目の階級」から、やっと半階級ほど這いあがって、すこしは人間に近くなった。今村はリオに行ってしまったが、何をしているのだろうか。

この祭りをいちばん喜んだのは上塚司社長であろう。二週間ほどまえ、ブラジル大統領のゼツリオ・ヴァルガスが堪用機でマナオスを訪問した際、わざわざパリンチンスに降り立ち、上塚社長にジュート栽培の状況と将来について詳細に話を聞いたそうで、式典で上塚社長は、

「ブラジル産業界に一大革命をもたらし、前年の欧州大戦勃発以来、ジュートの価格はいよいよ高騰し、その利益率は相当多額に上がるをもって、将来の発展の資たらしむる」と、例によって気宇壮大に熱弁をふるった。

喧嘩とダンス

式典のあった初日の宵は、八紘会館まえのカジューの木の

下から通りに沿って、椅子やテーブルを並べたボール（バー）が開かれた。時は乾季の盛りで、空気は乾いている。夜が更けるにしたがって、ジュート栽培者の顔が増えた。彼ら低湿地帯の開拓者は、日ごろの吸血ダニの痺さも忘れて、生温かいビールをあおるのに忙しい。

いつのまにか私は、原莊太呂の一群に入って飲んでいた。四、五人の現地人カボクロが腕に自信のありそうな大男を取り巻くようにして、原の近くに寄ってきた。柔道の猛者として近隣にその勇名をとどろかす原に引かれて、近づきになりたかったらしい。しばらくゴタゴタしているうちに、喧嘩がはじまった。避けようとして私が立ちあがると、大男は私が弱いとみて手を出してきた。ポリスと野次馬も待つてましたとばかり、弱そうな私を取り押さえにかかった。

ムラムラツときた私は、やにわにポリスの腰剣を引き抜いた。ポリスは、

「鉄砲、鉄砲」

と叫んで、警察署に走った。いつのまにか私と原は大勢に囲まれ、大立ちまわりのすえ、豚箱にぶち込まれてしまった。原のはうが先に入れられており、

「喧嘩の相手は捕まっておらず、不公平だ」

と怒鳴っていた。私はにわか酔いがまわり、そのまま床にひっくり返って寝てしまった。夜明けに友だちが身柄を引き受けに来て、アントニオ・メレーレ署長が出してくれた。

署長の説教には耳が痛かった。

「おまえらはまだ若いんだから、こんなことはいい加減にやめなければ、いつか命を落とすぞ！」

当然といえど当然で、一言の反論もないが、私はそんな羽目におちいることがしばしばある。どうもそういう運命のもとに生まれたようである。しかし、降りかかる火の粉は振り払わなければならない。そんなことは、この秦の始皇帝のような風采をした遊び人の署長にはわからないだろうと、黙って拝聴しておいた。不公平なあつかいには不満だったが、意外に早く出してくれたのは、彼の好意だと受け取っておいた。

あきらめていたダンスパーティーがふいにならなくて助かった。われわれのような独身者のお目当ては、最終日のダンスパーティーなのである。パリンチンス通の独身者たちが上塚社長にダンスパーティーの話を持ちこんで煽っているうちに、社長のほうが乗り気になってきたのだという。

ついには社長が先頭に立って、

「本物のバイレ（ダンス）というものは……」

と、講釈までするようになり、自分はワルツよりブルースが得意で、

「足の運び方は、三步下がってから前進するのだ」

などと、実演もしてみせたという。まるで鹿鳴館のダンスパーティーを思わせるような意気込みだったという。社長は貴

族趣味で、宮家に入出入りしたり、夫人は伯爵家から輿入れしたなどと、高拓時代から噂されていた。「植民事業を推進したのは、貴族である」と、しばしば社長（校長）の植民史の講義でも聞いたことがある。

その夜、私と原はダンスパーティーが盛りあがってくるのを辛抱して待ち、人目に立たないよう、立て込んでいる会場に入った。原は昨夜の奮闘の跡が耳や鼻に残り、絆創膏が目立った。会場に入るとすぐ、社長と総支配人の視線を浴びた。私は踊る群衆のなかに、三人のダーマ（淑女）の姿を見つけた。一曲終わると彼女たちが寄ってきて、「あなたたちが昼になっても出られなければ、差し入れするつもりだった」と言った。一人は警察署長の養女で、浅黒い肌に、黒いドレスを着ている。もう一人はアマゾン産の産業界の商事部に勤める佐脇忠（高拓六回生）の同僚で、褐色の髪をした細面のかわいいイタリア系の娘である。今夜はピンクのドレスを着ている。最後の一人は香水工場のフランス人の娘セリーナである。三人のなかでいちばん上背があり、金髪に空色の瞳の美女だ。瞳と同じ色のドレスが映える。

代わる代わる三人の相手をしていると、一曲終わるごとに、「ベース、ベース（アンコール）」の声とともに拍手が沸きあがった。私は自然に、いちばんうまいセリーナと踊ることになってしまった。セリーナと踊ると人込みなど気にならず、サロンが広々と感じられた。三保の松原の天女とでも

踊っている心持ちになってくる。

私も原もブルースは踊れない野人だが、校長と総支配人が並んでいるのを見ると、そのままを通ってみたくなる。私たらはワルツの円を描いて、わざと何度もその「御前」をかすめた。今夜は地位や肩書などくそくらえだ。このサロンも我々ジュート栽培者の稼ぎで建てたものなのだから、遠慮は無用である。ダンスバーナイの半ばでパリンナンスからの招待客は引き揚げた。

サロンはますます広くなり、われわれの専有になった気分で、四隅くまなく円を描いてドレスは翻った。上塚社長に高拓卒業生がただの芋掘りでないところをお目につけたつもりだが、あまり感心した様子は見せなかった。

その後セリーナは、マナオスへ引越してしまった。ある日、友人を見舞った私はヴィラ・アマゾニアの病院のテラスで、パール・バックの『大地』を読みふけていた看護婦から、セリーナの伝言を知らされた。その後、彼女は親類のところまで洋裁の仕事をしているという。私は天女の羽衣を思いだした。いまの私の境遇ではマナオスは遠すぎる。もう二度と彼女と羽衣の舞を舞うこともあるまい。

イルカとたわむれる

雨季が来た。増水をはじめたアマゾン河の水は、名もない洲の涸れた水路にも入りこんで、大型カヌーが入るようになったので、杭柱用のピラニエイラを運びだした。ピラニエイラのおいてあるイガツポ地帯は、日毎に潮が満ちてくるようにジワジワと浸水していく。水に浮かぬ堅材を満載した大型カヌーで、風の強い日中にアマゾンを渡るのは危険だ。風のなぐ夕暮れから夜にかけて、二日一往復しかできない。こうしているうちにピラニエイラも水に浸かりだした。伐りだした当時、足跡をつけておいた細道も水に浸かってしまった。私のような方向音痴はお手上げだった。

出口の洲の上の流れもどんどん広がって、周囲のイガツポのなかまで浸水してしまうと、流れの中心部は渦巻いてくる。二本のオールで漕ぐ重い大型カヌーでは、とてもそこを通過できない。竿を持った舵取りを舳先に立てて、残り全員が水に入って浅瀬を押し進んだ。

渦巻く流れを喜んで、淡水に棲むボート（イルカ）の群れが遊泳していた。さかんに呼吸音を響かせ、ぬめーつとした肌を夕日に光らせて、浮いたり沈んだりしている。

なかに際立って大きなピンクのやつがいる。胸まで流れに浸かって、溺れかかったどぶ鼠のような私の肩のあたりに来ては、プシューと息を吐いて沈んでいく。伝説ではボートは男に化身して、女を誘惑すると恐れられている。書物によつ

ては、それはピンクのボートだともいう。ピンクのボートはアンデス山脈ができる以前から、太平洋から入ってきて棲むようになった種類だという学説がある。私の肩越しに現れる姿は、どうみても男に化けるタイプではない。砂糖キビ焼酎がまわっている頭のせいばかりでなく、黒いボートとくらべても動作が緩慢で、大きな鬚（まげ）を結った御殿女中が駕籠から降りるように浮かびあがってくる様子は、イガツポに棲むといわれる伝説の妖精人魚イヤーラの姿を連想させるに充分だった。

いつものようにアマゾン河への出口まで来ると、すでに薄暮が迫り、沖のマカヤニ島の上空を掃くように余光が走っている。風のないだ河面に、流れの音が高く広がっていた。その流れに大型カヌーを押しだして、いっせいに乗りこんだ。まず、砂糖キビ焼酎のまわし飲みで元気を出し、二本のオールでアマゾン河の岸に沿って遡ると、ボートの呼吸音も人魚イヤーラの伝説も、頭のなかから消えてしまった。

それから半年ほどして、スサーナは妻を亡くした義理の伯父、つまりは私が寝泊まりさせてもらった家の主人といっしょになったという。その後、検事に任ぜられた夫とイガツポを出て、任地のバレイリーニヤ市へ移ったが、まもなく亡くなったと聞いた。なんとなく哀れで、私は人魚イヤーラの姿を心に描いた。

南伯に去った同期生からの便り

サンジョアンキンに移住したころ、渡辺正治からはじめて手紙を受け取った。サンパウロ州スザーノ市からである。私たちがジュートづくりを目指してサンタルジアから去るのと前後して、彼は中学からの同級生・横田信男に誘われ、スザーノへ行ったという。彼はサンタルジアを去るとき、逃亡者と目されるのを恥じて、いつ、どこへ行くのかを誰にも告げなかった。それほどみんな屈折していたのだ。彼はスザーノへ着くと一町歩（約1ヘクタール）の歩合農民となり、トマトづくりに励んだそうだ。

昼休みも惜しんでしゃにむに働き、やっと土地を手に入れたという。手紙のなかで彼は、サンタルジア時代の生活を懐かしんでいた。

私はジュートを刈り終え、乾季にさしかかった広々とした水草の原を眺めながら、彼の手紙を読んだ。

サンタルジアで別れて四年が過ぎた。やせ我慢して暮らした植民地も、いまでは懐かしい土地になってしまった。

さっそく、私はつぎのような返事を書いた。

【高拓生たちはワアイクラッパ湖畔から去り、いやいやつくらされたマンジョカ製粉工場は、もうカポエラ（再生林）のなかに埋没してしまった。当時の関係者でサンタルジアに

住む人はなく、湖水の浜は元の姿にもどった。そこに住むカボクロ（混血の現地人）は日本人が残した古井戸を恐れて、コロニア（植民地）跡の森へは狩りに行かなくなった。入植したところと同じ姿にもどった湖で、山鳩がポーポーと鳴いている。そして、私たちはヴァルゼア（低湿地）に移転して、やっとジュートづくりで立ちあがろうとしている。】

マラリアで入院

アマゾン産業研究所創立十周年記念式典のほとぼりも冷め、一九四一年が明けると、サンジョアンキンにも、白塗りの板壁に赤瓦葺きの家が立ち並び、村らしくなってきた。そして、アマゾンの水位が下がりはじめる五月から七月にかけて、第二回のジュートの収穫も無事すませた。乾季が来て、新しく倉庫を建て、つぎのジュートを植え付けるころ、私は微熱に悩まされるようになった。マラリアの徴候である。

こんな状態には慣れっこになっていたので、そのまま仕事をつづけていると、体がだんだん衰弱してきて、気力もなくなってきた。白眼が黄色になっていくのに気がついたときには、マラリアは進行していた。ふだん太陽にさらされ、砂糖キビ焼酎で焼けた目は真っ赤で、「チニョーズ（悪魔）の目」だと言われていたので、黄症が出ているのがわからなかった

のだ。

マラリアは肝臓を冒していた。そのうえアルコールの飲みすぎもある。アマゾン河の行商船に便乗して、ヴィラ・アマゾニアの病院に行った。タラップをのぼるのがやつとだった。しかし病院のベッドに横になると、ふだん病院に縁遠い人間にはまるで天国にいるようで、たちまち快癒した気分になる。ただし歩けないので、ベッドのまわりで暮らした。利尿剤をあたえられ、どんどん排尿するようにと注意を受けた。排尿を促すために、ハブ草の種を煎じて飲むよう指示された。ハブ草はこのあたりの草原にはたくさんある。三週間ほど入院して、サンジョアンキンに帰った。その後、回復しても長いこと砂糖キビ焼酎の味がまずく、酒量もすっかり落ちてしまった。

自力でのジュート栽培の限界

サンジョアンキンに移住してきた当初は、ジュートの栽培をつづけるつもりだった。しかし、1回目の収穫を終えて、あらためてサンジョアンキンの土地を見てみると、この低湿地の地質は、エステーボ島より粘土質がまじっていてよくない。それに大きな欠点は、ボント（要地）とよばれるにふさわしい自然の条件に恵まれた土地ではないことだ。ジュー

トの集散のために人為的につくった場所で、背後に、住むのに適したヒンターランドとよぶ平坦地がないから、このあたりには住人がほとんどいなくて、労働人口もない。

一般に低湿地はアマゾン河が上流から運んできた土砂が堆積した沖積土からなり、レスチンガ（高洲）と水草などが密生した湿地帯が手の甲のように扇状の斜面を形成していて、平らな広い土地はない。ジユートはその限られた高洲に栽培するのだ

サンジョアンキンの低湿地は、パリンテンス山脈の麓に沿って広がっている土地のほんの一部だ。森林に覆われている高洲と高洲のあいだは、水草とアニングアの密生した湿地帯で、その広いところは幅一キロぐらいもあることがしだいにわかってきた。その高洲も手の指を広げたように、扇状になっているようだ。すると、低湿地の三分の二ぐらいは、ジユート栽培に適さない湿地帯だということも見当がついてきた。ジユートが栽培できるのは、せいぜい三〇〇町歩（約三〇〇ヘクタール）程度だろう。三〇〇町歩というと広く思えるかもしれないが、アマゾンではジユートも連作がきかないから、この程度ではけっして充分とはいえないのだ。しかも、高台地はどこも痩せた酸性土壌で、食料とする作物の裁増もできない。要するに自力でジユートを栽培する限界が早くも見えてきたということだ。

それにくわえて、低湿地を開拓しても、雨季には水に没し

てしまうから、浸水しない高台地が必要となる。ところが、この高台地に通じる道は、やっと大型カヌーが通れるほどの水路で、それも増水期の四か月間ぐらいしか使えない。水路というと聞こえがいいが、アニングの藪に覆われて沼とも池ともつかない状態だったのである。

ジュートの仲買商をはじめ

そこで二年目から、ジュートの委託生産とジュートのアピメント（仲買商）を試みた。生活必需品を支給する代わりにジュートを栽培させる仲買商である。それと、当時の行商船は薪をたいて走っていたので、船を寄港させるために、燃料の薪を集めて売るようになった。そのためにこの年（一九四一年）の四月に、私は石黒彗吉、山崎太郎、薬師神光雄と合名会社（ウチュー・ヤスイ合名会社）を設立した。この数か月後に、石黒は家庭をもつため、オビドス近辺に土地を求めて去っていった。

アピメント（アピアード制度）というのはアマゾン地域特有の経済システムで、主として十九世紀後半から二十世紀の初めにかけて、ゴムの採集とその流通によって確立されてきた。木材やパラ栗（ブラジルナッツ）、パウローザ（バラのエッセンスをふくむ香料）などの生産流通もアピアード制度が支配してきた。

裸一貫、これという家や財産を持たない現地人の生産者や採集者は、アピアードとよばれ、生産物や採集物を仲買人（アピアードル）に売ることを条件に、彼らから生活必需品などの商品をあたえられる。

そして、収穫を終えると、それを買い上げてもらって精算するのだ。ただし精算までの期間は生産や採集の条件によって決められる。また商品の値段には、当然のことながら、生産物または採集物を買取ることができない場合のリスクも計算に入れて、高い利子がくわえられるのがふつうである。そして、アピアードルの上には、さらに大手のアピアードルがいて、アマゾンの物産は幾重にも重なったアピアメントの組織を通じて吸いあげられるのだ。

われわれは、直営のジュート畑をおよそ二町歩（約二ヘクタール）に減らし、残りの面積は現地人労働者の家族や、カバナマ移住地から来た細田一家に生産を委託した。カバナマ移住地というのは、ベレンから約一八〇キロ、ブラガンサ鉄道のカバナマに一九三〇年、南米拓殖株式会社の重役で、衆議院議員だった千葉三郎が土地を購入し、一九二九年から同社が導入したトメアス移住地を退耕した家族移民を入植させた移住地である。一時は三〇家族にふくらんだが、戦中戦後は営農がむずかしく、ここから出ていく家族が多かった。

こうして、サンジョアンキン周辺の現地人の契約栽培者のほうは急激に増えていった。彼らの畑づくりはブシロンとい

う互助方式で森林を伐り開く。この地方でマンジョカ畑をつくるときの、古くからの慣習である。人数を集めるために、酒と食料を用意して人を招き、お祭りの調子で共同作業をする。たいてい、一日で作業を終えることのできる面積を開く。手伝ってくれた人に賃金は払わないが、つぎにその人に招かれたときに、労働でお返しをするというしくみである。

マンジョツカ畑のときは伐採は一年一回で用が足りた。山を伐ったあとは、ほとんど女子どもの仕事で、芋を掘り出して必要なだけマンジョツカ粉を作る。

草を採った後にまた、マンジョツカ芋の茎を植えておけばすんだ。男にはあまり用はない。ただ食べるだけでは能がないから、男たちは漁や狩りに出た。

現金が欲しければ、天然資源の採集か出稼ぎに行く。そのうちに適当な女に行き会えば、帰ってこない。あとに残った女が困るかと思えば、そんな心配はいらない。空いたところへはちゃんとべつの男が来て、相通じてさまざまな混血をつくりながら「発展」していく。

ジュートづくりにも最初のうちはこの互助方式が役に立ったが、ジュートの作業はやはり女には無理で、男の仕事だがそうなると半農半漁はだんだんできなくなる。半町歩ぐらいの面積なら、漁業をやりながらジュート栽培もできなくはないが、この程度の規模ならば、ジュートのような安価な麻織維をつくるよりは、鱈やピラルクーを専門に捕ったほうがま

しだ。

そこで二町歩、三町歩以上のジュート栽培者になって、腰を据えて働くようになる。また、五町歩以上の面積になると、重労働になるし、労賃もかかりすぎる。われわれはそんなことを計算して、中ぐらいの規模の、適当と思える六〇家族を選んで栽培契約をしたのだが、それでも常時六〇〇人ぐらいの人間を抱えていた。

現地人労働者たちが契約栽培者になると、マンジョカ粉をつくって生活していたよき時代が去って、しだいにおかしなことになるってきた。初期には自給自足していた食糧を、自然にジュートの契約栽培に頼るようになってきた。仲買商のわれわれもおかしなことになってきて、気がつくくと、現金で買ってきた牛肉を契約栽培者に掛け売りするというような商売をしていた。

第八章

太平洋戦争下の苦闘

敵国人となる

ふたたび雨季がやってきて、十二月に所用があつてヴィラ・アマゾニアへ行くと、太平洋戦争がはじまったのを知られた。アマゾニア産業の事務室から流れてくる短波放送の低い声に、居合わせた人たちは耳を澄ませた。軍艦マーチの合間に、日本軍の華々しい戦果を報じている。祖国の緒戦の勝利は誰でも嬉しいにはちがいないが、複雑な思いで、「ウーム」とため息をついた。手放しでは喜べない。

その後しばらくたって、総支配人の辻小太郎が甲高い声で、

『きみ、もうだめや』

と言ったことがあつた。辻総支配人の先行き暗い予想を追うように、欧米諸国が日本に宣戦布告していき、日を追つて日本の敵国が増えていった。

一九四二年が明けてまもなく、一月二十九日についてブラジ

ルも参戦して日本との国交が断絶した。

この日からアマゾニア産業の関係者二十二家族とわれわれ高拓生七四家族は、南米大陸に放りだされてしまった。祖国日本からも見捨てられ、棄民になったのだ。

こうなつては何を考へても無駄だが、われわれ四人が設立したウチュー・ヤスイ合名会社は、この時点で一〇〇〇人近いブラジル人の契約栽培者を抱えて、約二〇〇町歩（約二〇〇ヘクタール）にジュートを植え付けてしまつている。契約栽培者に掛け売りする商品の仕入れやジュートの売買にベレンのフェレイラ・ダ・オリベイラ・ソブリーニョ社の行商船モアシール号を頼りにしているのだが、日本人の身柄が危うくなつてきているので、取引をしぶつている。

藤島正徳はサンジョアンキンの下流およそ六キロにあるポッカ・デ・カルデロンで、一年まえから仲買商の仕事をはじめていた関係で、フェレイラ・ダ・オリベイラ・ソブリーニョ社の信用があり、モアシール号がそこにも寄港していたので、彼は幸運にも商売にさしさわりがなかった。私たちはたつた半年遅れで、ベレンに出るところか、近くの町に行くのにも警察の許可なしには出られなくなった。いわば軟禁状態同然になつてしまつたのだ。

そこで、藤島にモアシール号との取引を仲介してもらつた。この船の行商支配人アベールは、ジュート取引のもたらす利益に目をつけていたので、彼の一存で引き受けてくれ

た。

しかし、藤島の身柄でさえも不安定な時節に、本社の承認なしに新顔の日本人を一人前にあつかってくれるわけがない。そこは海千山千の商人、藤島と私にリスクを分担させる、アベールにとつてもっとも好都合な方法を選んで取引に応じた。つまりリスクをばか高く乗せられてピンバネされるのだ。私たちはその後一年間、その条件に甘んじなければならなかった。二月になるとアマゾン産業の資産が凍結され、みんな動揺していた。辻総支配人は社員が自活の道を選ぶように勧めていたので、会計課の戸口恒治を高拓同期のよしみで、わが合名会社の戦力として招いた。戸口の同僚でエメポイ実習場出身の大西虎雄、服部某も身を寄せてきた。溺れる者、わらをもつかむというが、頼られたほうも明日をも知れぬ身だ。ただ流されていくわらくずにすぎない。エメポイ実習場というのは、移民会社「海興」が一九三一年、サンパウロ郊外に設立した移民の指導者養成所である。正式名称は「サンパウロ農事實習所」といい、毎年、日本から永住する目的でやってきた青年二〇人、ブラジル国内から応募した一〇余人の特志作業生を実地教育した。

辻総支配人も早々にサンタレン郊外に移住して、一介のジュート栽培者になった。彼のこの行動を敵前逃亡だと非難する声も多く、一部の社員は退散することを拒み、ヴィラ・アマゾニアにとどまった。

この年の八月十八日、アマゾン河口のベレン市の沖合で、ブラジル商船がドイツの潜水艦に撃沈されるという事件が起きた。ブラジルの官民は激高して、ドイツの同盟国である日本を憎み、日本人の商店や住居が焼き打ちされるという事態になった。

当時、ベレンには約七〇家族の日本人が居住し、野菜づくりと野菜の小売りで生計を立てていたが、街じゅうの人間がブラジル国旗を掲げて、「日本人を殺せ！ ドイツ人を殺せ！ イタリア人を殺せ！ と、たいへんな騒ぎだったらしい。この事件のあおりをうけて、市内に留置されていた敵国人はベレン近郊のアカラー収容所（のちのトメアス収容所）に送られた。ヴィラ・アマゾニアに残留していた日本人職員も一人残らずアカラー収容所に軟禁された。

ヴィラ・アマゾニアは州政府に接收され、四千コントスの資本金を投じて設立されたアマゾニア産業株式会社は、アマゾナス州最大の財閥のジョタイゼ・アラウジヨ商会にわずか七〇〇コントスで売却されてしまった。

特別に保護されたジュート

われわれのようなジュツテイロ（ジュート栽培者）とよばれる最下層の日本人だけが野に残された。敵国人になって

もジュート栽培者のみは、ブラジル政府が特別に布告を出して、従前の生活が保障された。以前、マナオス・ハーバー社の別荘番を退くとき、英国領事もつとめていた社長が、「戦争が拡大したら、ジュートの必要性が高まる」と話していたが、そのとおりになったのだ。インドから輸入していたジュートが不足して、アマゾン産のジュートを増産せよというわけだ。当時、高拓生の栽培面積は九四〇町歩（約九四〇ヘクタール）、関係者家族の栽培面積六〇町歩（約六〇ヘクタール）と伝えられている。

こうしてジュート栽培者の身分は一応保障されたが、「キタコロニスタ（第五列）」などという不名誉な陰口をたたかれ、首に縄をかけられたような身ながら、わがウチュエ・ヤスイ合名会社はジュートの仲買商として破産を免れた。そして、また乾季がやってきた。

野鴨や雁が渡り、島に森にオレンジピンクのタシー（低湿地に多い喬木。タシー蟻と共生する）の花が咲きはじめた。貿易風が吹きつる夏になると、サンジョアンキン村にもマラリアが猖獗（しょうけつ）しはじめた。私をはじめ仲買仲間全員、そして現地の雇い人は、マラリア熱に取りつかれて呻吟（しんぎん）していた。労働者の家からひんぱんと葬式がでるようになった。突然、空をつんざく悲鳴が突っ走ると、村じゅう総出で葬式の準備がはじまる。死者の出身地に運んで埋葬しても、熱病はサンジョアンキン村に巣くって退

散しない。

ヴィラ・アマゾニアには旧日本人の病院に戸田善雄ドクターが残っていたが、マラリアぐらいのことで病院へ行こうとする者はいなかった。

命綱の行商船が沈没

マラリアに冒された敵国人という身分で暗い毎日を送りながらも、一九四三年が明けて、植え付けたジュートが育ち、雨季の最盛期になったころ、モアシール号の到着を首を長くして待っていると、この船が沈没したというニュースが入ってきた。船はベレン港を出てマラジョー島の近くを航行中、はげしい暴風雨に遭遇して沈没したらしい。われわれの命綱が切れたのだ。

パリンチンス市近辺のニュースのほかは、知るすべもなく閉ざされた世界で、ブラジル政府のジュート保護策によってジュートの増産に励むことしか考えられないときに、追い打ちをかけるような暗いニュースである。ただでさえ雨雲のうつつうしい雨季に、重い心を抱えて沈みこんでしまった。またしばらくは辛抱を強いられるが、なりゆきは天にまかせるよりあるまい。大西と服部は自分の道を選んで、それぞれ去っていった。

《日本軍がソロモン諸島で死闘をくりかえしている》というニュースが伝わってきた。風の便りでは、どちらが勝っているのかわからない。遠い国の戦いのように思える。察するに日本の旗色が悪いのであろう。ますます気持ちが暗くなった。

私のマラリアも一進一退で、熱のあるときは食欲が減退して、在伯九年にもなろうというのに、お茶漬けしかうけつけない。そのお茶はマテ茶である。熱の出方は人によってちがうが、マラリアの特効薬と言われたキニーネを服用すると熱を誘発することは定説になっていたので敬遠していると、アメリカ製のパルダンというよい薬が手に入るようになった。薬の持ち合わせがないときは、現地人カボクロ流にクーヤという瓢箪に似た木の実の殻でつくった容器に、砂糖キビ焼酎を入れて胡椒をつぶして混ぜ、火を点けてアルコールを煮え立たせた熱いのをあおると、たちまち汗が噴き出て熱が下がった。体に良いか悪いかはわからなかった。

ジュート全盛の到来

こんなことをくりかえしているうちに月日が流れて、ふたたび乾季を迎えたら、世をあげてジュートの時代になってき

た。その栽培地域はアマゾナス州のソリモンエス河下流から、パラ州のモンテ・アレグレ郡まで、アマゾンの大小支流の低湿地帯に広がり、三〇〇〇キロの大江岸にすさまじい勢いで普及していった。

ベレンの名のある行商船は競ってジュートの取引に手を出した。地方の大小の仲買商もジュートを買い付け、みずから栽培にも手を出しはじめた。当然、われわれ日本人との関係を持ちたがり、彼らは時勢に乗って事業を拡張していった。われわれ高拓生は、金が儲かるからというより、ブラジルがジュートを輸入しなくてもすむように増産しようという気持ちが強かったから、現地人にも種子を分けあたえ、ジュートの栽培を教えた。こうしてジュート栽培はブラジル人にも広まっていった。

戦前から戦後のブラジルのジュート産業の発展を数字で追ってみると、つぎのようになる。

一九三七年	八トン
三八年	六〇トン
三九年	一七八トン
四〇年	三二〇トン
四一年	一一〇〇トン
四二年	三〇〇〇トン
四三年	五五四三トン

四五年	六八八二トン（日本敗戦の年）
五〇年	一万三九二八トン
五三年	二万〇七二五トン（大水の年）
六〇年	三万八八九一トン
七〇年	四万三〇〇〇トン
七三年	六万六三六〇トン（ピークの年）
七四年	一万六〇〇〇トン
七五年	三万七一四三トン
八〇年	四万五〇〇〇トン
八四年	四万九〇〇〇トン
八七年	一万九四三〇トン
八九年	二万二二八二トン

まえにもちよつとふれたが、現地人カボクロたちもマンジョカ栽培を放棄してジュート栽培者になった。そのためマンジョカ粉が姿を消して、飢饉状態になった。フェレイラ・ダ・オリベイラ社の行商船は沈没したモアシール号からパリンチンス号に代わり、沈没事故のとき、たまたま入院中で命拾いした助手のガバイという若者が支配人に格上げされていた。幸い彼は、おおいにわが合名会社に協力してくれた。

ジュート栽培契約者の主食であるマンジョカ粉の不足を解消するために、アマゾン河口のブラガンサ地方で生産されて

いるフアリーニャ・ド・パラーとよばれるマンジヨカ粉が移入されるようになった。このマンジヨカ粉はこの地域の現地人の嗜好には合わないが、緊急のときだから文句は言えない。日本が戦後、内地米の不足をおぎなうために外米を輸入したのと同じようなものである。

しかし、それさえも目立って不足してきて、世間はイライラしてきた。マンジヨカ粉を是が非でも手に入れるために、札付きの男の口車に乗って、金をだまし取られたこともある。一か八かの勝負に出たのだが、案の定、二週間の期限が過ぎても、マンジヨカ粉は手に入らず、手ぶらで帰ってきてしまった。

マラリア持ちの身で、カヌーや馬を乗り継ぎ奥地に分け入り、はげしい腹痛に襲われ七転八倒のはてに行き倒れになりかかって、やっと集めたフアリーニャだけをカヌーで運ばせたら、「安井が死んだ」と伝わったのもこのころのことだった。

牛を飼いはじめる

サンジョアンキンに移住した当初、われわれ四人のなかに牛を飼うことを本気で考えている者はいなかった。牛がとくに好きだというわけでもないし、牛は広大な土地で飼うもの

だと考えていた。

それまでは、自分たちだけが食べるために、安価な牛を見つけて、それを食していた。たいていは小規模の飼い主から買うので、それらの牛は半ば野生化していて、簡単には捕まらない。捕らえるのに人手と時間がかかった。それでもスポーツ気分で作ってきた。

隣のイタリア大商人のサルバドール・スパノの牧童が、ときどき牛を売りにきた。相当に野生化した牛で、近づくとき森に逃げこんだ。森から出てきても柵囲いに入らないので、牧童が手を焼いて助けを求めてきた。そんな牛しか手に入らないのだ。

そんなことをつづけているうちに、牧童と老主人サルバドールとのあいだにゴタゴタが生じた。牧童たちが目の届かない老主人をごまかしていたのだろう。その余波をうけて、われわれは安い牛を手に入れにくくなった。そのため、ついつい牛買いの真似をしなければならなくなり、きちんとした牧場主から五頭ぐらいずつ買うようになった。

そんな折、ジュルチー・ノーボ（新ジュルチー）へ下る途中に、大きな牧場主がいて、会うことになった。連れの現地人カボクロが、「あそこは悪い病気があるから行くな」と言うのを押しきって訪ねた。その牧場主は閉めきった大きな部屋のなかのソファに座って、片手にコウモリ傘を持っている。近づいて握手をしようとしても、手を出さず、

「まえの椅子に座れ」

と言うので、腰掛けて用件を切りだすと、すぐ五頭買うことができた。しかし、あたりに妙な気配が漂っている。

やがて目が慣れてくると、主人の手足に分厚く包帯が巻かれているのに気がついた。悪い病気というのはレプラ（ハンセン病）だろうと直感したが、牛が容易に買えたので満足した。牛とハンセン病は関係ないと思う。

同じころ、ジュールチー・ベリーヨ（旧ジュールチー）の商人で、牧場主のマノエル・ケロスが牛一〇頭を売りこんできた。六十歳ぐらいのポルトガル人だが、四十歳ぐらいのマダムが万事差配している。マダムにすこし高いと言って値切ったところ、「セニョール・ヤスイ、はじめて牛を飼う人が安く買おうというのは無理だねえ」と、軽くいなされた。相手は勝手に、われわれが牛を飼うと決めこんでいる。その牛は全部牝だった。契約栽培者の食糧用にそれらをつぎつぎ三頭まで殺したとき、戸口恒治が言った。

「全部子持ちで、最後のはそろそろ生まれるばかりに大きくなっていった。もったいないことをした」

その胎児を見た私は、もう殺す気がなくなった。三頭もつづけて子持ちだったのに気がついたわれわれは、残りは飼うことにした。妊娠している牛を、太った牛だと勝手に思っていたのだ。

しかし、牛を飼うにしても牧場がなかったので、あわてて

旧耕地の再生林を整理して牧草を植えた。

その後は新しい耕地の水の引き際に、水陸両生の牧草コロニアをどんどん播いていった。この方法がいちばん生育がよかった。残りの牛7頭はつぎつぎに子を産んだ。

そこではじめて、グロスの牧場のマダムに椰撒された意味がわかった。はじめて牛を飼うのに、素性の悪い安い牛では飼育がむずかしく、また容易に殖やせないというわけだ。腹の大きい牝牛を一〇頭もそろえて売りに出したケロス家の台所事情もわかるような気がした。

子持ちの牛を三頭も自分たちの契約栽培者の食糧にしたばかりかさ加減を後悔して、以後、牛の肉まで掛け売りで供給するのはやめてしまった。

こんな無知からはじめた牛飼いが、うまくいくはずがない。慣れるだけで三年以上かかった。牛は兎を飼い慣らすのとはちがう。生まれ育った土地の草を喰って育ち、生まれた牧場が故郷であり、牧場主によって子どものように育てられなければ、野性の血が目覚めるのだ。買ってきた牝牛はその土地で子を産めば、まえの牧場を忘れるが、牝牛は油断がでない。一度オンサ（アマゾンジャガー）にでも襲われれば、生まれ故郷の方角へ向かって、森であろうが河であろうが、四散して逃げてしまう。他人の牧場を眺めるような、牧歌的なムードに浸っているわけにはいかない。牛を飼いはじめてまもなく、そのことを身に染みて知らされた。

第九章

戦後の闘いがはじまる

暗雲が漂いはじめたジュート商売

われわれ高拓四回生四人は、新たな開拓の夢を抱いて一九四〇年七月サンジョアンキンに移住してきたが、その夢を育む暇もなく太平洋戦争がはじまり、重苦しい心を引きずりながら、ジュートの委託生産と仲買商、そして牧畜に勤しむこと以外は考えることもできずに五年間を過ごしてきた。

そして一九四五年八月、ベレンから来た行商船が「米国が新型爆弾ボンバ・アトミカ（原爆）を広島、長崎に落として、地獄と化し、二つの町は瞬時に消滅した」という絶望的なニュースを伝え、日本が降伏して戦争が終わったことを知らされた。

ほかに知るすべもないわれわれは、そうと知らされても半信半疑だった。乾季を迎えて日ごとに水位が下がり、低湿地の牧場が姿を現すと、高台地の痩せた土地から低湿地に牛の

群れを移動させるのに追われた。パッサガードといって、バテロンという大型のカヌーに牛を乗せて移動させる、アマゾンならではの作業である。

その作業を終えると、大戦中もウチュー・ヤスイ合名会社に協力してくれたレガトンのパリンチンス号に乗って、私はベレンに下った。戦争中は敵国人としてなかば軟禁状態におかれ、監視されていたのが、胴長短足で一目で日本人とわかる私に、警官は注意を払おうともしなかった。ここではじめて、私は自由の身になったことを実感した。このときのこと、プロローグでふれたとおりである。

われわれの住んでいる土地は、高台地とか山地とかいっても、石ころ一つない。もともとはアンデス山麓に広がる浅海の底に沈殿した第三紀層、第四紀層の泥土なのであろう。私がマナオスにいたころ、考古学者の鳥居龍蔵博士から、「アマゾンの土地は、奥のほうへ行くほど地味がよくなるのだ」と、聞いたことがある。地質図では滝をいくつも登った段丘の奥に中生層、古生層があるが、そんなところは古くからゴムやパラ栗（ブラジルナッツ）などの産地として利用されている。そこに私たちの入りこむ余地はない。それでも、私たちは広大な、それこそ海のような大樹海に惑わされて、いつまでも見果てぬ夢を迫ってみるのだ。

私たちは終戦後になってやっと、「ピンチーニヨ（小さなひよこ）」という名の大型カヌー大のポンポン船を手に入れ

ることができた。これで他人のモーター船をチャーターせずに、ジュートの集荷ができるようになった。集荷のない時期には、遊ばせておくのはもったいないので、山崎太郎と薬師神光雄が毎月、ジュルチー・ベリーヨ湖とラーモス水道の半田二郎とのあいだを、行商の真似事をして通うようになっていた。

ジュルチー・ベリーヨ湖は高台地にあるので、マンジョカ粉と獣皮などが産物であった。ラーモス水道の入口、ヴィラ・アマゾンニアに戦後もとどまっていた戸田善雄ドクターを表敬訪問する意味でここを基点にして、ワイクラッパやアンジラの森進一郎（高拓三回生）、古賀邦次（同三回生）、原莊太呂（同四回生）、木村宗一（同四回生）、そのほか東海林善之進（同七回生）、小野三郎（同三回生）、四釜信造（アマゾン興業出身）、伊原只郎（高拓四回生）、馬場康二（同四回生）などのジュート栽培者のところをまわった。そのほとんどがジュートの仲買商を兼ねていた。

夜は誰かのところへ寝泊まりして、麻雀をしたり砂糖キビ焼酎を酌み交わし、親睦と情報交換の旅をした。つまりサンパウロの行商人と同じようなものだ。

そのころのわれわれは、まったく活字とは緑のない半裸の生活で、夕食後はベランダで砂糖キビ焼酎を傾けながら、昔食べた日本食の話などを飽かずにくりかえした。大アマゾン河の向こうの空に、太ったり痩せたりした月が傾くのを眺め

るのが習慣になっていた。

戦後のジュート市場は、インド産ジュートの輸入が再開されると、先行きは悲観的になった。われわれ仲買商の仕事にも不安な兆候が押し寄せていた。皮肉なことに、アマゾンニア産業株式会社がつぶれてから、パリンチンスの街には製麻会社や梱包工場が進出してきて、アマゾナス州のジュートの買い付けをしていた。ブラジル銀行が直接、契約栽培者に融資をするという噂も流れていた。

カカオ地帯への進出をねらう

敗戦のショックもやや薄らぎ、一九四五年も暮れるころ、ラーモス水道から帰ってきた山崎太郎と薬師寺光雄が、ボツカ・ダ・ガルサのカカオ園と店が売りに出るらしいという耳寄りな話を、内藤菊次郎（高拓五回生）から聞いてきた。ボツカ・ダ・ガルサは、アマゾナス州ウルクリツィバ郡のカカオ生産地帯のポイント（要地）だ。カカオ園を売りに出した地主のシンキはイタリア人で、内藤はその借地契約栽培者だという。

われわれはジュートの衰微に備えて、カカオ地帯への進出の機会をねらっていた。

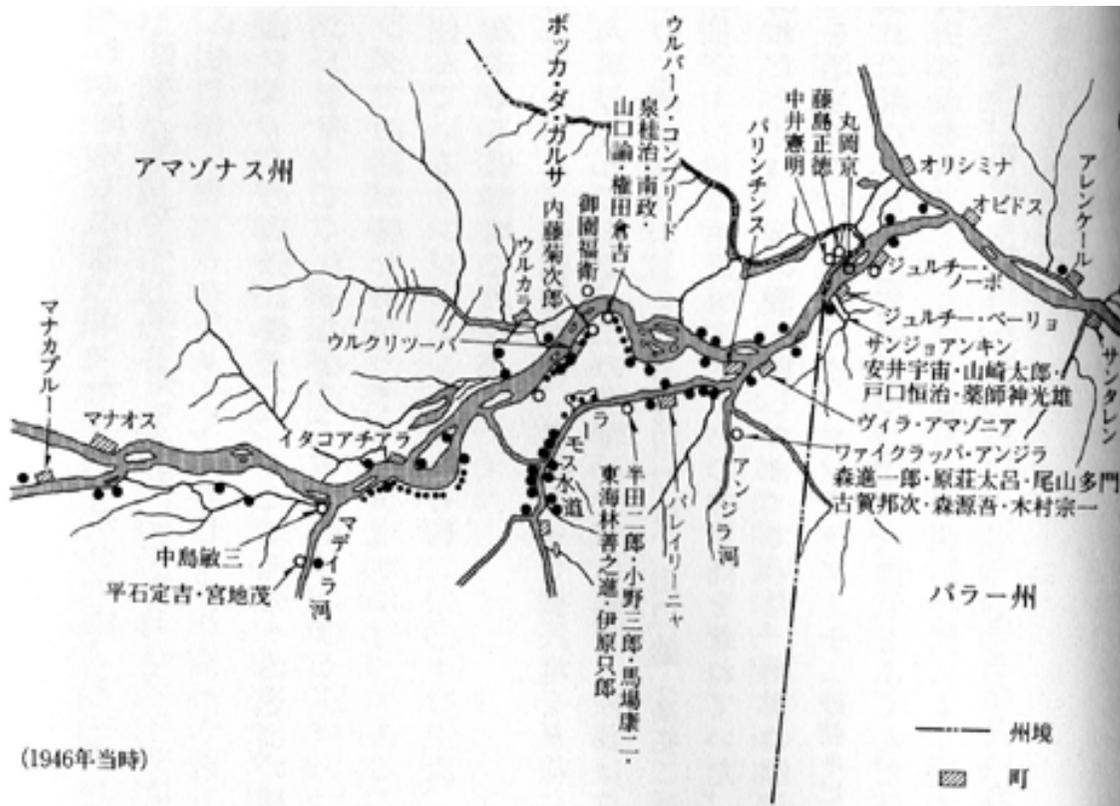
「そんなポイントを売ってくれるのなら、ぜひ買ったほうがい

い」

と、ベランダでの話が盛りあがって、私が現地に行ってみることにになった。ポツカ・ダ・ガルサは、われわれの住んでいるサンジョアンキンから約二〇〇キロ上流、ラーモス水道とアマゾン河に挟まれた、四国ほどの島にある低湿地である。

途中にあるウルバーノの低湿地は、クワケイラ植民地を最後に出た御園福衛、泉桂治、佐藤行夫ら高拓一回生が入植したところで、この当時はすでに御園と佐藤はウルバーノを出て、泉先輩の土地になっていた。その先のコンプリード湖の周辺では、山口諭（高拓二回生）、南政（二回生）、権田倉吉（大工）の三家族が、ジユートの仲買商と水産物の仲買商を兼ねていた。

内藤を訪ねたときは、年の瀬も押ししまっていた。雨季のはじめで、空気は湿っぽく、船着き場のまわりは濁りを増した流れに揉まれて、カンナラアーナ（砂糖キビもどきの水草）がざわめいていた。船着き場の、流れに削られた粘土質の上がり口も、湿気をふくんだ雑草が芭々と茂っている。そのなかを分けいって胸突き坂を六メートルほど登ると、開拓時代によく建てられた外開きの揚げ戸の家があった。カバコ（板）葺きの粗壁も相当にくたびれている。小さな白い犬が出てきて吠えると、細君が顔を出して、新潟なまりで内藤をよんだ。



ポンポン船を手に入れた安井氏らは、高拓関係者のジュート栽培地をまわって行商の真似事をするようになった。そして1945年が暮れるころ、安井氏はカカオにねらいをつけてボッカ・ダ・ガルサへ行った。

と、内藤は、
 晩飯を食べながら、カカオ園の所有者シンキの話になる

「自分はシンキが七〇歳で隠居したいと言っているので、カ
 カオ園を売るかもしれないと山崎に言ったただけだ」と言うの
 だ。そして、シンキは半年まえに店を閉じて、マナオスの長
 男のところへ転居しており、その後一度も来ないそうだ。

「それではマナオスに行くから、住所を教えろ」

と言うと、内藤は、

「行ってもむだだ。イタリア人のシンキとの商談は一回ではまとまらない。お天気屋で、口約束は守らない。一筋縄ではいかない老人だ」

と言うので、無性に腹が立ってきた。

「じゃあ、シンキはここへ来ることがあるのか」

と尋ねると、

「カカオの収穫時にはかならず来るだろう」

と言う。

「それでは、シンキが来たときに、売るかどうか聞いておいてくれ」

と、内藤にことづけして、私は明日にも帰るつもりで、うまくもない砂糖キビ焼酎を飲んでいた。狭くて暗く、湿っぽくてやたら蚊の多いこの土地は、一見しただけで住む気などまったく起こらなかったが、泉や南、山口諭、権田らのグループが各自半農半商売で独立をはじめていた。南と山口が商売敵だということは、問わず語りにわかる。将来、行商をやるには、こうした人間関係もふくめて顧客にしていかなければ、裸一貫の人間に何ができよう。そのためには、このポッカ・ダ・ガルサを足場として確保しておきたい。

夜もすっかり更けて、家族は寝静まっていたが、内藤は話をつづける。私は眠くなった頭で半分聞き流しながら、もう一度、内藤と山崎が話し合ったことを整理してみた。シンキ

が売れる気もない土地を、なぜ内藤が山崎に、売るかもしれないと言ったのだろうか。

私の推量はこうである。内藤はいまだにシンキの借地契約栽培者で、もしシンキが見も知らぬ人間に土地を売ったとしたら、いちばん困るのは内藤だ。彼自身の将来にかかわる重大問題だから、日ごろ、このことは考えつくしているはずだ。彼に金があれば、自分で買うはずである。彼はその辺をあいまいにして、酒の酔いにまかせて山崎にいい加減な話を吹いたのではないか。

「売るかもしれない」という内藤の言葉のニュアンスをよくたしかめもせず、自分たちに都合のいいように解釈して、はるばるボツカ・ダ・ガルサまで出てきたばかき加減に、われながら愛想が つきた。砂糖キビ焼酎の味がますます苦くなつた。

夜中をとづくに過ぎても、内藤はシンキを口説き落とす方法とか、私へのおためごかしを熱っぽく話し続けてやめようとはしなかった。私は眠くなってしまった。アルコールもリミットを超えている。とにかく内藤の言うとおりにして、買うめどだけはつけよう。

アルコールにどっぷり浸かった脳味噌で、

「とりあえず、カカオの収穫がはじまるまえに、店を開く準備をする。そのためにパリンチンス号をここに着けるように働きかける」と、内藤に約束してしまった。厄介な重荷を背

負いこんだことを後悔したが、男として引っこみがつかない。ミイラ捕りがミイラになってしまった。

私は子供のときから優柔不断で、人の話を断るのが苦手です、そのために不本意なことをしてみたり、よけいなことに手を出したりして後悔する悪い癖があった。年を取ってから、義理人情に溺れないように心がけているのだが、酒癖も手伝って、また悪い癖が出てしまった。

カカオ売買の店舗を設ける

一九四六年三月、内藤の古い倉庫を手入れして、とりあえずボテッコ（小さな飲み屋）のような店を作った。周囲のカオ園では青い実がどんどん大きくなっていた。シンキのカオ園が手に入るまで、現地人が収穫したカカオを日用品と物々交換しようと考えたのだ。

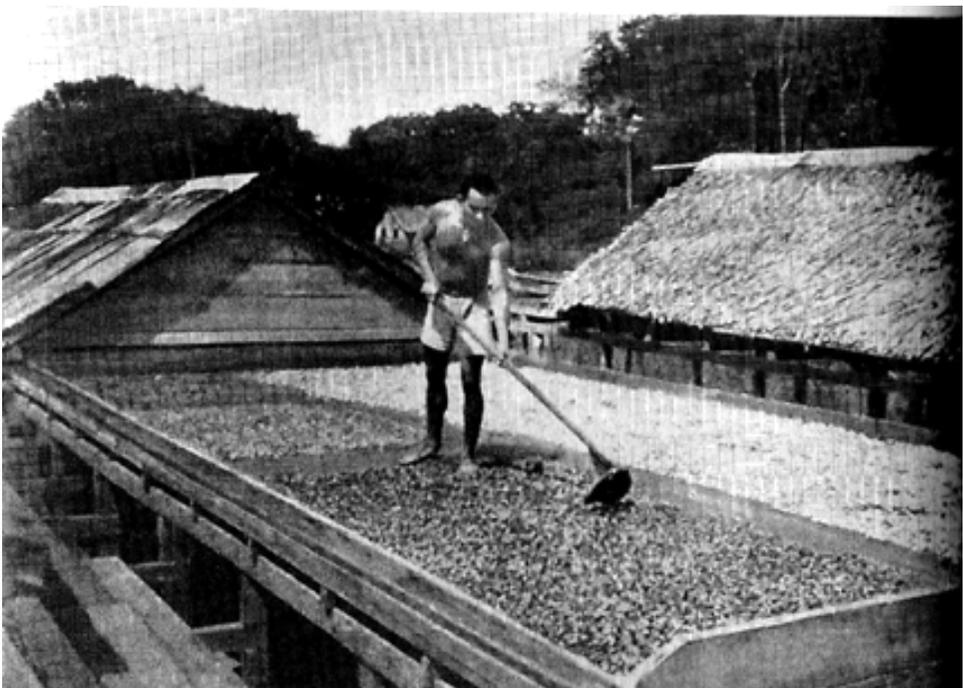
店は設けたものの、肝心の生カカオのテンドール（乾燥台）ができていない。カカオの収穫期は雨季の絶頂のころだから、地面で乾かすわけにはいかないのだ。乾燥台の製作はふつう、特別な大工に頼むのだが、カカオの収穫が間近に迫っていて、とても間に合わない。そこで、内藤から現地労働者を二人借りて、イタコアチアラ市の製材所へ材木を買いに行くことにした。小型カヌーで、一昼夜漕ぎつづけ、つぎ

の日の昼には、イタコアチアラに到着することができた。

カカオの乾燥台は高床式になっていて、台の上で三日間ほどカカオを天日乾燥させ、雨が迫ったときには、台の側面についているレールの上を三角屋根をスライドさせて覆ってしまふのだ。問題は乾燥台の骨組みの材木だが、この辺は再生林ばかりで、ろくな木がない。しかし、私に必要な乾燥台は、シンキのカカオ園を手に入れるまでの一年間ほどもてば充分なので、長持ちする材木はいらない。太くて、長さが三メートルほどあればよい。これならば、乾燥台のレールの間を差し渡せる。雑木を集めて一夜づくりの、祭りの舞台のような二段式の乾燥台をつくって間に合わせることにした。

屋根を移動させる車輪は、堅い丸太を輪切りにして、よく磨きあげた。屋根はごく軽くするために、カワアスーの葉で葺いた。カワアスーは笹の葉を大きくしたような葉をもつアシの一種で、この辺にはたくさん生育しているらしく、簡単に集めることができた。その葉柄をくくりつけて団扇を並べるように葺けばよい。この葉はファリーニヤを入れる籠の底に敷きつめるのにも使われる。こうして前代未聞の乾燥台ができた。試運転してみると、気がかりだった車輪がよく回転して、軽々と滑る。大成功だ。

特別な大工など必要なかった。内藤が危ぶんだことはみんな解決してしまった。



カカオ乾燥台 雨が降ると後ろの三角屋根を滑らせる。

カカオの高騰

こうして、カカオの収穫を待つばかりとなった。周囲は水生林とさして変わりにないカカオ樹林で、小地主の現地人カボクロの家が、河岸に沿って点在している。退屈きわまる生活

がはじまった。無壁の牢獄である。水の量はどんどん増えてきて、雨雲の切れ目から日が射しかけたと思うと、また雨が通る。乾く間のない毎日のなかで、カカオの実は喜ぶように育っている。人びとはそれが熟れるのをひたすら待って、平和に生活を送っている。

私も郷に入れば郷に従えを守って、彼ら同様平和に暮らしていけばいいのだが、「ひさかたの光のどけき春の日に静心なく花の散るらむ」という心境だ。

晩飯の一刻には内藤と砂糖キビ焼酎を飲みながら、話し好きで酒飲みの彼の四方山話を肴にして過ごす。話題の多くは、地主のイタリア人、ビセンチ・シンキの物語である。

彼は若いころ、ボツカ・ダ・ガルサの土地を買って弟と二人で商売をはじめ、隣近所のカカオ園の所有者に商品を掛け売りして、担保のカカオ園をせしめ、いまの一万本のカカオ園にしたという。ジュルチーの入口の商人、サルバドール・スパノと同じ年配だろうから、ある時期に、大勢のイタリア人が移住してきて、アマゾンにも散らばったのだろう。

その後、シンキは一度イタリアにもどって結婚した。細君はイタリア人気質まるだしの、とても陽気な女性で、現地人カボクロに人気があり、商売は繁盛した。やがてシンキは弟を追いだしてしまった。

長男はマナオスで商人となり、アルト・アマゾナス（マナオスから上流の部分）で行商船の商売をやっているという。

次男は父親に似た体つきだが、人がよすぎて落ちつきがない。母親が亡くなったあと、父親がうるさいので家を出てしまった。三男もお人よしのところへもってきて、すっかり現地人化してしまつて、カカオ園の管理ができる人間ではないということだった。

こんな話が毎晩くりかえされているあいだに、カカオの実が色づいてきて、カカオ園のなかは黄色く熟した実が輝き、明るくなった。第一回の収穫があちこちではじまるころ、シンキ老人も末娘といっしょにやってきた。カワアス―葺きの乾燥台を備えたわが仮店舗にも、生カカオを持って日用品を買いにくる者が現れた。

生カカオは升計りで受け取る。升の基準は石油缶二個が入る空き箱を一五キロ升と称するのが習慣で、箱一杯の生カカオを二、三日寝かせたあと、乾燥台に移して天日で三日間乾燥させると、赤褐色に干しあがり、正味一八キロとなる。その差の三キロは乾燥をやらせる現地人の労賃に充てられる。

私は内藤の紹介でシンキに会った。想像していたとおりのように痩せていて、一見して偏屈な老人だった。私は次第にカカオ園を買う気が失せてきていたので、その後彼にはあまり近寄らないようにしていた。そのうちにシンキの娘が、「遊びに来ないか」と言ってきた。退屈しのぎだそうだ。

「ポ語を教えるから毎日来い」というので出かけると、私をカカオの木陰に腰掛けさせて、二十二、三歳ぐらいのその娘

は、父親譲りの大きな口で舌を突きだしたりまわしたりしては、ポルトガル語の発音練習をさせる。舌の短い私はいっように上達しなかった。

しばらくすると、シンキは一度マナオスへ帰った。そのとき、内藤の長女を小学校に入学させるために連れていった。そのとき私は、シンキ夫婦が内藤の長女の洗礼親だということを知った。これまでよく理解できなかった内藤のシンキに気をつかった言動が、砂糖キビ焼酎のせいばかりでなく、シンキとコンパドレ（代父）の関係によるものだとわかった。

アマゾン河の水は五月になると、内藤の庭へもジワジワと浸みこんできた。潮が満ちてくる感じである。シンキのカカオ園へも浸水してきたという。シンキの留守のあいだ、次男と三男が収穫の手伝いをしていた。ときどき、労働者の支払いに困ると見えて、一五キロ入りの箱を持って私のところへ来た。今年は二十年ぶりの増水ということで、収穫に追われているのだ。カカオの樹は根元に浸水したら、水が引くときには枯れていくという話だ。それで水に浸からないところにしか植えないのだ。

私が来たころには捨て値同然だったカカオの値段が、急に高騰しはじめた。天気がよくない日がつづく、このあたりのパトロン（親方）のライムンド・モラエスの乾燥台だけでは処理しきれなくて、顧客の持ちこんだ生カカオが箱のまま積んであるという。箱のなかで三日過ぎると発酵しすぎて品

質が悪くなり、最後には腐ってしまうので、私のところへ一五キロ入りの箱が流れてくる。私の乾燥台は貧相なボデイを震わせて活躍した。

ある晩、突然、サンタルジア植民地の元支配人、高村正寿がランチに乗って現れた。カカオを買いにきたのだという。「値が下がるから早く売ったほうがよい」

と、よけいなことまで言った。終戦後、高村元支配人はアカラー収容所（この時点ではトメアス収容所と改称）から釈放されて、パリンチンスにもどってきた。かつてのアマゾニア産業株式会社の植民地支配人としての顔がきくから、契約量のカカオが集まらない商社から、調達を頼まれてきたのだという。私はすでに売り渡しの約束ができているからと断つて、内藤のところに行くからあるはずだからと、まわした。

高村元支配人はアカラー収容所に収容されたあと、道路工事をやらされて、ツルハシを振るっていた。しばらくするとドイツ人収容者たちは要領よく立ちまわって、事務の仕事にまわった。要領のいい日本人はドイツ人の引きで道路工夫から足を洗ったのに、彼だけはいつまでもツルハシ振りから足を抜けなかったそうだ。

私は高村支配人から教育された農民精神なるものを忍耐強く守って、今日も千尋の海底のような闇のなかでハンモックに潜りこんでいる。身動きもせず眠りについていて、内藤がよびにきた。二人は暗いランプのもとで、砂糖キビ焼酎

を酌み交わしながら、まだ商取引の話をつづけていた。内藤にどうしようかと相談されたので、「値が下がるものを買う商人はいない。上がるから先手を打って買い集めて歩くのだ。しかし、少量のカカオだ。わざわざ買いにきてくれたのだから売ってはどうか」と答えたら、高村元支配人は、「きみたちはすっかり商売人になってしまったなあ」

と、感心したのか嘆いたのか、判然としない声でぼそりと言った。そして、すっかり夜が更けてしまったころ、高村元支配人は内藤のカカオを積んで閨の河のなかを去っていった。

カカオから潔く撤退

五月末になると、カカオの収穫は最終段階を迎える。このころになると、河の水は一週間ほど増減をくりかえすレピケットという状態になり、水位がしばしのあいだ止まってしまふ。そして、しばらくして減水が始まると、カカオの樹はバラ色の新芽を吹いて衣替えをはじめ。木漏れ日が強く目に染みる。カカオ園のなかに陰をつくるために育てられたゴムの樹の実が、落ち葉を鳴らしてはぜる。

終日、西へ西へと河下から吹いてくる貿易風に乗って、黄蝶の群れが日暮れまでつきからつきへと流れつづける。ものみな流れるなかで、シンキとの商談の決着がつかないので、

私だけは動けない。ちよっぴり感傷的になる。

私はカワアスー葺きの間に合わせの家を新しく建てて、内藤のもとから引越した。まもなく、内藤は長いことかかったシンキとの交渉の結果を私に告げた。

「シンキの土地は自分が買うことにする」

と、すこし言いにくそうな口ぶりで口火を切った。しかし私は、シンキが内藤の長女を引き取ったと聞いたときに、すでにこの事態を予測していた。私が即座に承知したので、彼は気が楽になったらしく、買う条件などを詳しく説明した。

カカオ園が手に入らないとなれば、すぐこの地を引き払うつもりだったが、せっかくカカオに首を突っこんだついで、もうすこし知りたいこともあったので、

「べつの場所を見つけてくれ」

と頼むと、内藤も道理だと思ったのだろう、すぐに承知してくれた。しかし、とくに期待もしていなかったので、引き払う準備をしていると、二週間もしないうちに、「ここから六キロほど上流に、レオン・ビタールの一〇〇〇本のカカオ園があつて、持ち主のレオンは先ごろ、ウルクリツバの郡長に当還したので、そこを貸したいそうだ」という話を持ってきた。私は、カカオの収量の半分と店での販売権をもらつて管理するという条件で、一年間そのカカオ園を借りることにした。ここで栽培を経験すれば、カカオの収穫量もつかめるだろうと思つたのだ。

そこで私は、いったんサンジョアンキンに引き揚げた。フェレイラ・ダ・オリベイラ社の行商支配人ガバイも、またわが合名会社の仲間も、以前からボツカ・ダ・ガルサの土地を買わなければだめだと言っていたから、残念だっただろう。

それから私はボツカ・ダ・ガルサにもどり、一九四七年の正月の終わりに、レオンの土地に行って家の補修をした。カカオ園ではそろそろ早生が熟しはじめていた。カカオ景気が来るといふ噂が流れて、人びとは浮かれていた。何年も手入れをしていない荒れ放題のカカオ園にも人の手が入りはじめた。商人たちは競ってこの狭い地域に支店を開くようになった。ポンポン船がわが店のまえをよく通るようになった。内藤もこの先取景気に刺激されて、樽入りのビーニョ・チント（赤ブドウ酒）や新式の石油ランプなどを買い、成り金気分が高揚してきたようだ。

雨後の筍のようにできた支店の店主は商才にたけたカボクロたちで、金に糸目をつけずにカカオを商品と変換するの で、同年配のカカオ園主の人気を集めている。カカオの値段は私の来た二年まえにくらべて五倍ちかく跳ねあがっている。カボクロたちは、細君に洗いざらしの衣服を脱がせて、絹のぞろりとした衣装を着せ、これ見よがしにカヌーに乗せて走っていた。

私は元来商才に欠けているうえに、仏頂面とききているか

ら、連中の掛け売り競争に巻きこまれないようにした。三年もすればカカオの値段も天井に達するだろう。手を引くときの用心のほうに肝心だ。カカオ地帯は湖が遠く、牧場もないので、魚も肉も手に入らない。マンジョカをつくる土地もないので、年じゅう食糧が不足して、カカオのほかには何も無い土地だ。

そこで私は、カカオの収穫期になると、カカオの実を食べに集まってくるオウムの一種パパガイオを捕って食べていた。日本ではオウム病を恐れて食する鳥ではないとされているが、慣れてしまえば何でも無い。

この年も昨年ほどの増水で、水生林は全部水に浸かったが、カカオ園は浸水をまぬがれた。カカオの豊作で収穫が終わると、あちこちの支店から商品がばったり消えた。カカオが安値になって売り掛けの採算がとれず、多くの支店が破産して消えていくという噂が広まった。アマゾンではよくあることだ。カカオの樹がバラ色の若葉に衣更えするころ、パパガイオも寄りつかなくなつて、私は食糧に欠乏するようになってきた。朝早くからトンビが鳴く上天気の日を選んで、裏の水生林の奥の森まで足をのばした。小鳥一羽も目にはいらないので、方向音痴もかえりみず奥へ奥へと踏みこんでいった。下生えの藪の前方に鹿の動く姿を見つけた。姿勢を低くして撃鉄に指をかけ、背が現れるのを辛抱強く待っていると、飛びだすかのように見えて引っ込んでしまう。

「あるいはアンタ（アメリカバク）かもしれない」と、安全装置をはずせるばかりに親指をかけてねらいをさだめていると、むっくり半身が現れた。心臓が早鐘のように鳴った。人間ではないか！ 私はあわてて銃を隠すように横たえて立ち上がった。その人間もはじめて私に気がついたとみえて、照れかくしのように、にたりと笑った。手に釣竿を持っている。一匹も釣れていないので照れたのだろう。私も殺人未遂を見破られたかのように、つくり笑いをした。危ないところだった。

私の祖父は獲物の姿を確認してからでないといけないので、よく獲物を捕り逃したのだよ、装置をはずさなかったのも、よく獲物を捕り逃したのだよ、と祖母から言い聞かされて育った。それが耳にこびりついていて、そのおかげで手錠をはめられずにすんだ。胸をなでおろして祖父母に感謝した。

それからしばらくは店の後始末をするために、貸し金を取りに歩いた。漁師は借金がかさむと外に移るといふ。シンキのカカ才園に沿ってガルサ水道をしばらく進むと、水生林がどこまでもつづいている。やっと湖に出て、漁師の家を探しあてると、運よく数枚の干したピラルクーを受け取ることができた。二日がかりの旅であった。この辺には食糧がないことを、あらためて実感した。

八月にはいって、レオンとの契約期限も切れたので、カカ才園から手を引いて、サンジョアンキンに引き揚げた。

第十章

牧場と行商に挑戦

暴れ牛

ボツカ・ダ・ガルサのカカオ園から帰ってくると、片方の角のない牛や尾っぽのない牛がいた。それらを一見すれば、どんな牧場主かわかるのだ。ろくな牧童をおかず、放ったらかしにしておくので、牛が荒くれて、いざ移送というときに、牛は牧童をばかにして、暴れまくって角をなくしたり、座りこんで動かないので、尾っぽを火であぶられ、ねじ切れてしまうのだ。

ある雨上がりの午後、一頭の牝牛が逃げていくと知らせがあった。牧童は高台地へ行って留守だ。私はあり合わせの古い綱を手にして外へ出てみると、草を食べながら遠ざかっていく牛の様子がおかしい。

牛の概囲いに追いこんで綱をかけるつもりで綱を投げたが、へたくそで二回ともはずれ、牛が怒った。

柵囲いのなかは泥田んぼになっているので、牛は苛立っていて、投げ縄のへたな私をばかにしたのだ。

泥田のなかで急に立ち止まると、向き直って、真正面から私を睨みつけた。その目が薄緑色になると、眼底がきらりと光った。突進してくるな、と直感した。

その牝牛は概を背にして、首を高く掲げてまっすぐ私のほうを見ている。距離は一〇メートル。私のくたびれた足では、泥田のなかを柵まで逃げきれないと覚悟した。絶体絶命！ 逃げる背後から串刺しされて振りまわされ、惨めな格好で死んでは男の恥だ。どうせ殺られるなら、心臓をひと突きにやってもらおうじゃないか。

まだ、手が使える。万が一のチャンスがあるかもしれない。



とっさの判断で、牛を惑わさないために、古縄を捨てた。捨て身で牛の真っ正面を向いて、心臓をねらわせた。牛は前足で三回泥を後ろに掻き飛ばすと、突進してきた。だーっと心臓に突きが入る瞬間、私は全体重をかけた右手で角をつかみ、全力で左へねじると同時に、身を翻した。左の上腰部と肩のあたりに衝撃が走った。頭のなかが真っ白になった。時間の止まったような空間に私はまだ生きていた。

気がつくともう夕方に近かった。牛の柵囲いや家の窓から、私の死闘を見物していた人影が動いた。

生兵法に綱などを振りまわすから死にそうな目に遭ったのだ。角がもつと大きかったら危なかったと言われた。左の上腰部がつぎの日から三日間痛んで、半病人のようになった。

牧場の完成を目指して

一九四七年の夏、私も三十歳を過ぎて体力の衰えを感じるようになった。ボツカ・ダ・ガルサのカカオ園でぼやぼや過ごしてきた体に、熱い太陽がこたえた。徒労に終わったような一年半の年月の長さを、悔いた。

ジュートの先行きは芳しくなかったが、契約栽培者は確実に増えていた。現地人カボクロにとって、ジュートを半町歩前後自作するのは、マンジョカをつくるのと同じで漁業のか

たわらでもでき、栽培地にも不自由しない。

このような副業的な契約栽培者がやがて二町歩、三町歩の栽培者として腰を据えて働くようになり、われわれが開拓したサンジョアンキンは、ジュート生産の要地になってきていた。サンジョアンキンはまた、ベレン州でも名の知れた行商船の、牛と薪積みの寄港地にもなっていて、労働者は荷の揚げ降ろしの仕事に追われ、その余力で牧場づくりに精を出していた。

一方、パリンチンスはジュートの集散地になって、製麻・梱包工場も進出した。米国船が寄港してジュートを積みこむようになり、かつてのような吸血ダニの話も聞かなくなつた。

私はそんなことを横目に見ながら、牧場の完成を目指した。いまだに徒手空拳であるが、第一高洲のあちこちに残っている再生林を整理して、白鷺の繁殖地の下で分岐している第二高洲の一部を伐採した。

牛はまだ一〇〇頭にも達していなかった。ちゃんとした種牛もなく、屠殺用に集めたなかから、よさそうなのを充てた。牛の種類もさまざまで、ゼブー（背中にこぶのあるインド種）の雑種や、土地の牛、当牧場生まれもまじっていると、いうぐあい、成績は芳しくなかった。綱をかけられたこともなく育つたのもいた。決まった牧童もいず、ただ放牧している状態なので、いざ牛の群れを移動させるといふとき、訓

練されていないので、手間が掛かったり逃げられたりした。



第一高洲の再生林の整理が進むと、オンサ（アマゾンジャガー）に食い荒らされた牛の白骨がたくさん出てきた。牧場づくりは、第二高洲の水生林を伐ってジュートを植え、その収穫が終わったあと、減水期が始まるとすぐに、ぬかるみのなかに水陸両生の牧草コロニアの種を播くのである。

第一高洲で仕事している間は、アマゾン河までの距離があるので、湿地帯の水を利用した。畑の縁に残っている木陰に、水汲み場を決めて昼の休憩場にした。そこに西瓜などを冷やしておく。湿地帯の水はいくら掃除しても、三日月藻や浮草、風船虫などが泳いでいるのは仕方がない。

山を焼いてしまうと、十一月も末の土曜日、乾季も終わりに近づいたころ、焼け跡を整理するために積みあげた枝の山に火を点けていた女たち三人が、水汲み場に行っただと思っただら、「大蛇が出た！」と、金切り声で叫んだ。

その声を聞いた男たちがいつせいに走り寄った。監督の現地人青年ガートが一刀のもとに頭を郷ねて、騒ぎはおさまった。さすが山男である。そのあと彼らは、「これくらいのことなら、人間を呑みこむ」などと言って見物していたが、私が騒がないので、つまらなさそうに仕事にもどっていった。

その日は半ドンなので、帰りに、頭を刎ねられた大蛇をちよつと見てみた。二抱え、三抱えもある黒焦げの幹が大蛇のかたわらに横たわっていたせいかな、蛇はさほど大きいとは思わなかった。

せつかく大蛇が出たのだから、その皮をみんなに見せてやろうと、午後になって一人で蔦を編んだ籠を背負って現場に出かけた。つくづく大蛇を眺めると、長いあいだ飢えていたと見え、腹の皮がたるんでいる。しかし、それでも胴まわりはゆうに七〇センチあまりあった。二〇〇キロ近い牛と同じ大きさだった。

牛の移送

ブラジル南部や中部の大地の牧場とちがって、アマゾン流域で牛を飼うには、低湿地帯に牧草を植えてつくった牧草地を利用するので、増水期に牧草地が湖沼地帯と化してしまうと、その間は牛の群れを高台地に移す。減水すると、ふたたび地味の豊かな低湿地に生える牧草にもどして飼う。痩せて乾燥のはげしい高台地には、永久的な牧場はつくらないのだ。高台地に牧場を本格的につくるとなると、低湿地の四倍以上の面積が必要になる。だから、牧場の規模は低湿地の牧草地の広さによって決まる。

早く入植した先人たちによって、天然の牧草地帯はほぼ占有されている。その子孫が牧場主として、上は国家の、下は地方の権力者におさまってきた。あとからきた日本人に、そんな都合のよい土地が残っているわけがない。

日本人はジュートを栽培する目的で、低湿地の高洲を伐り開いた。その後、ジュートの連作がむずかしいとわかると、その跡地に牧草を植えて牧草地にした。その牧草地はもとの再生林にもどりやすく、林相が変化しやすいという、手のかかるしろものである。牧場としての立地条件が悪い土地が多いのだ。

バイショ・アマゾナス（アマゾナス州のアマゾン下流）の、名のある牧場主の所有する牛は、最高一〇〇〇頭前後で、これが一か所に飼える牛のリミットらしい。これ以上になると、ほかの土地に分けて飼わなければならない。そのためソ

シエダーデという習慣がある。これは、牧草地の所有者が牧場主から牛を預かって育てる代わりに、生まれた子牛の半分を分けてもらうという制度だ。

わが牧場は、三〇〇町歩（約三〇〇ヘクタール）のジュート畑跡の牧草地から計算すると、一二〇〇頭は飼える。しかし増水期には低湿地帯の牧草地が水没するので、その間牛を移す高台地での飼養頭数を考えると、せいぜい四〇〇頭から五〇〇頭が限度だ。それと忘れてはならないのが、家畜移送の能力だ。

サンジョアンキンには、家畜移送の点で、大きな欠点があった。低湿地と高台地をつなぐ水路が浅く、狭いので、モーター船を使って一度に大量の牛を運べない。低湿地から高台地へ家畜を移送するのは、低湿地が全面浸水する二〇日ほど前である。反対に高台地から低湿地に移送するのは、低湿地が現れて、ぬかるみが消えてしまう直後から、水路が通過不能になるまえの十日ほどのあいだである。

手漕ぎの大型カヌーで一日三回の移送量が大小の牛を混ぜて最高六〇頭とすると、六〇〇頭で十日かかる。ただし、水の増減は一定ではないので、余裕をみて八日とすると、牛の移送能力は五〇〇頭前後が限度となる。そんなわけで、たんに低湿地の牧草地の面積から牛の飼育頭数をはじき出せないのである。家畜移送の能力が牧場の立地条件の要となる。

十九四九年、サンジョアンの低湿地のすべての高洲を開

いて、牧草地をつくり終えてみて、やっと以上のようなことがわかった。じつにここまでくるのに八年間もかかった。そこで私は、新しい牧場の適地を考えるようになった。家畜の移送にモーター船が使えて、なおかつに一度に大量の牛を移送できる高台地を手に入れることができれば、距離のことはあまり問題ではない。と同時に、優秀な牧童が必要になる。牧場の運営がスムーズにいくかどうかは牧童の腕にかかっているのだ。

敗戦將軍の来訪

戦後も四、五年たつと、世の中も変わってきて、フジヤマのトビウオと言われた水泳選手の古橋廣之進がベレンに来たという風聞も伝わってきた。

「日本民族は健在だったのだ」と喜ぶ一方で、日本から便りが届くようになると、地獄の底から聞こえるようなうめき声ばかりで滅入った。マキン・タラワ玉砕の日（一九四三年十一月十四日）と同じくして、私のすぐ下の妹が亡くなっていたという知らせをうけた。誰にも向けようのない怒りが込みあげてきた。

また、疲弊した日本、朝鮮を救済するために一九四六年にアメリカで設立されたララ（LARA II アジア救済公認団体）という機関から援助物資を募る案内書が届き、私も遅ればせ

ながら親不幸の償いをしようとしたが、なにぶんにもドルが高くて、思いの十分の一も果たせなかったのが情けない。

一九五一年八月、私はパリンチンス号でベレンに下った。このころにはポンポン船のピンチーニョに代わって、パリンテンスの有力者からディーゼルエンジンのスマートなランチ（サンジョアンキン号と命名した）と荷船を手に入れた。牧場経営と並行して、ジュートを集める仕事も軌道に乗っていた。

しかし、ジュートの価格は低落して、契約栽培者の黄金時代は去っていた。この月になると、アマゾン産のジュートの買い手がなくなった。ベレンの工場にも、南伯の工場にもインドから輸入したジュートのストックが山ほどあるというところで、引き取り手がない。ジュートの束のなかに、湿った繊維をまぜて重量を増やそうとしたり、石や木片をまぜる悪徳な現地人栽培者もいて、アマゾンジュートの評判は落ちていた。

同じころ、熊本県知事選に落選した上塚元校長が、ジュートの契約栽培者から転身して「辻商会」を設立していた、元アマゾンア産業総支配人の辻小太郎のところに滞在していると、耳に入った。

パリンチンス号の狭い船のなかの旅は単調で退屈である。昼間はデッキにハンモックを張って休むわけにはいかないし、キャビンのなかも暑い。食事がすむと、ポーカーをした

り、ベレンからのラジオ放送でフットボール（サッカー）の試合中継を聞いたりした。

そんなとき、いちばんまえのキャビンから顔を出して、私に、

「ジャボネースが河を上がってくる」

と、声をかけた人がいた。サンタレン市の上流を通過中のことである。私は上塚元校長だなど直感した。見ると、パリンチンス号の左舷側を遡ってくるのは、ポンポン船のヴァルガス号だ。手すりとデッキのあいだから辻元総支配人と並んで、見慣れたアングロサクソン植民者姿のヘルメットが二つ見下ろせた。その姿には、手を振って挨拶するのを躊躇させる何かがあった。

その昔、理想の植民地建設に燃えて、リセルツルード号に意気揚々と日章旗を掲げ、調査旅行を敢行した貴人が、いまは窮屈そうなボンボン船でアマゾン河を遡っている。私は敗戦將軍を思わせるその姿を見下ろして、手を振るのは失礼だろうと考えたのだ。人間万事塞翁が馬という古い格言が脳裏をよぎった。

上塚元校長が来伯したのには、こんないきさつがあった。

前年（一九五〇年）のブラジル大統領選で労働党を組織して立候補したゼツリオ・ヴァルガスは、全国遊説の途、サンタレンに立ち寄り、「自分が当選すれば、ジュート産業を保護し、サンタレンにジュートの製麻工場を建設して、ジュツ

テイロ（ジュート栽培者）を救済する」と公約していた。ヴァルガスは大勝して大統領に返り咲き、その記者会見でも、ジュートの工場建設にふれていた。

辻商会代表の辻小太郎は大統領に宛てた私信を地元議員に託した。≪私らのアマゾニア産業株式会社は戦争中、敵国資産としてブラジル政府に接收され、売却代金七〇〇コントス（売却時、邦貨にして約一七万五〇〇〇円）はブラジル銀行に凍結されたままになっています。大統領が公約され、計画されているサンタレンの製麻会社に全額投資しますから、凍結を解除されたく……≫と、したためたそうである。

大統領から、すぐに会いたいという電報が届き、急ぎ計画書を作成するよう要請された。その計画書を提出すると、辻は大統領に面会することになった。

「この会社の設立は、貴君らに引き受けてもらいたい」

と、大統領は返答された。設立には二万五〇〇〇コントス（この当時、邦貨にして一二五〇万円）が必要で、われわれも設立株を買わされたのだった。

その席で、辻が大統領に日本人移民に対する意向を尋ねたところ、

「アマゾン地域の暑いところなら、いくらでも開拓してよろしい」

と、言われたそうだ。この返事でもって、上塚元校長は来伯することになり、一九五二年度にジュート栽培地に、八〇

家族を入植させることになった。この移住計画を進めるために、われわれジュート栽培者たちに移民の受け入れを求めてきた。あまり反響はなかった。時代はすでに過ぎ去っていたのだ。われわれもジュート栽培から足を洗っており、協力しようにもできなかつた。

一方、日本国内では農林省がアマゾン移住者を募集した。移住者の送りだしに熱心な福島県では、この年、冷害で稲が四分作、梨が六分作という凶作で多数の希望者があり、選別試験を実施したそうである。一九五二年の暮れに、戦後集団移住第一回、一七家族五四人がジュート栽培のために日本を発った。

一回だけに終わったジュート移民

一九五三年が明けて早々、増水の様子がおかしいことに気がついた。ふつうの年にくらべると勢いが強く、すこしも停滞せずに増えつづけて、早くも昨年の二月ごろの水位に達した。浮草と流木が増えて、沖の流れに巻きこまれて、つぎからつぎへとあとを絶たずに流れてくる。

いまからこんな調子ではと、人びとは大水を心配するようになった。記録的な大水のあった一八五九年から数えれば九十四年目、一九〇三年からではちょうど五十年目に当たる。海拔二九メートル以上の増水を大水とすると、その後、一九

○九年に二九・一七メートル、一九二二年に二九・三五メートル、一九二三年には二九・一九メートルと、三回の大水が記録されている。今年は二九メートルを越す大水が来る周期だという。

二月になると予感は的中してきた。いつもの年なら三月に浸水が始まる低湿地帯に早くも水が入りはじめたのだ。その水はアンデス山脈の雪解け水だと言われていたが、北は北緯五度のギアナ高地から、南は南緯一五度あたりのゴヤス高地に降る雨もアマゾン河に集まってくるはずだ。

そこへ、第一回ジュート移民の一行がベレンに到着した。壊滅した満州開拓団や焼け野と化した日本から、「外国に出さえすれば、運命が開けるだろう」と、希望を持って入植してきた移住者だ。

そのころ、私はジュートを集めるために走りまわっていた。契約栽培者たちが、潮の満ちるように広がってくる水を手手に奮闘している折、入植したばかりの四家族が脱耕するという事件が起こった。戦後のアマゾン移民のテストケースだっただけに、マスコミにも大きくとりあげられた。

雨季のアマゾンでのジュート収穫作業は、頭から足もとまで水との格闘で、雨具などは何の役にも立たない。朝から十二時間もの水中作業は死ぬほどつらかったという。二五クルゼイロス（一九四二年にミルレイスからクルゼイロに切り替わり、この当時は一クルゼイロ五円前後）の日当では生活で

きない。食物の入手も困難で、体がもたないと脱耕した家族は語っていたそうだが、十年まえ、われわれが引き受けた二家族も、農業には相当のベテランだったが、それでもジュート作業には悲鳴をあげていた。そういう経験もあって、今回はわれわれは移民の受け入れを辞退したのだ。結局、ジュート移民はこの一回だけで中止となった。

サンジョアンキンに帰ってみると、牛を移してしまった柵囲いの河岸に、ネムの花に似たインガの白い花が満開で、甘い香りを放っていた。例年なら、牛の群れはまだ牧場に放たれている。いまはもう牧場に浸水して、柵囲いのなかにも浸みこんでいる。

そして方々の契約栽培者から、

「早くジュートを受け取れ、さもなければ責任は負えない」と、矢の催促をうけた。荷の揚げ降ろしをすませると、休む間もなく出発した。かさばるジュートは、水に追われて置き場がないのだ。こんな状態になってはじめて、黄緑色のスマートなランチのサンジョアンキン号が、なぜたやすくわれわれの手に入ったのかがわかった。この船の心臓であるディーゼルエンジンが、夜を日について駆けまわる重労働には耐えきれないのだ。集荷の順序も目茶苦茶になって、家に帰る暇もなくなった。

ランチがしばしばエンコするようになると、これまでのように機械係にまかせて動くのを待っているわけにはいかな

い。人がしていることに興味がなかった私は、エンジンのこともランチに関する知識もない。だから、あわてた。アマゾンでは万事がそうだが、自分で何でもできなければ生きていけない。パリンチンスまで出かけて修繕などしていられないし、修理屋でも簡単には治らない。

苛立つ心をおし静めて、エンジンが発動するまで分解、組み立てをくりかえした。予定や予測が立たなくなつて、出たところ勝負になつた。私は、またもや人間万事塞翁が馬の格言を唱え、泣きたくなる心を慰めた。

ジュートを運んでくるたびに、水の様相は変わっている。再生林はすでに河の一部となつて没してしまい、建物の階段を水が這いあがってきた。

大水と格闘した悪夢の四か月

わが家へ帰ってきてみると、倉庫の床すれすれに水が来ていた。高床式の家の床も、もう一息で水に浸かりそうだ。沖を外洋船が通ると、波が押し寄せて、いまにも波頭が飛びこんできそうだが、うねりは床下を潜り抜けて、裏の牧草地の浮草を揺るがすと、消えていった。

相棒の戸口恒治は労働者を総がかりにして、材木や流木を集めて、倉庫の床の上にマロンバ（筏）を組みあげ、その上にジュートの山を移動させていた。私が訪れる先々も、同じ

ような状態だった。

昼夜の区別もあいまいになった。サンジョアンキン号のやわなエンジンにむち打っているあいだに、人間のほうが睡眠不足で痩せてきた。家のなかまで筏を積みあげるようになり、筏と屋根のすきまにハンモックをつるして休んだ。筏の下は生温かいアマゾン河の水が洗い、とても蒸し暑い。ノアの箱船もこんな感じだったのではないだろうか。

とうとう低湿地帯には、満足な家はなくなってしまった。水生林か浮草に覆われて大湖沼になってしまった。

私のパリンテンスのイメージは長年、高台の上にマンゴー並木の連なる町だった。いまは、その街路のマンゴーの樹の根元に乗りあげるように船が着く。

パリンテンスに着岸すると、待ってましたとばかり、辻商会の計量係が船に飛びこんでくる。ジュートを引き渡すと、すぐ出ていく。私のランチはまるで辻商会の集荷船になったかのようなのである。

何をしたのか記憶も定かでないほど、悪夢のような四か月が過ぎると、ジュートの季節もすっかり終わっていて、仲買商たちは費用の滴算に頭を悩ました。高拓四回生の半田二郎はパトロン（親方）の行商船アキダバン号に、ジュートの費用の清算ができず、牛を全部取られることになった。彼は、そのために私への支払いができなくなるだろうと、相談に来た。私はジュートの残りを全部、アキダバン号に渡すことは

承知したが、牛を全部渡すことには反対した。せつかくの立派な牧草地が役に立たなくなるからだ。私への清算には牛を二〇頭充てるが、その牛はそのままソシエダーデとして残すことを約束した。つまり、清算によつて私のものになった牛をそのまま半田に預けて育ててもらい、生まれた子牛の半分は彼のものになるというわけだ。そして、「二〇頭はわれわれの牛だから、絶対にアキダバン号に渡してはいけない」と、強く念を押した。しかし、つぎに行ってみると、頑張つてやつと一〇頭だけ残したという。ただし、子持ちの立派な牝ばかりだというから、まあまあだろう。全部失つて赤裸にならなくてよかつた。

以来、半田とのソシエダーデの約束は五十年後の現在もつづき、八十歳を超えたにもかかわらず、半田はラーモス水道沿いで、いまだに電気もない仙人のような暮らしをつづけている。

七月を迎えると乾季である。暑い太陽が雨雲の消えた空から照りつけ、貿易風が流れる時期である。しかし、アマゾン河は満々として、人影のない海原のようだ。水は増えるときとちがって、遅々として減水しない。

牛たちは、首を長くして低湿地帯の若草を待ち焦がれている。高台地の牛たちは、枯れていく牧草のなかで、日増しに痩せ衰え、腰骨が飛びだした。牝牛は子を育てる力がなく、見捨ててしまう。暑い日射しにさらされて、よろよろと悲し

げに短い枯れ草をなめるように喰んでいる。

毎朝、アマゾンの岸から集めた水草のカンナラアーナを大型カヌー一杯分あたえても、牛たちの衰えには追いつかない。骨と皮になった牛は、ミネラル不足になって病気が流行した。われわれの力では、手の施しようがない。

八月の半ばになって水が引き、やっと低湿地帯に牛たちを移送することができた。しかし、土地がよく乾いていないので、体力のない牛はぬかるみのなかに倒れた。飢えすぎて消化する力を失った牛は、青草を食べすぎて死んだ。もう、数など数える必要もない。残ったものが生きていくということだ。

やがて野鴨の群れが渡ってきて、流行していた疑似チフスが下火になったころ、やっとノアの箱船から解放された。新しい季節を迎えて一段落すると、戸口がパリンチンスへ出て、辻商会で清算してみると、余剰金が出た。この大水の年にどういいうわけかわからないが、ジュートがたくさん集まったということだろう。

アマゾン河流域のこの年のジュート作付面積は六万二〇〇〇町歩（約六万二〇〇〇ヘクタール）、生産量は二万〇七二五トンと言われている。

行商でしのぐ日々

遠くの空に夢を追うことはしばらくやめて、私もアマゾナス州イタコアチアラ郡からパラ州ジュルチー郡にかけて、周囲に散在する商人たちから、獣皮やマンジョカ粉を集めてまわるようになった。一九五三年の大水の年の余剰金を現金で受け取るかわりに、辻商会から手に入れた新しいランチのヴァルガス号の船体は、目立つと見えて、マノエル・ケロスの店のマダムも買い物をしてくれるようになった。

彼女は、マラリアで荒廃する以前は栄えていたこの地方のパトロン（親方）である。

彼女はわれわれがはじめて牛を飼うとき、「はじめて飼うのに、安い牛を手に入れようというのは無理だねえ」と椰輸したマダムだ。彼女は取引には抜け目なかった。私自身はまだサンジョアンキンの店の配達人か、出前持ちぐらいの気持ちでやっているうちに、世間からはひとかどのアマゾン河の行商人に見られるようになっていた。黄緑色の船体のヴァルガス号のせいだろう。六〇トン積みの木造船であるが、田舎まわり向きのディーゼルエンジンには満足していた。

サンジョアンキンの司法・行政区はパラ州オビドス市に属している。一方、サンジョアンキンから一步上流や前方に出るとアマゾナス州で、パリンチンス山脈が両州の境になっている。その麓にパラ州のポスト・フィスカル（監視所）があり、山脈の上流側の麓にはアマゾナス州の監視所があ

る。州境は日本の県境とちがって、国境といった感じである。そして境界線の引かれている河は、海のように広いのだ。わが行商の顧客は旧アマゾン産業の植民地を中心に展開した、高拓四回生のジュートの契約栽培者が多く、アマゾナス州に散在している。

サンジョアンキンから行商に出入りするたびに、両州の監視所の許可を得て通過しなければならぬ厄介な場所にあつた。

パラ州のはずれにあるサンジョアンキンは場所柄、政変のあるたびに、ベレン市やジュルチー市から任命されてくる監視所の役人の暇つぶし場所になっていた。それらの役人には、僻地をよいことに権力を笠に饗応を強要するたちの悪いのがいた。

こんな田舎まわりの役人や、飲んべえでちよつと油断すると借金をためる現地人カボクロたちを相手に、戸口恒治は辛抱強く商売をしていた。とても私には耐えられないと敬服していた。彼は埼玉県の山林地主の息子で、奥深い山に育つたという。

「アマゾンの開拓は、とても百姓仕事ではできない。ことにジュートは重労働だ」

と、つねづね話していた。彼は温和な人柄で、人と争うようなことはしない。そのくせ、彼は進んで屠殺を手がけた。私はそんな殺戮じみたことが嫌いで、一度もやったことがな

い。山崎太郎は鼻っ柱が強く、ケンカも冒険も辞さないが、屠殺はしたことがない。血を見ると貧血を起こすたちだ。

戸口がしているような商売をやらなければ、ジュートの仕事はできない。私は「カーラ・インジョワード（洗面）」と陰口をたたかれていたから、商人としては落第だ。戸口は山林地主の息子だから、人を材木ぐらいに見ているのだろう。

そんな私が本格的に水運業をはじめ、レガトンという行商人になったのは、資本のない身で、これよりほかにアマゾンでは人間らしい生活ができないからだ。本当は金儲けが好きというより、乗り物が好きなのかもしれない。金を儲けるのが目的なら、河口の最大都市ベレンを目指さなければならぬのだ。私は、もしも大地に根ざした仕事がアマゾンにあれば、それをするだろう。アマゾンというところは、人間万事塞翁が馬という格言が象徴するように、新陳代謝、栄枯盛衰のはげしいところである。いっさい予断を許さない。

私が日本高等拓殖学校で教わったアマゾンの姿は、この目で見たものとはまったくちがうものだった。

それは、アンデス以東八百余万町歩に広がる大処女林に覆われた天然資源の宝庫だと言われていた。それは私の頭に、磐石不動の大地を想像させるものだった。そこから収奪を意図した民族がことごとく開発を拒まれて敗退した、神秘的な大地だった。

ところが来てみると、大部分は農業が育たない地力の貧弱な大地だということがわかった。農作物は焼畑に一回でできるだけで、連作はできない。もとの原生林の姿にもどるには三十年はかかると言われている。収奪したくなければ、収穫物全部かそれ以上の地力を肥料として還元していかなければならない。とても天与の宝庫とは考えられない。

また、原生林の一部を残してみても、よほど広大な面積でなければ、一年もたつうちに風雨その他の原因でつぎつぎに倒れて、残した意味がなくなってしまふ。先輩から、「家の周囲には危ないから、立木を残すな」と注意された。アマゾンの樹木はかたちばかりの直根があるだけで、脇根を張って支えられているのだ。その脇根が毛細血管のように広がって、地表から養分を吸収しているらしい。私たちはその根を坂根とか髭根とよんでいた。

その根は森のなかの地表を、敷物状に覆っているのだ。二〇センチもの厚さがあった。その下の土に養分などあるはずがない。この大密林を養っているのは、たぶん水と空気と髭根の上に積もるわずかな腐葉土に、太陽のエネルギーが作用してできる物質であろう。

夜も昼も私は大木が朽ちて倒れる音をしばしば聞いた。その大音響に和するように、驚いた鳥や獣が騒いだ。森が新陳代謝する響きであり、老木の葬送の声である。生きている樹木は、新芽を吹くのが先か、落葉が先かという調子で、新陳

代謝をくりかえして、年輪を刻む暇がない。ちよつこのことで周囲の若木や蔦葛との生存競争に負けてしまう。

大木が倒れた跡に、その後継ぎが育つとは考えにくい。はげしい盛衰の結果は、知るすべもない。

「この大地を愛して収奪せず、自然とともに栄えて文明を築くのだ」と張りきってきたが、微力の身の開拓者には、そんな大それたことはできない。それは砂漠を開拓するのに等しいと考えるようになった。

私のような人間は、木の実を拾って生活して、最後は髭根の養分となるに決まっている。かつて、山焼きの日に、「切り株の根元にドクロをさらすのが開拓者だ」と、高村正寿支配人が訓示したとおりである。アマゾン開発銀行の頭取は私をまえにして、「なぜ日本人は都市の周辺から開拓せず、奥のほうへ行くのだろうか」と不思議がったが、都市周辺は人が多くて、われわれには競争に勝つだけの資金がないからである。

そこで私は、自分の生業となった行商に黙って励みできた。ヴァルガス号を引つ立てて、州境を越えて、ラーモス水道をまわってアマゾン河を下ることを実直にくりかえしていると、世間からは本物の行商人に見られるようになっていた。

遠のくばかりの人並みの暮らし

ある日、いつものとおり、マンジョカ粉、砂糖キビ焼酎、その他雑貨を積んで、州境の監視所で通行の許可を取り、ヴィラ・アマゾニアの戸田善雄ドクターのところへ寄った。その後、ワアイクラッパの森進一郎のところに行くため、ラーモス水道を遡行していた。乾季のピークを迎えた空には、大水の影もとどめず、ジュートを植え付ける焼畑の煙が、幾条も幾条も立ちのぼっている。そのガスは、何日も雨に洗われない空気のなかに停滞して、太陽は半熟卵のようにもうろうとしていた。

気がつくくと、ヴァルガス号ほどの大きさの船が、後方からやってきた。ワアイクラッパ湖の入口に近づいたころ、その船に乗船していたパリンチンスの市長の命令で、停船させられた。その船が着舷してくると、若い市長を先頭に、警官、税務署の役人がヴァルガス号に乗りこんできた。臨検拿捕されて、パリンチンスへ曳船された。こんな大げさな捕り物は、ただごとではない。逃げも隠れもしないわれわれを、密入船か密漁、麻薬業者並みにあつかうのは、よほど有力な人物に訴えられたとしか考えられない。

パリンチンスの埠頭に着くと、故障した曳船を放すように綱を解き、市長はさっさと下船してしまった。市役所に引つ

立てられることもなく、野次馬の目にさらされることもなかった。ただし、残った役人たちから、目の玉が飛び出るような額の罰金だか税金だかを書いた書類に署名するように命じられた。

法律には無知な私も、さすがに了解できずに署名を拒否した。役人たちはしつこく署名を強要した。弁護士の手当たりもなく、あつたにしても急場には間に合わない。もつとも、医者はいないような町に、よい弁護士がいるはずもないが。

アマゾニア産業が健在だったころ、ここの会計係だった戸口恒治と市長が遊び友だちだったことを私は思いだした。この件は、あとで戸口から市長に泣きを入れてもらったほうがよいと判断して、署名に応じると、役人たちは勝ち誇ったように下船していった。鉛を飲んだような重苦しさで腹の底に抱えながらも、しつぽをピンと立てた犬のように勇んで、ワイクラッパへ引き返した。

いったい私は何のためにこんな瘡痍蛮雨の土地で働いているのか。働けば働くほど大自然の創造主の手下どもにじめられ、やつと逃れたと思えば、人間仲間の権力で頭がめり込むほどやつつけられる。人並みの暮らしをしようと努力してきた知恵も尽きはてる。

やがて森進一郎の家の山麓に船を着けると、彼とわが身をくらべてみた。彼はワイクラッパ植民地が滅亡したあと、友人の去った跡を譲りうけて、滋養強壯の秘薬と言われる

グアラナ、パラー栗（ブラジルナッツ）、マンジョカを育てて二十年、じつと動かず湖の住人相手に日用品を売りつづけて暮らしている。その山の上の粗末な家を見上げると、私は私の生業であるジュートを集めつづけるのだと、思い直した。よけいなことは考えずに奮闘するのだ。そういう道を選んだのは自分ではないかと、思いいたすと、腹の虫もすこしはおさまった。

ラーモス水道からアマゾン河を下って一周して帰ると、戸口に、パリンチンスで体験した不愉快な出来事を報告した。戸口はたしかに市長を若いころから知っているというので、彼にこの件の後始末をまかせた。

やがて雨季がやってきて、年末を迎えると、ジュートが育って、アマゾンには生き生きとしてきた。アマゾナス州イタコアチアラ郡からパラ州ジュルチー郡にいたる行商ルートを開いて、私なりに記念すべき一九五三年。多事なりし一年。今世紀最大の大水の年の大晦日を、半田二郎の船着き場で過ごした。

暴風雨が近づいているのか、真っ暗な闇夜に、盛んに野鴨の群れが騒いでいる。避難しているのだろう。私は蒸し暑いので、デッキのハンモックに横になっていた。乗組員は船室に入って寝てしまった。誰もいないはずのデッキで、止まっては歩く何者かの足音がする。注意していると、やがてランプの薄明かりに、鳥のような姿が現れた。よく見ると野

鴨である。ハンモックのかたわらまでおびき寄せて捕まえた。

幸い暴風雨はそれたらしく、夜が明けると炊事係が屋根の上の鶏籠に野鴨を入れた。一九五四年の元日は鴨料理で祝おうと、夜が明け切るとエンジンを始動して出発の準備をした。そのとき、エンジンの音に驚いた野鴨が籠を破って飛び去ってしまった。長いあいだ使っていない籠は朽ちていたのだ。元日のご馳走に逃げられてしまった。ヴァルガス号は錨をあげると、初日の輝くラーモス水道へ向かって急いだ。

第十一章

畑の黒ダイヤ・胡椒に賭ける

ベレン近郊の胡椒園へ

一九五四年が明けて、早生のジュートが出はじめる二月になると、ベレンに行っていた山崎太郎がサンジョアンキンに帰りたいたいだした。戸口恒治の話によると、「ベレン近郊に住む高島将元（高拓六回生）に、胡椒を植える土地を探

すよう頼んであるが、安井宇宙が行くなら高島は喜んで歓迎し、胡椒栽培についてはいっさい世話をするという。それについて安井の意思を聞いてくれ」と山崎が言ってよこしたそうだ。

要するに、山崎はサンジョアンキンを根城に本格的に行商船をやりたいから、私が代わりにピメンタ（胡椒）栽培をする気がないかということだ。戦後まもなくラーモス水道からジュルチーにかけて行商の真似事をしていた彼は、元アマゾンア産業研究所職員の山内登に声をかけられて、一年半ほどまえにベレンに行った。山内はそのころ、飯田・山内商会の飯田義平（高拓一回生）と別れて、本格的な行商船をはじめていて、相棒に山崎を誘ったらしい。ベレンに行ってしばらくすると、山崎は戸口に、「面白い仕事があるから、金を出さないか」と相談をもちかけてきた。私は山崎と山内の関係をよく知らないし、当時サンジョアンキンにも金がなかったので、「それは山内を儲けさせるばかりのようだし、二人は長続きしないで、山崎は帰ってくるよ」と賛成しなかった。そんな経緯があったので、山崎が帰ってくるのは反対ではないが、第二の牧場をつくるために、私が買いたいと考えていたジザベルトという土地は、競売の結果、尾山良太のものになっていた。ヴィラ・アマゾニアの裏のジョゼアスー湖の入口にあるジザベルト以外に、このあたりには牧畜に適した土地はないと思っていた矢先だった。

私は高島を知らないが、彼は、ワイクラツパ植民地のドーセ地区に入植してきたとき、道で私に二、三回会ったことがあるという。山内と行商船をするつもりでベレンに行った山崎が、サンジョアンキンへ帰って行商船をしたいというのは、何か理由があるのだろう。私は根っからの商人にできていないから、べつの仕事をしてもいいが、ぜひ胡椒を育てたいとも思わない。

いまや胡椒は黒ダイヤとよばれて、一大ブームである。私は他人が手をつけないことや、見向きもしないことには興味がわくが、猫も杓子もということには、目新しくても興味がわかない。また、できあがってしまったものには執着心が消えてしまう。しかし、牧場もどうか軌道に乗ったし、サンジョアンキンではこれ以上発展の余地が望めないのです、高島のところへ行ってみることにして、戸口から山崎に伝えてもらった。

折り返し山崎から返事が来た。

〈サンジョアンキンのご一同様

先日、お手紙を受け取ったとき、高島が来ていました故、土地のことを話したら、一ロット（一区画）二〇町歩ぐらい、高島の近くに八コントス五〇〇（邦貨約二一五〇円）であるということでしたので、ニコラウ・ダ・コスタ（卸商社）に、オールデン（オーダー）を書いて、一〇コントス（邦貨二五

〇〇円）払うようになっていきます故、ご承知ください。兄等より高島に土地買い入れの手紙を出しておいてください。高島の近くだとピメンタ（胡椒）を植えるのに何かと便利です。高島から教われればよいからです。また、高拓仲間の平石定吉、中根敏造（四回生）もベレンに来て、ピメンタをやるそうです。このように安ければもう一ロツテ買ったらどうですか。一ロツテ二〇町歩でも使えるのは一〇町歩と違ってください。一町歩に一五〇〇本植えます。土地の値段は上がる一方です。高島のところはベレン市から六〇キロの地点です。

何とか今年より仕事に取りかかったらどうですか。高島は今年、カミニヨン（トラック）を買うそうです》

こうして、山崎は一九五四年二月末、張りきってサンジョアンキンに帰ってきた。入れ替わりに、私は八年まえ、ポツカ・ダ・ガルサの内藤菊次郎のところへ出かけたように、トランクー一つ提げて、パリンチンスから定期便のイドロ（水上機）に乗った。高島の住むサンタイザベル郡モエマの胡椒園を目指して。

めったに乗ったことのない水上機は空気の調節が悪く、上がり下がりのときに耳が圧迫されてとても苦しかった。水上機は「下駄履き」とあだ名され、足がわりに使われるようになっていたが、ベレンまで五時間の空の旅は窮屈で退屈だっ

た。

翌朝、ホテルを出て、プラグンサ鉄道のサンブラス駅から一日二本の朝の汽車に乗った。もう二十年も汽車に乗ったことがないところへもってきて、この汽車はよく脱線するから、なるべく後ろのほうへ乗れ、と聞いていた。後方から二番目の車両に乗りこんだが、両側に並んだ木製の座席はとても粗末だった。満席になっているあいだに割りこんだ。

ベレン郊外に差しかかると、楽士の一団が演奏をはじめた。車内はにぎやかになったが、調子のはずれた現地人カポクロの音楽のような演奏は、私には耳ざわりだった。

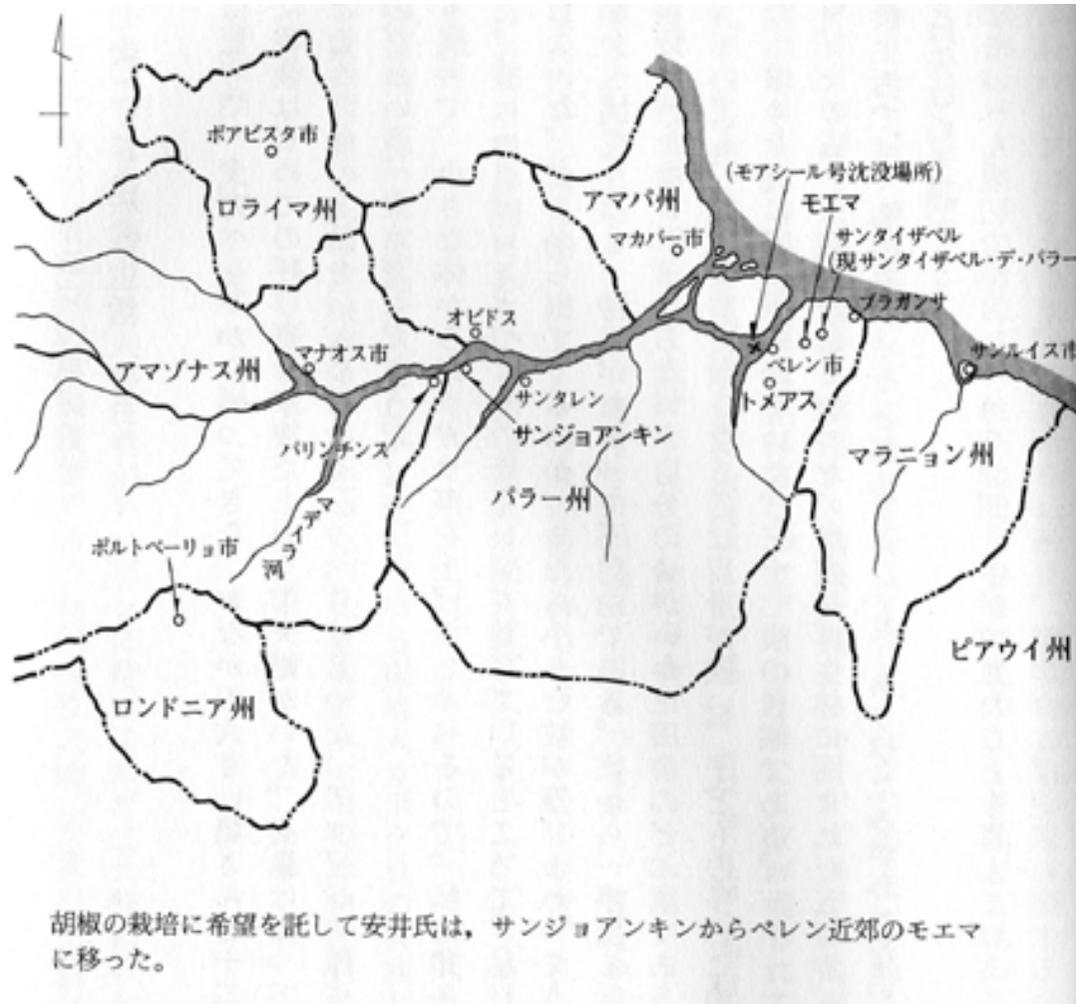
ある坂道に差しかかると、列車が動かなくなった。早くも脱線かと思っていると、乗客が外に出て立ち話をはじめたので、私も退屈まざれに外へ出てみた。あらためて列車を眺めると、機関車の後ろに濃青色の車両が二両連結されていた。そちらへ乗りこんで見ると、ソファ型の座席が両側に二つずつ前向きに並んでいる。先進国で使われている車両だ。

座席は半分しか埋まっていない。これが一等車というものか！ 腰を下ろすと、まもなく発車した。

上り坂を登るのに蒸気が不足していたらしい。私は外房線の「土気（とけ）の坂」を思いだした。列車がこの時に差しかかると、人間が並んで歩ける速度になったものだ。

車掌が追加料金を取りにきたので、モエマで降ろしてくれよう頼んだ。やがて竹藪を背にした無人のプラットホーム

に降ろされた。そこから舗装のない街道をすこし歩くと、線路の反対側の再生林に入る脇道に小さな店があったので、高島の家へ行く道を尋ねた。その脇道を三〇〇メートルほど進んで再生林が尽きると、アマゾン銀行頭取の所有だという胡椒園に出た。そのつづきが高島の胡椒園だった。



三十七歳にして居候生活

高島将元は留守で、夕方ベレンから帰ってきた。おなかの大きい奥さんと十二歳ぐらいを頭に男児が四人、それに戦後初めての呼び寄せ家族だという弟夫婦がいた。高島は帰ってくる時とさっそく、ベレンに出てきたころの身の上話を、とめどなくしゃべりはじめた。アマゾンの原生林の妖気に圧倒されて飛びだしたのだという。東京育ちだそうだ。

彼はとてもじょう舌で、小さな体からガラガラ声を上げてしゃべるので、私は聞き手になっていればすむので助かった。彼はいま、レンガづくりの新しい家を建てているところで、私はその建築中の二階に逗留することになった。どこから出てくるのか、やたら小さな蚊が飛びまわってうるさい。

田舎者は都会へ出てくると、勝手がちがって不自由である。家から一步出ると、手荷物から履物までいっさい、自分で持たなければならぬ。自分の姿がいかに田舎のどぶ鼠であるかを痛感した。ちゃんと食費を払っていても、他人の家で飯を食うのは肩身が狭い。子どもの多いこの家では、一膳の飯でもそつといただく惨めな姿に成り下がっていた。三十七歳の居候である。

早くもアマゾンの広い天地が恋しくなった。周囲を再生林に囲まれた五町歩（約五ヘクタール）ほどの胡椒園の居候生

活では、畑の黒ダイヤと拝まされても、ありがたみがわからない。どうもこの作物との「お見合い」は失敗の予感がする。

高島夫婦はたいへん親切で、おしゃべりの聞き手ができたことを喜んでいるふうだった。それに私を金持ちだと勘違いしているようだ。それから毎日、顔が合えば胡椒に関する農学や地質学、社会経済学から哲学にいたるまで、たたき込まれるのだった。高拓の寄宿舎へ入ったようなものだ。・暇があればよびにくる。そして、自分の騒々しい性格にくらべて、私のことを「どこにいるのかわからない猫のような男だ」と言っていた。

この地方は、アマゾンが開発されるにつれて増えてきた、ベレンの人口を賄う食糧供給を目的に開拓された土地だ。ブラガンサ鉄道沿線を開発する植民計画によって、ブラジル人が入植して農作をしている。何度も焼畑をした跡は、全域が再生林となって、そのなかに人家が埋もれている。家の周囲には果樹が植えられているが、生活を維持できる規模ではない。マンジョカ畑や陸稲、ミリーヨ（トウモロコシ）の小さな畑もあるが、何をして生計を立てているのか。

高島の農地は前面三三〇メートル、奥行き六〇〇メートルのなかに、五町歩ほど胡椒を植えている。共同出資者は山内登の持ち船イダリーナ号の以前の持ち主フィゲレッドだ。私らが買う土地は、高島の区画から一つおいた奥の隣にある。そのつぎの区画は低くなって、なかをイガラツペ（小川）が

縦断して流れている。

胡椒園以外は再生林で、高島はそのなかに住んでいる現地人カボクロの家族とのつきあいもないようだ。彼が私を歓迎してくれる意味がよくわかった。私は黒ダイヤの世界に片足を突っこんだようだ。

胡椒栽培の一大ブーム

胡椒はジュートと並んで、日本人移住者がアマゾンに持ちこんだ二大作物の一つである。一九三三年、南米拓殖株式会社（略称「南拓」）の移民監督であった臼井牧之助（女優の小山明子の実父）が、渡伯する途中、シンガポールで南洋産の胡椒の苗を入手して持ちこんだのがはじまりだと言われている。それらの苗は、一九二九年に日本人がアマゾンにはじめて入植した土地、トメアス入植地のアサイザール試験場に移植された。二〇本のうち一八本は枯れ、吉田耕三場長のもとで残る二本が生長したが、一九三五年、南拓の事業縮小で同試験場は閉鎖されたため、入植者の加藤友治、斎藤円治がコツコツ挿し木、増殖に努めた。

しかし、当時の黒胡椒の市価は安く、副業にもならない状態で関心は低かった。第二次世界大戦がはじまり、南洋方面からの胡椒の輸入が止まり、値上がりしてきたため、加藤、

斎藤の両人が増殖した苗木が注目されるようになった。一九四二年二月、ブラジルの対日国交断絶により、トメアス入植地はパラ州の管轄下に移った。トメアス入植地は州営のトメアス植民地となり、ベレンに收容されていた敵国人たちもアカラー收容所（戦後、トメアス收容所に改称）に收容された。

アカラー收容所に軟禁された在植者たちは、胡椒の増産に専念して、その本数は五〇〇〇本近くに達した。年を追って増殖されていき、一九四五年度の終戦時には約三万本になっていた。

戦後、世界の胡椒産地であった南洋諸国がつぎつぎ独立し、それまで主に中国人が所有していた胡椒園が荒廃して、生産量が激減した。なにしろブラジルは肉食国である。胡椒は塩や砂糖に負けない必需品である。それまでのブラジルは輸入に頼っていたが、トメアス植民地から国産胡椒が出荷されるようになり、トメアスの地名はブラジル全土に知れわたるようになった。

一九五〇年、第一回出荷の黒胡椒は一キロ当たり一〇〇クルゼイロス（邦貨約一〇〇〇円）にもなり、十年まえの栽培当初から見ると、一〇倍以上にも急騰していた。インド産に比して品質、価格の点でも充分競争でき、胡椒景気は上昇し、「思いダイヤ」とよばれるようになった。

一九五一年八月、ベレンに下った私は、山内登の誘いをうけ

て、サントイザベルの大橋伊太郎一家の胡椒園を訪ねたことがある。当時住んでいた粗壁の小屋とはちがい、三年後の現在には四万本の胡椒を有して、年収が邦貨にして四〇〇〇万円という屈指の胡椒長者となっていた。

私をアマゾンの奥から誘いだした高島将元の胡椒に関する知識は、主としてサントイザベルの大橋家の長男、大橋敏男やトメアス植民地の加藤三郎から得たものらしい。加藤もいまやトメアス混合農業組合の理事をつとめる黒ダイヤ長者の一人である。加藤は戦争中、高島がアカラー収容所に軟禁されていたときからの友人で、この二人はアイデアマンで鳴らし、性が合うようだ。

ことに高島は加藤の財力に目をつけて、彼の目をブラガンサ鉄道沿線に向けさせるために、旅行に誘いだした。高島によれば、サントイザベル郡モエマの土地はめずらしく粘土質で比較的地力があり、トメアスの封色粘土質に似ている。地域の気候もトメアスにくらべてよく、胡椒の結実がよい。ブラガンサ地方からの道路網はすべてモエマ駅に集中している。

というような知識を高島は話しているうちに、ダミ声はとどまるところを知らなくなる。私は借りてきた猫のようにおとなしく聞いていた。つづいて高島は、胡椒を育てることがいかに資金を食ってたいへんなことかを話すのだった。畑に植えたからといって胡椒園ができたと思ったら考えちがいだ

と、口を酸っぱくして説明するのだが、その辺の事情は私にはよくわからない。アマゾン式原始農業しか作物を育てる知識がないから、要点がつかめなかった。

この黒ダイヤブームでは、私のようなぼつと出には、苗だって簡単には手に入らないことはわかった。いまのところは高島が一〇〇〇本用意してくれただけである。その後、運よく、大橋がグアラナの種と交換に、一〇〇〇本を分けてもよいと約束してくれたので、ワイクラッパの土といっしょにグアラナの種子三〇キロを船便で、五キロを空輸させたりした。

滋養強壯の秘薬といわれるグアラナは突然、一キロ当たり八〇クルゼイロス（邦貨約八〇〇円）にもなり、黒ダイヤブームのはじまりのときのようにな値がついた。飲料として脚光を浴びだしたらしい。グアラナの種は、マウエス、パリンチンスから遠くへ運ぶと、発芽しないとされていた。

私は高島の言うとおりに、七月に山を焼く予定で、胡椒の苗のあるなしにかかわらず四町歩（約四ヘクタール）を開くことに決めた。このあたりは海の影響で十日目ぐらいに一回スコールがあるので、注意するように言われた。山焼後の整地のために、早々と農務局へトラクターの借り入れを申しこんだ。七月に山を伐り終わると、高拓四回生二十周年記念の催しに参加するため、パリンチンスへ行くことができた。帰ってきて山を焼くと、高島の勧めで彼といっしょにトメアスへ

行くことになった。

肥料食いの胡椒栽培

ベレンからアカラー河を約二七〇キロ遡行、その河畔にあるトメアスには、一九二九年から一九三七年まで三五二家族、約二一〇〇人の日本人が移住した。主要作物とされたカオの栽培成績が惨憺たるうえに、マラリアが猛威を振るい、戦前までに一六〇〇人以上が脱耕したという。それが、戦後の黒ダイヤブームで息を吹き返した。

前年（一九五三年）のトメアスの胡椒相場は、一キロ当たり一三〇クルゼイロス（邦貨約一三〇〇円）で最高潮に達し、黒ダイヤの黄金時代ともてはやされるようになった。その年の生産量は六五〇トンだった。

トメアスでは高島の友人の加藤三郎宅を訪問することになった。胡椒園見学が目的であるが、苗を分けてもらうためでもある。トメアスの日系社会は胡椒景気に乗るまで長年、外部の社会から隔絶されていたので、古い日本的因習が根強く残っているようだ。

アントニーノというトメアス産業組合のランチに便乗して、アカラー河を遡行した。つぎの朝、トメアスの栈橋に着くと、誰を迎えにきているのかアメリカ製のピカピカの黒塗りの車が三台、埠頭からはみ出すように止まり、胡椒景気を

物語っていた。

加藤みずから運転する迎いのトラックに乗りこんだ。埃っぽい田舎道を一〇キロほど離れた村の中心地の十字路へ向けて走った。その間、加藤は高島に胡椒の国際市況とか、為替レートが何ドルだとか、聞きなれない貿易用語を並べ立てた。加藤の胸ポケットには、金色のカネタ（万年筆）が金バッジのように光っている。小切手の署名用だそうだ。トメアス産の胡椒が国際市場価格を左右する日も近いそうだから、この田舎道も遠からず立派な舗装道路になるだろう。

十字路を過ぎると、みごとな胡椒園が目立ってくる。あちこちを見学させてもらった。説明を聞いても、田舎者の私には、猫に小判である。ただ、どの畑を見ても、草一本なく、乾燥よけに稲藁やインペリアルという牧草がたくさん敷かれていた。それらの敷き藁を確保するために、陸稲畑や牧草地が胡椒畑よりも広く取ってある。胡椒は排水のよい傾斜地を選んで植えられている。

胡椒の本数が少ないころには、堆肥をたくさん使用していたが、黒ダイヤブームになってからは手が足りずに金肥（化学肥料）を使うようになっていた。要するに胡椒の樹は鉢植えを育てるように、堆肥を大量に使って育てなければならぬということがわかった。

夜になって落ちつくくと、主人の加藤から、

「何本ぐらい植えるつもりか」

と訊かれた。高島に注意されていたとおり少なめに、

「一〇〇〇本ぐらい」

と答えると、寝そべっていた彼は身を起こした。しまったと思ったが、口から出てしまった言葉は飲みこめない。恐縮している、「はじめて植えるには五〇〇本でも多すぎる。堆肥だけでも何十貫と使わなければならぬのだから」と叱られた。いまさら言い直すのもしゃくだから、神妙にしていると、高島が、「安井はアマゾンで事業をしていて、金があるから大丈夫だ」と、とりなしてくれた。この人たちは十数年もさんざん苦勞したすえにやっと、いまの胡椒園を育てあげたのだ。その胡椒をずぶの素人に軽く見られたので、しゃくにさわったのだろうが、こっちもアマゾンでは人に引けをとらぬ行商人と自負している。小僧のように説教をくらうのは心外であった。さすがに黒ダイヤの土地だわい。その鼻息の荒さに感心した。

ある老人の不吉な予言

私が焼いたあとの畑を整理して、農務局のトラクターで伐根、整地をするのを待っているころ、街道の出口にあるメルセアリア（雑貨店）のエラジオの父親だという老人が、薪を買う下見がてら遊びにきた。彼は瘦身鶴のごととまでは言

わないが、背の高いオランダ系かと思える人だ。まだ根株が一面に残っている畑を連れ立って歩いていると、

「この土地は雨季になると、雨水でながれるところだった」

と言った。まさかと思つて本気で聞いていない私に、彼は、

「冗談ではなく、本当のことだ」

と、説明をくりかえし、自分のむこうずねのあたりを指して、

「この辺まで水が来るのだ。自分はそのこの鉄道が敷設されるころからこの辺の土地をよく知っている」と、つけ加えた。そうまで言われて、このインテリらしき柔和な古老を信じないわけにはいくまい。不安に襲われたが、そんなことを知つても、もうどうにもならない。しかし、言われてみると、思ひあたる節がある。

中央の農道から高島側の畑の一角に、アサイー椰子の群落があつた。高島とのあいだの一区画の再生林の林相も似たようなものだ。高島は私の畑の焼け跡のアサイー椰子の根株を見て、「こいつは伐根に手間がかかる」と言っただけで、べつに気になるようなことは言わなかつた。気にもとめてない様子だ。

このアサイー椰子が湿地や沼地を好んで育つぐらいのことは、アマゾン育ちの私も知っている。いまは乾季でふつうの土地と変わらないが、どうも怪しいと気になりはじめた。や

がて、胡椒の支柱集めに追われているあいだに、不吉な話は忘れるともなく棚上げになっていた。

そのうち、この辺の有力者ガブリエル・エルメスの権力で、道路局のブルドーザーが入って、ガブリエルの畑の前面から私の隣の区画の小川まで、排水溝のある道路ができた。これで浸水の心配はなくなったと一息ついた。

粘土質の土地をつかまされて

この年の大晦日には一晩じゅう雨が降った。雨季の到来である。一九五五年の元旦の夜明けを待つのもどかしく畑に出ると、雨の降りやんだ空には、厚い雨雲が吹き立てられるように走っていた。

夜明けの畑一面に、火事場の放水跡か水田のように、無数の水たまりが白く光っている。支柱の根元に盛りあげた土に植えた苗まで水没しているところがある。休日で誰もいない。私はあわてて応急処置にかかった。昼近くなると薄日が射してきた。たまり水が生温かくなるので、急いだ。

このとき、私に土壌学の知識があれば、この粘土質の土地は胡椒には不適當だと判断しただろう。しかし、そう決めつけても、善後策を講じる勇気がなかった。心の奥に感じている疑問を、いまさら高島に相談してもはじまらないし、腹の

なかにおさめて注意深く様子を見ることにした。

モエマの土地で胡椒を植えている先輩は、ガブリエル・エルメスと高島だけで、二人とも去年はじめて収穫したばかりの三年樹を持っているだけだ。ガブリエルの畑は鉄道線路の向こう側の別荘地にあつて、三〇度の傾斜地だ。その農場の支配人はデンマークかポーランドの農学士だそうだ。

彼のもう一つの畑がわれわれの区画の並びにあつて、そこには三〇〇〇本ぐらいの一年樹が植えられているが、手入れされているわりには生育がよくない。その畑は平坦で粘土質である。畝ごとに排水溝を掘つて、道路用につくらせた排水溝に流しているのだが、充分ではないと見える。

こうして私がモエマの環境に悩まされはじめた大事なときに、私の胡椒栽培の先生である高島は、なぜかひんぱんにベレンへ通っていた。去年の収穫が終わった頃から、「いよいよこれからだ」と張りきつて、やれ肥料だ、やれ家を完成させるレンガだと気ぜわしくしていたが、そのうちに、共同経営者のフィゲレッドが出資をしぶつていると言つては、手ぶらで帰ってくるようになった。そして、その不満を私にぶちまけはじめた。

話の様子では、胡椒の値段が去年より下がり、はじめての収穫量も思わしくなかったらしい。収穫量が少なかったのは施肥が不十分なうえに、適切な時期におこなわなかったからだと高島は考えていた。

「値段が下がったといっても、一キロ一〇〇クルゼイロス（邦貨約一〇〇〇円）前後なら、ジユートの一〇倍もしている。施肥の手を抜けば、収穫量が落ちるのはあたりまえだ」と高島は憤慨した。フィゲレッドにすれば、インフレ亢進のときに高島が資金を湯水のように土のなかへ捨てている、と感じるのだろう。高島はベレンから帰ってくるたびに、目に涙さえ浮かべて憤慨をぶちまけるようになった。

「二年間汚い家に住み、辛抱して働き、農業融資をうけて買ったジープは、フィゲレッドが自家用車のように乗りまわして、胡椒園の役に立たない」などと言いだした。そんな状態が一月近くつづくうちに、胡椒園を手放す話が変わっていった。私はそのころ、自分の区画の入口に小屋を建てて、自炊していた。

ある日、さんざつぱら降った雨が上がった夕方、ベレンから帰ってきた私が小屋のまえに立つと、レンガの山が積まれている。高島の仕業にちがいない。翌日、高島に文句を言いに行ったら、彼はもう、サンタイザベルへ引っ越したあとだった。サンタイザベルの彼の借家を訪ねて行くと、「おまえもそのうち家を建てるだろうから、おれを助けると思っレングアを引き受けてくれ」と勝手なことを言った。そして、フィゲレッドと別れたことを告げられた。彼の万事軽はずみなやり方に腹が立ったが、滑稽で憎めないところがあるので黙っていた。

高島に出会った縁で、私はモエマの粘土に片足を取られてしまったのだ。いまさらじたばたしてもはじまらない。こんな関係になったのが、運の尽きかもしれない。災難だと思っただけであきらめるしかない。彼のことを「小さな辻小太郎」と評している人がいることも知っていた。新しもの好きで、好奇心に駆られてすぐ手を出すが、すぐ飽きてしまうところが、辻元総支配人にそっくりなのだという。

高島はサントイザベルへ引越すと元気を取りもどし、私を取っ捕まえては侃々諾々大風呂敷を広げたが、いつのまにか私の隣の区画を流れる小川の川下に新しく区画を求めて野菜づくりをはじめた。

ある日、高島がダミ声を張りあげて、蝶が羽ばたくように飛んできた。いかにもわれ働いているという感じで張りきっている。何事かと訊くと、モエマ植民地構想などという、どこかで聞いたような受け売りを吹聴する。内実は私に金を出させる話で、自分の区画へ通う道をトラックが通れるようにしたいので協力しろというのだ。

彼の話しぶりは、協力しない者は反社会的で理想のない個人主義者に聞こえてくるから不思議だ。まったく勝手な理屈に辟易する。彼の言う働くという意味は、縁台将棋と同じで、勝つても負けてもご破算にしてやり直す遊びごとのたぐいらしい。私はそんな相手をしているどころではなかった。

続々とやってくる移民船

前年（一九五四年）、モエマに来てまもなく、南米移住旅行社を経営しているという清原堅一（高拓五回生）から、二十年ぶりに、懐かしい手紙を受け取った。彼は太平洋戦争がはじまると、交換船で日本へ帰ってビルマ戦線に出征、無事生き残って帰還した。

彼から手紙を受け取ると、私はこれ幸いと、私の次弟の真のブラジルへの呼び寄せの手続きを頼むことにした。五月ごろのことで、そろそろ雨季の明けるシーズンだった。真は特殊潜航艇で出撃中、爆撃にあって九死に一生を得て浦賀に復員したが、家には帰らず、廃墟の日本で生存競争の渦のなかでぼろぼろになっていると聞いていた。

それから半年あまり、一九五五年一月十九日、次弟の真はぶらじる丸で到着し、その足でサンジョアンキンへ行っただけだ。日本の家族や親戚とは、いままで手紙のやりとりや慰問袋などですませていたが、弟の呼び寄せがきっかけになつて、敗戦日本の現実が私の上に覆いかぶさってきた。

あちこちからさまざまな手紙が舞いこんで、わずらわされるようになった。両親や親類に二十年ぶりの挨拶のつもりで写真を送ったのもよくなかった。それは敗戦日本に、アマゾンの印象を誤って伝えてしまったようだ。

その写真は一世一代の思いで、洋服を新調してベレンのフォト・ギャラリー（写真館）で写したものだ。そんな写真を見れば、アマゾンが一躍文明化して、豊かになったかのように勘違いするのはあたりまえだ。舞いこむ手紙は、言わずと知れた援助を求めるもので、とどのつまりは移民になりたいというものだった。

移民移民といっても、誰もが適応できるものではない。私のはれっきとした移民であるが、二十年たったいまでも、貧弱な土の上を這いずりまわっている藁しべで、人を救済できる力などあるわけがない。

自由勝手に生きているわけではないし、自分のことで精いっぱいなのだ。

それらの手紙に目を通すと、瀕死の戦友を路傍に見捨てる思いに沈んで、返事が書けなかった。暗いランプの明かりのもとで、情けない思いにとらわれていると、外の闇では「オーイ、オーイ」と、さかんに私を呼ぶような蛙の音が寒気を誘って哀れである。

そんなときに、辻商会の江村良造副社長から、半強制的にベルテラ・ゴム園の移民一家の一時受け入れを振り当てられた。ベルテラ・ゴム園というのは、ベレンから約七五〇キロ、アマゾン河本流とタパジョース河支流の分岐点付近に、米国のフォード社が一五〇万ヘクタールの土地の無償譲渡を得て、一九二七年に造設したゴム園である。しかし、東

南アジアのゴム園に押されて採算が合わず、一九四六年にフォード社からブラジル政府に売却された。戦後、一九五四年から一九五五年にかけて、三回にわたり一二二家族、七五人の日本人が移住したが、現地労働者を圧迫するということで、突如、退耕命令が出され、その転耕先として受け入れを求められたのだ。胡椒の樹がまだ小さいので、この一家が野菜の間作で生活ができるようにして引き受けた。彼らは半年ほど慣れてくると、線路の向こうに土地を見つけて引越していった。

一九五四年に辻小太郎が日本からの移民受け入れ機関として、アマゾン経済開発株式会社をベレンに設立したので、この年から一九五五年にかけては、毎月のように日本からの移民船が入港した。同社の植民地指導に、越知栄、高村正寿、藤島正徳ら高拓関係者があたった。

新造のぶらじる丸、あるぜんちな丸などは、遠い水平線にかすむベレンの町と匹敵するような巨体をイコアラシーの沖合に横たえた。吃水が深くてベレン港に入れないのだ。熱帯雨林を背景に白く輝くその姿は、祖国の敗戦の影を感じさせない、誇らしげな姿に見える。

私は身元引受人になって、アマゾンに移住する呼び寄せ青年が来るたびに、ベレン港から舳で迎えに出た。一九六三年までに二十家族、三十人を受け入れた。甲板はおびただしい引越し荷物で山のようになっている。そのなかに戦に疲れ

たような家族が、運命に身をまかせきつたように控えている。荷物のなかにはオート三輪や発動機らしきもの、風呂桶まであって、それらといっしょに懐かしい柳行李が山積みにされている。

ときどき、船員が子どもたちを追い散らす声を上げる。

「どいた、どいた、じゃまだ、じゃまだ」

と叫んで、ホースを引っ張って走る姿と声は、まったく懐かしい日本人のそれだ。その声には敗戦の響きはなかった。船の食堂からは食器の触れ合う音にまじって、日本の哀調を帯びたメロディーが流れてくる。呼び寄せの若者たちは、とんでもない質問をやたら浴びせかけて面食らわせるかと思うと、目の下の濁流を見て、「これを飲むのか」と尋ねるので、当然のことだという顔を向けると、「こんな水を飲んだら、明日はかならず大腸炎だ」と断冒して、アマゾン育ちの意表をつく。

暮色が迫ってきて、モスクーロから帰る避暑客を満載した連絡船が、ロッキンロールのサウンドを振りまいてベレンへ急ぐ。やがて、潮時を見て、最後の舢舨が移民船を離れる。南伯へ去る人とアマゾンへ残る人たちは、長い航海で結ばれた縁を惜しんで、互いに「幸あれかし」と励まし、別れていく。互いによび交わす「ガンバレー、また会おうぜー」の声のなかには、子どもの声もまじっている。それは、あの佐渡と丹後の由良へ引き裂かれていく『安寿と厨子王』の物語の親子

の姿と重なった。そう聞こえたのは私の気のせいだろうか。センチメンタルな別れをよそに、機関の排水音が無情に響きわたった。

胡椒には最悪の土地

一九五五年も暮れて、また雨季が来た。楽しみに見守ってきた胡椒の育ちがおかしい。大小の差が目立ってきた。苗にもよるようだが、支柱の上まで伸びて杉状になっているのは、全体の二〇パーセントにも満たない。ひどいのは支柱の半分にも達していない。

私の感覚では、土地のせいのように思えてならない。人に訊いても、学問的なことは教えてくれるのだが、納得がいかない。思いあまつて、大橋敏男を訪ねて、一度私の畑の現場を調べて対策を考えてもらうことにした。

彼は快く視察に来てくれた。むずかしい表情で長いあいだ考えていたすえ、

「この土地は何か冷たい感じがする」

と言った。私は質問に窮したが、

「それではいったい、どうすればよいのか」

と聞き返すと、

「いまの排水溝ではだめだから、一畝ごとに排水溝を二メートルぐらいの深さに掘り下げてみる」

と答えた。私は啞然とした。そんな畑など見たことがない。このとき、この土地はだめなのだと悟った。大橋はそこまで言えないので、試してみると言っているのだ。

彼は話題を変えて、

「数年まえまでは胡椒一キロでジャバ（干肉）が一キロ買えた。ジャバ一キロの値段が一日の労働賃金だったが、いまでは胡椒三キロ以上なければ一キロのジャバが買えなくなりました」

と冗談めかして、インフレの元進と胡椒の値下がりで、営農が苦しくなっていることを説明した。彼を送りだして、私は対策を考えた。暖かい丘陵で湿気がない土地を選び直して、一からやり直すしかない。それに胡椒ブームのピークは去ったと考えるべきだ。世間では、胡椒の値上がりは十年ぐらいの周期があると言ってはいるが。

あの夜、寝そべっていた加藤三郎が起きあがって、私に説教をした意味がやっと納得できた。高島が胡椒栽培をやめたのも土地がだめだったからだ。しかし、高島自身はそのことに気がつかないまま、嫌気が差してやめてしまったにちがいない。

押しつける相手もないし、逃げだすところもない。アマゾンへ帰って見たところで、ジュートも牧場も限界に達している。それ以上に面白いこともできない。まず、サンジョアンキンで頑張っている共同経営者の山崎太郎と戸口恒治と菓

師神光雄に現況を報告しなければならぬのだが、行きづまった話を持ちだせば、甲斐性なしの無能者というレッテルを張られてしまいうだろう。

胡椒に陰りが見えたといっても、アマゾンで有望な永年作物は胡椒しかないのです、銀行の農業融資の対象に認められるのだ。そこで、アマゾン奥地やトメアスから移転してブラガンサ鉄道沿線に広がった日本人は、土地さえ手に入ればブラジル銀行の農業融資がうけられるので、その融資でトラクターを購入して大規模野菜園をはじめた。また、鶏を飼育して、その鶏フンの堆肥を利用して野菜園の跡へ胡椒を植え付ける方式で、大量生産に挑んでいた。黒ダイヤのブームに乗って成功した胡椒園主は、機械化をして利益を上げることがを考えていた。

いつまでもこの事態を三人の共同経営者に知らせないわけにはいかないのです、私なりに実行できる案を書いて、彼らの反応を見た。胡椒を育てるには、適地のトメアスに移転しなければならぬこと。入植しなすなら、私はそこへ行くという相談をした。ところが、本当に行く気があるのか、という返事だった。たしかに、本当に行くのなら土地を選択しなければならぬ。おいそれと引越すこともできないのだ。

胡椒を植えて三年目、一九五六年の初の収穫量は、たったの五〇〇キロだった。実質、胡椒の樹は一〇〇〇本しかなく、残りの五〇〇本はふつう以下の出来だから当然である。

同じように手をかけた樹に、どうしてこんなひどい差が出るのだろうか。他の胡椒園とくらべて見劣りしない樹は、不思議にもピッサーラ（砂利）混じりの土地に育っている。

一九五七年早々、山崎太郎と戸口恒治はパリンチンスの川上頭二（高拓六回生）の家で、共同結婚式を挙げた。二人とも一年以上もまえからつきあっていた恋人と結婚した。そのときの戸口の手紙では、≪今年、ジュートの値は一五クルゼイロス（邦貨約一五〇円）、グアラナは八〇クルゼイロス（約八〇〇円）になっている。しかし去年はジュート二〇クルゼイロス（約二〇〇円）、グアラナ三〇クルゼイロス（約三〇〇円）でも買い手がなかった。ことにグアラナはきわもので、あつかうのは善し悪しだ。フアリーニャ（マンジョカ粉）がよい値段になって、手取り二〇〇クルゼイロス（約二〇〇〇円）している≫と、農産物の価格状況を知らせてきた。

胡椒の不作で意気があがらない私には、マンジョカ粉の値上がりは嬉しい便りだった。

また雨季に入ったので、いままで疑問に思っていた胡椒園の土のなかを調べて見た。アサイー椰子が多く生えていたあたりの貧弱な胡椒の樹を支柱からはがして引っこ抜いた。茎の根元は親指の二倍ぐらいの太さがある。しかし、土のなかではぶつつり切れたように直根がなくなっていた。わずかな鬚根が地表に食いついて生きていたのだ。

直根の痕跡は黒い繊維となってわずかに残っている。この

状態から察するに、腐敗菌による根腐れではなく、雨季のあいだに粘土質の土で水分が飽和状態になって窒息したのであろう。こんな状態になる植物は、アマゾンにはたくさんあった。これでは地中に施した肥料は何の役にも立たない。

肥料の穴にもひどいものがあって、腐敗して悪臭を放ちながら底にたまっているところがあった。粘土の穴はセメントと同じように排水しないのだ。いくら排水溝を掘っても役に立たないことがわかった。

思いだすのは、あのエラジオ老人が指摘した事実である。彼は昔、マンジヨカをつくったことがあったのか、あるいはこのあたりの住人の話でマンジヨカ芋が腐ってできないことを知っていて、私に注意したのであろう。

もっと大きな問題があることもわかった。井戸である。掘るときに、六メートルぐらいで地下水の層に当たった。この井戸は乾季には底が干上がりそうになるが、雨季の最中には口から一メートルほどのところまで水面が上がる。井戸を掘ってから二年目ぐらいのとき、細筆の先ぐらいのナマズらしい幼魚を汲みあげたことがある。

その不思議な現象を忘れてしまったところに、またナマズの幼魚を汲みあげた。全部で三匹になったので、もう鳥のいたずらですませてしまうわけにはいかない。ナマズの幼魚が井戸のなかで生まれるわけではないので、地下水脈が小川につながっているにちがいない。地の底に流れがあって、雨季とも

なると、その流れが井戸のなかを持ちあがってくるのだらう。モエマの土のなかには魚が棲めるような伏流水があるのだ。こんな土地に野菜ならともかく、いちばん不適切な胡椒を植えたのが運の尽きである。交通の便利なこの土地が、長年放置されて、マンジョカも生産されなってきたこと自体、疑うべきだった。

写真結婚

こんな、かつては河岸か入江だった土地に胡椒を構えても……と心が腐っているころ、上塚元校長から、「よい機会だから、結婚せよ」とさかんに言われていた。

しかし、ちっともよい機会などと言えるときではないので、長いあいだ放っておいた。遠い日本からでは時が明かないと考えたらしく、「校長からの命令だ」と言って、ヴィラ・アマゾニアの戸田善雄ドクターから督促の手紙が届いた。その手紙には、督促のときの決まり文句が並べてあった。機会だとか時期だとか言われても、返事のしようがない。私はもう四十歳近い。ソルテロン（老独身者）と世間ではよばれている。いわば宵越しのパンか、二番煎じのお茶のような人間だ。現地人カボクロの村かさびれた町の住人になって生涯を終えるかもしれない。それでも来てくれるならありがたくお受けしますが、会ったこともない女性に進んで結婚するとか

したいとか、厚かましいことを言えるはずはありません、と返事をしぼつていると、上塚元校長の信用で話がどんどん進んでいくらしく、写真を送らなければならなくなった。移民のあいだではあたりまえになっている「写真結婚」は他人事だと思っていいたら、私の番がきたのだ。

そこで、私は相手の女性に、

「私のようなソルテロンとは、よく調べてから結婚しなければならぬ」

とあえて赤信号を送っておいた。当時、彼女は二十三歳で新潟県の柏崎の高校の教師をしており、母一人、娘一人の一人っ子だという。父親は彼女が三歳のとき戦死したそうだったのだらう。

そうこうするうちに、十二月に入って、入籍したと親から知らせがきた。まもなくして、結婚写真だという、婿殿不在の正装した花嫁の写真が送られてきた。

一九五八年が明けた。モンテ・クリスト伯の夢などにうつつを抜かしてはいられない。婿殿は貧乏のど真ん中にいることに目覚めて、あわてた。職人を雇える状況にはないので、自分で棟梁から大工、左官までつとめることにした。いくらなんでも所帯をもつのに収納小屋兼厩舎ではぐあいが悪いので、台所と居間をレンガで増築することにした。見よう見まねの作業は遅々としてはかどらない。半年たつても新居はで

きあがらず、そうこうするうちに六月になってしまった。

「日本移民五十年祭式典に出席の三笠宮ご夫妻をお迎えしろ」という通達が来た。レンガ積みの作業ですっかり日に焼け、人種も判別できないほど焼け焦げた姿のままベレン空港に駆けつけると、その姿のまま空軍クラブで両殿下の拝謁を賜った。

新居は結局、十一月になってやっと完成した。焼け焦げた姿を「洗濯」している暇もなく、前夜イコアラシーの沖に入港したぶらじる丸に、花嫁を迎えに駆けつけた。

輸送監督の尾崎龍夫（高拓二回生）の引き合わせで、あらためてお見合いをした。花嫁にじろりと睨みつけられたが、どうやら及第点をつけられたらしい。そして、十一月二十二日にモエマの隣町、ベネデビスの近くにある友人の牧場で披露の園遊会を催した。

ベレンの総領事以下、二十年来世話になった人たちを七〇人から八〇人招待した。ベレンからベネデビスまで約三〇キロの間を、招待客のために列車を借りきった。この不況の最中にある。この年の胡椒の収穫は四トン近かったが、やはり地味の不良と肥料の流失で、たくさんのはいつていない殻）が出たのだ。胡椒の収益は披露宴に消えてしまったが、痩せたりといえども黒ダイヤ、写真結婚を無事終えた。

私は四十一歳、妻信子は二十四歳だった。

相変わらずの自転車操業

環境への適応能力に欠けた男と、西も東もわからない女の所帯では、貧乏するのもやむを得ない。選り好みをせずに仕事をすればよいのだが、結婚したからといって、あわてふためくこともあるまい。こんな私を見かねてか、高島たちが、サンジョアンキンの共同経営者たちに「資本を出させろ」とか、「サラリーマンをしたからといって、恥ずかしいことはないのだぞ」と、心配して言ってくれるのはありがたいが、蝶の羽ばたくのが働きだと思ったり、へぼ将棋の遊びを真剣勝負だと考える「先生」たちの教示に、素直に従うわけにはいかない。

私がウチュー・ヤスイ合名会社に積みあげている資本を小出しにするわけではないだろう。資本をつくるのはたいへんなことなのだ。自転車操業程度のことなら、このモエマの不良区画でもできる。胡椒が斜陽だといっても、世話をしやれば、土地も家もあるのだから、なんとかしのいでいける。

一九五八年末に戸口から手紙がきた。

「人生の半ばを迎えてから八年間、報いられない努力をされてきた貴兄の心持ちは、想像以上に苦しかったと思う。割に合わない部署を受け持ったのが不運なので、貴兄の責任ではない。あまり気にするな。新しい事業をはじめようだが、

どんな仕事か。どのくらいの資金が要るか。月々の必要額を知らせてくれ。それによって山崎と相談する。当方インフレのために手持ちの金を残さず商品に換えているので、予算の都合がある。至急返事をくれ」ということだった。資本の小出しはやめたほうがいいので、放っておいたら、胡椒園はどうすることに決めたのか。当方から送金すべき毎月の予算も知らせろ」と、また彼から手紙が来た。

援護射撃をしてくれるのはありがたいが、時すでに遅し。戦機は去ってしまった。チャンスが来るまで資本を大切に蓄えておいてほしいのだ。私はじっと待った。

こうして一年半が過ぎた一九六〇年六月三日、来週にはベレンの産院へ行かなければならないと思っていた矢先、赤ん坊が生まれそうになってしまった。私は不意を突かれてあわてた。米軍時代の古いジープで夜道に飛びだした。

しかし、私は産婆の住んでいる家を知らない。このあたりの道はまだ雨季が明けたばかりで、とても悪い。産婆の家を探しあてることで頭がいっぱいで、心は上ずって、車がぬかるみに突っこむたびにアクセルをふかしすぎてエンコした。耳のなかに、産気づいて叫んでいた信子の声がよみがえる。ますます頭に血がのぼる。だらしない男だと、舌打ちして気を静めた。

再生林の林のなかに、やっと産婆の家を探しあてた。連れて帰ると、放るようにして産婆をジープから押しだした。一

息つくくと、すぐに赤ん坊が生まれた。すでに夜は白みかかかって、目を覚ました鶏が薄暗い庭のなかを、雛といっしよになつて走りまわっていた。

娘の名を青葉・エジナと付けた。この名前をつけたのは、この年のミス・パラ州がエジナという名前だったことと、窓の外にアバカテ（アボカド）の樹やカジューの青葉が繁っていたからである。この青葉を見て、ある詠進歌を思いだした。それは「故郷を思う心でよる窓に、アバカテ青葉の夕かげりして」という、一九六〇年一月の宮中歌会始の入選歌である。勅題は「望郷」で、ブラジル移民が詠んだ歌だったが、作者の名前は忘れてしまった。

まだ土地の食べ物にも慣れない信子には、この娘を心頼みにして、望郷の心を癒してほしいと願った。

大雪に閉ざされ、陰鬱な日本海側の僻村に生まれ育った彼女は、「太陽がさんさんと降り注ぐ土地に憧れてアマゾンに嫁に来た」という。赤道直下のアマゾンには、たしかに太陽の熟と光はありあまるほどあるが……。

このころになると、共同経営者たちは、胡椒園の失敗と、ぼやぼやしている私にますますやきもきしていた。

しかし、私に言わせれば、そうそう簡単にチャンスは来ない。チャンスなどというのは、一生に一回来ればしめたものだ。ふつうチャンスだと思っているものは、きざ波のようなもので、そんなものを資本がない者が追いまわしても、本当

のチャンスに出会えるはずがない。

「動かざること山のごとし」と言うじやないかと、動きたい思いを抑えて辛抱しているほうが精神的な苦しみは大きいのだ。私は相変わらず自転車操業で生きていた。

手間のかかる胡椒栽培

この年の十月のぶらじる丸でやってきた、呼び寄せ青年の森昭男を迎えた。アマゾン行きに適切な便がないので、しばらくモエマで船待ちをしているあいだに、彼はサンタイザベルの町で、日本人青年の仲間に入って、日曜日ごとに野球をするようになっていた。このころには、モエマ地区にも二〇家族ぐらい日本人が増えて、野菜をベレン市に供給するかたわら、胡椒を植えていた。

いよいよ便船が出るといふときになって、彼は、
「アマゾンの奥には怖いから行きたくない」

と言いだした。無理もない、アマゾンでは野球もできなければ、友だちもないだろう。私自身、アマゾンは時間の停滞した十年一日のようなところで、希望を満たすものは何もないと思っっている。そんな私には、彼にむかってアマゾンを礼讃する資格などない。しかし、私は彼に、「約束を途中で投げだすのはよくない。男がアマゾンを見ないで怖いというのはおかしい。一度行ってみて、怖ければ帰ってこい。ここの

胡椒園は見たとおりのありさまで、仕事もないからおいてやるわけにはいかない」と言って、ベレンへ連れだした。彼に乗る便船はサンジョアンキンへ直行する行商船である。船は夕方の上り潮に乗って出港するので、時間をつぶしていると、元気な声をあげて二人の青年が近づいてきた。彼らも私の呼び寄せた青年である。一別以来の挨拶のあと、いまはモンテアレグレでカカオ園を經常していると話した。彼らも同じ便船でモンテアレグレに帰るのだった。渡りに船と森を紹介して、

「森はアマゾンが怖いと言って、行くのをいやがっている。きみたちといっしょなら心強い。よろしく頼む」と言うと、二人は大声で笑った。森もそれを見て心強くなったようだ。

私は相変わらず胡椒を育て、鶏を飼い、乳牛を飼って自転車操業をつづけているうちに、信子は下着も買えないような状況に追いこまれた。さすがの彼女も、「山崎さんや戸口さんたちの援助を素直にうけてもいいのでは……」と、口にするようになった。それでもなお、アマゾンで辛酸をなめた私は、信子にいい加減な返事をしてやり過ぎしていた。

私はパラエンセ産業組合に入っていたので肥料は手に入り、必要に応じて施していた。パラエンセ産業組合というのは、ベレンとの隣接地コケイロで一九五六年に、胡椒栽培者の大橋敏雄、大橋康雄ら六人が設立した組合で、現在はパラエンセ総合農業組合と改称して、サンタイザベルに本部をお

いている。

しかし、いくら肥料を施しても、胡椒は見かけによらず批（ひ）がたくさん出た。この土では根が養分を吸いあげるまえに、太陽熱と水でやられてしまうにちがいない。野菜を育てるように、年じゅう、こまめに施肥しなければならないだろう。

まったく、「ピメンタ・ド・レイノ（王様の芥子）」とはよく名づけたものだ。とても贅沢で手のかかる作物なのである。

年が明けて一九六一年、また雨水の流れる季節が来た。雨季たけなわの四月、カリスマ号という一二〇トンの行商船を手に入れたと、サンジョアンキンの共同経営者たちから知らせがあった。この船はもとは砲艦だったという鉄製の船である。いよいよベレンに出ていくことになるのだが、運営資金がたいへんである。

世はインフレの最中である。うっかり銀行の融資に頼ることとはできない。船はいつも荷を満載にしなければ赤字である。希望が生まれた反面、ますます辛抱しなければならぬ。しかし、時節は一転しはじめたのだ。

全滅した胡椒園

一九六二年十一月二十四日、次女が誕生した。今度は早くから貸室を求めてベレンへ出た。戸田善雄ドクターがヴィラ・アマゾニアから近くに移転してきていたので、彼の世話になった。アマゾン大江の入り江で生まれたので、海江・ジアナと名づけた。年末に末弟の達夫から便りが来た。父の訃報である。享年七十九歳十か月と記されていた。まえまえから覚悟していたとはいえ、しまったと思った。取り返しがつかないという感じが胸中に広がった。何がしまったのか、何を取り返しがつかないのか、自分にもわからない。胸に湧きあがる言葉も感情も、そうとしか言いようがないのだ。あとで考えてみれば、モンテ・クリスト伯になるのが遅かったという感情だったと思う。

信子は、「親が亡くなった年には、よいことなどあるはずがない」と、私の無力を慰めてくれた。また、この年、共同経営者の一人、薬師神光雄がイタコアチアラに店を開いて去っていった。

一九六四年は東京オリンピックの開かれた年だが、ブラジルのジョオン・ゴラール大統領が、キューバと親密になり、世相が左翼化してきた。二月ごろからベレンの近くを流れるトカチンス河が氾濫した三月末ごろから政情不安となり、一ドルが二〇〇〇クルゼイロスに迫ってきた。四月一日になると、軍部がゴラール大統領打倒を叫んで首都ブラジリアへ進

撃。翌二日になると、下院議院議長が臨時大統領となり、ゴ
ラール大統領はウルグアイへ亡命した。

そんななかで一九六四年四月五日、三女が生まれた。母親
の信子は男児を期待していたし、革命のど真ん中に生まれた
ので、勇ましい名前をつけて、歩・リリアンとした。昔、ハ
リウッド映画にリリアン・ギツシュという人気女優がいて憧
れていたのだ。

この政情不安のなかを、私はベレンへ出た。高島のところ
で日本食の材料を買いながら、亢進する大インフレをどうく
ぐり抜けていこうかと考えていると、「革命軍が進撃してき
て、道路が遮断されるかもしれない」と、あちこちで流言が
飛んだので、急いで帰ってきた。東北伯には豪雨がつづいて
いた。

モエマも雨季の真っ最中である。あのエラジオ老人の予言
どおり、粘土質の畑の畝という畝の排水溝は、全部小川に
なって流れていた。アサイー椰子のあったあたりの溝の両壁
は水苔が生えて青くなっている。

五月になっても乾季の兆候は見えず、雨が降りつづく。こ
の年、マツカーサーも、インドのネール首相も死んでしまっ
た。

六月になって雨が遠のくと、急に暑い夏の日射しを浴びた
小川は、水が温まり、土の表面にたまっていた雨水は湯に
なった。いままで鈴なりになっていた胡椒の実は、黄色く

なった葉といっしよに、土の上に散乱していった。

胡椒園は気持ちのいいぐらいに全滅してしまった。サンタイザベル地方の胡椒園も滅亡に瀕してしまった。また、全盛を誇っていたコケイロの胡椒園も全滅した。地中から湧きだした地下水と雨水にやられたのだ。いくら腕があっても、自然の力には勝てない。私は黙ってそれを眺めた。これでさっぱりとモエマを捨てて、本格的にアマゾン河の通商に踏みきる決心がついた。天はすべて一視同仁である。ベレンのジョゼ・マルシエ街に小さな家を借りると、妻と三人の女兒をボンコツのジープに乗せて、凱旋するように、渡り鳥が繁殖地を離れるように、モエマの胡椒園をあとにしたのだ。

残念ながら、十年目の黒ダイヤブーム再来の夢を見ることなく、胡椒の実が黒い批となって散乱する現実を見たのだ。黒ダイヤどころか、ただの南京玉（ガラス玉）である。ここで私は十年の歳月を棒に振ったおかげで、アマゾンの本質をかいま見ることができた。長いあいだの屈折も雲散霧消して、清々した気分になっていた。

ブルブルと速力のないジープの走る街道筋には、インガ（マメ科の木で、ネムの花に似た白い花が咲く）の白い花が咲き誇って、甘い香りを放っている。胸いっぱいその香りを吸いこむと、サンジョアンキンにアマゾンの水が満ちてくるころ、牛糞とぬかるみにまみれた牛の柵囲いのかたわらに、この花が芳香を放っていた季節を思いだした。

朝夕、サビア（ブラジル鷺）の鳴くモエマの地を捨ててしまえば、私たちは否応なく都会人になっていく。文明世界にもどってしまったらと、二度とアマゾン河へ帰ることはあるまい。文明は一朝にしてならずだが、男と女の流す血と汗と涙を何代も重ねて跳ねているうちには、人間嫌いのアマゾン河にも文明の華が咲き誇る時節が来るにちがいない。

察するところ、その華はインガのようなかぼそい花ではなく、太い刺をもつ水生植物の群落を割って燃え出するように咲くヴィットリア・レジア（オオオニバス）の真っ白の大輪に似て、日射しの移ろいとともバラ色の花と化し、あせていく姿に似たものだろう。人間万事塞翁が馬とは、よく言ったものだある。

エピローグ

アマゾン開拓をあとにして

ベレンでの再スタート

私は一九六四年、全滅した胡椒園を捨てて、家族ともどもベレンへ移った。ウチユー・ヤスイ合名会社の共同経営者たちが二年まえから、鉄鋼船カリスマ号でベレンからマナオスの近くまで広範囲にレガトン（交易）をはじめており、私はこの事業における、さしずめベレンの“駅長”の仕事に就いた。ベレンで砂糖、コーヒー豆、砂糖キビ焼酎、香辛料、機械油などの物資を積みこむ手配や作業にあたった。山崎太郎の乗ったカリスマ号はアマゾン沿岸の町や、支流の村に寄港しながら、その土地の産物と物々交換して上り下りする。

ふつうは一航海三か月、年に四回往復するが、山崎は年に八回も往復した。商品の回転を早くすることで価格を下げ、スケジュールも正確なので信用を得た。その後、一九六七年に、会社の発展と、山崎太郎と戸口恒治と私の三人の共同経

営者の結婚にともなう家族の成長、そして事業の変化も勘案して、ウチユー・ヤスイ合名会社を解散し、その事業を引き継ぐために、コメルシオ・イ・ナベガソン・サンジョアンキン有限会社をベレンに設立した。本部はサンジョアンキンにおき、山崎と戸口にそれぞれの夫人、山崎テルと戸口久子が新しくメンバーにくわわった。私はこれを機会に会社から手を引いた。山崎の凡帳面な性格とテル夫人の商才によって、新会社のレガトンはおおいに繁盛した。

ウチユー・ヤスイ合名会社の解散後、私は農機具や肥料、農薬などの販売と病院建設の現場監督のアルバイトのほか、多種多様の仕事を渡り歩いて食いつなぎながら、社会勉強をしたつもりである。

また私は一九六七年三月に、汎アマゾンア日伯協会監事に選出され、五月にはアマゾンア日本人援護協会監事に選出された。

汎アマゾンア日伯協会は戦後の日本人移住が再開されて五年目、一九五八年に各入植地代表が参集して設立されたもので、当時、アマゾン地域に在住していた約七〇〇〇人の移住者とその子弟で各地に結成されていた日本人会を統合団結して、その親善と日伯交流を目的としていた。初代会長には辻小太郎がなり、翌年の十一月にはアマゾン移住三十年祭が盛大に催された。

アマゾニア日本人援護協会のほうは、当時の日系人社会の情勢から、日本人移民の定着と福祉援助をおこなう組織の必要性が高まり、一九六五年に設立された。その後、日系社会の地位発展と社会情勢の変化から、日本人移民だけを対象にしたイメージから脱皮するために、一九七四年にアマゾニア日伯援護協会と改称された。

私は一九七一年四月から八三年三月まで汎アマゾニア日伯協会の事務局長をつとめたが、在職中から絵の勉強をはじめた。幼年時代から絵が好きで、横浜からアマゾンに向かうとき、叔父から「何が欲しいか」と訊かれて、所望したのが油絵の道具だった。アマゾンの開拓に取り組んだ軌跡を残したいと描いた、原生林に追いつめられた牛の絵が永井正画伯の目にとまり、推薦されて一九七九年、パリのサロン・ド・ドーンヌに出品することができた。永井画伯はフランスで長く修業して、サンパウロをベースに活躍していた。

事務局長を退いた八三年の夏には、サンパウロ文教展に入選。あれこれ挑戦しているうちに三文絵描きぐらいにはなったようだ。一九八八年七月には、五十四年ぶりに帰国して、東京都立川市ではじめての個展「安井宇宙展」を開催することができた。一九九二年七月にも立川市で二回目の個展を開催。このときには日本高等拓殖学校の上塚司校長の孫にあたる上塚芳郎医博夫妻、木内謙一元教授夫妻、数年まえに帰国していたモエマ時代の胡椒園の“先生”高島将元らが駆けつ

けてくれ、旧交を温めると同時に、辺境の絵描きにとってたいへんな励ましになった。木内元教授は戦後、公職追放にあつたりして苦勞されたが、九十一歳の現在も壮健で、長野県佐久市で天気の良い日は野菜づくりをやっているそうだ。

高拓関係者のその後

今年（一九九八年）の一月に八十一歳の誕生日を迎えた私は、老骨に鞭打ってベレンに妻と次女の三人で暮らしている。八十の坂はなかなかきびしい。高拓・アマゾン産業研究所の関係者も、アマゾン流域では二〇人あまりになった。一回生の秋山桃水（東京三菱ブラジル銀行勤務）先輩が、一九八五年から独力で編集発行をつづけている「高拓会会報」によると、一九九七年十月現在、高拓生二四八人のうち、生存が確認されているのは四五人である。物故者一五四人、そして五〇人近くが消息不明だ。

ウチュー・ヤスイ合名会社設立当時の共同経営者の一人、薬師神光雄は、まえにふれたように一九六二年にアマゾナス州イタコアチアラに店を開いて去った。その後、サンタレンに移転して間もなく死去した。

戸口恒治はコメルシオ・イ・ナベガソン・サンジョアンキンを三年ほどで去り、パリンチンスに移転して店を開いた。

ベレンで学んでいた子どもたちもパリンチンスにもどって、家業を継ぎ繁盛している。

家督を譲った戸口は夫婦で旅行に出かけ、大西洋岸を南下中、八六年一月にフォルタレーザで永眠した。

山崎太郎夫妻には子供がなく、日本から甥を呼び寄せて後継者に育てるつもりだったが、甥はレガトンにはむいてなく、帰国してしまったので、山崎は一九七七年にコメルシオ・イ・ナベガソン・サンジョアンキンを閉鎖して、船も売却。その後ベレンに出て八一年から八四年まで汎アマゾニア日伯協会の会長をつとめた。その後肺がんを患い、日本に帰国して療養中の八六年五月に亡くなった。

健在の高拓四回生のうち、馬場康二は、パリンチンスから船で九時間、ラーモス水道流域で牧畜と商業を営んでいる。そこからさらに三時間遡ったバレイリーニャでは、伊原只郎と半田二郎が牧畜と商業をつづけている。

一九九三年八月、私は三女の歩・リリアンと彼女の友だちとで半田牧場を訪ねた。いまだに電気も水道もない高床式住居に半田は一人で暮らしている。たしか東京の銀座界隈で生まれ育ったと聞いていたが、都会生活は性に合わないという。住居のまえの小川を隔てた牧場は約一万ヘクタールもあって、果てしなく広がっている。私より二歳年上の半田は最近牛の頭数を減らしているそうだが、それでも一〇〇〇頭前後を所有していた。ソシエターデの約束で半田に預けて

いた私の牛一〇〇頭ほどは、一九九〇年頃にに妻の信子に譲った。一九八一〜八四年ごろは一〇頭売れば、日本への旅行費用が出たが、現在は一頭二〇〇キロ前後の若牛が三二〇ドルぐらいで、売るのに苦勞するご時世になっている。

石黒糸吉はサンジョアンキンに移って間もなく、家庭をもつためにオビドスの近くに土地を求めて、ジユート栽培に励んだ。のちにモンテアレグレに移転して、移住事業団（のちの国際協力事業団 JAICA）の計画移住促進に協力。モンテアレグレ農業協同組合の再建に尽くし、現在もこの農協の理事長をつとめている。石黒の三男は一九九二年モンテアレグレの副市長に当選した。

四回生の団長をつとめた丸岡京は、現在ベレンで健在だが、一九六七年当時、ジュルチーでジユート栽培を手広くやり、自分の耕地内に小学校を建設。ブラジル人の女の先生を雇って現地人労働者の子どもたちの教骨に貢献した。その学校は町に寄付したそうである。

上塚司元校長は戦後、東京に「アマゾン会」を発足させ、援護射撃を送りつづけていたが、一九七八年十月二十一日、八十八歳で永眠した。入浴中にぽっくり逝かれたそうである。

一回生の引率者で現地のリーダーだった越知栄元支配人は、晩年はベレンで老人会の会長をつとめて、一九八八年五月に亡くなった。

高村正寿・元サンタルジア植民地支配人は一九九三年にマナオスから帰国。その後、消息を絶っていたが、現在は静岡県内の特別養護老人ホームに入所しているのがわかった。記憶はたしかで、敬老の日などにはポルトガル語でブラジルの歌を歌って聞かせるそうだ。

ジュート栽培者の血と汗で建設したヴィラ・アマゾニアの八紘会館は、戦後荒れるままに放置されていたが、一九九六年九月に鬼瓦を除いて取り壊された。鬼瓦はマナオスの文化会館に保存されている。

あとがき

一九八〇年代半ばに入ってブラジル経済は破綻し、年一〇〇パーセント以上の異常なインフレがつづき、農業や商売をしてもインフレに追いつかない。五十年まえとは逆にブラジル生まれの日系二、三世が仕事を求めて訪日することが多くなった。経済大国になった日本でまとまった金を稼ぎ、家や車を買ひ、事業資金に充てる、いわゆる出稼ぎブームが到来した。

日本は時あたかもバブル景気の真っ最中で、人手不足が深刻になっていた。とくに3Kと言われる「きつい」「汚い」「危険」な仕事に、日系人の労働力が歓迎された。

現在、ブラジルの日系人は約一三〇万人（アマゾン地域には約一万三〇〇〇人在住）、そのうち約一七万人が日本に出稼ぎに来ている。このポロロッカ（逆流）現象で、日系人社会の空洞化が心配されている。

かつて、人べらしのためにブラジルに渡った日本人が、食うや食わず、寝るところも満足になく、厳しい労働や病気と闘いながら築きあげてきた日系コロニアは、どうなっていくのだろうか。

笠戸丸で第一回の移民がブラジルに渡って、今年（一九九八年）で九十年、日本人のアマゾン移住は七十周年を迎える。

現在の日本では、「かつてアマゾン開拓に向かった日本人がいた」ことはほとんど知られていない。ポロロッカ現象の根源であるブラジル移民の存在も、忘れ去られようとしている。

私自身は、日本に住むのもアマゾンに住むのも、人間の暮らしに大差はないと思っている。ことに、交通や情報、物流の急速な発展で、ボーダーレス社会に向かって国際化が求められるいま、私たちブラジル移住者の歴史は、そのテストケースであると思う。

戦前一九万人、戦後六万人もの日本人が移住して、摩擦や融和も引つくるめて根を張り、ブラジルの政治経済をはじめ各界に進出し、日本企業の進出や日伯交流の先導者の役割を務めてきた。こんなに大挙して日本人が海外に定着した例はない。

アマゾン開拓というと、「苦闘」とか「苦難の歴史」といった言葉でイメージづけられ、開拓者の汗と涙の歴史が語られるか、サクセスストーリーの自慢話で終わることが多い。一九八八年七月に立川市の朝日ギャラリーで、私のはじめての個展を開催したとき、地元紙アサヒタウンズの中込敦子記者から、「絵だけでなく文字でも記録を残してみませんか」と、自分史を書くことを勧められ、じつは困った。こちらが楽しい話をしているつもりでも、文明人である本国の人には、苦労話としか受け取られない例が過去に数多く、気が進まなかった。

それでも、中込記者はあきらめず何度も何度も誘いの手紙をくれた。彼女の熱意に負けて往復書簡のつもりで、恥だらけの人生を書きはじめた。アマゾンの濁流と闘うというよりは、流れに身を任せてきた六十余年を妹か娘に語るつもりで綴った。その五九九枚もの、横道にそれ、濁流にのまれた迷路のような文章を、中込さんが凝縮して整理し、アマゾンへの日本人移住史と高拓の沿革史を加筆し、補完編集したのが本書である。現在、堺市に住んでいる末娘の歩・リリアンは、

できあがった原稿を読んで、いみじくも「これはまざれもなく、父の文章でもあるけど、中込さんの文章でもある」と評した。私としては中込さんとの共著のつもりである。

一九九八年六月 ブラジル・ベレン市にて

安井宇宙

アマゾンへの日本人移住史

一八三二 ブラジル、帝国としてポルトガルより独立。

一八八八 ブラジル、奴隷制度を廃止。先進国からの植民事業により経済発展をほかり、

移民の導入が活発化。

一八九五 日本・ブラジル国交成立。

一九〇八 四月二十八日、初のブラジル移民七九一人が笠戸丸で神戸港出航。

一九三三 黒人移民禁止および黄色人種移民の入国制限案が議会で提出される。日本人

移民は一万五千人に達する一方、サンパウロ州への移民集中が問題化。パライ

州知事が日本人移民歓迎の意向を表明。日本国内では不況で人口過剰の解決に海外移住を奨励。

一九二四 田付大使、野田良治書記官らをアマゾン視察に派遣。「アマゾン地域は有望」との報告。

一九二五 パラー州知事の移住招聘をうけて日本政府は鐘淵紡績株式会社に調査費用の捻出と調査団の結成を依頼。この年から日本の国策移民がはじまる。

一九二六 アマゾナス州でもパラー州と同じ条件で一〇〇万ヘクタールの無償譲渡を田付大使に約束。

一九二七 田付大使の要請で、視察に同行した通訳官の栗津金六は少壮実業家、山西源三郎と組んで、アマゾナス州と土地の無償譲渡契約を結ぶ。

一九二八 鐘紡の福原調査団の報告をうけて、渋沢栄一ら財界人が協議の結果、「南米拓殖株式会社（略称南拓）」を設立。一方、山西は帰国後、代議士の上塚司に契約履行を移譲。上塚は拓務省から調査費用を得てみずから渡伯。パリンチンスを中心に三〇万ヘクタールを選定、契約期限を二年間延長する承認を得た。

一九二九 南拓の第一回移民が募集され一八九人がトメアスに入植。一九三七年までに二一回、三五二家族二一〇四人が入植したが、米や野菜が自給できず、マラリアの猛威もあって退耕者が続出。

一九三〇 二月末に国士館専門学校に「国士館高等拓殖学校（略称高拓）」が付設され、三回生から国士館から独立し「日本高等拓殖学校」と改称。六月に渡伯した上塚校長は、パリンチンス下流に土地を購入、ヴィラ・アマゾニアと称し、ここに現地本部「アマゾニア産業研究所」を設立。

一九三一 高拓一回生がアマゾン産業研究所の実業練習所で自給作物やジュートなどの主要作物の試験栽培をしたが、さしたる成果は得られなかった。

一九三三 アマゾン産業研究所が財団法人となる。セイロンで入手したインド産ジュートの種子を持ち込み最終試験にかけたが失敗。しかし、第一回家族移住者の尾山良太が植えたジュートのうち生育のよい一本から種子の採取に成功。南拓移民監督の臼井牧之助が南洋産の胡椒の苗二〇本をトメアス植民地に持ち込む。

一九三四 新憲法で移民二分制限条項（各国の移民は過去五十年の入国数の二パーセントに制限）を制定。

一九三五 九月、「アマゾン産業株式会社」が発足。

一九三六 アマゾン産業株式会社の現地法人をパリンチンズに設立。移民二分制限条項により発展が望めなくなった南拓移民が打ち切られた。

一九三七 尾山らが生産したジュートが二七七〇キロに達し、インド産に劣らぬ品質と保証され、高拓生のジュート栽培が本格化。この新品种のジュートは「尾山種」と命名される。高拓は七回生を最後に閉鎖。

一九四一 太平洋戦争開始。

一九四二 日本・ブラジル国交断絶。日系企業は資産没収となり、職員や移住者はトメアス収容所に入れられる。戦争で需要の高まったジュートの栽培者のみは従前の生活が保障された。

一九四三 トメアスに軟禁された移住者が胡椒の増産に励み、苗木が

五千本に通した。ブラジルの商社や行商人、現地人にもジュート栽培が広まり、邦人栽培者は仲買、牧場 経営などに転進していく。

一九四五 終戦。トメアスの胡椒約三万本、ジュート生産六 八八二トン。

一九四八 トメアスの胡椒が注目される一方、インドジュート の輸入再開でアマゾンジュート の消費が落ち込み、価格 も下落。

一九五二 トメアスの胡椒相場が高騰、黒いダイヤブームが 到来。

一九五三 戦後第一回ジュート移民五四人が入植したが、アマゾンは今世紀最大の洪水に見舞われ、四家族の脱耕がマ スコミ沙汰になり、移民は一回で打ち切り。

一九五四 日本からの移民受け入れ機関として、辻小太郎が「アマゾンア経済開発株式会社」を アマゾン河口の都市ベレンに設立。

一九五五 元フォード自動車所有のゴム園に前年からの年 にかけて七七五人が入植したが、ブラジル国内の労働者を 圧迫するという理由で、アマゾン各地に再移住する。

一九五八 ベレンで汎アマゾニア日伯協会創立総会。初代会 長に辻小太郎。サンパウロで日本移民五十年祭。日本からの呼び寄せ移民が増加。

一九五九 アマゾン移住三十年祭。

一九六二 この年、アマゾンの日系人七二〇三人。

一九六三 戦前移住者の子弟が大学を卒業して、国費で日本 に留学する二世が増える。

一九六五 戦後の日本人移住者四万六千人になる。

一九七三 船による移住から飛行機に変わる。在伯日系人五 四万人に達

する。

一九七八 日本人移民七十周年記念祭サンパウロで開催。

一九七九 アマゾン日本人移住五十年祭。

一九八一 パリンチンスで高拓生入植五十年祭。

一九八二 胡椒相場が底値になり、生産者は転業を余儀なくされ、日本への出稼ぎがはじまる。

一九九〇 南米日系人の入国資格が緩和され、日本への出稼ぎが一〇万人を超え、ブラジルの日系人社会の空洞化が表面化してくる。

一九九二 ブラジル経済が破綻し、慢性化した不況が日系社会の各業界を直撃。

一九九七 日伯修好九十周年を記念して天皇后陛下がペルー、アルゼンチン、ブラジルを公式訪問。ブラジルの日系人は約一三〇万人、アマゾンには約一万三千人と なり、ブラジルの産業経済の一翼を担っている。

【引用・参考文献】

汎アマゾン日伯協会編『アマゾン・日本人による90年の移住史』一九九四年

生島重一『アマゾン移住三十年史』サンパウロ新聞社、一九五九年

生島重一『アマゾン叢書』サンパウロ新聞社、一九六〇年

御荘金吾『アマゾンは流れる・日本人苦闘史』家の光協会、一九七六年

パラ―高拓会編『高拓関係者のアマゾン開拓史』一九九〇年

野口敬子『上塚司と日本高等拓殖学校・アマゾニア開拓について』国際協力事業団『移住研究』一九九〇〜九三年

本田靖春『未来大国ブラジル感情旅行』週刊現代連載、一九七五年

山根眞一『セルバ・ヴェルデ』野生時代（角川書店）連載、一九九〇〜九二年

遠山茂樹、今井清一、藤原彰『昭和史』岩波新書（四一刷）、一九八八年

斉藤広志『ブラジル人と日本人』サイマル出版会、一九八四年

神田錬蔵『アマゾン河』中公新書、一九六三年

開高健『オーパ！』集英社文庫、一九八一年

明治大学職員会会誌一七号『生田校舎の来歴調査』、同二〇号、佐藤一也『もうひとつの学校史』一九九五年

秋山桃水編集・発行『高拓会会報』一九八五〜九八年

（財）アマゾニア産業研究所『アマゾニア産業研究所月報』第一巻〜三

巻、一九三一〜三三年

アマゾン開拓は夢のごとし

1998年八月五日 第一刷発行

著 者 安井宇宙

装丁者 遠藤 勁

発行者 加瀬昌男

発行所 株式会社 草思社

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前4-26-26

電話 営業03 (3470) 6565 編集03 (3470) 6566

印 刷 壮光舎印刷株式会社

カバー 株式会社大竹美術

製 本 大口製本印刷株式会社